

池辺義象氏著作目録（新訂・初稿）

—小中村清矩博士との関連で—

（平成 22（2010）年 5 月 1 日現在（新訂・初稿作成）・改訂中）

池辺義象氏著作目録（新訂・初稿）—小中村清矩博士との関連で—

（令和 6（2024）年 1 月 1 日（月）補正第 57 稿作成）

（前 記）

本「池辺義象氏著作目録（新訂・初稿）—小中村清矩博士との関連で—」は、平成 21（2009）年 9 月 5 日（土）開始の「（旧）初稿」の後を承けた平成 22（2010）年 5 月 1 日（土）の「新訂・初稿」作成から始まり、「補正第 36 稿」を『CD 版 春木一郎博士・原田慶吉教授・田中周友博士・船田享二博士・武藤智雄教授・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士・池辺義象氏略年譜・著作目録—日本ローマ法学七先生略年譜・著作目録（新訂版）—ローマ法・法制史学者著作目録選（第十輯）—』（平成 25（2013）年 9 月 1 日刊）に収載した。

その後は、「平成 26（2014）年 7 月 26 日（土）補正第 37 稿」を作成して以来幾度もまとめる機会があったものの成稿には至らず、「令和 5（2023）年 4 月 2 日（日）補正第 56 稿」まで、各補正稿作成の際に見い出した新規事項、修正事項を、各回毎にそれぞれ別枠として追加するにとどめざるを得なかった。

今般『CD 版 上山安敏先生・柴田光蔵先生・西村稔先生・宮崎道三郎博士・池辺義象氏・小林宏先生・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士略年譜・著作目録 附録：「日本ローマ法・法制史学者等略年譜・著作目録・追悼辞」掲載資料抄（追補）中田薫博士・瀧川政次郎博士・三浦周行博士・牧健二博士各関係資料抄—ローマ法・法制史学者著作目録選（第十六輯）—』（CD 版、令和 6（2024）年 1 月 1 日刊）に収録するために「令和 6（2024）年 1 月 1 日（月）補正第 57 稿」を作成するに当たっては、上記「補正第 36 稿」の如き現時点での一応の「全体完結版」を作成したかった。しかるに、近時話題の「次世代デジタルライブラリー」〈<https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/>〉活用等諸般の事情でやはり上記「補正第 56 稿」以降の新規、修正事項の別枠追加のみにならざるを得なかったのは、甚だ遺憾なことである。

この上は、なるべく早期に「補正第 37 稿」から今回の「補正第 57 稿」までの別枠追加分を本体に組み入れて、当面の「全体完結版」を作成いたしたく考えていることから、御示教の程切にお願い致すものである。なお、本稿が電子版であることに鑑み、今回から黒赤二色を使用した。

令和 6（2024）年 1 月 1 日（月）

編者謹誌

〔目 次〕

『CD 版 上山安敏先生・柴田光蔵先生・西村稔先生・宮崎道三郎博士・池辺義象氏・小林宏先生・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士略年譜・著作目録 附録: 「日本ローマ法・法制史学者等略年譜・著作目録・追悼辞」掲載資料抄 (追補) 中田薫博士・瀧川政次郎博士・三浦周行博士・牧健二博士各関係資料抄 —ローマ法・法制史学者著作目録選 (第十六輯) —』(CD 版、令和 6 (2024) 年 1 月 1 日刊) 収録)

(前記)	1
【参考 HP】	7
【関連 HP】	11
〔改訂状況〕	13
〔作成経緯〕	17
〔作成経緯・追記〕 (平成 22 (2010) 年 6 月 4 日～)	18
はじめに	27
1 略年譜	31
* 〔参考サイト〕	31
* 〔肖像〕	31
* 〔雅号〕	33
* 〔自筆文献〕	33
* 〔略年譜〕	34
* 訃報	42
* 追悼会	42
* 追悼辞	42
池辺義象氏追悼記一斑 —杉浦鋼太郎氏「藤園池辺義象大人の霊前に」—	43
* 親族	51
* 自伝	51
* 京都大学大学文書館 (木下広次 (初代総長) 関係資料) の件	53
* 池辺義象氏の小中村家離縁の件	53
* 小中村家人物史一斑	58
(参考 1) 小中村清名の動静の件	58
(参考 2) 小中村清象の動静の件	59
(参考 3) 『小中村清矩日記』に見たる本件関係事項抄	59
(小中村清矩の家族関係)	60
(小中村清矩住居の転居関係)	60
(小中村家のその後の状況)	63
(『小中村清矩日記』抽出)	63
* 京都帝国大学文科大学の件	67

〔参考〕京大文科初代国文学講座担任関係抄	68
*京都帝国大学法科大学の件	73
*京都帝国大学法科大学雑誌掲載論稿関係	75
*京都帝国大学法科大学在任中試験問題関係（抄）	77
*その他	78
・史談会関係	78
・明治神宮創建関係	78
・『明治天皇御集』、『明治天皇紀』関係	78
2 著作目録	79
（1）著書〔編集〕（省略）	79
（2）共著・共編〔編集〕（省略）	79
（3）校注等〔編集〕（省略）	79
（4）論説その他（省略）	79
（5）池辺義象氏関係日記（抄）	79
（6）池辺義象氏関係書簡（抄）	80
（参考）池辺義象氏宛書簡	67
（7）池辺義象氏筆記諸家講義録	81
（8）池辺義象氏関連新聞記事	82
ア 『新聞集成 明治編年史』関連記事	82
イ 『東京朝日新聞』（池辺義象氏逝去関連記事）	83
（9）池辺義象氏関連著作	84
（10）池辺義象氏研究論文（抄）	101

【追加分】 102

（概要） 102

〔追加1〕平成25（2013）年9月1日

『CD版 春木一郎博士・原田慶吉教授・田中周友博士・船田享二博士・武藤智雄教授・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士・池辺義象氏略年譜・著作目録—日本ローマ法学七先生略年譜・著作目録（新訂版）—一ローマ法・法制史学者著作目録選（第十輯）—』（平成25（2013）年9月1日刊）作成以後の追加事項（平成26年7月26日新設） 103
（関係文献等追加） 103

※1（平成26（2014）年7月26日補正第37稿追加分） 103

※2（平成26年12月17日補正第38稿作成追加分） 103

※3（平成26年12月21日補正第39稿作成追加分） 103

※4（平成27（2015）年3月9日補正第40稿作成追加分） 104

※5（平成27年5月31日補正第41稿追加分） 104

※6（平成27年10月10日補正第42稿追加分） 104

※7（平成29（2017）年7月20日補正第43稿追加分） 105

※8（平成29年7月23日補正第44稿追加分） 105

※9 (平成 29 年 8 月 30 日補正第 45 稿追加分) ……………105

[追加 2] 平成 30 (2018) 年 1 月 1 日 (月)

『CD 版 ローマ法、法制史、明治警察史及び日本統治下台湾警察史の諸問題—ローマ法・法制史学者著作目録選 (第十三輯) — —明治警察史雜纂 (第四輯) — —日本統治下台湾警察史雜纂 (第八輯) —』 (平成 30 (2018) 年 1 月 1 日刊) 作成以後の追加事項…105
(関係文献等追加) ……………105

※10 (平成 30 (2018) 年 9 月 9 日補正第 46 稿追加分) ……………102

(収録稿「(小中村清矩住居の転居関係) 追加稿 1 小中村清矩の最後の根岸邸について (1)」) ……………106

※11 (平成 30 (2018) 年 10 月 19 日補正第 47 稿追加分) ……………108

(収録稿「(小中村清矩住居の転居関係) 追加稿 2 小中村清矩の最後の根岸邸について (2) —森鷗外及び正岡子規根岸旧宅との関連も含めて— —続・小中村清矩博士の下谷・根岸邸はどこにあったのか—」) ……………108

※12 (平成 30 (2018) 年 11 月 15 日補正第 48 稿追加分) ……………112

※13 (平成 30 (2018) 年 12 月 18 日補正第 49 稿追加分) ……………113

※14 (平成 31 (2019) 年 3 月 21 日補正第 50 稿追加分) ……………113

※15 (令和 2 (2020) 年 7 月 27 日補正第 51 稿追加分) ……………113

※16 (令和 3 (2021) 年 11 月 20 日補正第 52 稿追加分) ……………114

[追加 3] 令和 4 (2022) 年 4 月 1 日 (金)

『CD 版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録—【参考篇】【附篇】—ローマ法・法制史学者著作目録選 (第十五輯) —』 (令和 4 (2022) 年 4 月 1 日刊) 作成以後の追加事項……………114

※17 (令和 4 (2022) 年 4 月 1 日補正第 53 稿追加分) ……………114

※18 (令和 4 (2022) 年 6 月 26 日補正第 54 稿追加分) ……………115

※19 (令和 5 (2023) 年 1 月 8 日補正第 55 稿追加分) ……………115

※20 (令和 5 (2023) 年 4 月 2 日補正第 56 稿追加分) ……………115

[追加 4] 令和 6 (2024) 年 1 月 1 日 (月)

『CD 版 上山安敏先生・柴田光蔵先生・西村稔先生・宮崎道三郎博士・池辺義象氏・小林宏先生・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士略年譜・著作目録 附録: 「日本ローマ法・法制史学者等略年譜・著作目録・追悼辞」掲載資料抄 (追補) 中田薫博士・瀧川政次郎博士・三浦周行博士・牧健二博士各関係資料抄 —ローマ法・法制史学者著作目録選 (第十六輯) —』 (令和 6 (2024) 年 1 月 1 日刊) 作成以後の追加事項……………116

※21 (令和 6 (2024) 年 1 月 1 日補正第 57 稿追加分) ……………116

(参考) 元号・西暦対照表 ……………117

別添「明治、大正期朝日新聞紙面データベース (DB)」池辺義象氏関連分……………119
〔目次再録〕 ……………137～139

【参考 HP】

(令和 2 (2020) 年 7 月 27 日追加、同 3 (2021) 年 11 月 20 日全体差替、同 4 (2022) 年 6 月 26 日、同 5 (2023) 年 1 月 8 日、同 6 (2024) 年 1 月 1 日各一部修正)

* 法制史学会 HP (平成 14 (2002) 年 10 月 5 日公開、平成 24 (2012) 年 4 月 1 日移転)

〈<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jalha/toppage.htm>〉 ⇒

(新) 〈<https://www.jalha.org/>〉

・ 〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8A%E5%B1%B1%E5%AE%89%E6%95%8F>〉

* 全体 HP

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/>〉

・ 「日本のローマ法」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Romanist2003.htm>〉

・ 「法制史学者著作目録選 (WEB 版)」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Historian2003.htm>〉

・ 「法制史コーナー」 所載項目一覧」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/ichiran002.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 宮崎道三郎博士略年譜・著作目録

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/miyazaki001.pdf>〉

・ 本 HP 本稿: 池辺義象氏著作目録

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/ikebe001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 三浦周行博士関係資料抄

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/miura001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 中田薫博士関係資料抄

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/nakata001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 牧健二博士関係資料抄

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/makikenji001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 内藤吉之助教授略年譜・著作目録

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/naito001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 瀧川政次郎博士関係資料抄

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/takikawa001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 金田平一郎博士略年譜・著作目録

〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kaneda001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 小早川欣吾先生略年譜・著作目録

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kobayakawa001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 「小早川欣吾先生記念メダルによせて

—小田輝子氏「叔父小早川欣吾の思い出」とともに—

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/odateruko.pdf>〉

- ・本 HP 別稿: 『小早川欣吾先生東洋法制史論集』収録論稿目次その他
 <https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kobayakawa_toyohoseishi.pdf>
- ・本 HP 別稿: 牧英正博士著作目録等抄
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/maki001.pdf>>
- ・本 HP 別稿: 小林宏先生著作目録等抄
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kobayashi001.pdf>>
- ・本HP別稿: 千賀鶴太郎博士著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/senga001.pdf>>
- ・本HP別稿: 戸水寛人博士著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/tomizu001.pdf>>
- ・本HP別稿: 春木一郎博士略年譜・著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/haruki001.pdf>>
- ・本HP別稿: 原田慶吉教授略年譜・著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/harada2003.htm>>
- ・本HP別稿: 船田享二博士略年譜・著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/funada2003b.htm>>
- ・本HP別稿: 田中周友博士略年譜・著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/tanaka2003b.htm>>
- ・本HP別稿: 栗生武夫先生略年譜・著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kuryu001.pdf>>
- ・本 HP 別稿: 「栗生武夫先生『婚姻法の近代化』の中訳本について」
 <https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kuryu_chuhon.pdf>
- ・本 HP 別稿: 「『栗生武夫先生隨筆拾遺』作成の思い出
 —『栗生武夫先生隨筆拾遺—栗生武夫先生単行本未収録論稿集第一輯—」
 <https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kuryu_zuihitsu_shui.pdf>
- ・本 HP 別稿: PDF 版『栗生武夫先生隨筆拾遺—栗生武夫先生単行本未収録論稿集第一輯—』
 <https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kuryu_zuihitsu_shui_002.pdf>
- ・本HP別稿: 西本穎博士著作目録等抄
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/nishimoto001.pdf>>
- ・本HP別稿: 久保正幡博士著作目録等抄
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kubo001.pdf>>
- ・本HP別稿: 井上周三教授関係資料抄
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/inoue001.pdf>>
- ・本HP別稿: 上山安敏先生著作目録等抄
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/ueyama001.pdf>>
- ・本HP本別稿: 笥克彦博士略年譜・著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kakei001.pdf>>

- ・本HP別稿：近藤英吉博士略年譜・著作目録
 〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kondo001.pdf>〉
- ・本HP別稿：増田福太郎博士関係資料一斑
 〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/masuda001.pdf>〉
- ・本HP別稿：山崎丹照先生著作目録
 〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/yamazaki001.pdf>〉
- ・本HP別稿：戴炎輝博士略年譜・著作目録
 〈https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Tai_Yen-hui001.pdf〉

- * 和田徹氏HP「私立玉川用賀村中央図書館（新館）」（令和5（2023）年12月31日閉館）
 〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/>〉
- ・春木一郎電子文庫（和田徹氏寄贈図書）
 〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/haruki.htm>〉
- ・原田慶吉電子文庫（和田徹氏寄贈図書）
 〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/harada.htm>〉
- ・栗生武夫電子文庫（和田徹氏寄贈図書）
 〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/kuryu.htm>〉
- ・いろいろ電子文庫
 〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/iroiro.htm>〉
- ・PD 図書室（「梅雨空文庫」のデータを整理してまとめたもの）
 〈<http://books.salterrae.net/about/tuyuzora.html>〉
 （註）早くには「船田亨二電子文庫」の平成22（2010）年開設予告もなされていた（平成14（2002）年12月14日初出か?）が、その後平成18（2006）年6月3日に「2006/06/03 船田亨二電子文庫計画中止」の表示が出た。

- * 「西村稔先生（1947～2019）年譜・著作目録（阪本尚文編）（初版）（2020（令和2）年4月現在）」⇒爾後逐次改訂⇒（最新版：令和5（2023）年11月現在第8稿掲載）
 〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/nishimura001.pdf>〉
 （註）本著作目録は、阪本尚文編『Aún aprendo それでもまだ学ぶぞ——西村稔先生追悼集』（私家版、2020（令和2）年2月28日刊（福島大学学術機関情報リポジトリ所収〈<http://hdl.handle.net/10270/5154>〉）に収録した「西村稔先生年譜・著作目録」に逐次修正を加えつつあるものである。

【関連 HP】

(令和 5 (2023) 年 1 月 8 日、同 6 (2024) 年 1 月 1 日各一部修正)

- ・法制史学会: <<https://www.jalha.org/>>
- ・国立国会図書館: <<https://www.ndl.go.jp/>>
- ・国立国会図書館デジタルコレクション <<https://dl.ndl.go.jp/>>
- ・(下記: 令和 5 (2023) 年 1 月 8 日追加)
<https://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2022/221202_01.html>
「[ホーム](#)>[新着情報](#)>[ニュース](#)> 「国立国会図書館デジタルコレクション」をリニューアルします (令和 4 年 12 月 21 日)」
「2022 年 12 月 2 日「国立国会図書館デジタルコレクション」をリニューアルします (令和 4 年 12 月 21 日)」
「国立国会図書館は、令和 4 年 12 月 21 日に、[国立国会図書館デジタルコレクション](#)をリニューアルします。リニューアルにより、全文検索可能なデジタル化資料が増加するとともに、閲覧画面が改善されます。詳しくはプレスリリースをご覧ください。」
- ・国立国会図書館個人向けデジタル化資料送信サービス (個人送信) (令和 4 (2022) 年 5 月 19 日開始)
<https://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/individuals_index.html>
- ・(下記: 令和 6 (2024) 年 1 月 1 日追加)
「2024 年 1 月 5 日 新「国立国会図書館サーチ」を公開しました」⇒
「国立国会図書館は、従来のウェブサービス「国立国会図書館検索・申込オンラインサービス (国立国会図書館オンライン)」及び「国立国会図書館サーチ」を統合・リニューアルし、令和 6 年 1 月 5 日 (金) から、新「国立国会図書館サーチ」としてサービスを開始しました。」
<https://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2023/240105_01.html>
- ・国立国会図書館次世代デジタルライブラリー
<<https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/>>
- ・CiNii: <<https://ci.nii.ac.jp/>> ⇒ <<https://cir.nii.ac.jp/>> (【[2022] 4/18 更新】CiNii Articles の CiNii Research への統合について)、<<https://ci.nii.ac.jp/books/>>
- ・IRDB (学術機関リポジトリデータベース): <<https://irdb.nii.ac.jp/>> (追加: 令和 5 (2023) 年 1 月 8 日)
- ・朝日新聞クロスサーチ (令和 4 (2022) 年春「聞蔵Ⅱビジュアル」を全面リニューアル)
<<http://www.asahi.com/information/db/2for1.html>>
- ・ヨミダス歴史館
<<https://database.yomiuri.co.jp/about/rekishikan/>>
- ・毎索 (マイサク)
<<http://xn--https-ft8kv51h//mainichi.jp/contents/edu/maisaku/>>
- ・京都大学大学文書館「教員履歴データベース (京都大学歴代総長・教授・助教授履歴検索システム—対象: 1949 年以前の在職者 [旧制] —)」

〈<https://kensaku.kua1.archives.kyoto-u.ac.jp/rireki/>〉

例: 「千賀鶴太郎」

〈<https://kensaku.kua1.archives.kyoto-u.ac.jp/rireki/?c=detail&id=000508>〉

(更新日: 2016/8/31、システム管理番号 000508)

・ 國學院大學デジタル・ミュージアム「明治期国学・神道・宗教関係人物データベース」

⇒ 「小中村清矩」

〈 http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/detail.do;jsessionid=AA41EA4A486161D822E5B729EF3E6A54?class_name=col_jmk&data_id=106867 〉

⇒ 「池辺義象」

〈 http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/dbSearchList.do?class_name=col_jmk&search_condition_type=1&db_search_condition_type=3&View=0&focus_type=0&startNo=1&name_search_j=%E6%B1%A0%E8%BE%BA%E7%BE%A9%E8%B1%A1&name_search_j_Ta=1&calendar_j=&calendar_j_Ta=1&calendar_e=&calendar_e_Ta=1&school=&school_Ta=1&keyword=&harmoty_calendar= 〉

[改訂状況]

- (新訂 HP 初出) :
- ・平成 22 (2010) 年 5 月 1 日 (土) 初稿作成
 - ・平成 22 (2010) 年 6 月 4 日 (金) 補正第 1 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 22 (2010) 年 6 月 16 日 (水) 補正第 2 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 22 (2010) 年 10 月 9 日 (土) 補正第 3 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 22 (2010) 年 12 月 5 日 (日) 補正第 4 稿作成
(大沼宜規編著『小中村清矩日記』関係記事
一部入力等)
 - ・平成 23 (2011) 年 3 月 29 日 (火) 補正第 5 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 23 (2011) 年 4 月 18 日 (月) 補正第 6 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 23 (2011) 年 5 月 8 日 (日) 補正第 7 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 23 (2011) 年 5 月 10 日 (火) 補正第 8 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 23 (2011) 年 5 月 23 日 (月) 補正第 9 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 23 (2011) 年 6 月 5 日 (日) 補正第 10 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 23 (2011) 年 6 月 9 日 (木) 補正第 11 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 23 (2011) 年 7 月 3 日 (日) 補正第 12 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 23 (2011) 年 7 月 5 日 (火) 補正第 13 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 23 (2011) 年 7 月 24 日 (日) 補正第 14 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 23 (2011) 年 8 月 9 日 (日) 補正第 15 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 23 (2011) 年 8 月 26 日 (金) 補正第 16 稿作成
(一部補正、文献追加等)
 - ・平成 23 (2011) 年 10 月 19 日 (水) 補正第 17 稿作成
(一部補正、文献追加等)

- ・平成 23 (2011) 年 12 月 19 日 (月) 補正第 18 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 24 (2012) 年 1 月 8 日 (日) 補正第 19 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 24 (2012) 年 1 月 31 日 (火) 補正第 20 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 24 (2012) 年 2 月 9 日 (木) 補正第 21 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 24 (2012) 年 2 月 17 日 (金) 補正第 22 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 24 (2012) 年 3 月 19 日 (月) 補正第 23 稿作成
(一部補正、文献追加等) 作成
- ・平成 24 (2012) 年 6 月 12 日 (火) 補正第 24 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 24 (2012) 年 8 月 3 日 (金) 補正第 25 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 24 (2012) 年 10 月 25 日 (木) 補正第 26 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 24 (2012) 年 11 月 7 日 (水) 補正第 27 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 24 (2012) 年 11 月 19 日 (月) 補正第 28 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 24 (2012) 年 12 月 4 日 (火) 補正第 29 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 24 (2012) 年 12 月 14 日 (金) 補正第 30 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 25 (2013) 年 1 月 4 日 (金) 補正第 31 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 25 (2013) 年 1 月 9 日 (水) 補正第 32 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 25 (2013) 年 2 月 18 日 (月) 補正第 33 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 25 (2013) 年 2 月 28 日 (木) 補正第 34 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 25 (2013) 年 6 月 4 日 (火) 補正第 35 稿作成
(一部補正、文献追加等)
- ・平成 25 (2013) 年 6 月 26 日 (水) 補正第 36 稿作成
(一部補正、文献追加等)

[追加1] 平成 25 (2013) 年 9 月 1 日 (日)

『CD 版 春木一郎博士・原田慶吉教授・田中周友博士・船田享二博士・武藤智雄教授・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士・池辺義象氏略年譜・著作目録—日本ローマ法学七先生略年譜・著作目録(新訂版)—ローマ法・法制史学者著作目録選(第十輯)—』(平成 25 (2013) 年 9 月 1 日刊) 作成

<<http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA64090131>> ⇒

<<http://ci.nii.ac.jp/ncid/BB13864295>>]

- ・平成 26 (2014) 年 7 月 26 日 (土) 補正第 37 稿作成
- ・平成 26 (2014) 年 12 月 17 日 (水) 補正第 38 稿作成
- ・平成 26 (2014) 年 12 月 21 日 (日) 補正第 39 稿作成
- ・平成 27 (2015) 年 3 月 9 日 (月) 補正第 40 稿作成
- ・平成 27 (2015) 年 5 月 31 日 (日) 補正第 41 稿作成
- ・平成 27 (2015) 年 10 月 10 日 (土) 補正第 42 稿作成
- ・平成 29 (2017) 年 7 月 20 日 (木) 補正第 43 稿作成
- ・平成 29 (2017) 年 7 月 23 日 (日) 補正第 44 稿作成
- ・平成 29 (2017) 年 8 月 30 日 (水) 補正第 45 稿作成

[追加2] 平成 30 (2018) 年 1 月 1 日 (月)

『CD 版 ローマ法、法制史、明治警察史及び日本統治下台湾警察史の諸問題—ローマ法・法制史学者著作目録選(第十三輯)—、—明治警察史雑纂(第四輯)—、—日本統治下台湾警察史雑纂(第八輯)—』(平成 30 (2018) 年 1 月 1 日刊)

- ・平成 30 (2018) 年 9 月 10 日 (月) 補正第 46 稿作成
- ・平成 30 (2018) 年 10 月 19 日 (金) 補正第 47 稿作成
- ・平成 30 (2018) 年 11 月 5 日 (月) 補正第 48 稿作成
- ・平成 30 (2018) 年 12 月 18 日 (火) 補正第 49 稿作成
- ・平成 31 (2019) 年 3 月 21 日 (木) 補正第 50 稿作成
- ・令和 2 (2020) 年 7 月 27 日 (月) 補正第 51 稿作成
- ・令和 3 (2021) 年 11 月 20 日 (土) 補正第 52 稿作成

[追加3] 令和 4 (2022) 年 4 月 1 日 (金)

『CD 版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録—【参考篇】【附篇】—ローマ法・法制史学者著作目録選(第十五輯)—』(令和 4 (2022) 年 4 月 1 日刊) (「池辺義象氏著作目録(新訂・初稿)—小中村清矩博士との関連で—(補正第 53 稿)」を収録。)

- ・令和 4 (2022) 年 4 月 1 日 (金) 補正第 53 稿作成
- ・令和 4 (2022) 年 6 月 26 日 (日) 補正第 54 稿作成
- ・令和 5 (2023) 年 1 月 8 日 (日) 補正第 55 稿作成
- ・令和 5 (2023) 年 4 月 3 日 (月) 補正第 56 稿作成

〔追加4〕令和6(2024)年1月1日(月)

『CD版 上山安敏先生・柴田光蔵先生・西村稔先生・宮崎道三郎博士・池辺義象氏・小林宏先生・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士略年譜・著作目録 附録: 「日本ローマ法・法制史学者等略年譜・著作目録・追悼辞」掲載資料抄 (追補) 中田薫博士・瀧川政次郎博士・三浦周行博士・牧健二博士各関係資料抄 —ローマ法・法制史学者著作目録選(第十六輯)—』
(令和6(2024)年1月1日刊) (「池辺義象氏著作目録(新訂・初稿)—小中村清矩博士との関連で—(補正第57稿)」を収録。)

・令和6(2024)年1月1日(月)補正第57稿作成

〔作成経緯〕（平成 22（2010）年 5 月 1 日時点）

・池辺義象氏（1861～1923）の WEB 版著作目録については、従来、「池辺義象氏（1861～1923）著作目録（初稿）（平成 21 年 9 月 5 日現在）」（以下「旧稿」という。）を掲載してきた（掲載日時：平成 21 年 9 月 5 日～平成 22 年 4 月 30 日）。

〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/ikebe001.pdf>〉

・ちなみに、旧稿の補正状況は、以下のとおりである。旧稿最終補正稿は、平成 22（2010）年 1 月 7 日（木）作成の補正第 10 稿である。

・（HP 初出）：平成 21（2009）年 9 月 5 日（土）初稿作成、・平成 21（2009）年 9 月 10 日（木）補正第 1 稿作成（一部補正、追加）、・平成 21（2009）年 9 月 17 日（木）補正第 2 稿作成（一部補正、追加）、・平成 21（2009）年 9 月 23 日（水）補正第 3 稿作成（一部補正、追加）、・平成 21（2009）年 10 月 10 日（土）補正第 4 稿作成（一部補正、追加）、・平成 21（2009）年 10 月 23 日（金）補正第 5 稿作成（一部補正、追加）、・平成 21（2009）年 10 月 31 日（土）補正第 6 稿作成（「新聞関連記事」等一部補正、追加）、・平成 21（2009）年 11 月 14 日（土）補正第 7 稿作成（「関連著作」等一部補正、追加）、・平成 21（2009）年 11 月 20 日（金）補正第 8 稿作成（池辺義象『仏国風俗問答』等で補正、追加）、・平成 21（2009）年 11 月 25 日（水）補正第 9 稿作成（池辺義象『欧羅巴』等で補正、追加）、・平成 22（2010）年 1 月 7 日（木）補正第 10 稿（旧稿最終補正稿）作成（「関連著作」等一部補正、追加）

・その後、平成 22（2010）年 3 月 31 日に、冊子版『千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士・池辺義象氏略年譜・著作目録—日本ローマ法学七先生略年譜・著作目録（千賀博士・戸水博士限定追加版）—ローマ法・法制史学者著作目録選（第九輯）—』（平成 22（2010）年 3 月 31 日刊）を作成したが、同書に、上記 WEB 版旧稿（補正第 10 稿）を改訂した「池辺義象氏略年譜・著作目録」（193～215 頁）を収録した。ただ、諸々の事情で、本文中に「*池辺義象氏の小中村家離縁の件」等を組み込めず、〔補遺〕中（221～224 頁）に回さざるを得なかった。

・上記冊子版作成を受けて、今般、WEB 版を差し換えることにした。内容的には、同冊子版のものに、〔補遺〕部分を組み込み、更に、現時点で一、二気付いた点を修正、追加したのもあって、「池辺義象氏（1861～1923）著作目録（新訂・初稿）（平成 22（2010）年 5 月 1 日現在）」（以下「新稿」という。）として、新たにアップした。

・新稿についても、今後更に補正に務めることとしているので、御示教の程切にお願いする次第である。（⇒以後「新訂・補正各稿」とする。）

〔作成経緯・追記〕（平成 22（2010）年 6 月 4 日～）

【関連 HP】

- ・「法制史学者著作目録選」：（平成 24 年 10 月 26 日追加）
〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Historian2003.htm>〉

*1 平成 22（2010）年 6 月 4 日（金）新訂・補正第 1 稿分

- ・「池辺義象関連著作」を一、二追加するとともに、それに基づき、本文を補正した。
- ・読売新聞「ヨミダス歴史館」〈<http://www.yomiuri.co.jp/rekishikan/>〉（池辺義象 8 件、小中村義象 2 件）、朝日新聞「聞蔵Ⅱビジュアル」〈<http://www.asahi.com/information/db/2for1.html>〉（池辺義象 96 件、小中村義象 66 件、小中村清矩 52 件）記載記事については、現在調査中である。
- ・皓星社「雑誌記事索引集成データベース（ざっさくプラス）」（池辺義象 68 件、小中村義象 24 件）記載記事についても、現在調査中である。
- 〈http://pro.maruzen.jp/ln/ec/ec_kousei01.html〉、
〈<http://zassaku-plus.com/authorize.php>〉

*2 平成 22（2010）年 6 月 16 日（水）新訂・補正第 2 稿分

- ・「1 略年譜」に、「* その他」欄を新設し、今回は、「史談会」関係を収載した。
- ・京都法科大学講師時代の法制史関係著作として、『刑事法評林』掲載論稿を追加した。
- ・その他、一、二補正した。

*3 平成 22（2010）年 10 月 9 日（土）新訂・補正第 3 稿分

- ・「（7）池辺義象氏関連著作」として、大沼宜規編著『小中村清矩日記』（汲古書院、平成 22 年 7 月 15 日刊）を追加した。

*4 平成 22（2010）年 12 月 5 日（日）新訂・補正第 4 稿分

- ・上記大沼宜規編著『小中村清矩日記』（汲古書院、平成 22 年 7 月 15 日刊）中の本稿関連記載の一部を抽出した。

*5 平成 23（2011）年 3 月 29 日（火）新訂・補正第 5 稿分

- ・平成 23 年 4 月 23 日（土）所用のある件のために、一部補正及び文献追加をなした。

*6 平成 23（2011）年 4 月 18 日（月）新訂・補正第 6 稿分

- ・平成 23 年 4 月 23 日（土）所用のある件のために、重ねて、一部補正及び文献追加をなした。
- ・「1 略年譜」に、「* * 京都帝国大学法科大学在任中試験問題関係（抄）」欄を新設した。

*7 平成 23 (2011) 年 5 月 8 日 (日) 新訂・補正第 7 稿分

・平成 23 年 4 月 23 日 (土) 所用の件 (池辺義象本人はもとより、小中村清矩、谷干城両氏再検討の必要性被指摘) を受け、一部補正及び文献追加をなした。特に、谷崎潤一郎 (1886～1965) 関係文献 (小中村清矩関連) を追加した。

*8 平成 23 (2011) 年 5 月 10 日 (火) 新訂・補正第 8 稿分

・平成 23 年 4 月 23 日 (土) 所用の件を受け、重ねて、一部補正及び文献追加をなした。特に、『小中村清矩日記』関係記載を補正し、明治神宮創建関係文献を追加した。

*9 平成 23 (2011) 年 5 月 23 日 (月) 新訂・補正第 9 稿分

・平成 23 年 4 月 23 日 (土) 所用の件を受け、重ねて、一部補正及び文献追加をなした。特に、浅井忠 (1856～1907) 関係文献を追加、小中村家関係記載の補正をなした。

*10 平成 23 (2011) 年 6 月 5 日 (日) 新訂・補正第 10 稿分

・平成 23 年 4 月 23 日 (土) 所用の件を受け、重ねて、一部補正及び文献追加をなした。特に、三村竹清 (1876～1953) 関係文献を追加、池辺義象の小中村家離縁関係記載の補正をなした。

*11 平成 23 (2011) 年 6 月 9 日 (木) 新訂・補正第 11 稿分

・平成 23 年 4 月 23 日 (土) 所用の件を受け、重ねて、一部補正及び文献追加をなした。特に、「2 (5) 池辺義象関係日記抄」、「2 (7) 池辺義象氏筆記諸家講義録」の項目等を追加した。

*12 平成 23 (2011) 年 7 月 3 日 (日) 新訂・補正第 12 稿分

・平成 23 年 4 月 23 日 (土) 所用の件を受け、重ねて、一部補正及び文献追加をなした。特に、藤岡作太郎 (1870～1910) 関係記事等を追加した。

*13 平成 23 (2011) 年 7 月 5 日 (火) 新訂・補正第 13 稿分

・平成 23 年 4 月 23 日 (土) 所用の件を受け、重ねて、一部補正及び文献追加をなした。特に、小中村清名 (1886～?)、幸田露伴 (1867～1947)、藤岡作太郎 (1870～1910) 関係記事等を追加した。

*14 平成 23 (2011) 年 7 月 24 日 (日) 新訂・補正第 14 稿分

・平成 23 年 4 月 23 日 (土) 所用の件を受け、重ねて、一部補正及び文献追加をなした。特に、「小中村清矩の住居の転居関係」記事等を追加した。

*15 平成 23 (2011) 年 8 月 9 日 (火) 新訂・補正第 15 稿分

・平成 23 年 4 月 23 日 (土) 所用の件を受け、重ねて、一部補正及び文献追加をなした。特に、「*京都帝国大学文科大学の件」中に、「[参考] 京大文科初代国文学講座担任関係抄」を追加した。

*16 平成 23 (2011) 年 8 月 26 日 (金) 新訂・補正第 16 稿分

・平成 23 年 4 月 23 日 (土) 所用の件を受け、重ねて、一部補正及び文献追加をなした。特に、細江光 (1959～) 『谷崎潤一郎—深層のレトリック』(和泉書院、平成 16 年 3 月 31 日) 542～560 頁の初出関係記事、小中村家在根岸住宅関係記事を補訂した。

*17 平成 23 (2011) 年 10 月 19 日 (水) 新訂・補正第 17 稿分

・平成 23 年 4 月 23 日 (土) 所用の件を受け、重ねて、一部補正及び文献追加をなした。特に、「小中村清矩住居の転居関係」及び京大文科人事のことを補訂した。

*18 平成 23 (2011) 年 12 月 19 日 (月) 新訂・補正第 18 稿分

・平成 23 年 4 月 23 日 (土) 所用の件を受け、重ねて、一部補正及び文献追加をなした。特に、京大初代総長木下広次の件、小中村家のその後の状況等を補訂した。

*19 平成 24 (2012) 年 1 月 8 日 (日) 新訂・補正第 19 稿分

・平成 24 年 3 月 17 日 (土) 所用のある件のために、一部補正及び文献追加をなした。特に、パリ、京都での池辺の動静検討のため、浅井忠 (1856～1907) の遺稿、追悼録『木魚遺響』(編輯者 黙語会代表者 池辺義象、京都・芸艸堂(うんそうどう)、明治 42 年 9 月 30 日刊) 等の関連記事を追加した。

*20 平成 24 (2012) 年 1 月 31 日 (火) 新訂・補正第 20 稿分

・平成 24 年 3 月 17 日 (土) 所用のある件のために、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。

*21 平成 24 (2012) 年 2 月 9 日 (木) 新訂・補正第 21 稿分

・平成 24 年 3 月 17 日 (土) 所用のある件のために、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。なお、同年 2 月 5 日 (日) 東京都青山霊園に展墓した。

*22 平成 24 (2012) 年 2 月 17 日 (金) 新訂・補正第 22 稿分

・平成 24 年 3 月 17 日 (土) 所用のある件のために、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。特に、最近改訂された「国立国会図書館のデジタル化資料」の件を補充した。

*23 平成 24 (2012) 年 3 月 19 日 (月) 新訂・補正第 23 稿分

・平成 24 年 3 月 17 日 (土) 所用の件を受け、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。

*24 平成 24 (2012) 年 6 月 12 日 (火) 新訂・補正第 24 稿分

・平成 24 年 3 月 17 日 (土) 所用の件を受け、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。

*25 平成 24 (2012) 年 8 月 3 日 (金) 新訂・補正第 25 稿分

・平成 24 年 3 月 17 日 (土) 所用の件を受け、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。特に、岡村司 (1867~1922) 関係文献を増補した。

*26 平成 24 (2012) 年 10 月 25 日 (木) 新訂・補正第 26 稿分

・平成 24 年 3 月 17 日 (土) 所用の件を受け、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。特に、「[参考]『小中村清矩日記』に見たる本件関係事項抄」中に「(小中村清矩の家族関係)」を独立させるとともに、山口隼正「田中義成日記と『大日本史料』創刊のことも」『長崎大学教育学部紀要 人文科学』第 63 号 (平成 13 年 6 月 27 日刊) 記載事項を引用した。

*27 平成 24 (2012) 年 11 月 7 日 (水) 新訂・補正第 27 稿分

・平成 24 年 3 月 17 日 (土) 所用の件を受け、[目次]を整理するとともに、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。

*28 平成 24 (2012) 年 11 月 19 日 (月) 新訂・補正第 28 稿分

・平成 24 年 3 月 17 日 (土) 所用の件を受け、「1 略年譜 *京都帝国大学法科大学雑誌掲載論稿関係」中の『京都法学会雑誌』所載「法制史雑話」に「小見出し一覧」を附すとともに、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。

*29 平成 24 (2012) 年 12 月 4 日 (火) 新訂・補正第 29 稿分

・平成 24 年 3 月 17 日 (土) 所用の件を受け、「1 略年譜 [略年譜]」に「*追悼録」を新設し、まず、『大成中学校創立四十周年記念 杉浦先生講演集』(杉浦鋼太郎 (1857~1942)、大成中学校々友会、昭和 12 年 10 月 29 日刊) 所収「二 藤園池辺義象大人の霊前に」: 8~10 頁 (初出: 『神廻道』第 144 号 (大正 12 年 8 月 10 日刊)) の件を追加するとともに、小中村義象の新規判明写真として、北条常久氏 (秋田市立中央図書館長) HP 「標準語村の生成と展開」(2 指導者 遠藤熊吉) <<http://nishinaruse.sakuraweb.com/kotoba/hojo02.html>> 掲載「明治廿八 [1895] 年三月大八洲学校卒業記念」の件を記載した。

・その他、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。

*30 平成 24 (2012) 年 12 月 14 日 (金) 新訂・補正第 30 稿分

・上記『大成中学校創立四十周年記念 杉浦先生講演集』(杉浦鋼太郎 (1857~1942)、大成中学校々友会、昭和 12 年 10 月 29 日刊) 所収「二 藤園池辺義象大人の霊前に」: 8~10 頁 (初出: 『神廻道』第 144 号 (大正 12 年 8 月 10 日刊)) を全文入力した。

・その他、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。

*31 平成 25 (2013) 年 1 月 4 日 (金) 新訂・補正第 31 稿分

・上記補正第 30 稿で追加した杉浦鋼太郎「藤園池辺義象大人の霊前に」の初出『神廻道』第 144 号 (大正 12 年 8 月 10 日刊) 所載 (25~28 頁) 分を全文入力した。

・その他、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。

*32 平成 25 (2013) 年 1 月 9 日 (水) 新訂・補正第 32 稿分

・上記補正第 31 稿で追加言及した『神廻道』第 144 号 (大正 12 年 8 月 10 日刊) 所載「彙報」36 頁の「池辺義象氏の追悼会」を全文入力し、関連部分を併せ補正した。

・その他、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。

*33 平成 25 (2013) 年 2 月 18 日 (月) 新訂・補正第 33 稿分

・末尾に、別添「明治、大正期朝日新聞紙面データベース (DB) 池辺義象氏関連分」を追加した。

・その他、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。

*34 平成 25 (2013) 年 2 月 28 日 (木) 新訂・補正第 34 稿分

・「1 略年譜 * [略年譜]」中に「自伝」項目を新設し、今後諸資料を入力、集成していくこととした。

・その他、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。

*35 平成 25 (2013) 年 6 月 4 日 (火) 新訂・補正第 35 稿分

・「1 略年譜」中に「* [自筆文献]」、「1 略年譜 * [略年譜]」中に「* 訃報」、「* 追悼会」項目を新設し、今後諸資料を入力、集成していくこととした。

・その他、全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。

・「別添「明治、大正期朝日新聞紙面データベース (DB) 池辺義象氏関連分」の表形式を全面的に補正した。

*36 平成 25 (2013) 年 6 月 26 日 (水) 新訂・補正第 36 稿分

・全体にわたって一部補正及び文献追加をなした。

* [参考 1] 平成 25 (2013) 年 9 月 1 日 (日)

・CD 版『春木一郎博士・原田慶吉教授・田中周友博士・船田享二博士・武藤智雄教授・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士・池辺義象氏略年譜・著作目録—日本ローマ法学七先生略年譜・著作目録 (新訂版)—ローマ法・法制史学者著作目録選 (第十輯)—』(平成 25 (2013) 年 9 月 1 日刊) 作成

〈<http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA64090131>〉⇒〈<http://ci.nii.ac.jp/ncid/BB13864295>〉

*37 平成 26 (2014) 年 7 月 26 日 (土) 補正第 37 稿分

・事情あって本稿は上記「36 平成 25 (2013) 年 6 月 26 日 (水) 新訂・補正第 36 稿分」の続稿であり、上記平成 25 (2013) 年 9 月 1 日 (日) 刊行 CD 版そのものを踏まえていないことをお断りしておく。主として当該 CD 版作成以降の判明事項を記載したものであ

る。このため、本編部分は「36 平成 25 (2013) 年 6 月 26 日 (水) 新訂・補正第 36 稿分」そのままである。ただし、一部誤植 (例えば ⇒細江光著書の件 (H260519)) を訂正した。

*38 平成 26 (2014) 年 12 月 17 日 (水) 補正第 38 稿分

・関係文献を追加した。

*39 平成 26 (2014) 年 12 月 21 日 (日) 補正第 39 稿分

・松尾尊允先生 (1929~2014) の御逝去 (平成 26 年 12 月 14 日) を追加した。
・誤植を訂正した。

*40 平成 27 (2015) 年 3 月 9 日 (月) 第 40 稿分

・井上琢也先生の御教示により当時の大学試験問題集を追加。井上先生に厚く御礼申し上げまするものである。

*41 平成 27 (2015) 年 5 月 31 日 (日) 補正第 41 稿分

・CiNii <<http://ci.nii.ac.jp/>> オープンアクセス分、木龍美代子氏ツイッター等の件を追加し、併せ、誤植を訂正した。

*42 平成 27 (2015) 年 10 月 10 日 (土) 補正第 42 稿分

・佐佐木信綱博士 (1872~1963) 関係文献を追加した。

*43 平成 29 (2017) 年 7 月 20 日 (木) 補正第 43 稿分

・大沼宜規氏 (1971~) 「池辺義象の日記—古典講習科生徒の青春—」『日本史学集録』第 37 号 (平成 27 年 12 月 31 日刊) を追加した。
<<http://ci.nii.ac.jp/naid/40021201688/>>

*44 平成 29 (2017) 年 7 月 23 日 (日) 補正第 44 稿分

・誤植訂正 ① 本居長世か ⇒本居清造か ② 三村竹青 (一部に残存) ⇒三村竹清
・岩瀬文庫所蔵池辺義象半自叙伝「千代のかたみ」の HP 公開分を紹介。
<<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11E0/WJJS06U/2321315100/2321315100100010?hid=ht086790>> ⇒「千代のかたみ」全文テキストへのリンクあり。

*45 平成 29 (2017) 年 8 月 30 日 (水) 補正第 45 稿分

・池辺義象を谷干城 (1837~1911) に紹介した土佐人今橋巖について再度言及した。

* [参考 2] 平成 30 (2018) 年 1 月 1 日 (月)

・CD 版『ローマ法、法制史、明治警察史及び日本統治下台湾警察史の諸問題—ローマ法・法制史学者著作目録選 (第十三輯) 一、一明治警察史雑纂 (第四輯) 一、一日本統治下台湾警察史雑纂 (第八輯) 一』 (平成 30 (2018) 年 1 月 1 日刊) 作成

*46 平成 30 (2018) 年 9 月 10 日 (月) 補正第 46 稿分

・小中村清矩の根岸住居について再び言及した。

⇒ (関係文献等追加) ※10 (平成 30 年 9 月 9 日補正第 46 稿追加分)

*47 平成 30 (2018) 年 10 月 19 日 (金) 補正第 47 稿分

・表題に副題「—小中村清矩博士との関連で—」を追加した。

・小中村清矩の根岸住居について三度言及した。

⇒ (関係文献等追加) ※11 (平成 30 年 10 月 19 日補正第 47 稿追加分)

*48 平成 30 (2018) 年 11 月 5 日 (土) 補正第 48 稿分

・「*追悼記 池辺義象氏追悼記一斑 一杉浦鋼太郎氏「藤園池辺義象大人の霊前に」—」中の誤植を訂正した。

・小中村家の本籍地「上根岸町 111 番地」関連事項を追加した。

*49 平成 30 (2018) 年 12 月 18 日 (火) 補正第 49 稿分

・パソコン技術上の故あって、表題を従前の「池辺義象氏 (1861~1923) 著作目録 (新訂・初稿) —小中村清矩博士との関連で—」から「池辺義象 (1861~1923) 氏の特別検討 池辺義象氏著作目録 (新訂・初稿) —小中村清矩博士との関連で—」に変更した (表題につき上記「*47 平成 30 (2018) 年 10 月 19 日 (金) 補正第 47 稿分」参照。)

・全体にわたり誤植等を修正するとともに、追加すべきは追加した。

*50 平成 31 (2019) 年 3 月 21 日 (木) 補正第 50 稿分

・上記*49 で変更した表題を故あって元に戻した。

・関係文献等を追加した。

*51 令和 2 (2020) 年 7 月 27 日 (月) 補正第 51 稿分

・【参考 HP】に國學院大學デジタル・ミュージアム「明治期国学・神道・宗教関係人物データベース」等を追加。

⇒ 「小中村清矩」

〈 http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/detail.do?jsessionid=AA41EA4A486161D822E5B729EF3E6A54?class_name=col_jmk&data_id=106867〉

⇒ 「池辺義象」

〈 http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/dbSearchList.do?class_name=col_jmk&search_condition_type=1&db_search_condition_type=3&View=0&focus_type=0&startNo=1&name_search_j=%E6%B1%A0%E8%BE%BA%E7%BE%A9%E8%B1%A1&name_search_j_Ta=1&calendar_j=&calendar_j_Ta=1&calendar_e=&calendar_e_Ta=1&school=&school_Ta=1&keyword=&harmoty_calendar=〉

・全体にわたり誤植等を修正するとともに、追加すべきは追加した。

*52 令和 3 (2021) 年 11 月 20 日 (土) 補正第 52 稿分

・レイアウトを全面的に変更し、一、二修正を加えた。

* [参考 3] 令和 4 (2022) 年 4 月 1 日 (金)

・『CD 版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録—【参考篇】【附篇】—ローマ法・法制史学者著作目録選 (第十五輯)—』(令和 4 (2022) 年 4 月 1 日 (金) 刊) 作成 (「池辺義象氏著作目録 (新訂・初稿)—小中村清矩博士との関連で— (補正第 53 稿)」を収録。)

*53 令和 4 (2022) 年 4 月 1 日 (金) 補正第 53 稿分

・全体にわたり一、二修正を加えた。

*54 令和 4 (2022) 年 6 月 26 日 (日) 補正第 54 稿分

・全体にわたり一、二修正を加えた。

*55 令和 5 (2023) 年 1 月 8 日 (日) 補正第 55 稿分

・全体にわたり一、二修正を加えた。

・西尾市岩瀬文庫所蔵『宗吾大双紙講義』に添付の兄池辺源太郎書翰 (明治 17 (1884) 年頃) の件を追加した。

*56 令和 5 (2023) 年 4 月 3 日 (月) 補正第 56 稿分

・全体にわたり一、二修正を加えた。

・村上こずえ・森本祥子「資料紹介 井上哲次郎『巽軒日記-大正三年-』」『東京大学史紀要』第 40 号 (令和 4 (2022) 年 3 月刊) に依拠して、小中村清名、小中村清象両氏の件を追加した。

* [参考 4] 令和 6 (2024) 年 1 月 1 日 (月) 刊

・『CD 版 上山安敏先生・柴田光蔵先生・西村稔先生・宮崎道三郎博士・池辺義象氏・小林宏先生・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士略年譜・著作目録 附録: 「日本ローマ法・法制史学者等略年譜・著作目録・追悼辞」掲載資料抄 (追補) 中田薫博士・瀧川政次郎博士・三浦周行博士・牧健二博士各関係資料抄—ローマ法・法制史学者著作目録選 (第十六輯)—』(令和 6 (2024) 年 1 月 1 日刊) (「池辺義象氏著作目録 (新訂・初稿)—小中村清矩博士との関連で— (補正第 57 稿)」を収録。)

*57 令和 6 (2024) 年 1 月 1 日 (月) 補正第 57 稿分

・全体にわたり一、二修正を加えた。本稿が電子版であることに鑑み、今回から黒赤二色を使用することとした。

はじめに

池辺義象氏（よしかた、小中村義象、1861.10.3～1923.3.6）の年譜、著作等については、夙に昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第22巻（池辺義象、有島武郎、ケーベル、厨川白村、三木天遊）（昭和女子大学、昭和39（1964）年12月1日刊）中「池辺義象」（口絵、10～11、17～92、447頁）、同第2巻（〔昭和女子大学〕光葉会、昭和31（1956）年4月10日刊）中「小中村清矩」（1822～1895。307～308頁、「5、遺跡、遺族」334～338頁）等で詳述されており、また、近年では、斎藤ミチ子氏、齊藤智朗氏、池辺史生氏、大沼宜規氏、藤田大誠氏及び宮部香織氏等の貴重な著作¹がある。

池辺氏のパーソナルヒストリー探索²を試みようとする本稿においては、本来は同氏の全著作目録をはじめ詳細な関係文献目録を作成すべきであるが、同氏関係の著作のほとんどは、上記昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第22巻（池辺義象）中に記載されている³ので、それに譲るとし、今回は、ただ、小中村家との関係の件、京都在任

¹ 主たるものとしては例えば次の各著作がある。（令和6（2024）年1月1日特別追加）

・斎藤ミチ子「池辺義象」『國學院黎明期の群像』（國學院大學日本文化研究所、平成10（1998）年3月刊）391～402頁

・齊藤智朗「明治二十年代初頭における国学の諸相—池辺義象の著作を中心に—（特集 神道と日本文化の諸相）」『國學院雑誌』第104巻第11号（平成15（2003）年11月刊、通号第1159号）282～295頁

・齊藤智朗「明治国学の継承をめぐって—池辺義象と明治国学史—（国学特集）」『國學院雑誌』第107巻第11号（平成18（2006）年11月刊、通号第1195号）173～191頁

・池辺史生（池辺義象兄源太郎令孫）「池辺義象」『近現代日本人物史料情報辞典3』（吉川弘文館、平成19（2007）年12月刊）23～25頁

・藤田大誠『近代国学の研究』（弘文堂、平成19（2007）年12月刊）

・大沼宜規編著『小中村清矩日記』（汲古書院、平成22（2010）年7月刊）

・大沼宜規「池辺義象の日記—古典講習科生徒の青春—」『日本史学集録』第37号（平成27（2015）年12月刊）31～61頁

・宮部香織「池辺義象の『日本制度通』講義」『校史』第23号（國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター、平成25（2013）年3月刊）7～10頁

・西尾市岩瀬文庫ネット資料「2013年1月26日（土）～2013年3月31日（日） こんな本があった！ 10～岩瀬文庫平成悉皆調査中間報告展 10～ II 〈小特集〉かつて池辺義象という学者がいた」

〈<https://iwasebunko.jp/event/exhibition/entry-131.html>〉

² 評伝の在り方について、伊藤之雄（1952～）「評伝を書く楽しみとむずかしさ」『歴史書通信』第204号（平成24年11月号、歴史書懇話会）2～4頁参照。（平成24年12月4日追加）

³ 最近国立国会図書館の検索システムが改訂されたので、現在では、文献検索についてはこれをも踏まえて更に検討する必要がある。例えば「神保町系オタオタ日記」（2012-06、2012-08）等参照〈<http://d.hatena.ne.jp/jyunku/20120206>〉。以下、取りあえずの参考事項を記載しておく。（平成24年2月17日追加）

・国立国会図書館「資料の検索」

・国立国会図書館サーチ：〈<http://www.ndl.go.jp/>〉

・NDL-OPAC（蔵書検索・申込）：〈<http://www.ndl.go.jp/>〉

・国立国会図書館「電子図書館」

・近代デジタルライブラリー：〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉（小中村義象：23件、池辺義象：71件、小中村清矩：36件）

・デジタル化資料（貴重書等）⇒「国会図書館のデジタル化資料」⇒「館内限定公開資料を含める」をクリック⇒「小中村義象」、「池辺義象」等を入力して検索（小中村義象：123件、池辺義象：48件、

中の件、井上毅（梧陰、1844～1895）関係の件等個人的に多少関心あることを一、二抽出するに止めた。御示教を得て、他日稿を改める機会を持てることを願っている⁴。

（追記）

・近時大沼宜規氏（1971～）「池辺義象の日記—古典講習科生徒の青春—」『日本史学集録』第37号（平成27（2015）年12月31日刊）が公表され、また、西尾市・岩瀬文庫所蔵池辺義象半自叙伝「千代のかたみ」がHPで公開されたことから、本稿は全面的に改稿の要があるが、取り敢えずはこれらの紹介のみにとどめざるを得ないことをお断りしておく。

（平成29（2017）年7月23日記）

〈<http://ci.nii.ac.jp/naid/40021201688/>〉

〈<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11E0/WJJS06U/2321315100/2321315100100010?hid=ht086790>〉 ⇒ 「千代のかたみ」全文テキストへのリンクあり。

【キーワード】

池辺義象（小中村義象、1861.10.3～1923.3.6）、小中村清矩（1822～1895）、小中村たつ子（清矩室、？～1912）、小中村三作（清矩三男、1863～1933）、/
池辺三山（1864～1912）、谷干城（1837～1911）、井上毅（1844～1895）、田中光顕（1843～1939）、木下広次（1851～1910）、/
飯田武郷（1828～1900）、中邨秋香（中村、1841～1910）、落合直文（1861～1903）、増田于信（1862～1932）、/上田萬年（1867～1937）、芳賀矢一（1867～1927）、藤岡作太郎（1870～1910）、幸田成行（露伴、1867～1947）、/
浅井忠（1856～1907）、杉浦鋼太郎（1857～1942）、/
細川侯爵家

小中村清矩: 36件) 〈<http://dl.ndl.go.jp/#classic>〉

・NACSIS Webcat: 〈<http://webcat.nii.ac.jp/>〉（平成25（2013）年3月8日〈金〉でサービス終了予定との由）⇒下記 CiNii へ

・CiNii（NII論文情報ナビゲータ[サイニィ]）〈<http://ci.nii.ac.jp/books/>〉

⁴ 将来的には、池辺氏についても、例えば、同氏と親交の厚かった落合直文（1861～1903）に関する落合秀男（1904～1989）編『落合直文著作集』（全三巻、明治書院、I：平成3年7月10日刊、II：同年10月10日刊、III：同年11月30日刊）の如き著作集の刊行が望まれる（平成23年4月18日追加）。

池辺義象氏のことを初めて知ったのは、昭和42（1967）年春さる先生の「日本法制史」の講筵に連なった時である。ちなみに、この春は、前年秋に「日本の法制史を変えた」といわれる『法社会史』（みすず書房、昭和41年11月30日刊）を出されたある先生の「西洋法制史」をも初めて聴講できた思い出深き時期であった。この「日本法制史」では、何故か指定参考書が石井良助博士（1907～1993）の『日本法制史概要』（創文社、昭和27年4月29日第1刷印刷、昭和41年5月19日第16刷刊）であり、そこで、小中村清矩（1822～1895）、小中村義象（池辺義象）、小早川欣吾（1900～1944）等の学者のお名前を知り、当時関心を持って、いささか調べた覚えがある。このうち、池辺義象氏については、小中村清矩逝去の後に何故小中村家と離縁したのか、欧州遊学後どうして京都に行ったのかの二つが、特に気になった。その後は、諸事にかまけて何もしなかったが、平成年代に入ってから、小早川先生については一、二のものを作成した。池辺義象氏に関しても、関係文献集だけでも作っておきたいと思っていたが、平成21（2009）年に、たまたま、千賀鶴太郎博士（1857～1929）及び戸水寛人博士（1861～1935）のことを調べる機会を得たことから、同氏についても、不十分ではあるが、二、三調査した（『千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士・池辺義象氏略年譜・著作目録—日本ローマ法学七先生略年譜・著作目録（千賀博士・戸水博士限定追加版）—日本ローマ法学七先生略年譜著作目録—』（私家版、平成22年3月31日刊））。この間、諸先生方より御懇篤な御教示を賜った。厚く御礼申し上げるものである。本稿は、これに、その後に判明したことでもって、修正、追加をなしつつあるものである。更なる御示教を乞う次第である。（平成23年10月19日追加、平成24年3月6日一部補正）

【関連 HP】

- ・「法制史学者著作目録選」：（平成 24 年 10 月 26 日追加）
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Historian2003.htm>〉

1 略年譜

* [参考サイト]

- ・「池辺義象」

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%A0%E8%BE%BA%E7%BE%A9%E8%B1%A1>〉、
〈<http://21coe.kokugakuin.ac.jp/db2/kokugaku/ikebe.004.html>〉

- ・「サボンちゃんのひとりごと」 (その1 ご先祖さまと私)

〈<http://www.ohmoto-s.co.jp/raum/sabon/sabon-hitorigoto200503.htm>〉

(ただし、昨平成 22 (2010) 年 3 月 3 日現在では既に閉鎖されていた。)

(追記)

上記「はじめに」にて追加記述のことを再録しておく。

・近時大沼宜規氏 (1971~) 「池辺義象の日記—古典講習科生徒の青春—」『日本史学集録』第 37 号 (平成 27 年 12 月 31 日刊) が公表され、また、西尾市・岩瀬文庫所蔵池辺義象半自叙伝「千代のかたみ」が HP で公開されたことから、本稿は全面的に改稿の必要があるが、取り敢えずはこれらの紹介のみにとどめざるを得ないことをお断りしておく。(平成 29 (2017) 年 7 月 23 日記)

〈<http://ci.nii.ac.jp/naid/40021201688/>〉

〈<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11E0/WJJS06U/2321315100/2321315100100010?hid=ht086790>〉 ⇒「千代のかたみ」全文テキストへのリンクあり。

* [肖像]

・『読売新聞』大正 6 (1917) 年 11 月 9 日 (金) 朝刊 5/8 頁掲載「新寄人二人 佐々木 [信綱] 博士と池辺義象氏」(写真あり。「ヨミダス歴史館」に拠る。)(平成 24 年 2 月 20 日追加)

・昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第 22 卷 (池辺義象、有島武郎、ケーベル、厨川白村、三木天遊) (昭和女子大学、昭和 39 年 12 月 1 日刊) 中口絵「池辺義象」⇒下記「ネット資料「II (小特集) かつて池辺義象という学者がいた」」⁵に同一写真あり。(この分平成 25 年 6 月 3 日追加)

〈<http://www.city.nishio.aichi.jp/nishio/kaforuda/40iwase/kikaku/48konna10/konna10.html>〉

- ・『國學院大學百年史 (上・下)』(國學院大學、平成 6 (1994) 年 3 月 27 日刊。)

(上): 169 頁 (明治 26 (1893) 年 7 月 7 日撮影「第 1 回卒業生集合写真」中に「小中村義象」の姿あり。同氏 30 歳過ぎの写真で貴重。) ⇒宮部香織「池辺義象の『日本制度通』講義」『校史』第 23 号 (國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター、平成 25 年 3 月 4 日刊) 7~10 頁 (10 頁に池辺義象の写真 (「明治 26 年の國學院第一回卒業式集合写真より」) あり。)(後半部分: 平成 25 年 5 月 11 日追加)

・『國學院黎明期の群像』(國學院大學日本文化研究所、平成 10 (1998) 年 3 月 15 日刊) (斎藤ミチ子「池辺義象」391 頁)

- ・HP「ことば先生翁」(遠藤熊吉: 1874~1952) (平成 18 (2006) 年 HP 開設)

〈<http://nishinaruse.sakuraweb.com/kumakichi/kumakichi.html>〉

北条常久 (1939~、秋田市立中央図書館長) 「標準語村の生成と展開」(2 指導者遠藤熊吉) 〈<http://nishinaruse.sakuraweb.com/kotoba/hojo02.html>〉

ここに、「明治廿八 [1895] 年三月大八洲学校⁶卒業記念」(写真裏面に記載) なる遠藤熊吉氏旧蔵写真 (裏面に「氏名録」もある。) が掲載されており、当時の同校教師として

⁵ 西尾市岩瀬文庫ネット資料「2013 年 1 月 26 日 (土) ~2013 年 3 月 31 日 (日) こんな本があった! 10~岩瀬文庫平成悉皆調査中間報告展 10~ II (小特集) かつて池辺義象という学者がいた」

〈<https://iwasebunko.jp/event/exhibition/entry-131.html>〉 (令和 6 (2024) 年 1 月 1 日特別追加)

⁶ 大八洲学校は、大八洲学会の教育機関という。(平成 24 年 12 月 4 日追加)

大八洲学会: 〈<http://ameblo.jp/k2600nen/entry-10195301457.html>〉

「(左から)小中村義象 [1861~1923]、萩野由之 [1860~1924]、飯田武郷 [1828~1900]、木村正辞 [まさこと、1827~1913]、本居豊穎 [とよかい、1834~1913]、落合直文 [1861~1903]、関根正直 [1860~1932]」と国語伝習所の創設者であった杉浦剛太郎⁷ [マ、鋼太郎、1857~1942] 及び飯田永夫⁸ [武郷次男、? ~1918、65 歳] の姿があり、まことに貴重である。

なお、北条常久『標準語の村 遠藤熊吉と秋田西成瀬小学校』（無明舎出版、平成 18 年 7 月 20 日刊）24 頁にも同一写真が掲載されているが、ここには、同写真裏に記載されている「氏名録」は掲載されていないので、人物特定ができる向きには問題ないのであろうが、一般的には上記 HP は重要な意味を有するといえる。この他、後掲 [「*追悼記」欄] 『大成』第 50 号（大成学園同窓会設立 85 周年会報特集号、平成 24 年 5 月 15 日刊）38 頁にも同一写真が掲載されているが、ここでも、杉浦鋼太郎氏以外の人物の特定はされていない。

木村正辞（まさこと）：〈<http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/66.html?c=9>〉

杉浦鋼太郎：

〈http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/S/sugiura_k.html〉

（平成 24 年 12 月 4 日追加、同年 12 月 8 日、同 25 年 1 月 23 日各一部修正）

（追記）念のため、上記「明治廿八 [1895] 年三月大八洲学校卒業記念写真」裏面氏名録を掲載しておく。（平成 29（2017）年 7 月 23 日追加）

- ・一列目写真に向かって左から 不明、杉浦鋼太郎、不明
- ・二列目写真に向かって左から 小中村義象、萩野由之、飯田武郷、木村正辞、本居豊穎、落合直文、関根正直
- ・三列目写真に向かって左から 四人不明、飯田永夫、三人不明
- ・四列目写真真ん中 遠藤熊吉、残り不明

・ネット資料「Ⅱ〈小特集〉かつて池辺義象という学者がいた」西尾市岩瀬文庫「こんな本があった！～岩瀬文庫平成悉皆調査中間報告書 10～」（平成 25 年 1 月 26 日（土）～3 月 31 日（日）、西尾市岩瀬文庫・岩瀬文庫資料調査会。前掲『近代文学研究叢書』第 22 巻掲載と同一写真）（平成 25 年 6 月 3 日追加）

〈<http://www.city.nishio.aichi.jp/nishio/kaforuda/40iwase/kikaku/48konna10/konna10.html>〉

・東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館 HP

〈<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/contact.html>〉

デジタルアーカイブ 12 古写真

〈http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/images/ichiko_12_20170116.pdf〉

第一高等学校（明治 27 年 9 月第一高等学校に改称）文芸部委員 明治 27（1894）年

〈<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/images/ichiko/bunngaiibu.pdf#search=%27%E6%96%87%E8%8A%B8%E9%83%A8+%E5%B0%8F%E4%B8%AD%E6%9D%91%E7%BE%A9%E8%B1%A1%27>〉

（平成 30 年 10 月 19 日追加）

（参考）小中村清矩肖像（平成 24 年 2 月 17、24、27 日、11 月 19 日追加）

・67 歳時撮影のもの（小中村清矩遺著『国史学のしをり』（吉川半七、明治 28 年 11 月 17 日刊）口絵）〈<http://sky.geocities.jp/petrus0067/index.html>〉

〈http://sky.geocities.jp/petrus0067/portrait_KONAKAMURA.html〉

⇒同『国史学の葉』（勉強堂書店、明治 33 年 10 月 25 日刊）では、肖像が差し替えられている。

〈<https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/bitstream/2324/19907/1/法学セミナー-2011.3.pdf>〉

⁷ 「大成学館 国語伝習所 大成中学校 東洋商業学校校主杉浦鋼太郎君」『東京名古屋現代人物誌』（柳城書院、大正 5 年 12 月 25 日刊）234~238 頁（「近代デジタルライブラリー」〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉に収録。）（平成 24 年 12 月 7 日追加）

⁸ 『近代文学研究叢書 第 4 巻』（昭和女子大学光葉会、昭和 31 年 9 月 10 日刊）「飯田武郷」（283~324 頁）中 320 頁参照。（平成 24 年 12 月 8 日追加）

- ・細江光（1959～）『谷崎潤一郎—深層のレトリック』（和泉書院、平成16年3月31日）542～560頁（554頁に、「写真8 神祇大史従七位・小中村清矩（51歳）」、「写真9 小中村清矩と妻・たつ子」等あり）
- ・〈<http://talent.yahoo.co.jp/pf/detail/pp255157>〉

*〔雅号〕

- ・〔雅号1〕藤園（由来：『明治人物逸話辞典 上巻』（東京堂出版、昭和40年4月10日刊）「池辺義象」56、57頁参照。元は「巴戟天舎」（ひひらぎのや（ひいらぎのや））、明治10年代には「比々良木舎」の使用例あり（この部分平成23年6月8日、令和4年6月26日（高橋均先生の御教示に拠る。併せ次世代デジタルライブラリー〈<https://lab.ndl.go.jp/dl/fulltext>〉参照。）各一部補正。）。『近代作家追悼文集成〔2〕原抱一庵 落合直文 斎藤緑雨 綱島梁川』（ゆまに書房、昭和62年1月25日刊。初出：『明星』辰歳第2号（明治37年2月1日刊）、『国文学』第62号（明治37年2月25日刊））中「落合直文」中89、90頁。落合秀男編『落合直文著作集』Ⅱ（明治書院、平成3年10月10日刊）407頁、落合直文の「菽之家」との対比。（平成23年4月15日一部追加）、「藤園主人（ふぢそののあるじ）」（池辺義象『世界読本 巻の一』（弘文館、明治34年11月30日刊）巻頭「世界読本を著はしたわけ」参照。）
- ・〔雅号2〕知且、知且居士（ちたんこじ）⁹

*〔自筆文献〕（平成25年6月3日新設）

- ・池辺史生（池辺義象兄源太郎の令孫、1939～）「池辺義象」『近現代日本人物史料情報辞典3』（吉川弘文館、平成19年12月10日刊）23～25頁に自筆文献残存場所等の記載がある。（平成25年6月3日追加）
- ・愛知県西尾市岩瀬文庫にかなりりの自筆文献ありと聞く。
 〈<http://www.city.nishio.aichi.jp/nishio/kaforuda/40iwase/index.html>〉
 同館ネット資料「Ⅱ〈小特集〉かつて池辺義象という学者がいた」西尾市岩瀬文庫「こんな本があった！～岩瀬文庫平成悉皆調査中間報告書10～」（平成25年1月26日（土）～3月31日（日）、西尾市岩瀬文庫・岩瀬文庫資料調査会。前掲『近代文学研究叢書』第22巻掲載と同一写真）（平成25年6月3日追加）
 〈<http://www.city.nishio.aichi.jp/nishio/kaforuda/40iwase/kikaku/48konna10/konna10.html>〉（平成25年6月3日追加）
- ・平成23年5月頃の大沼宜規先生の御示教では西尾市岩瀬文庫所蔵「池辺義象日記（明治17（1884）年1月1日～4月27日）」がある由。同日記（「千代のかたみ」、小中村家の養子となった直後から明治17年8月までとのこと。文書番号162-230）につき、齊藤智朗「明治国学の継承をめぐって—池辺義象と明治国学史—（国学特集）」『國學院雑誌』第107巻第11号（平成18年11月15日刊、通号第1195号）189頁註（31）参照。（平成25年6月3日追加）

⁹ フランス滞在中に新聞『日本』に寄稿した「巴里風俗問答」の著者名等である（『近代文学研究叢書』第22巻「池辺義象」著作目録参照。）。（平成24年3月6日追加）

〈<http://ameblo.jp/dokkyohisashi/entry-10122647919.html>〉参照。

この他、鈴木良・福井純子「（史料紹介）岡村司『西遊日誌』（その3）」『立命館産業社会論集』第31巻第2号（通号第85号、平成7年9月刊）129頁右参照。（平成24年8月3日追加）

* [略年譜]

(**：参考事項)

文久元年(1861)年10月3日 肥後熊本に生れる¹⁰。

明治12(1879)年9月 伊勢・神宮教院本教館¹¹(神宮皇學館の前身)に入学する¹²。

**明治12(1879)年 小中村清矩(1822~1895)が井上毅(1844~1895)に初めて会う¹³。(平成24年3月8日追加)

明治14(1881)年12月 伊勢・神宮教院本教館閉鎖、解散のため、上京す。

その後、牛込市ヶ谷田町の谷干城(1837~1911)邸の書生となる¹⁴。

¹⁰ 熊本時代の池辺の教育歴に関心が持たれるが、寡聞にして未だ把握できていない。例えば、『読売新聞』大正6(1917)年11月10日(土)朝刊5/8頁掲載「新興国の元気を歌へ =寄人に内定されたる= 池辺義象氏談」中には、熊本在住14、5歳時での歌の師であった中島広足(1792~1864)の弟子小山多乎里(おやまたこり、一太郎、?~1896、享年81)への言及あり。すなわち、「池辺義象氏を訪へば氏は語る『私は十四五歳の時熊本で本居派の中島広足の弟子小山多乎里の門に入ったので、その頃から既[も]う和歌は非常に好きであつた・・・(中略)』(「ヨミダス歴史館」に拠る。)。小山多乎里校訂『参考吉野拾遺』(小山多乎里住所: 熊本県飽田郡池田村五百五十九番地。巻末に小中村義象名の『参考吉野拾遺』あり。東京・六合館弦巻書店、明治27年7月3日刊)。小山につき下記参照。(平成24年1月31日追加、同年2月20日一部修正) <<http://red.ribbon.to/~menorah/oyama-rk.html>> 参照。

¹¹ 明治6(1873)年1月10日神宮教院創設、同9(1876)年10月神宮教院本教館創設、同14(1881)年12月9日神宮教院本教館閉鎖。

<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9A%87%E5%AD%B8%E9%A4%A8%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E5.AD.A6.E5.9C.92.E3.81.AE.E5.85.85.E5.AE.9F>>

¹² 松野勇雄(1852~1893)、落合直文(1861~1903)を知る。(平成23年2月14日追加)

<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%BE%E9%87%8E%E5%8B%87%E9%9B%84>>

<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%90%BD%E5%90%88%E7%9B%B4%E6%96%87>>

うち、松野勇雄と本居豊穎(とよかい、1834~1913)家の関係につき、安津素彦(あんず、1912~1985)「松野勇雄『皇典講究所 草創期の人びと』(國學院大學、昭和57年11月4日刊)61、68頁、松浦良代(1948~)『本居長世 日本童謡先駆者の生涯』(国書刊行会、平成17年3月20日刊)21、22、40~43頁等参照。本稿後掲「増田于信(1862~1932)」の記述をも参照。(平成23年4月18日追加)

なお、この頃の神宮教院本教館のことについては、例えば、『近代作家追悼文集 [2] 原抱一庵 落合直文 斎藤緑雨 綱島梁川』(ゆまに書房、昭和62年1月25日刊)中「落合直文」(初出:『明星』辰歳第2号(明治37年2月1日刊)、『国文学』第62号(明治37年2月25日刊))における各氏の追悼文(阪正臣(ばん、1855~1931): 51~54、110~111頁、青戸波江(1857~1929): 76~85頁、池辺義象: 85~92頁、橋本光秋: 109頁)等に詳しい。(平成23年4月18日追加)

¹³ 小中村清矩「井上子爵の御霊の前に申す詞」『有声録』(石川文栄堂、大正9年9月20日刊)262~264頁(当該記事は263頁)(平成24年3月8日追加)

<<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/953884/1/145>>

¹⁴ 池辺義象と谷干城(1837~1911)の関係は重要であるが、詳しいことはなお不明である。谷につき、差し当たり、最新の文献として、小林和幸(1961~)『谷干城—憂国の明治人』(中公新書、平成23年3月23日刊)参照。島内登志衛編『谷干城遺稿』上(東京・靖献社、明治45年4月22日刊。覆刻本: 東京大学出版会、1: 昭和50年12月1日刊、2: 昭和51年1月5日刊(続日本史籍協会叢書))。

<<http://kindai.ndl.go.jp/>> 所収日記には、当該年月の日記欠のため記載なし。(平成23年3月28日追加) なお、この時期、池辺が谷邸にいたことについては、前掲『近代作家追悼文集成 [2] 原抱一庵 落合直文 斎藤緑雨 綱島梁川』(ゆまに書房、昭和62年1月25日刊)中「落合直文」(初出:『明星』辰歳第2号(明治37年2月1日刊)、『国文学』第62号(明治37年2月25日刊))79、86頁参照。(平成23年4月18日追加)

(下記は、平成23年5月8日追加分、平成23年5月23日一部補正)

谷干城関係伝記としては、例えば、平尾道雄(1900~1979)『子爵谷干城伝』(富山房、昭和10年4月25日刊。復刻版: 象山社、昭和56年9月刊)、嶋岡晨(1932~)『明治の人—反骨 谷干城—』(學藝書林、昭和56年7月10日刊)等がある。うち、前者『子爵谷干城伝』は、巻末「余録」2頁において、「子は上述の如く自ら持すること頗る儉素であつたが、決して財を吝んだのでなく、縁故救済、社会公共のためならば欣然として之を抛ち安井千菊[せんぎく、安井息軒(1799~1876)孫、?~1883、享年18]、池辺義象を育てたのはその例であつて、また家庭にも常に数名の書生を養うて居た。」という。なお、谷干城邸は、東京市牛込区市ヶ谷田町三丁目二十一番地である(青山長格編『華族鑑(新刻)』<二書房、明治27年2月10日刊>23丁表、近代デジタルライブラリー <<http://kindai.ndl.go.jp/>> 32コマ)。現在の東京観光専門学校のあたりか。

<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E8%A6%B3%E5%85%89%E5%B0%82>>

明治 15 (1882) 年 9 月 東京大学文学部附属古典講習科¹⁵開設とともに、官費生として国書課に入学、小中村清矩¹⁶等に学ぶ。

明治 17 (1884) 年 1 月 谷干城 (1837~1911) を媒介人 (媒酌人) とし、小中村清矩 (1822~1895) の四女ゑい (栄、1860 (万延元年 3 月 31 日) ~1932.5.12、享年 73¹⁷) と結婚 (入婿) する¹⁸。

この頃の住所: 市ヶ谷加賀町、北豊島郡金杉村 332 番地、本郷区駒込西片町 10 番地その他¹⁹

[E9%96%80%E5%AD%A6%E6%A0%A1](https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11E0/WJJS06U/2321315100/2321315100100010?hid=ht086790)

(追記 1) 池辺義象自伝「千代のかたみ」によれば、谷に池辺を紹介したのは土佐人今橋巖との由。(平成 29 (2017) 年 7 月 23 日追加)

(<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11E0/WJJS06U/2321315100/2321315100100010?hid=ht086790>) で全文テキストを参照のこと。

(追記 2) 今橋巖 (未詳~1899) については、例えば『高知県人名事典 新版』(高知新聞社、平成 11 年 9 月 1 日初版〈マ〉刊) 77 頁 (初称 権助、初名 重泰、明治 32 年 1 月 18 日東京で病没)、広谷喜十郎「今橋権助」安岡昭男『幕末維新大人名事典【上】』(新人物往来社、平成 22 年 5 月 21 日刊) 135 頁等参照。(平成 29 (2017) 年 8 月 30 日追加)

¹⁵ 東京大学文学部附属古典講習科: 『東京帝国大学五十年史 上冊』(東京帝国大学、昭和 7 年 11 月 20 日刊) 721~747 頁、『東京大学百年史 通史 I』(東京大学、昭和 59 年 1 月刊) 462~467 頁等参照。

¹⁶ 「小中村清矩」

(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%8F%E4%B8%AD%E6%9D%91%E6%B8%85%E7%9F%A9>)

¹⁷ ゑいの生年: 「小中村清矩」307 頁、没年: 337 頁 (平成 24 年 3 月 16 日追加)

¹⁸ 大沼宜規先生の御示教では、入婿した日は、明治 17 (1884) 年 1 月 20 日との由である (西尾市岩瀬文庫所蔵「池辺義象日記 (明治 17 年 1 月 1 日~4 月 27 日)」に拠る。)(平成 23 年 5 月 23 日追加、同年 6 月 9 日一部補正) なお、同日記 (「千代のかたみ」、小中村家の養子となった直後から明治 17 年 8 月までとのこと。文書番号 162-230) につき、齊藤智朗「明治国学の継承をめぐる一池辺義象と明治国学史一 (国学特集)」『國學院雑誌』第 107 巻第 11 号 (平成 18 年 11 月 15 日刊、通号第 1195 号) 189 頁註 (31) 参照。(平成 24 年 1 月 31 日追加)

¹⁹ 井上毅伝記編纂委員会編『井上毅伝 史料篇第四』(國學院大學図書館、昭和 46 年 9 月 5 日刊) 4 頁 (明治 17 年 2 月 10 日井上毅発小中村義象宛書簡。小中村清矩邸と同じか。)。なお、逸見久美 (いつみ、1926~) 編『与謝野寛晶子書簡集成 第 1 巻』(八木書店、平成 14 年 10 月 25 日刊) (与謝野寛 (1873~1935) 発小中村義象宛書簡 5 通 (明治 26 年) 中: 明治 27 年 5 月 16 日分 (推定日時、6 頁) では「本郷駒込西片町 10 番地」、明治 27 年 7 月 27 日分 (7 頁) では「駒込西片町 10 番地」とある。) 参照。

(追記 1) 大沼宜規 (1971~) 編著『小中村清矩日記』(汲古書院、平成 22 年 7 月 15 日刊) によれば、結婚後市ヶ谷加賀町をはじめ何回か転居しているようであるが、詳細未検討 (平成 22 年 12 月 5 日追加)。

(追記 2) 上記『日記』掲載のもの以外では、例えば、萩野由之 (1860~1924) ・小中村義象共著『日本制度通巻一』(吉川半七、明治 22 年 9 月 26 日刊。『明治後期産業発達史資料 第 733 巻 日本制度通巻 1・巻 2・巻 3』(龍溪書舎、平成 16 年 10 月復刻版第 1 刷)) 奥付では「北豊島郡金杉村 332 番地」とあるが、当時の小中村清矩の住所は「東京府下北豊島郡金杉村 375 番地」(『歌舞音楽略史』(著述者兼発行人 小中村清矩、明治 21 年 2 月 27 日刊)) とあるので、その近くに住んでいたものかと思われる (この記述は後掲 (追記 3) のように訂正す。)。ただし、「近代デジタルライブラリー」収録の『日本制度通巻 1』(吉川半七、明治 22 年 9 月 1 日刊) の奥付では、池辺の住所は「本郷区駒込西片町十番地」とあるが、ここは、明治 23 (1890) 年 10 月 29 日 (水)『読売新聞』朝刊「転居」広告「転居 本郷区駒込西片町拾番地 小中村清矩」(「ヨミダス歴史館」に拠る。同日 4/4 頁) に見るように、その後の小中村清矩の住居地である。この頃、小中村清矩家は金杉村 (根岸) と駒込西片町の家を使っていたものかと思われる。なお、『梧陰存稿』(六合館書店、明治 28 年 9 月 13 日刊) 奥付に拠れば、この時点での池辺の住所は「本郷区西片町拾番地」であって、小中村清矩と同居の形であったかとも考えられる。(平成 23 年 12 月 19 日追加、平成 24 年 1 月 8 日、3 月 6 日、平成 30 年 10 月 19 日各一部補正)。

(追記 3) 明治 21 (1888) 年 6 月 13 日小中村清矩は東京府下北豊島郡金杉村金杉村 332 番地に転居している。大沼宜規氏 (1971~) 編著『小中村清矩日記』(汲古書院、平成 22 年 7 月 15 日刊) 237、239、252、296 頁各参照。更に『東京百事便』(三三文房、明治 23 年 7 月 9 日刊) 495 頁 (国会図書館デジタルコレクション 258 コマ)、497 頁 (同 259 コマ) を見るに、小中村清矩及び小中村義象の当時の住所については、「下谷区金杉村三百三十二番地」とある。この頃は一時同居していたものかと思われる。

(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991721/336>) (平成 30 (2018) 年 10 月 19 日追加)

明治 18 (1885) 年秋 井上毅 (1844~1895) に初めて会う²⁰。(平成 24 年 3 月 6 日追加)
明治 19 (1886) 年 7 月 10 日 上記卒業 (* 同年 3 月東京大学は帝国大学と改称。)
明治 19 (1886) 年 学士院より『古事類苑』の編纂委員を嘱託される。
明治 19 (1886) 年 12 月 宮内省図書属 (* 図書寮: 明治 17(1884) 年 井上毅²¹(1844~1895) 図書頭に就任)
明治 21 (1888) 年 12 月 第一高等中学校²²嘱託 (授業を担当。木下広次²³(1851~1910) 校長在任: 明治 22 年 5 月 9 日~同 26 年 6 月 9 日。なお、木下は校長になる前の明治 21 年 10 月帝国大学法科大学教授で同校教頭を兼務している。当時の校長は古荘嘉門(1840~1915) (平成 23 年 7 月 5 日追加、同年 10 月 19 日一部補正、同年 12 月 2 日一部補正)。
** 明治 22 (1889) 年 9 月 落合直文 (1861~1903) 第一高等中学校に勤務 (明治 23 (1890) 年 9 月に一中教諭、教授、後に一高教授) (平成 24 年 3 月 12 日追加、平成 25 年 4 月 1 日一部補正)
明治 22 (1889) 年 10 月 24 日 第一高等中学校教諭、奏任官五等²⁴
明治 23 (1890) 年 10 月 第一高等中学校教授²⁵
明治 27 (1894) 年 3 月 26 日 兼任女子高等師範学校教授、高等官七等²⁶
** 明治 27 (1894) 年 9 月 11 日 第一高等中学校、第一高等学校に改称
** 明治 28 (1895) 年 3 月 15 日 井上毅逝去 (1844~1895.3.15)
<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%95%E4%B8%8A%E6%AF%85>>
** 明治 28 (1895) 年 4 月 1 日 帝国大学文科大学内に史料編纂掛設置
明治 28 (1895) 年 4 月 史料編纂委員嘱託²⁷
明治 28 (1895) 年 5 月 1 日 依願兼官被免²⁸

²⁰ 小中村義象「梧陰存稿の奥に書きつく」『梧陰存稿』(六合館書店、明治 28 年 9 月 13 日刊。「近代デジタルライブラリー」収録同書巻二 49~69 コマ。『井上毅伝 史料篇 第三』(國學院大學図書館、昭和 44 年 3 月 5 日刊) 702~709 頁、当該記事 702 頁) (平成 24 年 3 月 6 日追加)

²¹ 井上毅: <<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%95%E4%B8%8A%E6%AF%85>> (平成 23 年 2 月 18 日追加)

²² 第一高等中学校の略称は「一中」である。例えば、下村海南 (宏、1875~1957)『隨筆 二直角』(櫻井書店、昭和 17 年 7 月 1 日刊) (「近代デジタルライブラリー」参照。) 中「玉川楼事件」(37~44 頁) 「その昔一中時代……第一高等中学校をつめて一中といったもので、当時府立の中学校が、広い東京で築地に只一つしか無かつた時代には、高等中学は東京仙台京都金沢熊本と五つしか無かつた。今の一高の前身が一中といったのである。」(37 頁) 参照。(平成 25 年 3 月 28 日追加)

²³ 木下広次: <<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%A8%E4%B8%8B%E5%BA%83%E6%AC%A1>> (平成 23 年 2 月 18 日追加)

<<http://www6.ocn.ne.jp/~kohryoh/album02.html>> (平成 23 年 10 月 19 日追加)

²⁴ 国立公文書館デジタルアーカイブ <<http://www.digital.archives.go.jp/>> 中「小中村義象 宮内省図書属小中村義象第一高等中学校教諭ニ被任ノ件」(平成 23 年 4 月 18 日追加)

²⁵ ・保科孝一 (1872~1955)『ある国語学者の回想 挿話に浮んだ名士の面影』(朝日新聞社、昭和 27 年 10 月 10 日刊)「小中村義象」11~13 頁 (一高教授時代のこと) (平成 23 年 2 月 28 日追加)

<http://uwazura.cocolog-nifty.com/blog/files/hosinakoiti_arukokugogakusya.pdf>

・八木雄一郎「小中村義象の国語教育論—明治 20 年代における「国語観の時代的拡大」の中で—」『人文科教育研究』(筑波大学・人文科教育学会) 第 33 号 (平成 18 (2006) 年 8 月 20 日刊) 83~93 頁 (平成 23 年 2 月 28 日追加)

<<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/limedio/dlam/M86/M864217/8.pdf>>

²⁶ 『東京朝日新聞』明治 27 年 3 月 28 日 1 頁 2 段参照。(平成 23 年 2 月 7 日追加)、国立公文書館デジタルアーカイブ <<http://www.digital.archives.go.jp/>> 中「小中村義象 第一高等中学校教授小中村義象兼女子高等師範学校教授高等官七等ニ任叙ノ件」(平成 23 年 4 月 18 日追加)

²⁷ 『東京大学百年史 部局史 4』(東京大学、昭和 62 年 3 月刊) 562 頁、三上参次 (1865~1939)『明治時代の歴史学界 三上参次懐旧談』(吉川弘文館、平成 3 年 2 月 10 日刊) 80~81 頁各参照。(追加) 桑原伸介 (1918~)「近代政治史料収集の歩み 3 —井上毅と修史事業の再建—」『参考書誌研究』第 22 号 (昭和 58 年 6 月刊) 12~13 頁 (平成 24 年 2 月 6 日追加)

<http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/22-12.pdf#search=近代政治史料収集の歩み_3>

²⁸ 女高師辞職につき、前掲三上参次『明治時代の歴史学界 三上参次懐旧談』80 頁参照。国立公文書館デジタルアーカイブ <<http://www.digital.archives.go.jp/>> 中「小中村義象 第一高等学校教授兼女子高等師範学校教授小中村義象依願兼官被免ノ件」(平成 23 年 4 月 18 日一部修正)

＊＊明治 28 (1895) 年 9 月 井上毅『梧陰存稿』2 卷 (東京神田六合館) 刊行、編纂は小中村義象 (「奥に書きつく」参照。)

＊＊小中村義象「故井上子爵小伝」『第一高等学校 校友会雑誌』第 47 号 (明治 28 年 5 月 23 日刊) 13～17 頁 (「web 版日本近代文学館」参照。)、同「故井上子爵小伝」『大日本教育会雑誌』第 166 号 (明治 28 年? 月刊。未見。)

＊＊明治 28 (1895) 年 10 月 11 日 (墓石では 10 月 9 日の由) 小中村清矩 (1822～1895) 逝去

明治 31 (1898) 年 1 月 離婚、原姓に復す²⁹。離婚後、一切の公職を辞す (1 月 一高教授辞任、6 月 史料編纂委員辞任)

この頃の住所: 牛込西五軒町 10³⁰

明治 31 (1898) 年夏から明治 33 (1900) 年末まで フランス等に游学³¹

明治 31 (1898) 年 7 月 8 日 横浜出帆³² 8 月 8 日パリ着³³

＊＊明治 31 (1898) 年 9 月 落合直文 (1861～1903) 第一高等学校教授非職³⁴ (平成 24 年 3 月 12 日追加、平成 25 年 4 月 1 日一部補正)

＊＊明治 32 (1899) 年 7 月 3 日 勅令第 321 号により、京都帝国大学法科大学に法制

²⁹ 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第 2 卷 (小中村清矩等) ([昭和女子大学] 光葉会、昭和 31 年 4 月 10 日刊) 中「小中村清矩 5、遺跡、遺族」(334～338 頁) 参照。加えて、後掲「木下広次関係資料 (京都大学大学文書館)」の「木下広次宛池辺義象書簡」27 通中「資料番号 12-5 1897 (明治 30) 年 10 月 14 日: 家復旧 (分家) の件」、「資料番号 12-6 1897 年 11 月 17 日: 離縁案」、「資料番号 12-7 1898 (明治 31) 年 1 月 11 日: 復姓につき礼」、「資料番号 12-8 1898 年 2 月 12 日: 外遊決心報告」等及び同資料中「資料名 増田于信 (1862～1932) 宛谷干城書簡 資料番号 木下-416-1 ファイル 14 作成年月日 (1897 年 12 月 3 日) 備考 義象離縁の件」各参照。谷書簡は、松尾尊先先生、西山伸先生の御高配に与った。

³⁰ 三村竹清 (1876～1953)『三村竹清集 2 日本書誌学大系 23 (2)』(青裳堂書店、昭和 57 年 6 月 15 日刊) 178 頁 (「陽春廬日記」178～179 頁) (平成 23 年 6 月 5 日追加)

³¹ 明治 31 年 5 月 14 日上野松源で送別会ありとのこと (前掲『三村竹清集 2 日本書誌学大系 23 (2)』179 頁 (この部分: 平成 23 年 6 月 5 日追加))。往復路の旅行記として、池辺義象『仏国風俗問答』(明治書院、明治 34 年 6 月 15 日刊) 中附録「八重の海山 明治三十一年」(1～52 頁)、同「潮の八百路 明治卅三年の末より全卅四年に及ぶ」(1～42 頁) (国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵) がある。同書は、その他諸々のこととあわせ貴重。

³² 『東京朝日新聞』明治 31 年 7 月 10 日朝刊 3 頁 3 段「寺尾 [亨、1859～1925] 氏等出発」、同明治 31 年 7 月 10 日朝刊 3 頁 5 段落合直文「池辺義象君におくれる歌どもの中に」各参照 (平成 23 年 2 月 7 日追加)。

³³ パリでの浅井忠 (1856.7.22～1907.12.16) との親交は周知のことであり、池辺が編輯した浅井忠の遺稿、追悼録『木魚遺響』(編輯者 黙語会代表者 池辺義象、京都・芸艸堂 (うんそうどう)、明治 42 年 9 月 30 日刊) は、極めて貴重である。パリ、京都での交友を含めた池辺関係のものとして、同書の下記各頁参照。 (<<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/851860/1/1>> (国立国会図書館デジタルコレクション))

・渡欧日記 (故人遺稿、15～63 頁)、(2) 巴里日記: 31～63 頁)、・巴里寓居日記 (故人及小山 (正太郎、1857～1916)、池辺、63～73 頁)、・池辺義象「海の内外」(175～194 頁)、「黙語翁と兔」(194～195 頁)、「西洋風俗画」(195～196 頁)、「巴里会」(196 頁)、「執筆と気燄」(196～197 頁)、「酒席にも筆をおくひまなし」(197～198 頁)、「然諾を重んず」(198 頁)、「気取屋を嫌ふ」(198～199 頁)、「聖護院の画堂」(199～200 頁)、「美術及美術工芸雑誌」(200 頁)、吊文「浅井忠君の霊に告る詞」(262～265 頁)、吊歌「親友浅井忠君の死を悲しみてその病床にあられし時よりの事を偲びつゝけてよめる五十首の歌」(273～280 頁)

加えて、石井柏亭 (1882～1958)『浅井忠 画集及評伝』(京都・芸艸堂、昭和 4 年 11 月 5 日刊) (池辺義象関係: 83～88、128、129、144、145、154、155、170、172、175 頁等) も参考になる。(平成 24 年 1 月 8 日追加) なお、当時のことを検討した戦後の著作として、例えば、高橋在久 (すみひさ、1927～2005)『浅井 忠 原風景と留学日記』(第一法規出版、昭和 63 年 5 月 30 日刊) 52、86、87、89、105～113、115、116、118、119～127、129～134 (「藤園氏」のものあり。)、135 (「三人」)、188、190 頁参照 (この分は平成 23 年 5 月 23 日追加)。

この他、パリで接点のあった後年の京大法科教授には岡村司 (1867～1922)、勝本勘三郎 (1867～1923) がいる (『木魚遺響』182、189、196 頁)。(平成 24 年 1 月 8 日追加)

³⁴ 明治 31 (1898) 年 9 月落合の一高教授「本官非役[ママ]」の件につき、三上参次 (1865～1939)『明治時代の歴史学界 三上参次懐旧談』(吉川弘文館、平成 3 年 2 月 10 日刊) (明治三十一年 (第 12 回) 「二 国学者の気風」134～136 頁参照 (本註: 平成 24 年 11 月 19 日追加)。『東京朝日新聞』(「聞蔵Ⅱビジュアル」) 明治 31 年 9 月 11 日朝刊 2 面参照 (本註: 平成 25 年 4 月 1 日追加)。

史比較法制史講座設置

明治 33 (1900) 年 12 月末 帰朝寸前に、ロンドンで夏目漱石 (1867~1916。漱石は第一高等中学校での教え子) と暫時相宿す³⁵。12 月 22 日 ロンドン出帆

明治 34 (1901) 年 2 月 8 日 帰朝 (神戸着、同 11 日東京着)、牛込区東五軒町居住³⁶

明治 34 (1901) 年 6 月 15 日現在 牛込区矢来町 3 番地に居住³⁷

明治 34 (1901) 年 11 月 野口敦 (? ~1969.3.16、89 歳) と再婚 (平成 23 年 4 月 18 日一部補正、平成 24 年 2 月 6 日一部修正)

* * 明治 35 (1902) 年 4 月 ~ 5 月頃落合直文「四つ目屋事件」³⁸に遭遇 (平成 25 年 4 月 1 日追加)

* * 明治 35 (1902) 年 9 月 7 日頃 浅井忠 (1856~1907) 京都に移住 (平成 24 年 3 月 6 日追加)

明治 36 (1903) 年 4 月 京都帝国大学法科大学講師を嘱託され、法制史 (日本法制史) の講義を担当す。京都市吉田町に移る³⁹。

³⁵ 『漱石全集 第 22 巻 書簡 上』 (岩波書店、平成 8 年 3 月 19 日刊) 池辺義象関連分: 200 頁 (① 書簡 207、明治 33 (1900) 年 12 月 26 日 (水) ロンドンから夏目鏡 (鏡子、1877~1963) 宛)、207 頁 (② 書簡 212、明治 34 (1901) 年 1 月 3 日 (木) ロンドンから芳賀矢一 (1867~1927) 宛) 参照。なお、前掲池辺義象『仏国風俗問答』附録「潮の八百路 明治卅三年の末より全卅四年に及ぶ」1 頁参照。

³⁶ 明治 34 (1901) 年 2 月 13 日『東京朝日新聞』朝刊 4 頁は、広告として、「本日帰朝仕候間辱知諸君に謹告す 明治卅四年二月十一日 東京牛込区東五軒町三十番地 池辺義象」を掲載している。(平成 23 年 2 月 7 日追加)

³⁷ 前掲池辺義象『仏国風俗問答』奥付に拠る。

³⁸ 『東京朝日新聞』(「聞蔵Ⅱビジュアル」) 明治 35 年 4~5 月関係記事参照。その他、例えば、下記参照。(平成 25 年 4 月 1 日追加)。

<http://www.slownet.ne.jp/sns/area/culture/reading/kansanyoroku/200709210941-9138219.html>

³⁹ 吉田町での池辺の住所については、例えば、神沢貞幹 (1710~1795) 編・池辺義象校訂『翁草』第 1 冊 (五車楼書店、明治 39 年 5 月 27 日刊。近代デジタルライブラリー収録。) 奥付に拠れば、「京都市吉田町中大路一番地」とあるが、これは現在の「吉田中大路町」のことか。ちなみに、「ウィキペディア」の「京都市左京区の町名」によれば、「町名に「吉田」を冠称する地区は、もとの愛宕郡 [おたぎぐん] 吉田村である。吉田村は、市制町村制施行以前の明治 21 年 (1888 年)、当時の上京区に編入され、上京区吉田町となった。明治 22 年には京都市制に伴い、京都市上京区吉田町となった。大正 7 年 (1918 年) には吉田町を廃し、「吉田」を冠称する 14 町に編成された。これら 14 町は、昭和 4 年の左京区成立後は、同区の町となった。」との由である。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%AC%E9%83%BD%E5%B8%82%E5%B7%A6%E4%BA%AC%E5%8C%BA%E3%81%AE%E7%94%BA%E5%90%8D> (以上平成 24 年 3 月 2 日追加、同年 3 月 12 日一部修正。)

京都では、パリ以来の浅井忠 (1856~1907) との交友が有名である。前掲浅井忠の遺稿、追悼録『木魚遺響』 (編輯者 黙語会代表者 池辺義象、京都・芸艸堂 (うんそうどう)、明治 42 年 9 月 30 日刊)

の当該頁を参照。最近のものでは、青木茂 (1932~)「池辺^{よしかた}義象と浅井忠」『日本古書通信』第 75 巻第 4 号 (通巻第 969 号、日本古書通信社、平成 22 年 4 月 15 日刊) 8~11 頁 (1 頁に「〈今月号注目の一点〉浅井忠・池辺義象『当世風俗五十番歌合』、7 頁に追記各あり。)」がある。また、「若菜会」なる歌会の主宰者として、この方面でも活躍している (池辺義象「[明治] 三十九年に余は有志の人々と若菜会といふ歌会をおこし、その夏季より「さをしか」といふその会の機関雑誌を発行することゝせり」『木魚遺響』190 頁)。例えば、京大法科教授千賀鶴太郎博士 (1857~1929) は、漢詩が有名であったが、「池辺大人 (うし)」の「若菜会」にも参加していた由である (『読売新聞』明治 40 年 1 月 23 日 (水) 第 5 面〈法曹附録 1 頁〉「千賀博士詩人となる事」(「ヨミダス歴史館」検索に拠る。))。磯田多佳 (1879~1945、「大友のお多佳さん」として著名。) も歌を池辺義象に習ったという (谷崎潤一郎 (1886~1965)『磯田多佳女のこと』(全国書房版、昭和 22 年 9 月刊。未見。谷崎のその他の著作に再録されている。例えば、『月と狂言師』〈中公文庫、昭和 56 年 1 月 10 日刊、平成 17 年 11 月 25 日刊) 109、119、120 頁)。

<http://www.tokyo-kurenaidan.com/tanizaki-kyoto4.htm> (平成 23 年 4 月 18 日追加、平成 24 年 1 月 8 日一部補正)

(以下は、平成 23 年 5 月 8 日追加分である。平成 23 年 5 月 6 日内藤丈二先生の御示教に与った。厚く御礼申し上げるものである。)

・田中比佐夫 (1832~2009)『日本画繚乱の季節』(美術公論社、昭和 58 年 6 月刊)

http://www.suntory.co.jp/sfnd/gakugei/gei_bun0015.html 85 頁は、明治 42 (1909) 年 4 月創立の京都市立絵画専門学校に池辺義象が就任していることを記載している。

明治 36 (1903) 年 5 月～6 月 22 日 神宮皇學館教授⁴⁰

＊＊明治 36 (1903) 年 12 月 16 日 落合直文東京で逝去 (1861.12.16 (文久元年 11 月 15 日)～1903.12.16) (平成 25 年 2 月 20 日追加)

＊＊明治 39 (1906) 年 9 月 京都帝国大学文科大学開設

＊＊明治 40 (1907) 年 5 月 9 日 勅令第 187 号により、京都帝国大学法科大学に法制史と比較法制史との二講座設置

＊＊明治 40 (1907) 年 7 月 京都帝国大学初代総長木下広次 (1851～1910) 辞職⁴¹

・前掲高橋在久 (すみひさ、1927～2005) 『浅井忠 原風景と留学日記』 (第一法規出版、昭和 63 年 5 月 30 日刊) 189 頁下、190 頁上は、京都における池辺義象のことを記載している。

うち、190 頁上に抛れば、「[明治 36 年] 同 [6] 月、池辺義象が京都帝大講師で東京より入洛、吉田に住む。」とある。京都における池辺義象の活動については、なお今後の課題である。

(以下は、平成 30 年 10 月 17 日追加分である。)

・浅井忠とともに京都帝国大学教授 (憲法学) 井上密 (1867～1916) 下鴨邸訪問のことについては、下記を参照。

石井柏亭 (1882～1958) 編『浅井忠 画集及評伝』 (芸艸堂、昭和 4 年 11 月 5 日刊) 144 頁 (136 コマ)、174 頁 (151 コマ)

〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000736535-00>〉

⁴⁰ 『神宮皇學館五十年史』 (神宮皇學館、昭和 7 年 4 月 30 日刊) 「第 7 章 旧職員在職年表」 212 頁。神宮皇學館は、明治 36 (1903) 年 8 月 29 日勅令第 130 号「神宮皇學館官制」により、内務省管轄の官立専門学校となり、専任教授が置かれるが、池辺の早期の辞職は、そのためかとも推測される。

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9A%87%E5%AD%B8%E9%A4%A8%E5%A4%A7%E5%AD%A6>〉

なお、木下広次宛池辺義象書簡 (資料番号 12-12) 明治 36 年 4 月 28 日「京大就職の件」参照。当時の三重県知事は同郷の古荘嘉門 (1840～1915、所謂木門 (木下犀潭: 1805～1867) の四天王 (井上梧陰 (1844～1895)、竹添井井 (1844～1895)、木村邦舟) の一人、第一高等中学校長、三重県知事在任: 明治 33 (1900) 年 10 月 31 日～明治 37 (1904) 年 11 月 17 日) であり、この時、池辺は古荘に会っている。(平成 23 年 4 月 18 日一部追加)

〈<http://kotobank.jp/word/%E5%8F%A4%E8%8D%98%E5%98%89%E9%96%80>〉

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9A%87%E5%AD%B8%E9%A4%A8%E5%A4%A7%E5%AD%A6>〉

⁴¹ 木下総長の辞職理由は、病気ということになっているが、京大内部、特に法科では創設以来当時様々なことがあったようである。大学史検討の観点からしても興味深い。例えば、下記の諸文献参照。

・鳥海安治編『東西両京之大学』 (法科之部・斬馬劍禪) (編集兼発行者: 鳥海安治明治 37 年 1 月 7 日刊。後に、斬馬劍禪『東西両京の大学—東京帝大と京都帝大—』 (講談社学術文庫、昭和 63 年 11 月 10 日刊) として復刻。) (国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉所蔵) (参考: HP「網迫の電子テキスト乞校正@Wiki 斬馬劍禪「東西両京の大学 3」」)

〈<http://www6.atwiki.jp/amizako/pages/98.html>〉 (平成 23 年 12 月 19 日閲覧)

・潮木守一 (1934～) 『京都帝国大学の挑戦—帝国大学史のひとこま—』 (名古屋大学出版会、昭和 59 年 6 月 25 日刊) (後に、増補の上、『京都帝国大学の挑戦』 (講談社学術文庫、平成 9 年 9 月 10 日刊) として復刻。)

(参考 1) 岡松参太郎 (1871～1921) 東大転出関係の高根義人 (1867～1930) 書翰 (木下広次 (1851～1910) 宛、明治 35 (1902) 年 5 月 6 日)

(京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史 資料編 2』 (京都大学教育研究振興財団、平成 12 年 10 月 30 日刊))

〈http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr_bookview.cgi/BB00000056/Body/2-2-2-01.html〉

[封筒表] 「京都市聖護院 木下廣次様 親展」 [封筒裏] 「須磨 高根義人」

「謹啓同封ニテ大学制度改正意見ニ三点覚書トシテ御覧ニ供シ候先般内外論叢ニ論シタルモノトハ多少相異ナリ候何レモ未定稿トシテ御参考マテ差出候ノミ尚充分研究シタル上ニテ勅令改正案ヲ私擬仕度存居候

今週御上京前御拝芝ヲ得ヘク存居候ヘトモ三四日前より冢尻 (一才半) 大熱ニテ相弱リ居リ候ヘハ或ハ木曜日ニハ上京六ツカシクカト恐レ候故右拜呈シ候別ニ稿ヲモ起サハル蕪雜ノ文字ニ候ヘハ御一読後ハ御返付ネガヒ上候

岡松★ [参太郎] ★進退問題ハ先般モ申上候通り織田★ [萬] ★学長ハ勿論小生等モ苦心致居候次第何分ニモ京都大学ノ休戚ニ関スルト同時ニ岡松ノ前途ニ非常ノ影響ヲ及ホス儀ト存候ヘハ今回ハ少クモ両大学ニテ内約位出来スル運ニ致度充分御配慮奉祈候過日戸水寛人氏面会候所転任許可切望ノ様子小生ハ東京ハ已ニ大牢ノ美味ニ飽キナガラ更ニ一塊ノ羊肉ヲ得ントスルニ異ナラス京都ハ今ヤ漸クニシテ常食ヲ得ントスルニ当リテ其尤モ美味ナル一菜ヲ奪ハルハニ均シト申置候兎角好都合ノ団円ヲ望マシク奉存候 先ハ右申上度 匆々頓首 五月六日 高根義人 木下老台侍史」

(参考 2) 千楽木仙史編『学界文壇時代之新人』 (天地堂、明治 41 (1908) 年 6 月 26 日刊。(近代デジ

＊＊明治 40 (1907) 年 12 月 16 日 浅井忠 (1856～1907) 京都で逝去 (平成 24 年 3 月 6 日追加)

＊＊明治 41 (1908) 年 9 月 京都帝国大学文科大学文学科開講

＊＊同年 10 月 京都帝国大学初代文科大学長狩野亨吉 (1865～1942) 辞職

明治 42 (1909) 年 11 月 20 日 東京に帰る⁴² (平成 22 年 6 月 4 日一部修正。「明治 42 (1909) 年秋」に修正。平成 24 年 1 月 30 日「11 月 20 日」に修正)。小石川区関口台町 26 番地に居住⁴³

＊＊明治 43 (1910) 年 8 月 22 日 木下広次 (京都帝国大学初代総長) 逝去

明治 44 (1911) 年 豊多摩郡渋谷町下渋谷 519 番地⁴⁴ (その後渋谷区氷川町 56 番地、更に昭和 41 年 4 月 1 日実施の住居表示で渋谷区東 2 丁目 12 番 16 号) に転居 (平成 21 (2009) 年 10 月 10 日現地確認。國學院大學の渋谷移転は大正 12 (1923) 年。)

＊＊明治 45 (1912) 年 2 月 28 日 池辺三山 (吉太郎、1864～1912) 逝去 (平成 24 年 3 月 6 日追加)

大正 3 (1914) 年 12 月 宮内省臨時編修局編修 (大正 5 (1916) 年に臨時帝室編修局と改称、臨時帝室編修局編修官。「明治天皇紀」の編修⁴⁵。)

大正 4 (1915) 年 9 月 京都帝国大学法科大学法制史講座講師の職を解かれる。後任として、同文科大学教授三浦周行 (1871～1931) が講師を嘱託される。

大正 6 (1917) 年 11 月 6 日 御歌所寄人 (よりうど)、(同所) 臨時編纂部委員⁴⁶

タルライブラリー (<http://kindai.ndl.go.jp/>) にあり。) 237～284 頁所収の「京都法科大学諸教授」参照
⇒上記潮木守一著作を補訂するものとして貴重。(平成 23 年 12 月 2 日追加)

⁴² 『東京朝日新聞』明治 42 (1909) 年 11 月 15 日 (月) 朝刊 2 頁には「内国電報 (十四日発) 池辺義象氏辞任 (京都) 久しく京都法科大学に於て日本法制史の講座を担任せし池辺義象氏は今回同大学を辞し暫く東京に仮寓することゝない来る二十日東上すべし」(「聞蔵Ⅱ」に依る。) とあるが、次註に見るように、これは京都を引き払ったことを指し、その後も京都法科大学の講師は続いている。ただし、処遇その他の変化については不詳。(平成 24 年 1 月 30 日追加)

⁴³ 熊沢一衛『青山余影 田中光顕伯小伝』(青山書院、大正 13 年 2 月 11 日刊) 「第 25 章 青山伯の八面観」中に、池辺義象「田中伯と和歌」(603～611 頁。池辺生前のもの。) があり、次のようにいう。「(中略) 親しく御交際——御交際といつても歌の上の事であるが——するやうになつたのは明治四十二年の秋、丁度私が京都帝国大学に講座を持つてゐた関係から京都に居たのが引払つて東京へ帰り、而して東京から受持の時間を京都へ出掛る都合にして小石川区関口台町へ転居するやうになつたからである。」(604 頁) (平成 22 年 6 月 4 日追加)。なお、田中光顕 (1843～1939) の本邸 (蕉雨園) の門と池辺の家の門とは対合していたというから、池辺の家は、当時の細川侯爵邸の一角 (現在の永青文庫の近辺) かと思われる。(平成 23 年 4 月 13 日一部追加)

(<http://blogs.yahoo.co.jp/yumegarden8/5404338.html>)

⁴⁴ 例えば、年月不詳であるが、池辺義象差出封書に捺された住所印には、「東京市外下渋谷五一九 池辺義象」とある。(<http://wagen-memo.jugem.jp/?eid=992>) なお、同 HP には池辺の筆跡も掲載されている。(平成 25 年 5 月 22 日追加)

⁴⁵ 後藤四郎「明治天皇紀」『国史大辞典』第 13 卷 (吉川弘文館、平成 4 年 4 月 1 日刊) 740 頁参照。

(<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/letter/1880Newsletter04.pdf>)、

(<http://doors.doshisha.ac.jp/webopac/bdyview.do?bodyid=BD00011762&elmid=Body&lname=028003210021.pdf>)、

(http://ci.nii.ac.jp/els/110004677466.pdf?id=ART0007407490&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1305003036&cp=) 等も参照。(平成 23 年 5 月 8 日一部追加、同年 5 月 10 日一部補正)

⁴⁶ 『東京朝日新聞』大正 6 年 11 月 7 日 (土) 朝刊 5 頁 7 段「池辺氏と佐佐木博士 [信綱、1872～1963] 昨日御歌所寄人を拜命 明治天皇御製編纂が主な仕事 大口鯛二 [1864～1920] 談 従六位 池辺義象 文学博士 佐々木信綱 御歌所寄人被仰付 (但奏任待遇) 臨時編纂部委員を命ず」、同大正 8 年 1 月 17 日朝刊 5 頁 1 段「代々の総裁難 三度も悩む 臨時編修局 [総裁] 田中伯 [光顕、1843～1939] の就任した由来」各参照。(平成 23 年 2 月 14 日追加) なお、恒川平一『御歌所の研究』(恒川平一) 還暦記念出版会、昭和 14 年 6 月 14 日刊 (池辺義象関係分: 353～358 頁等) をも参照。(平成 24 年 1 月 8 日追加)

この他、『読売新聞』大正 6 (1917) 年 11 月 9 日 (金) 朝刊 5/8 頁掲載「新寄人二人 佐々木 [佐佐木信綱] 博士と池辺義象氏」(写真あり。)、同年 11 月 10 日 (土) 朝刊 5/8 頁掲載「新興国の元気を歌へ = 寄人に内定されたる = 池辺義象氏談」(「ヨミダス歴史館」に拠る。)、同年 11 月 17 日 (土) 朝刊 5/8 頁掲載「新寄人ふたり 佐々木 [マ] 池辺両氏任命 大口録事 [鯛二] の辞職聴許」参照。(平成 24 年 1 月 30 日

大正 12 (1923) 年 3 月 1 日 臨時帝室編修局で倒れ、同月 6 日 自宅で逝去 (豊多摩郡渋谷町下渋谷 519、その後渋谷区氷川町 56 番地 ⇒現在渋谷区東 2 丁目 12 番 16 号)、享年 63、同月 9 日 自宅で葬儀⁴⁷

大正 12 (1923) 年 3 月 6 日 高等官三等、従五位、勲五等瑞宝章を受く。

墓地: 青山霊園 2 種イ第 17 号 23 側 4 番「池辺義象墓」、「池辺家墓」(平成 24 年 2 月 5 日〈日〉展墓。)(平成 24 年 2 月 9 日一部修正)

〈<http://www.geocities.jp/daitabou/aoyama/aoyamameibo1b.html>〉

同墓所内に熊本県立熊本高等学校校歌 (明治 43 (1910) 年制定。池辺義象作詞、岡野貞一 (1878~1941)) の記念碑もあり。

〈<http://www.kumamoto.bears.ed.jp/1006.html>〉

清廉忌: 〈<http://www.kogenkai.net/hiroba/guestbook07.html>〉

大正 12 (1913) 年 7 月 16 日 追悼会開催 (開催主体不明。下記「*追悼記」参照。)(平成 24 年 12 月 25 日追加)

追加、同年 2 月 20 日、3 月 6 日各一部修正)

⁴⁷ 『東京朝日新聞』大正 12 年 3 月 8 日 (木) 朝刊 5 頁 12 段「青鉛筆」参照 (辞詠あり。)。また、同紙 6 頁に訃報広告「臨時帝室編修官御歌所寄人従五位勲五等池辺義象病氣之處養生不相叶六日午後四時卒去致候間此段謹告仕候 [以下小文字] 追而来る九日午後一時より三時迄の間下渋谷五百十九番地自宅に於て神式告別式執行可仕候 大正十二年三月六日 親族総代 池辺義敦 池辺榮弘 野口正雄 友人総代 子爵 藤波言忠 子爵 入江為守」、同紙大正 12 年 3 月 10 日 (土) 夕刊 2 頁 7 段に「池辺義象氏 告別式」あり。(いずれも、『聞蔵Ⅱ』ビジュアルに拠る。)(平成 23 年 7 月 3 日追加)

*** 訃報** (平成 25 年 4 月 18 日新設)

・後掲「(8) 池辺義象氏関連新聞記事 イ 『東京朝日新聞』(池辺義象氏逝去関連記事)」参照。

・「池辺義象氏の逝去」『國學院雑誌』第 29 卷第 4 号(大正 12 年 4 月号) 91 頁(「彙報」欄)(平成 25 年 4 月 18 日追加)

「 本学の旧講師で、国文学界の泰斗、池辺義象氏は脳溢血の為に宮内省の臨時編修局で卒倒せられ、下渋谷の自宅で静養中、一時小康を得て愁眉を開いた処、三月四日から病勢俄かに革つて、六日遂に溘焉として逝かれたのである。学界の損失は云ふ迄もなく、来学年よりは本大学の古代法制の講義を担当せらるゝ事になつて居り、氏も出講する事を悦んで居られたのを想起すると、哀惜の情愈々切なるものがある。然も氏の一生は軒軻不遇[マ、軻軻不遇か] 晩年漸く臨時帝室編修官兼御歌所寄人として幾分酬ひらるゝものがあった危篤の報天聴に達するや特旨を以つて位一級を進められ、従五位勲五等叙せられた。」

*** 追悼会** (平成 25 年 5 月 21 日追加)

・「池辺義象氏の追悼会」『神廻道』第 144 号(大正 12 年 8 月 10 日刊) 36 頁(「彙報」欄)(平成 25 年 5 月 21 日追加)

下記「* 追悼記 池辺義象氏追悼記一斑 一杉浦鋼太郎氏「藤園池辺義象大人の霊前に」」参照。

・「池辺義象氏追悼会」『國學院雑誌』第 29 卷第 9 号(大正 12 年 9 月号) 80 頁(「彙報」欄)(平成 25 年 5 月 20 日高塩博先生の御示教に拠る。)(平成 25 年 5 月 21 日追加)

「◎ 池辺義象氏追悼会 臨時帝室編修局編修官、御歌所寄人、藤園池辺義象氏逝いて[大正 12(1923)年 3 月 1 日逝去] 早五ヶ月、世人の記憶漸く薄らぐむとするに際し、氏の友人、並に編修局御歌所、國學院大學、神宮奉齋会、歌道奨励会等の縁故者相計りて、去七月七日[後掲『神廻道』第 144 号 25 頁では何故か 7 月 16 日とある。] 午後五時、その追悼会を麴町区富士見軒[当時九段坂にあった有名な西洋料理店のことか?]に開催せり。会衆六十余名、先づ式場正面御写真に向つて祭典を行ひ、続いて食事に移り、席上今泉定介⁴⁸[後に「定助」、1863~1944]、篠田時化雄[京都・精華女学校創立者]、千葉胤明[1864~1953]、杉浦鋼太郎[1857~1942]等の諸氏の故人に関する追懐談あり、国文国歌の普及進歩につき多大なる貢献をしつゝ、花やかなる生涯を終られたる氏の面目を躍如たらしめたり。なほ当日遺族側としては故人の長男義敦氏[1902~1989] 参列せられ、来会者中の主なる者は、入江子爵[為守、1868~1936]、若王子男爵、今泉雄作[1850~1931]等の諸氏にして生前親交ありし田中伯爵[光頭、1843~1944]が、特に蒲原[静岡県所在の伯別荘]より左の一首を霊前に供へられしは最も感深きものありき。

去年の夏ともにめでにし口[一字欠]子[「梔子」か。]の
花を手向けてしのぶ今日かな

*** 追悼辞**

(平成 24 年 12 月 4 日新設、同年 12 月 27 日、同 25 年 1 月 9 日、1 月 23 日、2 月 4 日、2 月 8 日、2 月 13 日、2 月 18 日各一部補正)

⁴⁸ 今泉定助(定介)は池辺義象氏、千賀鶴太郎博士(同夫人と今泉夫人が姉妹)検討上重要人物である。追って調べたいと考えている。(平成 25 年 5 月 22 日追加)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BB%8A%E6%B3%89%E5%AE%9A%E5%8A%A9>

<http://w01.tp1.jp/~a251757002/ronnbunn.html>

〔目 次〕

- 1 はじめに ……………43
2 杉浦鋼太郎氏「藤園池辺義象大人の霊前に」 ……………44
① 『神廻道』第144号（大正12年8月10日刊）25～28頁……………45
② 『大成中学校創立四十周年記念 杉浦先生講演集』（杉浦鋼太郎
（1857～1942）、大成中学校々友会、昭和12年10月29日刊）
「二 藤園池辺義象大人の霊前に」8～10頁 ……………48

1 はじめに

池辺義象氏（1861～1923）検討⁴⁹の一環として、かねてから追悼記の渉獵に努めてきたが、寡聞にして見るができなかった。しかるに、去る平成24（2012）年12月初旬たまたま国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉を再検索するに、『大成中学校創立四十周年記念 杉浦先生⁵⁰講演集』（杉浦鋼太郎（1857～1942）、大成中学校々友会、昭和12年10月29日刊）に「二 藤園池辺義象大人の霊前に」（8～10頁。初出：『神廻道』⁵¹第144号（大正12年8月10日刊）25～28頁。国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉に収録。平成24年3月1日文化庁長官裁定によりネット公開との由。）がありしことを知り得た⁵²。これは、平成24年3月1日以降にアップされたもので、前に検索した折には検出できなかったものである。「近代デジタルライブラリー」が逐次充実されつつある御蔭といえる。

ただ、同追悼文の初出誌同号については、国立国会図書館サーチ〈<http://iss.ndl.go.jp/>〉及びCiNii〈<http://ci.nii.ac.jp/books/>〉でも検索できないことから、同月中旬同号を所蔵せる金光図書館⁵³に問い合わせしところ、同年12月24日、同25（2013）年1月4日、同8日の三度にわたり、同館三好定男氏より御懇篤な御示教と当該部分の写しの恵投に与った。記して同氏の御厚情に深甚の謝意を表する次第である。

更に、これにより、杉浦剛太郎氏が池辺義象氏検討上のキーパーソンの一人であることが確認できたので、同氏につき、改めてネットサーフィンしたところ、下記のHPに行き当たった。

- ・HP「ことば先生翁」（遠藤熊吉：1874～1952）（平成18（2006）年HP開設）
〈<http://nishinaruse.sakuraweb.com/kumakichi/kumakichi.html>〉

⁴⁹ 『千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士・池辺義象氏略年譜・著作目録—日本ローマ法学七先生略年譜・著作目録（千賀博士・戸水博士限定追加版）—ローマ法・法制史学者著作目録選（第九輯）—』（平成22（2010）年3月31日刊）。その後の改訂状況につき下記参照。

〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/ikebe001.pdf>〉

⁵⁰ 杉浦鋼太郎氏については、差し当たって、「大成学館 国語伝習所 大成中学校 東洋商業学校校主杉浦鋼太郎君」『東京名古屋現代人物誌』（柳城書院、大正5年12月25日刊）234～238頁（「近代デジタルライブラリー」〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉に収録。）

〈http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/S/sugiura_k.html〉等参照。また、平成25年1月12日（土）大成高等学校同窓会事務局より、『大成七十年史』（学校法人大成学園、昭和42年10月30日刊）及び『大成』第50号（大成学園同窓会設立85周年会報特集号、平成24年5月15日刊）をいただいた。前者は大成学園創立者杉浦鋼太郎氏について詳しく、また、後者には「杉浦鋼太郎先生」（38頁）、「杉浦鋼太郎先生（創立者）と大成学園の流れ」（39頁）等があり、いずれも貴重である。なお、『大成七十年史』の池辺義象氏関係記載は50頁、国語伝習所関係記載は20～21、48～51、124、131、175、322頁等である。同事務局種瀬二三男氏の御厚意に感謝するものである。

⁵¹ 『神廻道』（かながらのみち、神廻道雑誌社）は齋藤襄吉が発行した神道雑誌。

〈<http://d.hatena.ne.jp/josaiya/20120709/1341838997>〉

⁵² 杉浦鋼太郎氏は、その後、大正14（1925）年9月3日「萩の舎追悼会」で、落合直文（1861～1903）についても、「萩の舎先生追悼の辞」を述べている（前掲『大成中学校創立四十周年記念 杉浦先生講演集』21～27頁参照。）。

⁵³ 金光図書館：〈<http://www.konkokyo.or.jp/konko-library/>〉

北条常久（1939～、秋田市立中央図書館長）「標準語村の生成と展開」（2 指導者遠藤熊吉）〈<http://nishinaruse.sakuraweb.com/kotoba/hojo02.html>〉

ここに、「明治廿八〔1895〕年三月大八洲学校⁵⁴卒業記念」（写真裏面に記載）なる遠藤熊吉氏旧蔵写真（裏面に「氏名録」もある。）が掲載されており、同「氏名録」によれば、当時の同校教師として「（左から）小中村義象〔1861～1923〕、萩野由之〔1860～1924〕、飯田武郷〔1828～1900〕、木村正辞〔まさこと、1827～1913〕、本居豊穎〔とよかい、1834～1913〕、落合直文〔1861～1903〕、関根正直〔1860～1932〕」と国語伝習所の創設者であった杉浦剛太郎〔マ、鋼太郎、1857～1942〕及び飯田永夫⁵⁵〔武郷次男、？～1918、65 歳〕各氏の姿がある。池辺義象氏のは、同氏の人生の節目ともいえる明治 28（1895）年時点（同年 3 月 15 日井上毅（1844～1895）逝去、同年 10 月 11 日小中村清矩（1822～1895）逝去）のものであり、寔に貴重である。なお、北条常久『標準語の村 遠藤熊吉と秋田西成瀬小学校』（無明舎出版、平成 18（2006）年 7 月 20 日刊）24 頁にも同一写真が掲載されているが、そこには、同写真裏に記載されている「氏名録」は掲載されていないので、人物特定ができる向きには問題ないのであろうが、一般的には上記 HP は重要な意味を有するといえる⁵⁶。

2 杉浦鋼太郎氏「藤園池辺義象大人の霊前に」

以下に、杉浦鋼太郎氏「藤園池辺義象大人の霊前に」の初出『神廻道』第 144 号及び『大成中学校創立四十周年記念 杉浦先生講演集』所載両原文を収録しておく。前者 25 頁所載追悼文まえがきによれば当該追悼会は大正 12（1913）年 7 月 16 日開催されたものであるとのことであるが、前掲「池辺義象氏追悼会」『國學院雑誌』第 29 卷第 9 号（大正 12 年 9 月号）80 頁（「彙報」欄）では、同年 7 月 7 日とある。なお、『神廻道』第 144 号「彙報」36 頁には、「池辺義象氏の追悼会」と題した下記の文面がある。これから、当日の状況がより判明する。（平成 25 年 5 月 21 日、同 30 年 11 月 1 日一部修正）

「会は武島〔羽衣、1872～1967〕、本居〔清造か？、1873～1958〕、鳥野〔幸次、1873～1961〕、佐藤〔球か？、1865～1926〕等諸氏の斡旋にて七月十六日に富士見軒〔当時九段坂にあった有名な西洋料理店のことか？〕に於て催さる、藤岡〔好春、昭和 9 年 2 月現在神宮奉斎会専務理事〕神宮奉斎会東京支長が祭主を勤められ杉浦〔杉浦鋼太郎、1857～1942〕氏の追悼辞あり、食卓につき今泉〔定助、1863～1944〕氏発起人総代として挨拶あり、それより篠田〔時化雄、京都・精華女学校創立者〕今井〔彦三郎（斐巳）か？、1868～1944〕千葉〔胤明、1864～1953〕等諸氏の追悼談あり、田中光顕伯〔1843～1944〕より送られたる和歌⁵⁷を鳥野氏朗詠せられしが妙声実に驚嘆に余りあり、当日は生憎山本信哉氏〔1863～1944〕の博士になられし招待会とかちあひ、それに赴きし人の多かりしたため博士連の出席は少なかりしが出席者は入江〔為守、1868～1936〕御歌所長、関根〔正直、1860～1942〕博士、古賀鶴所〔マ、賀古鶴所（1855～1931）のことか？〕、與謝■寛〔一字不明、与謝野鉄幹、1873～1935〕氏等八十余名に及びたり」

初出誌所載のものには、全文すべてルビが振られる他、『大成中学校創立四十周年記念 杉浦先生講演集』所載のものとは表現、句読点、仮名遣い等に一部異同がある。また、初出

⁵⁴ 大八洲学校は、大八洲学会の教育機関という。

大八洲学会：〈<http://ameblo.jp/k2600nen/entry-10195301457.html>〉

⁵⁵ 『近代文学研究叢書 第 4 卷』（昭和女子大学光葉会、昭和 31 年 9 月 10 日刊）「飯田武郷」（283～324 頁）中 320 頁参照。

⁵⁶ この他、前掲『大成』第 50 号 38 頁にも同一写真が掲載されているが、杉浦鋼太郎氏以外の人物の特定はされていない。

⁵⁷ 「去年の夏ともにめでにし■子〔一字不明、「梔子」か。〕の花を手向けてしのぶ今日かな」（前掲「池辺義象氏追悼会」『國學院雑誌』第 29 卷第 9 号 80 頁「彙報」に拠る。）

誌には、同『講演集』が収載する最終段落部分の小中村清矩関係は掲載されておらず、ここは再録時に追記されたと思われる。

① 『神廻道』第144号（大正12年8月10日刊）25～28頁

左の一篇は〔大正十二（1913）年〕七月十六日に開かれたる故池辺義象氏の追悼会に、杉浦鋼太郎氏が述べたる追悼辞なり（後欄⁵⁸参照）、掲げて同氏の功勞を知る一片に供す

藤園池辺義象大人の霊前に

杉浦鋼太郎 謹白

（25頁）池辺先生〔1861～1923、大正12（1923）年3月6日逝去〕は御生前我が伝習所〔国語伝習所⁵⁹〕に御尽力下さったので有ますから追悼会は本来ならば国語伝習所が主として執行すべき筈ですが、皆さんの御骨折によつて今夕追悼会〔大正12（1923）年7月16日開催〕を御催し下さった事は發起人の各位に深く御礼を申上げる次第であります。池辺先生が国史、国語、国典、国歌等に貢献せられた事は今更私どもが申し上げるまでもなく皆さまのよく御承知の事でありませうから主に国語伝習所に関する事柄を申述べたいと思ひます。

抑も国語伝習所に御尽力下さった初めは、落合直文先生〔1861～1903〕⁶⁰が池辺先生を誘引して共に御尽力下さった次第で有ります。従つて講義録並に国文〔国語伝習所、明治23（1890）年創刊〕といふ雑誌■〔一字不明、に〕御骨折下さつて其の機関として毎月文章会を池の端長蛇亭⁶¹に催したもので、老大家としては小中村〔清矩、1822～1895〕、黒川〔真頼、1829～1906〕、川田〔剛、1830～1896〕、木村〔正辞、1827～1913〕、小杉〔楳邨、すぎむら、1835～1910〕の諸博士、依田百川〔学海、1834～1909〕、前田健次郎〔夏繁、香雪、1841～1916〕先生等の外に若先生には阪〔ばん、正臣、1855～1931〕、池辺〔義象、1861～1923〕、落合〔直文、1861～1903〕、萩野〔由之、1860～1924〕、関根〔正直、1860～1932〕等の諸先生であつたが、即題で文章を作つて互に批判されたものでありました。萩の家〔ママ、萩の舎、落合直文〕は推敲を重ね文を錬る方〔ルビ：ほう〕でなかなか出来なかつたが、巴戟天舎⁶²〔池辺〈小中村〉義象〕は忽ち筆成つて、最も早かつたやう

⁵⁸ 前掲「彙報」36頁所載『池辺義象氏の追悼会』の件か。

⁵⁹ 国語伝習所については、関係する大八洲学会、大八洲学校とともに追つて検討の予定でいるが、差し当たっては、前掲昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 第4巻』（昭和女子大学光葉会、昭和31年9月10日刊）「飯田武郷」（1828～1900。283～324頁）中292、299～302、307～308頁、『近代作家追悼文集成〔2〕 原抱一庵 落合直文 斎藤緑雨 綱島梁川』（ゆまに書房、昭和62年1月25日刊。初出：『明星』辰歳第2号（明治37年2月1日刊）、『国文学』第62号（明治37年2月25日刊））中「落合直文追悼文」（関根正直）18、62頁、（今井彦三郎）74～75頁、（池辺義象）86～88頁、（飯田永夫）92～95頁、（平田盛胤）101～103頁、（大町桂月）116頁、（師岡須賀子）184頁等参照。この他、例えば、朝日新聞『聞蔵Ⅱビジュアル』で「国語伝習所」を検索すると面白い。
〈<http://www.asahi.com/information/db/2for1.html>〉

⁶⁰ 「萩の舎先生追悼の辞」『大成中学校創立四十周年記念 杉浦先生講演集』21～27頁参照。

⁶¹ 長蛇亭については、例えば永井荷風「改訂 下谷叢話 第四十」『荷風全集』第15巻（岩波書店、平成5（1993）年12月22日刊）278～279頁参照。

⁶² このルビには「ひらぎのや」とあるが、『近代作家追悼文集成〔2〕』90頁上段のルビでは、「ひら

でありました。

常に御自分も吾々の同志の中では即席に筆のたつ人は(26頁)内藤恥叟翁[1826~1902]と林甕臣氏[1845~1922]といはれて居りました。そこでその後井上毅先生[1844~1895]が文部大臣とならるゝ[在任: 明治 26 (1893) 3 月 7 日~同 27 (1894) 年 8 月 29 日]や、国語国文に御尽力なされたので、我が国文[国語伝習所、明治 23 (1890) 年創刊]にも力を添へようといふので池辺君を通じて申込まれた。その時私の案としては美事善行の藍綬章を得たる事蹟を普通文即ち国文に書いて世の中に示したらどうかと建議した処が、早速賞勲局より書類を取寄せて材料を提供され大臣自らも数事項を執筆された。今日教科書に散在せる井上先生の文章は即ちそれでありました。序ながら申し述べますがアリナード氏[ママ、ボアソナード氏][1825~1910]を送る文章でも一度国文に載つたものです。

今先生の作品で世に歓迎せられたるものは決して少くありませんが、殊にフランスから御帰りになつて[明治 34 (1901) 年 2 月 8 日帰朝]間もなく筆を御とりになつた世界読本『世界読本』(弘文館、明治 35 年 9 月 23 日刊)は、西欧の風物を親しく御覧になつた智識と先生の艶麗の筆でなつたものであるから堪つたものぢやありません。当時日本人の愛読したのみならず支那人が最も愛読したので、先年我国に留学した一万有余の支那人に日本語の読本として皆持たせたものです。恐らくは日本人の著書が外国人の教科書となつたのは、前に圓朝[三遊亭、1839~1900]の牡丹灯籠[『怪談牡丹灯籠』(文事堂、明治 17 年 10 月 8 日版權免許)]の歐洲の東洋語学校[例えば伯林大学附属東洋語学校]の教科書となつたのと、先生の読本と、この二つばかりでありませう。

今夕御集りの内には支那人教育に与つた方もありませうが、支那留学生に日本語を教育した功績者であり又先生の教へ子であつた三矢重松氏⁶³[1871~1923、大正 12 (1923) 年 7 月 18 日逝去。]が居られたならば、俱に世界読本の事も語りあふべきでありますのに、今や三矢氏は重病で生命さえ危篤ぢやといふこと⁶⁴で、此の席に臨場せられないのは転た感慨の情に堪へぬ次第で御座います。

終に臨んで聊か卑見を述べたいのは先生は古武士の風があつて如何にも凛々しい処に何となくやさしい処があつて、慕はしい人で、吾々男子でもすいたらしい人でありました。この観察から女子にも好かれる方で、事実ない事でも自然艶聞が起つたのではなからうかと考へます。これが先生の世渡りの障害となつたかと思ふ事もあります。今一つは先生は余り有力な人に最上(27頁)れ、所謂最上の引き倒しとなつたのではあるまいか。それは、幼少の時分から、谷干城子爵⁶⁵[1837~1911]にも非常に愛され、郷里の諸先輩は申すまでもなく、佐々木高行侯爵⁶⁶[ママ、佐佐木高行、1830~1910]田中光顕伯爵⁶⁷[1843~1939]

ぎのや」と振られており、おそらくそうではないか。更に調査したい。

⁶³ 三矢重松: <<http://www.shonai-nippo.co.jp/square/feature/exploit/exp45.html>>

⁶⁴ 前掲「彙報」36頁所載「文学博士三矢重松氏病死」参照。

⁶⁵ 谷干城子爵は、周知のように、明治 17 (1884) 年池辺の小中村家入婿時の媒人である。今井彦三郎(1868~1944)「嗚呼落合直文君」前掲『近代作家追悼文集成 [2]』76頁等参照。

⁶⁶ 佐佐木高行侯爵との関係は詳らかではない。佐佐木は土佐藩の出であるので、谷干城との関係で早くから池辺を知っていた可能性もあるが、このあたりは不明。佐佐木の皇典講究所第 2 代所長時代(1896~1909。同氏就任への落合の貢献につき堀江秀雄「嗚呼萩の家先生」同上 159頁参照。)以前のものとして、例えば、大町桂月(1869~1925)「嗚呼落合先生」前掲『近代作家追悼文集成 [2]』21~24頁(大町「嗚呼萩の家先生」同上 117~120頁も同文)に佐佐木が設けた「明治会」及びその会誌『明治会叢誌』(第 1 号、明治 21 (1888) 年 12 月 25 日刊)をめぐる佐佐木と落合直文の関係が記載されており、同

等にも大に囑望されて、其の鼻負があるといふのが其の妨の一つではなからうかと思はれます。

偕而〔さて〕由来銀杏城〔熊本城〕下に於ける池辺家の系統は実に偉い人が出て居る、明治十〔1877〕年の池辺吉十郎〔1838～1877〕、朝日新聞の主筆であつた池辺三山〔1864～1912〕及び義象先生との三傑が出たでは有りませんか。何も他家〔小中村家、明治 17（1884）年 1 月入籍〕を相続する必要はないので、初めから池辺で通ほして一本調子に進まれたら却て大成功であつたらうと思ひます。

先生は丁度これからといふ歳頃で亡くなられたのは誠に残念であります、御子供衆は男子であつてこの貴いよき血をうけられて居りますから、後を立派に立てられる事と思ひます、どうか池辺家の幸あることを満場の諸君と共にひたすら希望する次第であります。因にボアソナード氏を送る井上梧陰〔毅〕先生の文章を想ひ起しますと同時に更に両先生のことを偲ばざるを得ないのであります。

ボ氏は御承知でありませうが世々仏国アカデミーの家柄に生長せられた上相当の資産家で財産は株券であつたさうですが、彼の普仏戦争〔1870.7.19～1871.5.10〕の際に工場会社等が破壊せられて頽廢したが為めに打撃を被られたといふことで、明治初年〔明治 6（1873）年〕に遠く我国に法律顧問として招聘せられました。博士は持病の喘息でありながら我国の法律制定の為め二十有余年間〔明治 6（1873）～明治 28（1905）年〕一日の如く尽瘁努力せられたので今日の法治国となることが出来ました。

実に当初の功労者たる大恩人であるといふことは人皆の知る所であります。

ボ氏いよ／＼任満ちて明治二十八〔1905〕年に帰国せんとせらるゝに際し、朝野の名士が帝国ホテルに於て送別会を開かれた其時に、井上文部大臣は、病床にあつて親しく臨席が出来ないのみならず、命旦夕に迫つて居るに拘らず、熱誠の発露より筆を執られて送別文は出来たものである、これが多分先生の絶筆であらうと思ひます。私はボアソナード先生より此の文章を直接に貰ひ受け雑（28 頁）誌国文に登載したが、其の後各中等教科書にも転載せられて多くの青年子女に読まれ後世迄永く其の功績を止むるに至つたことゝ思ひます（完）傍訓は社員が便宜付せしものなり。 [以上]

89 頁では池辺本人も「明治会」や佐佐木の嗣子佐佐木高美（1862～1902、「佐々木君」）に言及していることから、池辺と佐佐木の関係もこの年代あたりから生じたのではないかとも思料されるが、今後の課題である。なお、佐佐木の日記中公刊された『保古飛呂比一佐佐木高行日記一』（天保元年～明治 16 年分、東京大学出版会、第 1 巻（昭和 45 年 3 月刊）～第 12 巻（昭和 54 年 3 月 31 日刊））及び『佐佐木高行日記一かざしの桜一』（明治 28～35 年（31、34 年欠）分、北泉社、平成 15 年 4 月 30 日刊）には、池辺の名前は出ていない。

http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/syoho/05/pub_sasakitakayuki-01.html

<http://www.sousendou.jp/kindai/sasaki.htm>

この他、國學院大學編『佐佐木高行家旧蔵書目録』（汲古書院、平成 20（2008）年 3 月 21 日刊）には、池辺義象（小中村義象）関係書がかなり記載されている。

（追記）池辺義象「純忠至誠の高美大人」『佐佐木高美大人』（猪狩又蔵編、発行者石渡幸之輔、大正 8（1919）年 7 月 3 日刊）「逸事及び感想」7～11 頁は佐佐木高行侯爵、佐佐木高美との関係に詳しい。

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1906418/1/1>（令和 6（2024）年 1 月 1 日追加）

⁶⁷ 田中光顕伯爵との関係については、例えば、熊沢一衛『青山余影 田中光顕伯小伝』（青山書院、大正 13 年 2 月 11 日刊）参照。「第 25 章 青山伯の八面観」中に、池辺義象「田中伯と和歌」（603～611 頁。池辺生前のもの。）あり。明治 42 年秋京都から東京に戻って住んだ小石川区関口台町の池辺の家〔細川侯爵邸の一角か？〕の門と田中伯の本邸〔蕉雨園〕の門とが対合していたという。

② 『大成中学校創立四十周年記念 杉浦先生講演集』（杉浦鋼太郎（1857～1942）、大成中学校々友会、昭和 12 年 10 月 29 日刊）「二 藤園池辺義象大人の霊前に」8～10 頁

藤園池辺義象大人の霊前に

（8 頁） 池辺先生 [1861～1923、大正 12（1923）年 3 月 6 日逝去] は御生前我が伝習所 [国語伝習所] に御尽力下さったのでありますから、追悼会は本来ならば国語伝習所が主として執行すべき筈ですが、皆さんの御骨折によつて今夕追悼会 [大正 12（1923）年 7 月 16 日開催] を御催し下さった事は、発起人の各位に深く御礼を申上げる次第であります。

池辺先生が国史、国語、国典、国歌等に貢献せられた事は、今更私どもが申し上げるまでもなく、皆さまのよく御承知の事でありませうから、主に国語伝習所に関する事柄を申述べたいと思ひます。

抑も国語伝習所に御尽力下さった初めは、落合直文先生 [1861～1903] が池辺先生を誘引して、共に御尽力下さった次第であります。従つて講義録並に「国文」[国語伝習所、明治 23（1890）年創刊] といふ雑誌に御骨折下さつて其の機関として毎月文章会を池の端長蛇亭に催したもので、老大家としては小中村 [清矩、1822～1895]、黒川 [真頼、1829～1906]、川田 [剛、1830～1896]、木村 [正辞、1827～1913]、小杉 [楡邨、すぎむら、1835～1910] の諸博士、依田百川 [学海、1834～1909]、前田健次郎 [夏繁、香雪、1841～1916] 先生等の外に若先生には阪 [ばん、正臣、1855～1931]、池辺 [義象]、落合 [直文]、萩野 [由之、1860～1924]、関根 [正直、1860～1932] 等の諸先生であつたが、即題で文章を作つて互に批判されたものでありました。萩の家 [マ、萩の舎、落合直文] は推敲を重ね文を錬る方で、なかなか出来なかつたが、巴戟天舎⁶⁸ [池辺（小中村）義象] は筆忽ち成つて、最も早かつたやうでありました。

常に御自分も吾々の同志の中では即席に筆のたつ人は内藤恥叟翁 [1826～1902] と林甕臣氏 [1845～1922] といはれて居りました。そこでその後井上毅先生 [1844～1895] が文部大臣とならるゝ [在任：明治 26（1893）年 3 月 7 日～同 27（1894）年 8 月 29 日] や、国語国文に御尽力なさつたので、我が「国文」[国語伝習所、明治 23（1890）年創刊] にも力を添へようといふので池辺君を通じて申込まれた。その時私の案としては、美事善行の藍綬章を得たる事蹟を普通文即ち国文に書いて世の中に示したらどうかと建議した処が、早速賞勳局より書類を取寄せて材料を提供され、大臣自らも数事項を執筆された。今日教科書に散在せる井上先生の文章は即ちそれでありました。序ながら申し述べますがボアソナード氏 [1825～1910] を送る文章でも一度「国文」に載つたものです。

今先生の作品で世に歓迎せられたものは決して少くありませんが、殊にフランスから御帰りになつて [明治 34（1901）年 2 月 8 日帰朝] 間もなく筆を御とり（9 頁）になつた世界読本 [『世界読本』〈弘文館、明治 35 年 9 月 23 日刊〉] は、西欧の風物を親しく御覧になつた智識と、先生の艶麗の筆でなつたものであるから、堪つたものぢやありません。当

⁶⁸ ここのルビには「ひらぎのや」とあるが、『近代作家追悼文集成 [2]』90 頁上段のルビでは、「ひらぎのや」と振られており、おそらくそうではないか。更に調査したい。（⇒「ひひ（い）らぎのや」か。）

時日本人が愛読したのみならず、支那人が最も愛読したので、先年我国に留学した一万有余の支那人に日本語の読本として皆持たせたものです。恐らくは日本人の著書が外国人の教科書となつたのは、前に圓朝〔三遊亭、1839～1900〕の牡丹灯籠〔『怪談牡丹灯籠』(文事堂、明治17年10月8日版權免許)〕の歐洲の東洋語学校〔例えば伯林大学附属東洋語学校〕の教科書となつたのと、先生の読本と、この二つでありませう。

今夕御集りの中には支那人教育に与つた方もありませうが、支那留学生に日本語を教育した功績者であり、又先生の教へ子であつた三矢重松氏⁶⁹〔1871～1924、大正12(1923)年7月18日逝去。〕が居られたならば、俱に世界読本の事も語りあふべきでありますのに、今や三矢氏は重病で、生命さえ危篤ぢやといふこと⁷⁰で、此の席に臨場せられないのは転た感慨の情に堪へぬ次第で御座います。

終に臨んで聊か卑見を述べたいのは、先生は古武士の風があつて、如何にも凛々しい処に何となくやさしい処があつて、慕はしい人で、吾々男子でもすいたらしい人でありました。この觀察から女子にも好かれる方で、事実ない事でも自然艶聞が起つたのではなからうかと考へます。これが先生の世渡りの障害となつたかと思ふ事もあります。今一つは先生は余り有力な人に最負され、所謂最負の引き倒しとなつたのではあるまいか。それは、幼少の時分から、谷干城子爵〔1837～1911〕にも非常に愛され、郷里の諸先輩は申すまでもなく、佐々木高行侯爵〔マ、佐佐木高行、1830～1910〕、田中光顕伯爵〔1843～1939〕等にも大に囑望されて、其の最負があるといふのが其の妨げの一つではなかつたらうかと思はれます。

偕而〔さて〕由来銀杏城〔熊本城〕下に於ける池辺家の系統には実に偉い人が出て居る。明治十〔1877〕年の池辺吉十郎〔1838～1877〕、朝日新聞の主筆であつた池辺三山〔1864～1912〕、それに義象先生、この三傑が出たではありませんか。何も他家〔小中村家、明治17(1884)年1月入籍〕を相続する必要はないので、初めから池辺で通ほして一本調子に進まれたら、却つて大成功であつたらうと思ひます。

先生は丁度これからといふ歳頃で亡くなられたのは誠に残念であります。御子供衆は男子であつて、この貴いよき血をうけられて居りますから、後を立派に立てられる事と思ひます。どうか池辺家の幸あることを、満場の諸君と共に、ひた(10頁)すら希望する次第であります。

尚ボアソナード氏を送る井上梧陰〔毅〕先生の文章を想ひ起しますと同時に、更に両先生のことを偲ばざるを得ないのであります。ボ氏は御承知でありませうが、世々仏国アカデミーの家柄に生長せられた上、相当の資産家で、財産は株券であつたさうですが、彼の普仏戦争〔1870.7.19～1871.5.10〕の際に、工場会社等が破壊せられて頽廢したがために、打撃を被られたといふことで、明治初年〔明治6(1873)年〕に遠く我国に法律顧問として招聘せられました。博士は持病の喘息でありながら、我国の法律制定の爲め、二十有余年間〔明治6(1873)～明治28(1995)年〕一日の如く尽瘁努力せられたので、我国は今日の法治国となることが出来ました。実に当初の功労者たる大恩人であるといふことは、人皆の知る所であります。

⁶⁹ 三矢重松: <<http://www.shonai-nippo.co.jp/square/feature/exploit/exp45.html>>

⁷⁰ 前掲「彙報」36頁所載「文学博士三矢重松氏病死」参照。

ボ氏いよ\／任満ちて明治二十八〔1905〕年に帰国せんとせらるゝに際し、朝野の名士が帝国ホテルに於て送別会を開かれた。其時に、井上文部大臣は、病床にあつて親しく臨席が出来ないのみならず、命旦夕に迫つて居るに拘らず、熱誠の余り筆を執られて、彼の送別文は出来たものである。これが多分先生の絶筆であらうと思ひます。私はボアソナード先生より此の文章を直接に貰ひ受け、之を雑誌「国文」に登載したが、其の後各中等教科書にも転載せられて多くの青年子女に読まれ、後世迄永く其の功績を止むるに至つた。

⁷¹因に義象氏は小中村博士〔小中村清矩、1822～1895〕の養嗣子となられた〔明治 17（1884）年 1 月入籍〕が、事情ありて池辺姓に復歸した〔明治 31（1898）年 1 月復姓〕。又、小中村清矩先生は、明治時代国学者の第一人者で、夙に貴族院に列し、我国憲法の制定に大いに貢献せられた方である。亦今日の靖国神社の命名者は先生である。——大正十二〔1913〕年八月十日発行「神廼道」第四百四十四号所載——

[以上]

⁷¹ 本段落部分は初出誌にはなく、『講演集』再録時に追記されたものと思われる。

*親族

・『池辺ファミリー雑記集』（編集者：池辺三郎、自己出版、平成16年12月刊）161頁「池辺家系図」（（財）日本近代文学館『日本近代文学館資料叢書〔第1期〕文学者の日記1 池辺三山（1）』（文館新社、平成13年8月31日刊）266頁所収「系図」を改訂したもの）

・昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第22巻（池辺義象、有島武郎、ケーベル、厨川白村、三木天遊）（昭和女子大学、昭和39年12月1日刊）中「池辺義象」（18～20頁、「5、遺跡、遺族」89～92頁）。上記青山霊園内池辺家墓地内の「池辺家墓」碑参照（平成24年2月9日一部修正）。

・昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第2巻（（昭和女子大学）光葉会、昭和31年4月10日刊）「小中村清矩」（307～308頁（平成23年5月23日追加）、「5、遺跡、遺族」334～338頁）

・狩野直喜博士（君山、1868～1947）との関係

・高田時雄（1949～）「君山狩野直喜先生小伝」

〈<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takata/Kano.pdf>〉

・前掲『池辺ファミリー雑記集』62頁に、池辺義象妹松（1876～1920）につき、「松子は文学博士狩野直喜（文化勲章授与される）に嫁ぐ。」とある。ただし、161頁掲載の系図では「松」とある。「松」が正しいと聞く。

・狩野直喜著、狩野直禎（1929～（2017））・吉川幸次郎（1904～1980）校『君山文』（京都・中村印刷（印刷者）、昭和己亥（34年）12月刊。80丁、24cm、和装。「狩野夫人池邊氏墳志」（巻七、二b～三a丁））（平成21（2009）年9月21日松尾尊允先生（1929～2014）の御教示に拠る。なお、「墳志」は「墓誌」、「墓誌銘」のこと。狩野直方氏：明治34（1901）年11月生）

・前掲『君山文』巻八（二b～三b丁）に「亡室池邊氏行述」あり。（平成21年10月2日高橋均先生の御教示に拠る。）

・『読売新聞』大正9（1920）年1月30日（金）朝刊5/8頁掲載「池辺義象氏も流感で一時重態」中に、「過般令妹に当たる京都大学文学部長狩野〔直喜〕博士夫人マツ子の葬儀の赴き」云々の件が記載されている。（「ヨミダス歴史館」に拠る。）（平成24年1月30日追加）

（参考）・荒木精之（1907～1981）『熊本県人物誌』（日本談義社、昭和34年6月1日刊）（「狩野直喜」87～90頁（89頁）、「池辺義象」93～96頁（93頁））

（参考）・『昭和人名辞典』第3巻（日本図書センター、昭和62年10月5日刊。『大衆人事録』第14版〈近畿・中国・四国・九州〉〈帝国秘密探偵社、昭和18年9月22日刊〉の復刻本）「狩野直喜」。

*自伝（平成25年2月28日新設）

（池辺義象本人が語りし資料を中心に入力して、集成する予定である。現在作成中。）

（追記）・岩瀬文庫所蔵池辺義象半自叙伝「千代のかたみ」のHP公開あり。要参照。本稿では未検討。（平成29（2017）年7月23日追加）

〈<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11E0/WJJS06U/2321315100/2321315100100010?hid=ht086790>〉 ⇒「千代のかたみ」全文テキストへのリンクあり。

・熊本時代の池辺の教育歴に関心が持たれるが、寡聞にして未だ把握できていない。例えば、『読売新聞』大正6（1917）年11月10日（土）朝刊5/8頁掲載「新興国の元気を歌へ＝寄人に内定されたる＝池辺義象氏談」中には、熊本在住14、5歳時での歌の師であった中島広足（1792～1864）の弟子小山多乎里（おやま、一太郎、？～1896、享年81）への言及あり。すなわち、「池辺義象氏を訪へば氏は語る『私は十四五歳の時熊本で本居派の中島広足の弟子小山多乎里の門に入ったので、その頃から既〔も〕う和歌は非常に好きであった・・・（中略）』（「ヨミダス歴史館」に拠る。）。小山多乎里校訂『参考吉野拾遺』

(小山多乎里住所: 熊本県飽田郡池田村五百五十九番地。巻末に小中村義象名の『参考吉野拾遺跋』あり。東京・六合館弦巻書店、明治 27 年 7 月 3 日刊)。小山につき下記参照。
(<http://red.ribbon.to/~menorah/oyama-rk.html>) 参照。(平成 25 年 2 月 28 日追加)
・『近代作家追悼文集成 [2] 原抱一庵 落合直文 斎藤緑雨 綱島梁川』(ゆまに書房、昭和 62 年 1 月 25 日刊。初出: 『明星』辰歳第 2 号 (明治 37 年 2 月 1 日刊)、『国文学』第 62 号 (明治 37 年 2 月 25 日刊)) 「落合直文」中 85~92 頁 (初出: 『国文学』第 62 号 (明治 37 年 2 月 25 日刊) 55~62 頁) に、明治 12 (1879) 年 9 月伊勢での落合直文 (1861~1903) との初出会い以降明治 36 (1903) 年 12 月 16 日同氏逝去に至るまでの交友に関する池辺本人の発言が記載されている。自伝の一として参考になる。なお、伊勢の神宮教院本教館については、明治 6 (1873) 年 1 月 10 日神宮教院創設、同 9 (1876) 年 10 月神宮教院本教館創設、同 14 (1881) 年 12 月 9 日神宮教院本教館閉鎖。(平成 25 年 2 月 28 日追加)

* 京都大学大学文書館 (木下広次 (初代総長) 関係資料) の件

- ・京都大学大学文書館 (<http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/>) (平成 25 年 6 月 18 日追加)
- ・『木下広次関係資料』の公開を開始 (平成 16 (2004) 年 9 月 1 日) 木下広次 (1851.2.25 ~ 1910.8.22) (http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/ugoki_10.html)
- ・木下広次宛池辺義象書簡 27 通 (資料番号 12-1~12-27) あり。
- ・木下広次宛井上毅書簡中 1 通 (資料番号 24-6) (内容: 1893 (明治 30) 年 4 月 6 日 小中村義象文部秘書官希望、小中村義象書簡添付)
(<http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/mokuroku/kinoshita040901.pdf>)
- ・増田于信 (1862~1932) 宛谷干城 (1837~1911) 書簡 (資料番号 木下-416-1 ファイル 14) (内容: 1897 (明治 30) 年 12 月 3 日 小中村義象離縁の件)

* 池辺義象氏の小中村家離縁の件

明治 31 (1898) 年初頭の池辺義象 (1861~1923) の小中村家離縁の件は、当時世間の大きな関心を集めたものと思われる。その内容については、あるいは、これを詳述した文献が存在するのかもしれないが、個人的には、寡聞にして、例えば、下記のものを知るに過ぎない。明治 20 (1887) 年時点で早くもその兆しが見えていることは注目される。(平成 25 年 5 月 30 日一部修正)

・「鮎貝盛房 [実父、1835~1894。これは、下記『落合直文著作集』Ⅲによれば、「養父落合直亮」の間違いと由。] 宛落合直文書翰 (明治 20 (1887) 年 2 月 14 日)」(平成 23 年 4 月 18 日追加)

「[本文省略] 二月十四日 金杉村寓居にて 亀二郎しるす
父上様

本居先生 [本居豊穎、1834~1913] の婿 [本居于信 (増田于信、1862~1932)] も今回破談に相成候。小中村 [小中村清矩] ノ婿池辺 [義象] のことも種々苦情これあり気二いるとか気二いらぬとか大混雑中なり。まゝならぬハ人の身の上の事とも不申や。」(『明治文学全集 44 落合直文 上田萬年 芳賀矢一 藤岡作太郎』(筑摩書房、昭和 43 年 12 月 25 日刊) 中、「落合直文集」書翰 101 頁。)

ただし、本書翰は、落合秀男編『落合直文著作集』Ⅲ (ゆまに書房、平成 3 年 11 月 30 日刊)「IV 書翰」318~319 頁では、次のとおりである。一部に異同がある。(平成 23 年 4 月 18 日追加)

・「落合直亮宛 [養父、1827~1894] 書翰 ([明治] 20 [1887] 年 2 月 14 日)」(平成 23 年 4 月 18 日追加)

「[本文省略] 二月十四日 金杉村寓居にて 亀二郎しるす
父上様

本居先生 [本居豊穎、1834~1913] の婿 [本居于信 (増田于信、1862~1932)] も今回破談に相成候。小中村 [小中村清矩] の婿池辺 [義象] のことも種々苦情これあり気二いるとか気二いらぬとか大困難申なり。まゝならぬハ人の身の上の事ともなりや。」

・今井彦三郎⁷² (1868~1944、雅号斐巳、池辺と東大古典講習科同級生、当時一高教授 (今井本人につき平成 25 年 4 月 18 日一部補正))「落合直文追悼講話」(仮名使いを一部修正) (平成 23 年 4 月 18 日追加、平成 24 年 3 月 19 日一部修正 (今井彦三郎の件のみ。))

「[落合君は] 社交に頓着しないといつて、人道を疎末にしたといふのでは無い。或は誤解を招くこともございませうから、一言補つておきます。落合君は師に事へて篤かつた事は、先程何方かの御話中にもござりました。又気心の合つた友人には、殊の外親切で、まねの出来ぬことが多くござります。小生などもその一人で、種々厚意をうけましたが、君が半

⁷² 今井彦三郎 (斐巳) : 『朝日新聞』昭和 19 年 7 月 1 日 (土) 第 3 面に訃報あり (「聞蔵」参照)。昭和 19 年 6 月 28 日逝去、享年 81、明治 29 年~昭和 5 年の 33 年間一高の国文学教授。(平成 25 年 4 月 18 日追加)

生の歴史はこの座中に居らるゝ池辺義象君と引張りあひになつて居ます。で池辺君に対しては友義は無類でござりませう。特に際立って感じましたのは、池辺君が故あつて小中村氏と絶縁せらるゝ時でした。この事につきましては心血を尽して日夜奔走せられ、谷中將〔干城、1837～1911〕が池辺君の媒介人でしたもんだから、中將の市ヶ谷田町〔三丁目二十一番地〕の邸へ、私と何度も足を運んで懇談を請めた事もありました。とうとう不幸にして纏りが付かぬ事になり、池辺君が愈小中村家を出ることになりまして、池辺君の心をも察し、痛く心痛をせられました。心痛のあげぐ、池辺君に外国留学を勧めた方が宜かろうと思ひこみ、何んでもあれば明治三十一年の一月でしたらう、雪の乱れ降る夕暮頃でした。私と兩人で池辺君の曙町の寓居⁷³を音づれ、志み志み後來の事に相談を遂げた事とございました。それで池辺君も意を決して、仏蘭西留学の事を思ひ立ち、早速その準備にかゝられ、其年の七月渡航せられた次第で、まあざつとさういうやうな、友人に対しての情義をも感ぜられます。其の外門生の人々や、其の他の人情の濃やかであつた事は、私が申さずも、其の方達が定めし御話がありませう。」「萩の家主人追悼録 嗚呼故落合直文君（明治37年1月10日追悼会席上講話）」（『近代作家追悼文集〔2〕 原抱一庵 落合直文 斎藤緑雨 綱島梁川』（ゆまに書房、昭和62年1月25日刊。初出：『明星』辰歳第2号（明治37年2月1日刊）、『国文学』第62号（明治37年2月25日刊））中「今井彦三郎」75～76頁）

・「〔小中村〕清矩の死後〔明治28（1895）年10月9日〕家庭の事情が險悪となつたので媒介人谷干城が斡旋したが纏まらず、〔明治〕31年（1898）池辺姓に復歸した。」（「池辺義象」23頁）⁷⁴

・三宅雪嶺（1860～1945）『自分を語る』（朝日新聞社、昭和25年1月？日刊（未見）。『石川近代文学全集 12 三宅雪嶺・石橋忍月・藤岡東園・桐生悠々等』（石川近代文学館、昭和63年8月25日刊）64頁に拠る。当該記載は大正15（1926）年5月発表のものか。）

「一時落合、小中村といへば世間の引張り凧になつた。小中村氏が養父歿して離縁沙汰を起し、池辺義象となつたのは已むを得ぬとはいへ、自身にも小中村家にも不幸とせねばなるまい。」（平成24年5月21日追加）

・三村竹清（1876～1953）『三村竹清集 2 日本書誌学大系 23（2）』（青裳堂書店、昭和57年6月15日刊）178～179頁（「陽春廬日記」（178～179頁）中に下記の記載あり。）（大沼宜規先生御著作の示唆に拠る。平成23年6月5日追加）

「（中略）小中村氏にては後に池辺義象との紛紜あり、聞き居れることもあれど、中藁のこと、みだりに筆にすべきにあらず、さはれ受恩之人忘恩而記怨とかや、其頃の手紙あれば記し置く。」として、明治31年5月13日夜記載の石倉重継（1875～1938）宛池辺義象書翰を掲載し、「（別紙清朝活字）」として以下の挨拶文を載せている。「拝啓益御清康奉恭賀候小生儀今般都合ニヨリ池辺ニ復姓仕候就テハ従来ノ通不相替御交際ノ榮ヲ荷ヒ度此段御報知旁奉得貴意候 頓首 明治卅一年一月 小中村改〔この分小文字〕池辺義象 殿 侍史〔この分小文字〕」「右小中村氏復姓ハ家事上止ムヲ得サル義ニシテ小生等其責ヲ負ヒテ熟議ニ与リ候間乍憚左様御承知被下度此旨得貴意候早々 明治卅一年一月 元媒酌人〔この分小文字〕子爵 谷干城 親友総代 木下広次」

・山口隼正（1940～）「田中義成日記と『大日本史料』創刊のことども」『長崎大学教育学部紀要 人文科学』第63号（平成13年6月27日刊）15～40頁（田中義成：1860～1919、小中村関係：21、30～31頁（註16））（平成24年10月25日追加）

（30～31頁（註16）。ただし、「なお、小中村（池辺）は洋行から帰国後、」以下の記載の

⁷³ 小中村清矩（1822～1895）『陽春廬雜考』（やすむろ、吉川半七、明治30年12月20日刊。明治31年4月30日再版刊）奥付けに「相統者 小中村義象 東京市本郷区曙町十三番地」とあることから、当時の住所をこれよりも知ることができる。（平成24年1月30日追加）

⁷⁴ 前掲昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第22巻（昭和女子大学、昭和39年12月1日刊）中「池辺義象」（口絵、10～11、17～92、447頁）（以下「池辺義象」で引用）、同第2巻（昭和女子大学）光葉会、昭和31年4月10日刊）中「小中村清矩」（307～308頁、「5、遺跡、遺族」334～338頁）（以下「小中村清矩」で引用）。

件は、八田三喜（1873～1962）「狩野亨吉父子」『日本歴史』第30号（昭和25年11月号48～49頁）に拠るとのことであるが、これはおそらく別の見解があると思われる。）

〈<http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10069/5802/1/KJ00000045515.pdf#search=%E4%BA%AC%E9%83%BD%E5%B8%9D%E5%9B%BD%E5%A4%A7%E5%AD%A6+%E6%B1%A0%E8%BE%BA%E7%BE%A9%E8%B1%A1>〉

「小中村義象は、国学者小中村清矩（東京大学教授。『古事類苑』編纂委員長）の養子で、古典講習科国書課を出て第一高等学校教授になっていたが、明治二十八〔1895〕年の史局復活（史料編纂掛設置）に伴って、星野恒〔1839～1917〕・三上参次〔1865～1939〕について、田中（文科大学助教授）〔田中義成〕とともに史料編纂委員に加えられた。田中の『戊戌日曆』（明治三十一〔1898〕年）に散見する。小中村は、この三十一〔1898〕年の初めから家庭問題が起こったため、同僚たる三上・田中両氏に相談している（一月七日条、二月十四日条）。小中村自身としては、改姓し（本姓「池辺」に戻る）、洋行（フランス）を希望し、一高を辞職したが、両氏はこれに反対、慰留した（二月廿四日条、五月二十日条）。しかし、これを振り切って洋行を決断したため、史局主催で送別会を挙行し（五月廿七日条）、遂に編纂委員についても辞表を提出した（六月十六日条）。なお、小中村（池辺）は洋行から帰国後、しばらくして、狩野亨吉〔1865～1942〕の勧めで内藤湖南〔1866～1934〕・幸田露伴〔1867～1947〕とともに京都帝国大学に赴任し（八田三喜〔1873～1962〕「狩野亨吉父子」、『日本歴史』三〇号〔昭和25年11月号48～49頁〕）、明治三十六〔1903〕年、そこで日本法制史講座の初代教官、池辺義象講師として講義を開始している（『京都大学七十年史』三八四ページ。）」

しかるに、今般、京都大学大学文書館所蔵の木下広次宛池辺義象書簡を見る機会を得たので、以下に、今後の検討素材として、一、二整理しておく⁷⁵。ただ、これでも、詳細な離婚原因についてはなお不明であるので、御教示を乞うものである⁷⁶。同書簡の釈文については、高塩博先生の御示教を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。

・中邨秋香（中村、1841～1910）は、小中村清矩の追悼詞、伝記等を書いているが小中村が最も信頼した人物の一人かと思われる。中村春二（1877～1924）は次男。

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%AD%E6%9D%91%E6%98%A5%E4%BA%8C>〉。中邨秋香は「貨殖に長じ国学者中随一の資産家」（「中村秋香」『近代文学叢書11』〔昭和女子大学光葉会、昭和34年1月1日刊〕24頁）とのことである。

ちなみに、小中村晩年の明治20年代の中邨の住居は、「東京市本郷区駒込西片町十番地（誠之小学校の前）」であって、小中村の近隣である（例えば中村秋香編『祝日大祭日歌詞解釈』（白井練一（共益商社書店）、明治26年10月16日刊）奥付、小中村清矩・中村〔マ〕秋香合著『増訂日用文鑑参考書』（青山清吉、明治27年2月12日刊）奥付等。近代デジタルライブラリー所収）（平成24年3月8日追加）。

この他、出口競（1890～1957）『学者町学生町』（実業之日本社、大正6年8月5日

⁷⁵ その後いろいろ知ることがあったが、ここの記載は、「木下広次宛池辺義象書簡」を初めて検討した時点のままであり、平仄が一致せず、今後改訂の予定であることをお断りしておく。（平成23年6月5日追加）

⁷⁶ ただし、池辺史生（池辺義象兄源太郎の令孫、1939～）「池辺義象」『近現代日本人物史料情報辞典3』（吉川弘文館、平成19年12月10日刊）23～25頁には、小中村清矩逝去（明治28〔1895〕年10月9日）後の池辺義象の日記が存在する旨の記載がある（平成22年6月16日追加）。その後、大沼宜規先生より、池辺義象の明治17（1884）年日記が、愛知県の「西尾市岩瀬文庫」〈<http://www.city.nishio.aichi.jp/nishio/kaforuda/40iwase/index.html>〉に所蔵されている旨の御示教を賜った（平成23年5月23日追加）。

刊)「西片町の解剖」(1~59頁)、「西片町の誠之舎」(243~255頁)中に、西片町における中村秋香関係記載あり。(平成24年3月16日追加)

・中村秋香著、中村春二(1877~1924)編『不尽廼屋遺稿』(前川文栄堂、明治44年1月31日刊)。「小中村博士を追悼する辞」198~201頁(115~116コマ)、「日記」(小中村義象関係:315(177コマ)、321(180コマ)、342(191コマ)、346(193コマ)頁)(近代デジタルライブラリー所収、コマ数は同ライブラリーのもの<<http://kindai.ndl.go.jp/>>)。上記日記明治31(1898)年1月1~3日条(342~343頁)に、落合直文(1861~1903)が静岡県(藤枝の志太温泉か。)滞在中の中村秋香を訪問し<<http://www.chooseikan.com/rekishi/>>、一高国語科主任[マ、正しくは「一高国文学科主任」か。]小中村義象辞職後の同主任就任を要請したのに対して中村が断っている記載がある。⇒同年9月落合辞職。ちなみに、中村は明治23(1890)年10月~明治26(1893)年に第一高等中学校教授であった(同書459頁「略歴」に拠る。「国立公文書館デジタルアーカイブ」に拠れば明治26(1893)年5月30日辞職(眼病のため)か。)(平成24年3月6日追加)

・中村秋香「おもひ出の一ふし」『読売新聞』明治31年8月29日(日)日曜附録明治31年第33号別刷1/2頁(「ヨミダス歴史館」に拠る。小中村清矩、池辺義象の思い出。「又義象ぬしもよしありて本姓に復し、今は遠く仏国留学の人となりぬ。」)(平成24年3月6日追加)

・明治31(1898)年1月頃に、小中村義象は池辺姓に復帰す。その際、故小中村清矩(1822~1895)の令室たつ子(?~1912)が居住していたと思われる「根岸」の養家と折衝している(書簡12-5<1897.10.14>)が、この「根岸」の家とは何ぞ⁷⁷。

・小中村清矩居宅の変遷については「小中村清矩」334~337頁参照。根岸に「別荘」ありという(「小中村清矩」336頁、前掲中村秋香『不尽之屋遺稿』198頁(「中村秋香」の件のみ平成24年3月6日追加))。小中村家の本籍:台東区上根岸町111番地(「小中村清矩」336頁。ただし、明治末年の地籍図には、所有者としての小中村家の土地は存在しない)。小中村清矩『歌舞音楽略史』(著述者兼発行人 小中村清矩、明治21年2月27日刊)には、小中村清矩の住所は「東京府下北豊嶋郡金杉村375番地」とある。⇒同地と、その後の上記本籍にいう上根岸町111番地(上根岸町は、昭和40年8月1日根岸二、三丁目に改称)の関係如何?⁷⁸。

・増田于信(1862~1932)宛谷干城(1837~1911)書簡(京大大学文書館資料番号 木下-416-1 ファイル14、内容:1897(明治30)年12月3日 小中村義象離縁の件)は、谷干城が前日小中村清矩室に会った結果を増田于信に手紙し、小中村義象に伝えさせたものである⁷⁹。しからば、増田于信とは誰ぞ。これについては、例えば、下記でほぼ判明する。なお、増田は本居長世(1885~1945)の実父である。これにつき、本稿(註6)「松野勇雄(1852~1893)」の件を参照。

・金田一春彦(1913~2004)『十五夜お月さん—本居長世 人と作品—』(三省堂、昭和

⁷⁷ 大沼宜規先生編著『小中村清矩日記』(汲古書院、平成22年7月15日刊)が刊行されるまでは、小中村清矩と根岸の関係については判然としていなかった。本稿の作成開始は、もとより同書刊行以前のため、このあたりおかしな問題提起とその検討状況のままになっていることをお断りしておく。いずれ訂正の予定でいる。(平成23年7月23日追加)

⁷⁸ 小中村清矩居宅変遷の把握は、小中村清矩検討上重要である。最も知りたい養父小中村春矩宅がどこにあったのかは、今なお不明であるが、大沼宜規先生『小中村清矩日記』の記載からすると、おそらく霊岸島かと思われる(同書691頁上段明治28(1895)年5月6日条)。取り敢えず、下記「[参考]『小中村清矩日記』に見たる本件関係事項抄」中で判明分的一端を示しておく。追記の予定でいる。(平成23年7月3日追加、同年7月5日補正)

⁷⁹ 谷干城(1837~1911)につき、差し当たり、前掲平尾道雄(1900~1979)『子爵谷干城伝』(富山房、昭和10年4月25日刊。復刻版:象山社、昭和56年9月刊)、嶋岡晨(1932~)『明治の人—反骨 谷干城—』(學藝書林、昭和56年7月10日刊)、小林和幸(1961~)『谷干城—憂国の明治人』(中公新書、平成23年3月23日刊、<<http://kindai.ndl.go.jp/>>)。覆刻本:東京大学出版会、1:昭和50年12月1日刊、2:昭和51年1月5日刊、3:昭和51年1月5日刊、4:昭和51年2月1日刊(続日本史籍協会叢書)所収日記には、当該年月の日記欠のため記載なし。(平成23年3月28日追加、同年5月10日一部補正)

57年12月15日刊) 18~24、107、108、436頁(『金田一春彦著作集』第10巻〈玉川大学出版部、平成16年7月25日刊〉に再録〈189~195、275、276、597頁〉。)

・鈴木淳(1947~)「本居豊穎伝」『維新前後に於ける国学の諸問題』(國學院大學日本文化研究所、昭和58年3月25日刊) 394~396頁(本居豊穎: 1834~1913)

・鈴木淳「増田于信のこと」『國學院大學日本文化研究所報』第115号(昭和58年11月25日刊) (「芽」欄) 11頁(『芽、往還 日本文化研究所スタッフのエッセイ集』〈國學院大學日本文化研究所、平成17年3月20日刊〉6頁に再録。)

・松浦良代(1948~)『本居長世 日本童謡先駆者の生涯』(国書刊行会、平成17年3月20日刊) 17~24、39~44、85、318~325頁

・斎藤達哉「増田于信と『新編紫史』—編纂の背景と言語生活史的位置づけ」『國學院雜誌』第107巻第6号(通号1190号)(平成18年6月15日刊) 30~47頁(小中村義象との関係にも言及)

・山根木忠勝「『源氏物語』の文語訳 増田于信『新編紫史』訳出の創意」『日本語日本文学論叢』(武庫川女子大学大学院文学研究科 武庫川女子大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻[編]) (4) (平成19年3月刊) 1~12頁(未見)

*小中村家人物史一斑 (追記*56 令和5(2023)年4月3日(月)補正第56稿分参照。)

- ・明治17(1884)年1月 池辺義象(1861~1923) 小中村清矩(1822~1895) 四女 忍い(1860~1932、73歳)と結婚、入婿(小中村清矩養子)
- ・明治24(1891)年5月27日上野公園桜雲台⁸⁰にて開催の「小中村清矩七十歳賀宴」は、小中村義象、小中村三作(1863~1933、小中村清矩実子、三男)の主催(「小中村清矩」308頁)
- ・明治28(1895)年10月11日(墓石では10月9日との由) 小中村清矩逝去
- ・相続者「小中村義象(東京市本郷区西片町十番地)」とある。小中村清矩遺著『国史学のみをり』(吉川半七、明治28年11月17日刊)奥付(平成24年2月9日追加)
- ・小中村清矩逝去後、小中村義象の離縁話が起りし由。その原因は何か?
- ・明治30(1897)年11月17日 木下広次宛小中村義象書簡は、小中村家の離縁条件を記載する(書簡12-6(1897.11.17)離縁案)。
- ・明治30(1897)年12月3日 前日谷干城が小中村清矩室に会った結果を、増田于信に手紙し、小中村義象に伝えさせる(書簡木下-416-1 ファイル14、内容:明治30(1897)年12月3日 小中村義象離縁の件)。
- ・明治31(1898)年1月 小中村義象離縁、池辺姓に復帰(書簡12-7(1898.1.11))。
- ・相続者「小中村義象」とある。:小中村清矩『陽春廬雜考』(やすむろ、吉川半七、明治30年12月20日刊。明治31年4月30日再版刊)奥付
- ・相続者「小中村三作」とある。:小中村清矩『国史学の葉』(勉強堂書店、明治33(1900)年10月25日刊)奥付
- ・相続者「小中村三作」とある。:小中村清矩『官職制度沿革史』(勉強堂書店、明治34年2月25日刊)奥付
- ・「小中村清名」(1886~?(1931年小中村清象逝去後)、小中村清矩令孫、小中村家での池辺義象長男)の名前が出る。:小中村清矩『令義解講義』(吉川半七、明治36年2月25日刊)奥付
- ・「小中村清象」(小中村清矩令孫、小中村家での池辺義象次男で小中村家の家督を継いだ(「小中村清矩」336頁。))の名前が出る。:小中村清矩(1822~1895)遺著『有声録』(広文堂書店(「石川文英堂」とするものもあり。))、大正4(1915)年9月20日刊)巻末に小中村清象「有声録の後に」がある。ただし、実質的には池辺の編纂か。(平成24年1月30日追加)

(参考1) 小中村清名の動静の件:

・塩谷賛⁸¹(1916~1977)『幸田露伴 中』(中央公論社、昭和43年11月9日刊。後に「中公文庫」(昭和52年3月刊)に再録。)78頁(幸田露伴日記大正5(1916)年5月26日の条、「小中村某」とあるが、267頁に拠れば「小中村清名」のこと。「小中村某が来て江戸文学保存会に名を連れてくれというのを、京都以来江戸文学にあきたればことわる」と記してある。)、265頁(幸田露伴日記大正5年5月5日の条「小中村清名が「帝国文学」の執筆を頼みに来る。この人は「歌舞音楽略史」をものした文学博士小中村清矩の孫であろうか。ことわった青年がまた来る。空想から詩人を志す危険を説いてやる。善良のものと見えて畏って聴く。自分の言を容れても容れなくてもよいが、おまえの詩はうまいなどとおだてる人に取巻かれないように祈るだけである。))、267頁(幸田露伴日記大正5年5月26日の条「小中村清名がまた来て「江戸文学保存会に名を連れなさい」と言うが、京都大学このかた江戸文学に飽きたからことわる。この短い記述が大学をやめて帰る一つの理由を明らかにするらしいことはさきに述べた。))、286頁(「それはおとし大正五年の

⁸⁰ 桜雲台につき、例えば、宮尾しげを(1902~1982)監修『東京都名所図会・下谷区・上野公園之部』(原本『新撰東京名所図会、暁書房、昭和43年9月15日刊』175、176~177(地図)、222頁等参照。(平成23年7月24日追加)

⁸¹ 塩谷 賛: <<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A1%A9%E8%B0%B7%E8%B3%9B>>(平成23年4月18日追加)

五月五日という五ばかり並んだ日の日記に見える、小中村清名が「帝国文学」に執筆を頼みに来たこととつながる。) 参照。(平成 23 年 7 月 4 日一部補正)

・明治 45 (1912) 年 2 月 1 日 小中村清矩室たつ子逝去 (「小中村清矩」336 頁)
(<http://ameblo.jp/k2600nen/entry-10071250980.html>)

(参考 2) 小中村清象の動静の件:

・「小中村清象」(1890~1931、小中村清矩令孫、小中村家での池辺義象次男、清象が家督を継ぐ(「小中村清矩」336 頁))の名前が出る。: 小中村清矩遺著『有声録』(広文堂書店、大正 4 (1915) 年 9 月 20 日刊)⁸²末尾に、小中村清象「有声録の後に」あり(併せ、池辺義象の序文もあり。(<http://kindai.ndl.go.jp/>))。

・『読売新聞』大正 12 (1923) 年 12 月 2 日(日)朝刊 7/8 頁 2 段「よみうり抄」は、「▲小中村清象氏は万朝社を退いたが、今度報知新聞社に入った。」(「ヨミダス歴史館」に拠る。)とする。(平成 23 年 2 月 7 日追加)

・明治 45 (1912) 年 2 月 1 日 小中村清矩室たつ子逝去 (「小中村清矩」336 頁)
(<http://ameblo.jp/k2600nen/entry-10071250980.html>) (平成 24 年 1 月 30 日追加)

・大正 12 (1923) 年 3 月 6 日 池辺義象逝去

・昭和 6 (1931) 年 小中村清象逝去 (「小中村清矩」337 頁)

・昭和 6 (1931) 年時点

『学位大系博士氏名録 昭和七年版』(発展社出版部、昭和 6 年 10 月 25 日刊)「文学博士」1 頁には、小中村清矩の「相続人、現住所」として、「正象(孫)[清象令息]、東京市外滝野川町上中里 114」とある。(近代デジタルライブラリー(<http://kindai.ndl.go.jp/>)にあり。)(平成 23 年 12 月 19 日追加)

・昭和 7 (1932) 年 5 月 12 日 池辺前妻小中村ゑい、昭和 6 (1931) 年 8 月まで小中村清象と同居していたが、その後小中村清名と同居し、東京府荏原郡松沢村赤堤 520 番地で逝去、73 歳 (「小中村清矩」307、308、337 頁) (平成 23 年 12 月 19 日一部補正)

(参考 3) 『小中村清矩日記』に見たる本件関係事項抄 (平成 22 年 12 月 5 日追加)

平成 22 (2010) 年夏、大沼宜規先生(1971~)の御労作同氏編著『小中村清矩日記』(汲古書院、平成 22 年 7 月 15 日刊)(<http://www.kyuko.asia/book/b68286.html>)が刊行された。小中村清矩(1822~1895)及び池辺義象検討上、寔に貴重なものである⁸³。こ

⁸² 小中村清矩博士二十年祭を記念して編まれたもので、池辺義象が尽力したる由(『東京朝日新聞』大正 4 (1915) 年 1 月 6 日(水)朝刊 3 頁 8 段「小中村博士二十年祭」。また、同書の広告として、『東京朝日新聞』大正 4 年 9 月 15 日(水)朝刊 1 頁広告「小中村清矩先生遺著 有声録」参照。(平成 23 年 6 月 20 日追加)

⁸³ 『小中村清矩日記』を夙に取り上げたのは、三村竹清(1876~1953)「陽春廬日記」『三村竹清集 2 日本書誌学大系 23 (2)』(青裳堂書店、昭和 57 年 6 月 15 日刊)178~179 頁(この分平成 23 年 6 月 5 日追加)や朝倉治彦(1924~2013)「小中村清矩の日記から」『日本古書通信』第 23 巻第 9 号(通巻第 173 号、昭和 33 年 9 月 15 日刊)8~10 頁、同「小中村清矩の日記から(続)一明治演劇の側面資料一」『日本古書通信』第 24 巻第 9 号(通巻第 185 号、昭和 34 年 9 月 15 日刊)5~7 頁(うち、前者は、朝倉治彦「小中村清矩の日記」『書庫縦横』(出版ニュース社、昭和 62 年 3 月 31 日刊)143~152 頁に再録。)(この分平成 24 年 12 月 8 日一部修正)等かと思われるが、最近では、大沼宜規「古典講習科時代の小中村清矩一日記にみる活動と交友」『近代史料研究』第 2 号(平成 14 年 10 月 31 日刊)47~69 頁、同「晩年の小中村清矩一日記にみる活動と交友」『近代史料研究』第 7 号(平成 19 年 10 月刊)1~28 頁がある。

また、小中村清矩の墓所は、谷中霊園甲 9 号 8 側「文学博士小中村清矩之墓」(「小中村清矩」326 頁、(<http://www17.ocn.ne.jp/~va-na-ka/konakamuraKiyonori.htm>)。平成 23 (2011) 年 7 月 23 日(土)展墓す(平成 23 年 7 月 24 日追記。))であるが、小中村家の菩提寺は、台東区元浅草 4-7-10 光明寺(小中村清矩の頃は「新光明寺」、大正 13 (1924) 年西光寺と合併)(http://www.tesshow.jp/taito/temple_basa_komyo.shtml)である(平成 23 年 5 月 21 日(土)朝展墓す。)(平成 23 年 5 月 8 日追加、同年 5 月 10 日一部補正、同年 5 月 23 日一部補正(平成 23 年 5 月 14 日大沼宜規先生から『近代史料研究』の御示教に与った)。同年 7 月 24 日一部補正)。

ここでは、池辺義象と小中村清矩四女ゑい（えい、1860～1932、享年 73）との結婚関係、池辺義象絡みの小中村清矩家族についての記載事項の一部のみを抽出しておくこととする。本題「池辺義象氏の小中村家離縁の件」の参考となる記述が多い。重要事項で漏らしたのも多いと思われることから、機会を得て、更に検討の予定でいる。同書を利用させていただきしことについて感謝する次第である。なお、閲覧に関しては、高塩 博先生の御厚情を忝うした。厚く御礼申し上げるものである。なお、[]内は当方の註記であり、漢字「井」は正字を入力できず、ここでは俗字を使用した。

（小中村清矩の家族関係）

（平成 24 年 10 月 25 日新設。元は（註 48〈当時〉）の一部であったが、今般独立させた。）

『小中村清矩日記』解説のためには、小中村清矩の家庭状況を知ることが必須であるが、種々の事情から、未だ難しい段階にあり、今後の課題といえる。うち、例えば、三女おしん（晋、1853～1908）及びその夫江澤藤右衛門（1854～1926.11.21）については、野村尚吾（1912～1975）『伝記 谷崎潤一郎』（谷崎潤一郎：1886～1965、六興出版、昭和 47 年 5 月 25 日刊、昭和 49 年 11 月 5 日改訂版刊）26～27 頁（ただし、頁数は新装第 2 版に拠る。）、細江光（1959～）『谷崎潤一郎—深層のレトリック』（和泉書院、平成 16 年 3 月 31 日）542～560 頁（554 頁に「写真 9 小中村清矩と妻・たつ子」等あり。この部分の初出：細江光「谷崎家・江沢家とブラジル」『甲南国文』第 46 号（甲南女子大学国文学会、平成 11 年 3 月 10 日刊）187～218 頁（199～213 頁：「2 谷崎平次郎一家について」）、同「谷崎家・江沢家とブラジル—訂正と追加—」『甲南国文』第 47 号（平成 12 年 3 月 10 日刊）205～206 頁（「この部分」以下平成 23 年 8 月 26 日追加）、小谷野敦（1962～）『谷崎潤一郎伝—堂々たる人生』（中央公論新社、平成 18 年 6 月 25 日刊）14～16 頁（15 頁に「谷崎家、江澤家系図」あり。ただし、江澤藤右衛門・晋夫妻の息女なか（仲、谷崎平次郎令室）につき補訂の要あり。）、82～84 頁等各参照。なお、谷崎終平（谷崎末弟、1908～1990）『懐しき人々—兄潤一郎とその周辺—』（文藝春秋、平成元年 8 月 15 日刊）9～16、101～103 頁にも、江澤藤右衛門一家関係のことが記載されているが、ここに「小中村義象」（102 頁）とあるのは、「小中村清矩」の誤記。（「なお」以下平成 24 年 10 月 25 日追加）

（小中村清矩住居の転居関係）

ちなみに、小中村清矩の住居の転居関係等は下記のとおりである。池辺義象の動静を知る上でも必要かと思われるので、記載しておく。（調査中、平成 23 年 7 月 24 日時点）（平成 23 年 7 月 3 日追加、同年 7 月 5 日、同年 7 月 24 日、同年 8 月 26 日、同年 10 月 19 日、平成 30 年 10 月 19 日各補正）

・「（此人の祖父某、四十年ばかりの昔靈岸嶋の家に来れる事あり。）」『小中村清矩日記』691 頁上段明治 28（1895）年 5 月 6 日条（平成 23 年 7 月 5 日追加）

（例えば、明治 28（1895）年より 40 年前 ⇒1855 年、嘉永 7 年 11 月 13 日～嘉永 7 年 11 月 26 日、安政元年 11 月 27 日～安政元年 12 月 30 日、安政 2 年 1 月 1 日～安政 2 年 11 月 23 日。なお、『小中村清矩日記』には、息女の靈岸嶋往来の記載あり（「なお」以下平成 23 年 10 月 19 日追加。）

・（参考）『中央区沿革図集〔京橋篇〕』（東京都中央区京橋図書館、平成 8 年 3 月 31 日刊）（平成 23 年 7 月 24 日追加）

平成 24 年夏現在では、『小中村博士日記（明治 15～27 年）』、『小中村翁日記（明治 20～28 年）』が「国立国会図書館デジタル化資料」で、館外でもネットで検索できる。〈<http://dl.ndl.go.jp/>〉（平成 24 年 8 月 3 日追加）

同書の書評として、中川和明（1962～）「大沼宜規編『小中村清矩日記』『古文書研究』第 73 号（日本古文書学会、平成 24 年 7 月 20 日刊）122～124 頁がある。（平成 24 年 9 月 27 日追加）

・明治 11 (1878) 年頃: 「明治十一年頃に清矩の転居した下谷西黒門町十二番地は、現在、台東区西黒門町 [現在の^{上野} 1 丁目] となっている。」(「小中村清矩」335 頁)、佐佐木信綱 (1872~1963) 「明治十五年の春、上京した時、父 [佐々木弘綱: 1828~1891] に連れられて西黒門町の先生の許へ行った。」(「小中村清矩」311 頁) (平成 23 年 7 月 24 日追加)、佐佐木信綱「(明治 15 年 [父佐々木弘綱 (1828~1891) と]) 天神下の通りの角に土蔵のある小中村清矩先生の家を訪うた。『作歌八十二年』(毎日新聞社、昭和 34 年 5 月 25 日刊) 22 頁 (平成 30 年 10 月 19 日追加)

(参考) 小中村清矩・中邨秋香 (1841~1910) 編輯『日用文鑑』(不二書屋、明治 17 年 2 月刊) 奥付では小中村清矩の住所は「下谷西黒門町十七番地」となっている。ちなみに、この時点での中邨の住所は「麴町区三番町七十一番地」である。

(http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he02/he02_05655/index.html) (平成 24 年 3 月 6 日追加)

・明治 18 (1885) 年 11 月 3 日 (火) 『読売新聞』朝刊「転居」広告 (「ヨミダス歴史館」に拠る。同日 4/4 頁) (同年 11 月 6、7 日にも同文広告あり。)

「転居 下谷区茅町貳丁目拾貳番地 小中村清矩」

(なお、「小中村清矩」335 頁参照。)

・『小中村清矩日記』では明治 20 (1887) 年 8 月に「根岸の家」のことが出ている。既に根岸に転居か。(平成 30 年 10 月 19 日追加)

・小中村清矩『歌舞音楽略史』(著述者兼発行人 小中村清矩、明治 21 年 2 月 27 日刊) には、小中村清矩の住所は「東京府下北豊嶋郡金杉村 375 番地」とある。

[下記「(旧) *****~*****」間の記載は、「(新) *****~*****」に全部差換 (平成 30 (2018) 年 10 月 19 日修正)]

(旧) *****

⇒これが、その後の本籍にいう「上根岸町 111 番地」(上根岸町は、昭和 40 年 8 月 1 日根岸二、三丁目に改称) と如何なる関係があるのかは、現時点では不明。⇒下記参照。

・明治 21 (1888) 年 6 月 13 日「根岸大塚より同処中村へ転居」との由 (『小中村清矩日記』252、296 頁) (平成 23 年 7 月 5 日追加)

・「大塚」、「中村」とも金杉村中央以南の地の字名であるが、この後、明治 22 (1889) 年に北豊嶋郡金杉村の南部 (石神井用水 (音無川) から南) が下谷区金杉村に、更に、明治 24 (1891) 年 3 月に「金杉村中村」の一部が「中根岸町」になっている (字杉崎が上根岸町になる。東北部の大塚はおそらく下根岸町か?) ので、本籍にいう「上根岸町 111 番地」とは、「大塚」でも「中村」のことでもないと思われる。小中村家がその後上根岸町に転じているのか、あるいは、戸籍を移したのかは、今後の課題である。ただ、上記明治 21 年 2 月 27 日現在の「東京府下北豊嶋郡金杉村 375 番地」は、明治 21 (1888) 年 6 月 13 日に転居した「中村」でなく、その前に居住していた「大塚」のことであると思われるが、現在の何処を指すのかは不明である。なお、根岸につき、下記各サイト参照。(平成 23 年 7 月 24 日追加、同年 8 月 26 日追加、同年 10 月 19 日追加、平成 25 年 6 月 18 日一部修正)

(新) *****

・大沼宜規氏 (1971~) 編著『小中村清矩日記』(汲古書院、平成 22 年 7 月 15 日刊) を 8 年ぶりに再読するに、既述 (252 頁上 6 月 13 日条 転居の件、296 頁下 本年の重事 6 月 13 日「根岸大塚より同処中村へ転居。」) に加え、「237 頁下 明治 21 年 3 月 30 日条 331 番地の件、239 頁下 同年 4 月 4 日条 332 番地の件」を見出だす。初読当時は根岸界隈の地歴に疎くてよくわからずそのままにしていたのではと痛く反省す。331 番地、332 番地は金杉村の番地で、さる識者によれば、明治 28 年の地図では「下谷区中根岸町 88、89、90 番地」にあたり、現在の「台東区根岸 3 丁目 13 番」付近との由である。

・更に、『東京百事便』（三三文房、明治 23 年 7 月 9 日刊）495 頁（国会図書館デジタルコレクション 258 コマ）、497 頁（同 259 コマ）を見るに、小中村清矩の当時の住所については、「下谷区金杉村三百三十二番地」とある。『東京百事便』については復刻版（フジミ書房、平成 11 年 7 月刊）あり。

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991721/336>〉

・いずれにせよ、中根岸町は「金杉村中村」であり、「根岸大塚より同処中村へ転居。」への記述はこれを指す。小中村清矩は、同地から、明治 23 年 10 月に「本郷区駒込西片町拾番地」に転居するが、根岸の旧邸とを頻繁に往来している。

・なお、明治 30 年前後の根岸検討に最も重要な大槻文彦博士（1847～1928）の『東京下谷 根岸及近傍図』（根岸倶楽部、明治 34 年 1 月 3 日刊）は、現在ではネット上にては詳細はよくわからないものの株式会社 Stroly の下記アドレスで見ることができる

〈<https://stroly.com/maps/3739/>〉。なお、同図については、差し当たり馬淵礼子氏（1949～）「東京下谷根岸及近傍図」『馬淵礼子評論集 2 歌の青春』（短歌研究社、平成 18 年 7 月 19 日刊）274～322 頁に詳しい。ここには同図の縮刷版もある。（平成 30（2018）年 10 月 19 日追加）

〈 [http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A0%B9%E5%B2%B8\(%E5%8F%B0%E6%9D%B1%E5%8C%BA\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A0%B9%E5%B2%B8(%E5%8F%B0%E6%9D%B1%E5%8C%BA)) 〉

〈<http://nippori-negisi.seesaa.net/category/1379311-1.html>〉（根岸の字名を記載。）

〈<http://www.habutae.jp/event/talk/talk1.php>〉（字中村→中根岸町の件記載。）

〈<http://www.habutae.jp/event/talk/talk2.php>〉（「上根岸町近傍図」を掲載。）

〈<http://www.habutae.jp/event/talk/talk3.php>〉

「上根岸町」： 〈<http://www.tctv.ne.jp/mkim/s-negishik.html>〉

〈 <http://www.maroon.dti.ne.jp/~satton/taidou-imamukasi/taisyoun1/negisi.jpg> 〉、
〈<http://www.maroon.dti.ne.jp/~satton/taidou-imamukasi/taisyoun1/>〉（中根岸町と字中村の関係）（平成 25 年 6 月 18 日追加）

・往時の「上根岸町 111 番地」は、識者の御示教によれば、現在の「台東区根岸 2 丁目 21～22 番」付近との由である。おそらく御隠殿跡 〈<http://www.maroon.dti.ne.jp/~satton/meisyo/goinden.html>〉の一部か。平成 23 年 7 月 23 日（土）実査済。

・明治期の下谷上根岸町につき、例えば、宮尾しげを（1902～1982）監修『東京都名所図会・下谷区・上野公園之部』（原本『新撰東京名所図会』。暁書房、昭和 43 年 9 月 15 日刊）96～99 頁等参照。

・当時の根岸のことを知るには、もとより、大槻文彦（1847～1928）『東京下谷 根岸及近傍図』〈<https://stroly.com/maps/3739/>〉が重要であるが、これにつき、山下一郎（1913～？）『鶯の谷 根岸の里の覚え書き』（富山房インターナショナル、平成 19 年 12 月 22 日刊）、馬淵礼子『歌の早春 馬淵礼子評論集 2』（短歌研究社、平成 18 年 7 月 19 日刊）274～322 頁等各参照。なお、前者口絵、後者 320～322 頁はその縮小版をそれぞれ掲載しており、貴重である。（平成 23 年 10 月 10 日追加、平成 25 年 3 月 21 日、同 30 年 10 月 19 日一部訂正）

〈 http://www.fuzambo-intl.com/index.php?main_page=product_info&cPath=11&products_id=42 〉

〈 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A0%B9%E5%B2%B8%E5%8F%8A%E8%BF%91%E5%82%8D%E5%9B%B3> 〉

・明治 21（1888）年 12 月 30 日（日）『読売新聞』朝刊「稟告（しらせ）」広告（歳末年始欠礼（「ヨミダス歴史館」に拠る。同日 3/4 頁）

「養病の為豆州旅行に付新年参賀礼を闕く 小中村清矩」

・明治 23 (1890) 年 10 月 29 日 (水) 『読売新聞』朝刊「転居」広告 (「ヨミダス歴史館」に拠る。同日 4/4 頁)

「転居 本郷区駒込西片町拾番地 小中村清矩」

(「小中村清矩」335 頁参照。「西片町十番地にノ三十号の家」との記載あり⁸⁴。)

・ただし、『小中村清矩日記』の記述にあるように、その後も、小中村清矩は、西片町と根岸との間を頻繁に往復していたようである。

・佐佐木信綱 (1872~1963) 『明治文学の片影』(中央公論社、昭和 9 年 10 月 25 日刊)
「小中村清矩先生 明治国文学の恩人」6 頁「・・・自分は、湯島切通下に、池の端に、また西片町の邸におたづねして、学問上の懇篤なお話を聞いた。」(平成 24 年 3 月 16 日追加)

(小中村家のその後の状況) (平成 23 年 12 月 19 日追加)

・明治 30 (1897) 年頃には下谷区上根岸町 88 番地に居住のようである。成瀬無極 (1885~1958) 「根岸の思ひ出」『無極集』(法律文化社、昭和 34 年 11 月 3 日刊) 420~436 頁中 425 頁 (初出不明、執筆日付: 末尾に「(昭 30・3)」とある。) に拠る。⇒後掲 (関係文献等追加) ※10 (平成 30 年 9 月 10 日補正第 46 稿追加) 参照。(平成 30 年 10 月 19 日追加)

・「小中村清矩」337 頁参照。

・昭和 6 (1931) 年時点

『学位大系博士氏名録 昭和七年版』(発展社出版部、昭和 6 年 10 月 25 日刊)「文学博士」1 頁には、「相続人、現住所」として、「正象 (孫) [清象令息]、東京市外滝野川町上中里 114」とある。(近代デジタルライブラリー <<http://kindai.ndl.go.jp/>> あり。)(平成 23 年 12 月 19 日追加)

(『小中村清矩日記』抽出)

* 明治十五年・十六年日記 (1882・1883 年、37~120 頁)

・48 頁 明治 15 (1882) 年 6 月 29 日以降 [謹吾 (清矩実子) のこと頻出]

・50 頁 明治 15 (1882) 年 7 月 17 日 ○三作 [清矩三男、1863 (文久 3 年 3 月 31 日) ~1933 (昭和 8 年 3 月 9 日火葬) 4]、時氣中りニ付今日帰宅。已後引。

⁸⁴ (以下、平成 23 年 10 月 19 日追加)

・HP「Clocks & Clouds」中「西片だより 西片町 その 2」(2011.5.14) に「駒込西片町全図」(『西片だより』第 8 号 <昭和 29 年 5 月 10 日刊> 所収との由) あり。

<http://pub.ne.jp/lot49/?entry_id=3651439>

・「西片町十番地にノ三十号の家」→現在の「文京区西片二丁目 8 番あたり」(平成 23 年 9 月 14 日文京区教示、ヤフー地図参照。昭和 39 年地番変更。)

(参考) 西片町: <<http://www1.tcn-catv.ne.jp/nishi-kata/history.htm>>、

<<http://www.toshima.ne.jp/~tatemono/page012.html>>

・『地籍台帳 地籍地図 [東京]』(全 7 巻、柏書房刊)

本郷区駒込西片町: 同書第 6 巻 (柏書房、平成元年 3 月 20 日刊) 162 頁

(以下、平成 24 年 2 月 17 日追加)

・「文京ふるさと歴史館」<<http://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/>>

「伯爵家のまちづくり—学者町・西片の誕生—」(平成 23 年度収蔵品展、平成 24 年 2 月 11 日 <土> ~同年 3 月 18 日 <日>)。旧福山藩主阿部家丸山屋敷地)

・出口 競 (1890~1957) 『学者町学生町』(実業之日本社、大正 6 年 8 月 5 日刊) 「西片町の解剖」(1~59 頁)、「西片町の誠之舎」(243~255 頁) (「近代デジタルライブラリー」参照。)(平成 25 年 3 月 28 日追加)

・下村海南 (宏、1875~1957) 『隨筆 二直角』(櫻井書店、昭和 17 年 7 月 1 日刊) 中「西片町十番地」(33~36 頁) (明治 25 (1892) 年頃の話。「近代デジタルライブラリー」参照。)(平成 25 年 3 月 28 日追加)

- ・52頁 明治15(1882)年7月25日 ○三作、今日より一週引籠届書・医師診断書渡。工部省へ出ス。[以降、引籠追届出の記事頻出]
- ・60頁 明治15(1882)年9月20日 ○三作、引籠追届出ス。
- ・60頁 明治15(1882)年9月22日 三作・おたつ[清矩妻、? ~1912.2.1] 同道にて、午前八時大学医院行。外国教師ノ診を受く。
- ・68頁 明治15(1882)年11月20日 ○電信局長へ三作転地療養願出ス〔廿二日指令済〕
- ・83頁 明治16(1883)年2月28日以降 [根岸で売家購入の件頻出]
- ・90頁 明治16(1883)年4月27日 谷 [干城、1837~1911。谷は池辺義象の結婚の媒介人] 行、池辺 [池辺義象] 事談ジ。
- ・93頁 明治16(1883)年5月20日(日) 谷来。池辺 [義象] ノ事也。
- ・98頁 明治16(1883)年7月9日 ○三作代井上、工部省へ出、免職辞令書受。[同年7月13日記事参照。]
- ・112頁 明治16(1883)年12月16日 [○池辺へ意見書、飯田 [武郷、1828~1900] へ廻る。]
- ・112頁 明治16(1883)年12月22日 飯田 [武郷] 方へ結納品送ル。今日神足 [勝記か、1854~1937。227頁下段参照。] へ被参候事。
- ・112頁 明治16(1883)年12月26日 午後三時過より飯田 [武郷] 来。池辺 [池辺義象] 同道。
- ・*明治十七年~十九年旅日記(1884~1886年、121~168頁)
- ・160頁 磯部の日記 [明治19(1884)年7~8月]
ことしの夏は、[中略] 上野の磯部の湯あみにとて、移りてよりいまだいく日もあらざる金杉村大塚のやどより出でたつ。[中略] さては常に病がちなる三男三作 [廿四] とうちつれて [以下省略]
- ・*明治二十年~二十八年日記・旅日記(1887~1895年、169~706頁)
- ・174頁 明治20(1887)年5月5日 清名 [小中村清名、義象長男] 初職立ニ付、飯田 [武郷]・神足 [勝記、1854~1937]・お道 [長女] 等招く。
- ・177頁 明治20(1887)年7月8日 于信 [雨宮、1862~1932] より書通、増田ト改姓。
- ・178~192頁 相模伊豆の旅日記 [明治20(1887)年7月24日~8月9日]
192頁 [明治20年8月9日] 根岸の家に帰りぬ。
- ・199頁 明治20(1887)年9月8日 おたつ、さゝ又 [長女お道の婚家か、あるいは、「笹又フミ⁸⁵」に關係ありし者か。] 行、金十円持参 [お道十日ニあたま行由]。
- ・203頁 明治20(1887)年9月25日(日) ○さゝ又来る。三作の意見を問ひ、かつ諭す。
- ・208頁 明治20(1887)年10月23日 ○ [二十四日敷] さゝ又来る。三作を諭す。
- ・216頁 明治20(1887)年2月3日 [小中村] 義象三番町三十一番地へ転居。
- ・220頁 明治20(1887)年12月29日 [小中村謹吾逝去、前後に關係記事あり。]
- ・231頁 明治21(1888)年12月18日 ○おたつ番丁 [三番町か] 行。清名 [義象長男] 見舞也。
- ・238頁 明治21(1888)年3月30日 ○午後お栄 [小中村義象妻]・清名帰る。明日市ヶ谷へ転居のよし。
- ・277頁 明治21(1888)年9月3日 加々丁 [市ヶ谷加賀町のことか。] 行。此ほどより清名下痢によりて也。
- ・282頁 明治21(1888)年9月30日(日) 義象来ル。近日出京にて弟遊亀同道。
- ・292頁 明治21(1888)年12月5日 ○本日義象へ第一高等中学より国語・漢文授業之囑托書来る。報酬月資廿円也。
- ・293頁 明治21(1888)年12月14日 〈頭書〉三作・お光縁組届書、役場へ出ス。

⁸⁵ ・昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第2巻 ([昭和女子大学] 光葉会、昭和31年4月10日刊) 中「小中村清矩」337~338頁参照。

予も調印。

- ・294頁 明治21(1888)年12月20日 法制局行、井上[毅、1843~1895]局長へ面会并女帝論演説之事談也。午後退出、加々丁行〔お栄歳暮并遊亀[義象弟]下駄送〕、
- ・301頁 明治22(1889)年3月15日 加賀丁行〔廿二日敷〕。生児を清象[義象次男]と名づく。
- ・308頁 明治22(1889)年3月15日 三作七軒丁行。地主より近々地盛ニ付、借地之印をする。
- ・316頁 明治22(1889)年5月2日 [中略]三時[大学]退出後加々丁行。清象[小中村清象、義象次男]初節句ニ付、馬乗人形・縮面(緬)鯉等遣ス。義象は井上[毅]法制局長と共ニ山田[司法]大臣[顕義:1844~1892]ニ招かれ候由にて不逢。
- ・326頁 明治22(1889)年6月30日(日) 三作・おみつ七軒丁へ引移、義象・お栄、加賀丁より根岸へ引移、双方共晩景迄ニ相済。
- ・349頁 明治22(1889)年8月15日 午前義象の母来る。
- ・352頁 明治22(1889)年8月27日 ○〔廿七日也〕午前十一時四十五分の気車[マ]にて王子行。おたつ・義象・お栄・池辺老母・子供二人つれ扇屋[慶安元(1648)年創業の老舗]にて酒食。[王子]稲荷へ参る。
- ・356頁 明治22(1889)年9月18日 大阪攻(マ)法会々主田山宗堯[宗堯、1859~1917]⁸⁶来る〔くわし持〕。税法雑誌発行ニ付考説頼なり。[同年10月10日記事参照。]
- ・358頁 明治22(1889)年9月27日 ○三作おみつ来る。[三作・おみつの件は頻出]
- ・359頁 明治22(1889)年10月10日 税法雑誌へ入るべき講義を記さんとて租税志、食貨志等何くれとミたる上にて起草す。[同年9月18日記事参照。]
- ・408頁 明治23(1890)年9月3日 ○義象・お栄并子共(マ)西片丁の家へ移る。
- ・408頁 明治23(1890)年9月4日 午前植木や同道、駒込行、午後帰る。○〔池之端〕七軒丁三作・おみつ、今日根岸へ移る。
- ・408頁 明治23(1890)年9月7日 義象・三作兩人ニ伝来物之小道具并掛物を遺物之配分申聞。
- ・414~415頁 明治23(1890)年10月8日~13日 [駒込引移の件、根岸宅(?)を三作に譲る件等記載]
- ・417頁 明治23(1890)年10月24日 [義象より小中村清道(清矩孫)借金証書調印の件記載]
- ・427頁 明治24(1891)年1月23日 午後、根岸へ移る。旧宅あたゝかニ付、四月の始まで在留之つもり也。[明治24(1891)年4月29日記事参照。]
- ・487頁 明治25(1892)年4月23日 ○本日本郷竜岡丁真信館(勸工場)開業。頗る雑沓也。三作事、鈴木某と組合、時計・眼鏡店を開くニ付、是より日々詰。
- ・495頁 明治25(1892)年6月3日 ○三作[本郷]春木丁より引移、同所店は人ニ貸し[家賃七円][以下省略]
- ・573頁 明治26(1893)年10月27日 〈頭書〉大阪なる[池辺]遊亀氏昨日死去之由、電報来ル。因て義象本日午後一時発気車[マ]にて阪地へおもむけり。[明治26(1893)10月29日記事参照。]
- ・584頁 明治26(1893)年11月22日 〈頭書〉義象より廃戸願書[意味検討中]、区役所宛に差出。清矩より七軒丁登記済届書差出。
- ・588頁 明治26(1893)年12月12日 ○義象廃戸復籍届区役所へ出す[意味検討中]。〈頭書〉
- ・613頁 明治27(1894)年5月7日 ○家財・伝来者其他義象・三作兩人へ処分之旨、三作へ談じ。
- ・613頁 明治27(1894)年5月8日 ○家財伝来物、義象ニ与ふべき物示す。

⁸⁶ 田山宗堯については、別稿「警眼社社主田山宗堯とは誰ぞ(六訂稿) — 『警察協会雑誌』との関連をめぐって — 一明治警察史の一齣一」(平成20年9月30日初稿、平成23年7月20日六訂稿各作成)〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/tayama.pdf>〉参照。(平成23年5月8日追加、同年7月24日一部補正)

- ・674 頁 明治 28 (1895) 年 3 月 17 日 △井上子爵毅君 [1843～1895] 薨去の赴音あり。
- ・675 頁 明治 28 (1895) 年 3 月 22 日 ○十二時前市谷薬王寺町井上子爵邸行。午後一時発葬。[以下省略]
- ・677 頁 明治 28 (1895) 年 4 月 5 日 ○夕四時過外山 [正一、文科大学長、1848～1900] 来る。義象事史料編輯委員 [ママ、史料編纂委員] たるべき談あり。
- ・688 頁 明治 28 (1895) 年 5 月 1 日 義象高等女子師範学校 [ママ、女子高等師範学校] 教授を免ぜられる。
- ・688 頁 明治 28 (1895) 年 5 月 9 日 廿九日の長旅に駒込・根岸両家無異なるを嘉す。
〈頭書〉
[最終記載: 明治 28 (1895) 年 7 月 31 日⁸⁷、小中村清矩逝去: 明治 28 (1895) 年 10 月 11 日 (墓石では 10 月 9 日との由。HP「かんがくかんかく (漢学感覚)」
〈<http://ameblo.jp/k2600nen/entry-10071250980.html>〉]

⁸⁷ その後逝去までの日記 (明治 28 年 8 月 1 日～同年 10 月 5 日) の存在につき、三村竹清 (1876～1953) 『三村竹清集 2 日本書誌学大系 23 (2)』 (青裳堂書店、昭和 57 年 6 月 15 日刊) 178～179 頁 (「陽春廬日記」〈178～179 頁〉) 中に記載あり。(平成 23 年 7 月 24 日追加)

* 京都帝国大学文科大学の件

池辺義象は、明治 36 (1903) 年 4 月、京都帝国大学法科大学で日本法制史の講師を囑託されているが、上記木下宛池辺書簡(資料番号 12-14、12-15)に拠れば、池辺のそもそもの「宿願」は、当時開設予定であって明治 41 (1908) 年 9 月に開講された同大学文科大学文学部の国文学講座担任就任にあったようである⁸⁸。このため、初代総長木下広次(1851~1910)に配慮方を依頼している。しかし、これは、幸田成行(露伴、1867~1947)が教授待遇の講師に就任したこと⁸⁹等から成らず、翌 42 年秋池辺は帰京する。これにつき、『京都帝国大学文学部三十周年史』(同、昭和 10 年 11 月 23 日刊)⁹⁰、塩谷賛(1916~

⁸⁸ 『京都大学百年史 写真集』(財京都大学後援会、平成 9 年 9 月 30 日刊) 26、27 頁に「分科大学の設立 文科大学」があり、教育学の初代教授になった谷本 富(1867~1946)某年 1 月 29 (?) 日作成の「文科大学案」(2-51)が掲載されている。

<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/anvphoto/menu.html>

そこには、就任予定の教授、講師の氏名が列挙されているが、キャプションには、「谷本富作成の文科大学案。1907、8 [明治 40、41] 年頃と推定されるが、このときにはまだ内藤 [虎次郎、湖南、1866~1934] らの名は見えない。(2-51)」とある。

・詳しい検討は省略するが、諸般の事情を考慮すると、これは、おそらく、1907、8 [明治 40、41] 年頃より先の 1906 (明治 39) 年作成のものかと推察される。

・教授案には、谷本の他に、松本文三郎(1869~1944)、藤岡作太郎(1870~1910)、狩野直喜(1866~1947)、桑木巖翼(1874~1946)、内田銀蔵(1872~1919) 5 名の名があり、国文学については、「国文学 文学博士文学士(27 [東大明治 27 年卒]) 藤岡作太郎」とあるが、決定者の印である*印は、谷本、松本、狩野、桑木の 4 名に付いており、藤岡と内田にはない。

・講師案には、「国文学 池辺義象」の名があり、池辺には推薦方問合予定者の印である括弧がついていないので、この時点では、あるいは内定者だったのかとも思われるが詳細不明。(平成 23 年 10 月 19 日追加)

⁸⁹ 幸田露伴を京大に招聘したのは、塩谷賛(1916~1977)『幸田露伴 中』(中央公論社、昭和 43 年 11 月 9 日刊) 38~43 頁に拠れば、最終的には、第二代京大総長岡田良平(1864~1934)及び上田萬年(1867~1937)の二人のようであるが、実質的な推薦者は、上田萬年及び芳賀矢一(1867~1927)といわれる。このあたりの経緯について、例えば、新村出(1876~1967)「露伴翁を頌す」、「露伴翁の言語研究」『近代作家追悼文集成 [31] 三宅雪嶺 幸田露伴 武田麟太郎 横光利一 織田作之助』(ゆまに書房、平成 9 年 1 月 24 日刊。初出『芸林閑歩』(昭和 22 年 8 月 1 日刊)、『文学』第 15 巻第 10 号(昭和 22 年 10 月 20 日刊)) 125、196 頁。上田萬年と幸田露伴との関係について、例えば、円地文子(1905~1986)『夢うつつの記』(文藝春秋 昭和 62 年 3 月 25 日刊) 34 頁参照。この他、狩野亨吉(1865~1942)との関係をも参照。なお、こうしたことを、往時の「落合直文・池辺義象(古典講習科出身)」対「上田萬年・芳賀矢一(本科(正規の文科)出身)」との見方でとらえる向きがあり、検討の要ありか。なお、上記塩谷 賛『幸田露伴 中』60 頁は、京都で池辺が幸田を招待したことを伝えている。(平成 23 年 4 月 18 日追加、同年 5 月 10 日一部補正、同年 7 月 5 日一部補正、同年 7 月 24 日一部補正)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8B%A9%E9%87%8E%E4%BA%A8%E5%90%89>

⁹⁰ 幸田成行(露伴)は、明治 41 (1908) 年 9 月(教授待遇)講師になり、翌明治 42 (1909) 年 10 月に退職している。ただし、正式には、大正元(1912)年 7 月講師囑託解囑との由(『京都帝国大学文学部三十周年史』263 頁。ただし、塩谷 賛『幸田露伴 中』(中央公論社、昭和 43 年 11 月 9 日刊) 228、232 頁では、大正 3 (1914) 年 9 月 15 日付とする。)。幸田と入れ替わるように、藤井乙男(1868~1946、当時八高教授)が明治 42 年 11 月講師となり、明治 44 年 9 月教授に就任している(同 31 頁)。(平成 22 年 6 月 4 日追加)。また、藤岡作太郎(1870~1910、東大文助教授で逝去)につき、芳賀矢一(1867~1928)「嗚呼藤岡君」は、「君が京都大学の教授に聘せられたのにも拘らず、応じなかったこと、」という(初出:『帝国文学』明治 43 年 3 月刊、『藤岡東圃追憶録』(三周忌記念刊行、藤岡由夫(1903~1976)蔵版、明治 45 年 2 月刊。藤岡由夫、昭和 37 年 12 月 1 日(増補)再刊) 23 頁(平成 23 年 7 月 3 日追加)、『明治文学全集 44 落合直文 上田萬年 芳賀矢一 藤岡作太郎』(筑摩書房、昭和 43 年 12 月 25 日刊) 415 頁)が、これは、幸田の後任の意味か、それとも、幸田の前にその話があったのかは不明?(平成 23 年 4 月 18 日追加、平成 23 年 6 月 5 日一部補正)。ただ、「藤岡作太郎」『近代文学研究叢書』第 11 巻(昭和女子大学光葉会、昭和 34 年 1 月 5 日刊) 92 頁は、「以前に教授として招聘をうけた京都帝国大学(その折は研究上の理由で作太郎自ら辞退)からこの年 [明治 42 年] 再び講師としてまねかれた。彼は京都行を楽しみにしていたが、東京側教授会の反対で断念せざるを得なかった。」という。これからすると、藤岡の教授招請は、幸田の前なのかも知れない(追記: 下記のように、もとより当初藤岡に話があったわけであるが、ここでは、そのままにしておく。(平成 23 年 10 月 19 日追記))。このあたり、池辺義象の教授就任忌避の観点からすると、極めて興味深いものがある。御し教をお願いするものである。(平成 23 年 6 月 5 日追加、同年 6 月 9 日一部補正) なお、本件について、藤岡作太

1977) 『幸田露伴 中』 (中央公論社、昭和 43 年 11 月 9 日刊 (中公文庫、昭和 52 年 3 月刊)) 「京都文科大学」 34、38～43 頁各参照 (平成 22 年 6 月 4 日、平成 23 年 7 月 4 日一部修正)。

〔参考〕 京大文科初代国文学講座担任関係抄 (平成 23 年 8 月 9 日追加)

(上記「*京都帝国大学文科大学の件」再検討資料として、重複するところあるも、作成中のものである。)

① 問題の所在

・明治 41 (1908) 年 9 月に開講された京都帝国大学文科大学文学科の初代国文学講座担任者については、一般には、初代文科大学長狩野亨吉 (1865～1942)⁹¹により、幸田成行 (露伴、1867～1947) が講師として招聘されたといわれている⁹²。

郎『東圃遺稿』巻二 (雑纂、大倉書店、大正元年 9 月 20 日刊) 所収の附録 書翰には、当時の京大文科大学長で知友の松本文三郎 (1869～1944) 宛藤岡作太郎書翰 106 (明治 42 年 9 月 16 日付)、108 (明治 42 年 9 月 29 日付) (760～762 頁) 書簡 (<http://kindai.ndl.go.jp/>) を収めている。これによれば、藤岡の幸田露伴離洛後の明治 42 年度京大講師嘱託招聘に対する東大文科教授会の反対内容 (当該年度東大文科開講単位の支障、補講の場合の藤岡の健康懸念等) が記載されているが、果たしてこのような理由だけだったのか興味深いところである。なお、藤岡は、同書翰中でこの場合の講師候補者に藤井乙男を推しているが、それが実現している。(平成 23 年 7 月 3 日追加、同年 7 月 5 日一部補正)。

(以下、平成 23 年 7 月 3 日追加、同年 7 月 5 日一部補正)

下記諸資料からすると、藤岡作太郎の教授招請は、もとより、幸田露伴の前である。京大初代国文学教授については、まず、明治 39 (1906) 年 2 月頃藤岡作太郎に話があり、同氏が断ったことから、その後様々な経緯があったと思われるが、開講年の明治 41 (1908) 年 2 月頃幸田露伴に講師としての招聘があったとみることができるのではないかと思われる。幸田が何故受けたについても、池辺義象の当時の状況が判明した今日的観点からすると、検討すべき課題である。ただ、そもそも、上田萬年等本件人事権に関与出来る者にあつては、池辺義象の思惑、存在等まったく考慮の外だったのかも知れない。『藤岡作太郎日記』の閲覧については、平成 23 年 6 月中旬木越 治先生、高橋由利子先生の御高配を賜った。記して深甚の謝意を表する次第である。

・『藤岡東圃追憶録』 (三周忌記念刊行、藤岡由夫 (1903～1976) 蔵版、明治 45 年 2 月刊。藤岡由夫、昭和 37 年 12 月 1 日 (増補) 再刊) には、次の叙述あり。藤井乙男 (1868～1946) 「伝記」 12 頁「君の学徳を以て十年間も助教授の地位に居て。[マ] 少しも不満の色なく、京都大学から教授に聘せられても、研究上の便宜を思うて応じなかつた。」、芳賀矢一「追憶」 23 頁 (『帝国文学』より転載。上記既載。)、 「鈴木大拙先生と東圃を語る」 (128～137 頁) 中の鈴木大拙 (1870～1966) の語る京大関係記事「それからもう一つ、京都を止めて [明治 30 (1897) 年 9 月三高教授就任] 東京の助教授になつたらう [明治 33 (1900) 年 9 月東大助教授就任]。その後で教授にするから京都にこいといつてきた。山本 [良吉、1871～1942] が京都の舎監かなになつていなかつたかな。そのとき藤岡君が、いやだといかなかつた。そのときの手紙に、京都のことはもうすんだ。京都の公卿さんの文明の研究はもうすんだ。今は江戸をやっているのだ。だから教授に上つてもいやだ。といつてきかなかつたことがある。そのときの手紙を山本は、藤岡は後にのこると思つて書いたのだろうといつておつたが、学問に忠実という点においてはえらいものだね。」 (133 頁)。

・『藤岡作太郎日記 明治三十九年分』 (『市民大学院論文集』第 4 号別冊 (金沢大学市民大学院、平成 21 年 3 月 14 日刊)) 5 頁、明治 39 (1906) 年 2 月 17 日分には、次の叙述あり。「十七日 (中略) 午前芳賀 [矢一] を訪ひ京都大学招聘のこと談ず、杉谷 [代水 (虎蔵) か、1874～1915] 同氏の所へ来る」 (5 頁)

・『藤岡作太郎日記 明治四十一年』 (平成 22 年度科学研究費補助金 (基礎研究 C) 研究成果報告書 (平成 23 年 3 月 1 日刊) 68 頁、明治 41 (1908) 年 9 月 1 日分には、次の叙述あり。「九月一日 火曜日 くもり後雨となる 露伴暇乞に来る (午)」

・塩谷賛 (1916～1977) 『幸田露伴 中』 (中央公論社、昭和 43 年 11 月 9 日刊) 34、38～43 頁

・塩谷賛『露伴の魔 その文献的研究』 (日本図書センター、昭和 59 年 9 月 25 日刊) 220～221 頁は、森鷗外 (1862～1922) の明治 41 (1908) 年 9 月 1 日の日記が露伴来訪、同氏明日上洛とのことを記しているという (平成 23 年 7 月 24 日追加)。

⁹¹ 狩野亨吉: (<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8B%A9%E9%87%8E%E4%BA%A8%E5%90%89>)

⁹² 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史 部局史編 1』(京都大学後援会、平成 9 年 9 月 30 日刊) < http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr_bookview.cgi/BB00000052/Contents/k_kan1.html

・実際は、それより先、明治 39 (1906) 年 2 月頃、まず、藤岡作太郎 (1870～1910、東圃、東大助教授で逝去) に教授就任の要請があり、同氏が辞退したことから、その後様々な経緯があったのであろうが、明治 41 (1908) 年 2 月頃幸田成行 (露伴) が応じ、その講師就任をみたものと思われる。

・この間、京都帝国大学法科大学で法制史の講師をしていた池辺義象 (1861～1923) は、知己の京大初代総長木下広次 (1851～1910) 宛に、初代国文学講座担任就任希望、配慮方要請の書翰を現存するものだけで 2 通送っている。

・以下は、この間の推移を、簡単に、資料的に取りまとめたものである。

・本資料作成に当たりては、『藤岡作太郎日記』を翻刻されつつある木越治先生の格別の御高配を忝うした。記して深甚の謝意を表する次第である。

② 池辺義象京大関係の件

- ・明治 30 (1897) 年 6 月 京都帝国大学創立、初代総長木下広次 (1851～1910)
- ・明治 32 (1899) 年 7 月 3 日 勅令第 321 号により、京都帝国大学法科大学に法制史比較法制史講座設置
- ・明治 32 (1899) 年 9 月 11 日 京都帝国大学法科大学開設
- ・明治 34 (1901) 年 2 月 8 日 池辺義象、帰朝、以後東京在住
- ・明治 36 (1903) 年 4 月 池辺義象 (1861～1923)、京都帝国大学法科大学講師を嘱託され、法制史 (日本法制史) の講義を担当す。京都市吉田町に移る。
- ・明治 39 (1906) 年 3 月 6 日 木下広次宛池辺義象書翰 (資料番号 12-14「文科大学長の件」)
- ・明治 39 (1906) 年 4 月 京都帝国大学文科大学開設委員 5 名 (狩野亨吉 (1865～1942) 等) 任命
- ・明治 39 (1906) 年 7 月 京都帝国大学文科大学初代学長狩野亨吉就任
- ・明治 39 (1906) 年 9 月 京都帝国大学文科大学開設、哲学科開講
- ・明治 40 (1907) 年 4 月 6 日 木下広次宛池辺義象書翰 (資料番号 12-15「木下辞職の件、文科大学講座担任の件」)
- ・明治 40 (1907) 年 5 月 9 日 勅令第 187 号により、京都帝国大学法科大学に法制史と比較法制史との二講座設置
- ・明治 40 (1907) 年 7 月 京都帝国大学初代総長木下広次辞職 (同年 7 月 1 日久原躬弦〈みつる、1856～1919〉事務取扱)
- ・明治 40 (1907) 年 9 月 京都帝国大学文科大学史学科開講
- ・明治 40 (1907) 年 10 月 16 日 京都帝国大学第二代総長岡田良平 (1864～1934) 就任 (明治 41 年 7 月 21 日文部次官と兼任)
- ・明治 41 (1908) 年 5 月 京都帝国大学文科大学文学科国語学国文学講座設置
- ・明治 41 (1908) 年 9 月 京都帝国大学文科大学文学科開講
- ・明治 41 (1908) 年 9 月 京都帝国大学第三代総長菊池大麓 (1855～1917) 就任
- ・明治 41 (1908) 10 月 京都帝国大学初代文科大学学長狩野亨吉 (1865～1942) 辞職

より引用。

「第 2 章 文学部 第 2 節 各講座の歴史 第 3 項 文学科 1. 国語学国文学 本講座は、明治 41 (1908) 年 5 月、1 講座 2 専攻 (国語学専攻と国文学専攻) をもって開設された。大正 8 (1919) 年に 1 講座が増設され、第 1 講座は国文学を、第 2 講座は国語学を担当することとなったが、国語学と国文学を分けるのは不自然であるとの考え方が強く、昭和 7 (1932) 年に 1 つの専攻にまとめ、それまで国文学専攻と国語学専攻に分かれていた学生は、国語学国文学専攻という同一の専攻に所属することになった。開設時から現在に至るまで、学生は国文学・国語学の区別にとらわれずに、両分野を併せ学ぶことを理想としてきているのである。開設当初、教授待遇講師として幸田成行 (露伴、1867～1947)、助教授として吉沢義則 (1876～1954) が任ぜられたが、幸田は 1 年後の明治 42 (1909) 年 10 月に退職、後任として藤井乙男 (1868～1945) が同年 11 月講師を嘱託され、明治 44 (1911) 年 9 月に教授に就任して、講座を担当した。大正 8 (1919) 年の講座増設により、第 1 講座は藤井が、第 2 講座は吉沢 (同年 8 月教授に昇任) が担任することとなった。以後、第 1 講座の担任者は、藤井乙男―沢瀉久孝―野間光辰―佐竹昭廣―日野龍夫と続き、第 2 講座は、吉沢義則―遠藤嘉基―濱田敦―安田章と続く。」

- ・後掲塩谷賛『幸田露伴 中』（中央公論社、昭和 43 年 11 月 9 日刊）60 頁は、当時、京都で池辺義象が幸田を招待したことを伝えている。
- ・明治 42（1909）年 10 月 幸田露伴退職、その前の 9 月 藤岡作太郎に京大講師再招聘の話あり。⇒最終的には藤井乙男（1868～1946、当時八高教授）を講師として招聘。その後、明治 44（1911）年 9 月藤井が教授に就任
- ・明治 42（1909）年 11 月 20 日 池辺義象、東京に帰る。小石川区関口台町 26 番地に居住（以後は、「法制史」の授業の都度上洛とのこと）。（平成 24 年 1 月 30 日一部補正（秋⇒11 月 20 日））
- ・明治 43（1910）年 8 月 22 日 初代総長木下広次逝去

③ 京都大学大学文書館（木下広次（初代総長）関係資料）所蔵池辺義象書翰の件

- ・『木下広次関係資料』の公開を開始（平成 16（2004）年 9 月 1 日） 木下広次（1851.2.25～1910.8.22）〈http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/ugoki_10.html〉
- ・木下広次宛池辺義象書簡 27 通（資料番号 12-1～12-27）あり。
 - ・資料番号 12-14 明治 39（1906）年 3 月 6 日 「文科大学長の件」
 - ・資料番号 12-15 明治 40（1907）年 4 月 6 日 「木下辞職の件、文科大学講座担任の件」
- ・木下広次宛井上毅書簡中 1 通（資料番号 24-6）（内容: 1893（明治 30）年 4 月 6 日 小中村義象文部秘書官希望、小中村義象書簡添付）
 - 〈<http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/mokuroku/kinoshita040901.pdf>〉
- ・増田于信（1862～1932）宛谷干城（1837～1911）書簡（資料番号 木下-416-1 ファイル 14）（内容: 1897（明治 30）年 12 月 3 日 小中村義象離縁の件）

④ 藤岡作太郎の京大教授招聘の件（明治 39（1906）年 2 月頃）

- ・藤岡作太郎（1870～1910、東圃、東大助教授で逝去）⁹³への教授招請は、もとより、幸田露伴より前である。木越治（1948～（2018））『藤岡作太郎日記 明治三十九年分』（『市民大学院論文集』第 4 号別冊（金沢大学市民大学院、平成 21 年 3 月 14 日刊））5 頁に窺えるように、京大文科の初代国文学講座担任教授については、まず、明治 39（1906）年 2 月頃藤岡作太郎に話があり、同氏が断ったことから、その後様々な経緯があったと思われるが、文学科開講年の明治 41（1908）年 2 月頃幸田露伴に講師としての招聘、受諾があったとみることができないのではないかと思われる。
- ・木越治前掲『藤岡作太郎日記 明治三十九年分』5 頁所載明治 39（1906）年 2 月 17 日分には、次の叙述あり。
 - 「十七日（中略）午前芳賀〔矢一〕を訪ひ京都大学招聘のこと談す、杉谷〔代水（虎蔵）か、1874～1915〕同氏の所へ来る」（5 頁）
 - ・芳賀矢一（1867～1928）「嗚呼藤岡君」は、「君が京都大学の教授に聘せられたのにも拘らず、応じなかつたこと、」という（初出: 『帝国文学』明治 43 年 3 月刊。『藤岡東圃追憶録』（三周忌記念刊行、藤岡由夫（1903～1976）蔵版、明治 45 年 2 月刊。藤岡由夫、昭和 37 年 12 月 1 日（増補）再刊）23 頁、『明治文学全集 44 落合直文 上田萬年 芳賀矢一 藤岡作太郎』（筑摩書房、昭和 43 年 12 月 25 日刊）415 頁に各再録。）。
 - ・上記『藤岡東圃追憶録』には、次の叙述あり。
 - ・藤井乙男（1868～1946）「伝記」12 頁「君の学徳を以て十年間も助教授の地位に居て。〔マ〕少しも不満の色なく、京都大学から教授に聘せられても、研究上の便宜を思うて応じなかつた。」
 - ・芳賀矢一「追憶」23 頁（『帝国文学』より転載。上記既載。）
 - ・「鈴木大拙先生と東圃を語る」（128～137 頁）中の鈴木大拙（1870～1966）の語る

⁹³ 藤岡作太郎:

(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%97%A4%E5%B2%A1%E4%BD%9C%E5%A4%AA%E9%83%8E>)

京大関係記事「それからもう一つ、京都を止めて [明治 30 (1897) 年 9 月三高教授就任] 東京の助教授になつたらう [明治 33 (1900) 年 9 月東大助教授就任]。その後で教授にするから京都にこいといつてきた。山本 [良吉、1871~1942] が京都の舎監かなになつていなかつたかな。そのとき藤岡君が、いやだといかなかつた。そのときの手紙に、京都のことはもうすんだ。京都の公卿さんの文明の研究はもうすんだ。今は江戸をやつてゐるのだ。だから教授に上つてもいやだ。といつてきかなかつたことがある。そのときの手紙を山本は、藤岡は後にのこると思つて書いたのだらうといつておつたが、学間に忠実という点においてはえらいものだね。」 (133 頁)。

・佐佐木信綱『明治文学の片影』(中央公論社、昭和 9 年 10 月 25 日刊)「芳賀矢一博士」(240~248 頁)に藤岡作太郎の京大関係記載あり (242~243 頁)。(平成 24 年 3 月 16 日追加)

・出口競 (1890~1957) 『学者町学生町』(実業之日本社、大正 6 年 8 月 5 日刊。近代デジタルライブラリー <<http://kindai.ndl.go.jp/>> 参照。)「西片町の解剖」(1~59 頁)、「西片町の誠之舎」(243~255 頁)中 23~25 頁に、西片町で逝去した藤岡作太郎関係記載あり。(平成 24 年 3 月 16 日追加、同 25 年 1 月 9 日一部補正)

⑤ 幸田成行 (露伴) の京大講師就任、離任の件 (明治 41 (1908) 年 9 月~同 42 (1909) 年 10 月)

・幸田成行 (露伴) は、明治 41 (1908) 年 9 月京大文科初代国文学講師 (教授待遇) になり、翌明治 42 (1909) 年 10 月に退職している。ただし、正式には、大正元 (1912) 年 7 月講師嘱託解嘱との由 (『京都帝国大学文学部三十周年史』263 頁。なお、塩谷賛『幸田露伴 中』(中央公論社、昭和 43 年 11 月 9 日刊) 228、232 頁では、大正 3 (1914) 年 9 月 15 日付とする。) 。幸田と入れ替わるように、藤井乙男 (1868~1946、当時八高教授) が明治 42 年 11 月講師となり、明治 44 (1911) 年 9 月には教授に就任している (同 31 頁)。

・幸田成行 (露伴) を京大に招聘したのは、塩谷賛 (1916~1977) 『幸田露伴 中』(中央公論社、昭和 43 年 11 月 9 日刊) 34、38~43 頁に拠れば、最終的には、第二代京大総長岡田良平 (1864~1934) 及び上田萬年 (1867~1937) の二人のようであるが、それに至る実質的な推薦者は、上田萬年及び芳賀矢一 (1867~1927) といわれる。このあたりの経緯について、例えば、新村出 (1876~1967) 「露伴翁を頌す」、「露伴翁の言語研究」『近代作家追悼文集成 [31] 三宅雪嶺 幸田露伴 武田麟太郎 横光利一 織田作之助』(ゆまに書房、平成 9 年 1 月 24 日刊。初出『芸林閑歩』(昭和 22 年 8 月 1 日刊)、『文学』第 15 卷第 10 号 (昭和 22 年 10 月 20 日刊)) 125、196 頁。なお、上記塩谷賛『幸田露伴 中』60 頁は、京都で池辺義象が幸田を招待したことを伝えている。

・木越治『藤岡作太郎日記 明治四十一年』(平成 22 年度科学研究費補助金 (基礎研究 C) 研究成果報告書 (平成 23 年 3 月 1 日刊) 68 頁、明治 41 (1908) 年 9 月 1 日分には、次の叙述あり。

「九月一日 火曜日 くもり後雨となる 露伴暇乞に来る (午)」

・塩谷賛『露伴の魔 その文献的研究』(日本図書センター、昭和 59 年 9 月 25 日刊) 220~221 頁は、森鷗外 (1862~1922) の明治 41 (1908) 年 9 月 1 日の日記が露伴来訪、同氏明日上洛とのことを記しているという。

⑥ 藤岡作太郎の京大講師再招聘の件 (明治 42 (1909) 年 9 月)

・「藤岡作太郎」『近代文学研究叢書』第 11 卷 (昭和女子大学光葉会、昭和 34 年 1 月 5 日刊) 92 頁は、「以前に教授として招聘をうけた京都帝国大学 (その折は研究上の理由で作太郎自ら辞退) からこの年 [明治 42 年] 再び講師としてまねかれた。彼は京都行を楽しみにしていたが、東京側教授会の反対で断念せざるを得なかった。」という。

・藤岡作太郎『東圃遺稿』卷二 (雑纂、大倉書店、大正元年 9 月 20 日刊) 所収附録 書翰

には、当時の京大文科大学長で金沢以来の知友である松本文三郎（1869～1944）宛藤岡作太郎書翰 106（明治 42 年 9 月 16 日付）、108（明治 42 年 9 月 29 日付）（760～762 頁）書簡（<http://kindai.ndl.go.jp/>）を収めている。これによれば、藤岡の幸田成行（露伴）離洛後の明治 42 年度京大講師嘱託招聘に対する東大文科教授会の反対内容（当該年度東大文科開講単位の支障、補講の場合の藤岡の健康懸念等）が記載されている。なお、藤岡は、同書翰中でこの場合の講師候補者に藤井乙男を推しているが、それが実現している。藤井は、その後、明治 44（1911）年 9 月に教授に就任している。

・なお、木越治先生の平成 23（2011）年 8 月初めの御教示では、本平成 23 年度中刊行予定『藤岡作太郎日記 明治四十二年、四十三年』の明治 42 年 9 月 16 日（木）、同 9 月 29 日（水）分に、本件関係記述があるとのことである（平成 24 年 3 月刊との由）。⇒『藤岡作太郎日記 明治 42 年・43 年』（平成 23 年度科学研究費補助金 研究成果報告書、研究代表者 木越治、平成 24 年 3 月 25 日刊。藤岡作太郎：1870～1910）48 頁下段、49 頁上段、51 頁下段参照。（平成 24 年 4 月 20 日追加）

* 京都帝国大学法科大学の件

・『京都帝国大学史』（京都帝国大学、昭和 18 年 12 月 20 日刊）（第 1 章 法学部 第 3 節 学術 14 日本法制史講座）（池辺義象関係分：185～186 頁）

（国立国会図書館近代デジタルライブラリー〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉所蔵。）

「14 日本法制史講座

本講座は大正十五〔1926〕年六月、西洋法制史講座と共に、設置せられたが、その淵源は法科大学創設当初に溯る。即ち明治三十二〔1899〕年七月に法制史比較法制史一講座の設置のことが定められ、越えて四十年〔1907〕五月法制史一講座・比較法制史一講座が設置せられた。尋で大正十五年に至り、前者は日本法制史講座と改められ、後者は西洋法制史講座と改められたのである。

日本法制史の講義は、明治三十六〔1903〕年四月より講師池辺義象によつて開始せられ、爾来同講師は大正四〔1915〕年九月まで十三年余その任にあつた。

抑々日本法制史に関する研究は明治時代の立法期に於てその端緒を見るが、初は徳川時代に旺んであつた「職原抄」を中心とする官職制度の研究を重んずる有職故実の学風を承継したものであつた。故に初期に於ては歴史家や法律家によつてよりも、国学者によつて法制史の研究がなされた。東京帝国大学教授小中村清矩〔1822～1895〕の『官職制度沿革史』の如きは、実にこの派の著述の代表的なものである。本学の日本法制史も亦この例に洩れなつた。本来池辺講師は国文学の造詣深く、落合直文〔1861～1903〕・萩野由之〔マ、萩野由之、1860～1924〕等と共に、明治二十三〔1890〕年より同二十五年〔1892〕に互つて、『日本文学全書』を編輯校訂したこともあり、又その /（改頁）特殊研究には朝廷の礼法に関するものが多いのである。

同講師が本学でなした講義の内容は明治四十一年〔マ、明治四十五年〕在任中に公刊された『日本法制史』⁹⁴に於てこれを見ることが出来る。本書が右講義の稿本を編成したものであることは序言に見えるが、同講師は更にその序言に於て「日本法制史は日本国民の習慣に本づきたる国家の組織即ち不文法時代より支那法継受時代の法制及武家任意法時代欧州継受法時代即ち現行法制に至るまでの史実を闡明し、其の成法の組織沿革を研究し、傍ら政治上の利害得失を考察する学なり」といつてゐる。編成は序論・皇室制度・行政法・位階及官吏・各部行政・司法制度・身分法・相続法・親族法の九編である。概して公法殊に律令の職制的方面を重んじたもので、財産法に関しては僅かに各部行政の編に於て触れられてゐるに過ぎない。これ同講師が初期の日本法制史家たる所以である。なほ大正七年〔1918〕には『日本法制史書目解題』⁹⁵二巻をも公にしてゐる。

池辺講師のあとを承けて大正四〔1915〕年八月から同十五〔1926〕年三月まで本学文学部教授三浦周行〔1871～1931〕が授業を担当した。（後略）」

・『京都大学七十年史』（京都大学、昭和 42 年 11 月 3 日刊）384 頁

「第 3 章 法学部 第 2 講座の発展 第 3 項 基礎法学系 2 ローマ法講座・西洋法制史講座・日本法制史講座」（383～386 頁）

「日本法制史講座は、明治 36〔1903〕年講師池辺義象（1861～1923）によつてその講

⁹⁴ 池辺義象『日本法制史』（博文館、明治 45 年 1 月 29 日刊）。巻頭に「緒言」（1～5 頁）あり（「中略。（4 頁）余不肖なりといへども、夙に第一高等学校に在りて「日本制度」を講述し、今京都帝国大学法科大学に在りて「日本法制史」を講述しつゝあり、自から思ふ、此の学に関して、聊学界に貢献せしことあるを、ここに多年の稿本を編成し、「日本法制史」と題し、世に公にすることゝせり、未だ完璧に至らざるは言ふも更なれども、一は以て此の学研究者の便に供し、一は以て学界元老の /（5 頁）示教を乞はむとするに外ならず、（改行）蓋し日本法制史の著、先年一二小冊子の刊行を見しことあれども近来絶えて之を聞かず、此の書不備なりといへども、研究者の資料たるを得ば、本望といふべし、（改行）明治四十四年八月東京にて 藤園学人識」）。

⁹⁵ 池辺義象編著『日本法制史書目解題』（上・下、大燈閣、大正 7 年 12 月 5 日刊。復刻：日本図書センター、昭和 57 年 5 月 25 日刊。合本、ただし、表紙は「池辺義象著」とし、原著の表紙はなし。）。巻頭に「例言」（1～3 頁）あり（1 頁「余京都帝国大学法科大学ニ在リテ、日本法制史ヲ講ゼシコト前後十年、其ノ間「日本法制史」ノ拙書アリ、而シテ今又「日本法制史書目解題」ヲ編述スルニ至リシハ、此ノ学ノ研究ガ、現今ノ国家ニ於テ殊ニ必要ナルヲ信ズレバナリ、蓋シ（後略）」）。

義が開始され、大正 4 [1915] 年からは同講師に代わって文科大学教授三浦周行（1871～1931）が講義を担当した。（後略）」（384 頁）

・京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史 部局史編 1』（京都大学後援会、平成 9 年 9 月 30 日刊）309～310 頁

〈http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr_bookview.cgi/BB00000052/Contents/k_kan1.html〉（ネット版参照。）

「1. 法史学講座 [開学当初は、法制史比較法制史講座]

法史学講座は、平成 4（1992）年、学部の日本法制史・西洋法制史・ローマ法の 3 講座を統合、大学院大講座に再編して構成されている。

日本法史は、明治 40（1907）年に法制史講座として設置され、大正 15（1926）年に日本法制史講座と改称、平成 4 [1992] 年改組に伴い法史学大講座の専攻分野の 1 つとなって今日に至っている。

既に明治 36（1903）年より、講師池辺義象（1861～1923）によって日本法制史講義は開始され、大正 4（1915）年からは文科大学教授三浦周行（1871～1931）が講義を担当した。大正 15（1926）年からは助教授牧健二（1892～1989）が本講座最初の専任担当者となり、昭和 6（1931）年に教授昇任、昭和 20（1945）年に及んだ。猪熊兼繁（1902～79）は、昭和 21（1946）年専任講師、昭和 22（1947）年教授に就任して講義を担当、昭和 41（1966）年 3 月猪熊の退官後は、助教授中澤巷一（1930～）が講義を担当、昭和 45（1970）年に教授に昇任し平成 5（1993）年度に及んだ。中澤の退官後、平成 6 年度より助教授伊藤孝夫（1962～）が講義を担当している。（略）

助教授小早川欣吾（1900～44）は、昭和 19（1944）年人文科学研究所教授昇任の直後若くして世を去ったが、極めて精力的な研究を続け、広範な分野にわたって多大の業績を残した。（中略）」

・瀧川幸辰（1891～1962。大正元（1912）年 9 月京大法入学）『瀧川幸辰刑法著作集』第 5 卷（世界思想社、昭和 56 年 8 月 10 日刊）（「回想の法学者 池辺義象先生」200～201 頁）（初出：瀧川幸辰「回想の法学者（2）—勝本勘三郎・井上 密・市村光恵・中島玉吉・田島錦治・池辺義象の諸先生—」『綜合法学』第 17 号〈昭和 34 年 12 月 1 日刊〉29 頁）

「七 中島玉吉先生（中略）妙なことのようにだが、力を入れて勉強した学科はいずれも不成績に終わった。憲法、刑法、民法、日本法制史がそうである。（中略）九 池辺義象先生 講師として年に二回、日本法制史を講義するために京都に来られた。著書『日本法制史』をそのまま読まれるので出ても出なくても同じであった。聴講者は次第に少くなり四人になった。私は法制史に興味があったので、その次の時間にも出た。出席者は私一人である。それからは差し向いでいろいろ有益な話をしてもらった。東大に入学していた先輩吉原隆次君 [1886～1981] から宮崎道三郎先生⁹⁶ [1855～1928] のノートももらっていたので、朝鮮語からの由来などを池辺先生に質問した。先生は私が法制史に傾倒している学生と勘違いされ「将来は日本法制史を勉強しなさい」と再三勧告されたが、つけ刃の知識であるから大それたことができるわけではない。しかし中田薫先生 [1877～1967] が京大講師をやめられてから、二年 [大正 15 〈1926〉年 4 月～昭和 3 〈1928〉年 3 月] ばかり西洋法制史講座を分担した縁故はこうしたところにあったかもしれない。一回生のときの思い出はこれで終ることとする。（以下省略）」

⁹⁶ 長尾龍一（1938～）「宮崎道三郎の法史学」（宮崎道三郎：1855～1928、HP 公開年月日不明）参照。⇒ 同『法学に遊ぶ 新版』（慈学社出版、平成 21 年 10 月 10 日刊）255～286 頁に収録。

〈http://book.geocities.jp/ruichi_nagao/miyazakimitisaburou.html〉

* 京都帝国大学法科大学雑誌掲載論稿関係

『法律学 経済学内外論叢』

- ・「徳川時代ニ於ケル肥後ノ刑法」第3巻第2号（雑録）（明治37（1904）年4月刊）

『京都法学会雑誌』

- ・「大宝令ノ親族法」第1巻第6号（論説）（明治39年6月刊）
- ・「大宝令ノ親族法（承前）」第1巻第7号（論説）（明治39年8月刊）
- ・「大宝令ノ親族法（承前）」第1巻第10号（論説）（明治39年11月刊）
- ・「大宝令ノ親族法（承前）」第1巻第11号（論説）（明治39年12月刊）
- ・「大宝令及其ノ注釈書」第2巻第3号（論説）（明治40（1907）年4月刊）
- ・「遣唐使」第3巻第3号（論説）（明治41年4月刊）
- ・藤園隠士「法制史雑話」第3巻第1号（雑録）（明治41年1月刊）
- ・藤園隠士「法制史雑話（続）」第3巻第5号（雑録）（明治41年5月刊）
- ・藤園隠士「法制史雑話（続）」第4巻第1号（雑録）（明治42（1909）年1月刊）
- ・藤園隠士「法制史雑話（続）」第4巻第2号（雑録）（明治42年2月刊）
- ・藤園隠士「法制史雑話（続）」第4巻第5号（雑録）（明治42年5月刊）
- ・藤園隠士「法制史雑話（続）」第4巻第8号（雑録）（明治42年8月刊）

（参考）

「法制史雑話」小見出し一覧（平成24年11月19日追加）

（池辺義象は、明治42（1909）年11月20日に住居を東京に移し、以後は春秋2回講義のため上洛するようになる。）

第3巻第1号（明治41年1月刊）

- ・借金ノ古証文 158頁
- ・奴婢ノ価 160頁
- ・罪人ノ脱巾 161頁
- ・市街ノ並樹 161頁
- ・一期分譲状 162頁
- ・徳政 165頁
- ・路頭ノ礼 165頁～167頁

第3巻第5号（明治41年5月刊）

- ・大学ノ掃除 136頁
- ・京路ノ掃除 136頁
- ・觸穢 138頁
- ・山林ノ濫伐 139頁
- ・葬儀ノ僭奢 139頁
- ・疱瘡 140頁
- ・堀平太左衛門〔勝名、1716～1793〕 142頁
- ・頭寒足熱 143頁
- ・巾着切ノ小兵衛 143頁
- ・閻魔王ヘノ依頼状 144頁
- ・情死未遂者ノ罪 147頁
- ・鬢髪ノ片剃 148頁
- ・拷問 148～149頁

第4巻第1号（明治42年1月刊）

- ・夜の朝廷 104頁
- ・日本最古ノ財務官 106頁
- ・古来全国戸口数 109頁
- ・中古ノ田数及穫稻 112頁
- ・歌ヲ詠シテ刑ヲ免ル 112頁～113頁

第4巻第2号（明治42年2月刊）

- ・三代将軍〔徳川家光、1604～1651〕上洛ノ時京都人民ヘノ下賜金及其ノ町数戸口数 135頁
- ・凶年ノ拝借金 138頁
- ・養子証文 139頁
- ・切支丹改宗ノ誓紙 140頁
- ・近世畿内地方戸口及寺院等総数 144頁～149頁

第4巻第5号（明治42年5月刊）

- ・近世京都ノ諸会所 118 頁
- ・板倉周防守〔重宗、1586～1657〕ノ定法 123 頁 ・京都ノ穢多長 126 頁
- ・伊勢拔参り 126 頁 ・加藤清正〔1562～1610〕ノ治蹟 128 頁
- ・石川五右衛門〔?～1594〕ヲユデタル釜 131 頁
 - ・千利休〔1522～1591〕梟首セラレ 133 頁
- ・獄門 136 頁 ・横奉行 137 頁～138 頁

第4巻第8号（明治42年8月刊）

- ・男女同権 133 頁 ・婦女祭官婦女従軍 135 頁
- ・旌旗 136 頁 ・医者ト僧官 138 頁
- ・試シ切り 139 頁 ・白洲ノ気焰 140 頁
- ・細川重賢〔1721～1785〕人權ヲ重ニス 142～143 頁

- ・「大宝令ノ刑法」第6巻第11号（雑録）（明治44年11月刊）
- ・「喪葬令摘註」第7巻第10号（雑録）（大正元年10月刊）
- ・「大嘗会ニ於ケル天神寿詞評釈」第8巻第5号（雑録）（大正2年5月刊）

（参考）

〔追加分〕（京都法科大学講師時代の法制史関係著作）

* 『刑事法評林』（評林社刊）（平成22年6月16日追加）

（引用端緒：『刑事法評林』（評林社刊）検索〈一部〉に拠る。）

・池辺義象「古法律の吾人に与ふる教訓」『刑事法評林』第2巻第3号（明治43年3月5日刊）69～73頁（「有声無声」欄）（平成22年6月16日追加）

* 京都帝国大学法科大学在任中試験問題関係 (抄) (平成 23 年 4 月 17 日新設)

・『京都法学会雑誌』第 2 巻第 7 号 (明治 40 年 8 月 10 日刊) 108 頁 (会報 法科大学 本学年試験問題)

・法制史 (池辺講師出題) 1、律令格式ノ解 2、大宝令ノ官吏法 3、大宝令ノ司法制度 4、貞永式目編纂ノ理由 5、徳川幕府三奉行ノ権限 6、目安箱トハ如何

・『四十二年度試験問題集 (』 (巖松堂書店、明治 43 年 3 月 20 日刊) (「近代デジタルライブラリー」〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉 検索 ⇒ 「試験問題集. 42 年度」で検索のこと) (平成 24 年 11 月 19 日一部修正)

・「京都帝国大学法科大学試験問題 (四十二年)」(五月施行ノ分: 40 頁、六月施行ノ分: 47 頁。出題問題省略。)

(法制史 五月施行ノ分)

1 大宝令ノ戸主権、2 相続法沿革、3 賤民ニ関スル制度、4 養子法、5 大宝令二官八省組織ノ概略、6 古代ノ氏族ト今ノ苗字 (5、6 は選択)

(法制史 六月施行ノ分)

1 大宝令ノ親族範囲ハ如何ニシテ制定セシカ其法律上ノ効果如何、2 大宝令ノ婚姻法概略、3 武家時代ノ総領法ヲ問フ、4 太政大臣ハ有職ノ官ナリヤ如何、5 徳川百ヶ条ハ如何ニシテ成リシカ、6 婦女権ノ沿革ヲ叙シテ一期分譲状ノコトヲ論ス ⇒ (補遺: 本稿末尾 (関係文献等追加) 平成 27 年 3 月 9 日分参照。)

＊その他（平成 22 年 6 月 16 日新設）

・史談会関係（平成 22 年 6 月 16 日追加）

・『史談会速記録』第 324 輯（史談会、大正 11 年 2 月 30 [マ] 日刊）33～35 頁（『史談会速記録 合本 41（第 319～342 輯）』（原書房、昭和 49 年 11 月 25 日刊）161～163 頁）

「史談会員 ⇒ 賛助会員 ⇒ 賛助会員代表者 ⇒ 細川家 市外渋谷町下渋谷五百十九番地 池辺義象」

・『史談会速記録』第 335 輯（史談会、大正 12 年 1 月 30 日刊）18 頁（前掲『史談会速記録 合本 41（第 319～342 輯）』476 頁）

「彙報 一 本会賛助員細川家代表本会幹事池辺義象君卒 [大正 12（1923）年 3 月 6 日逝去] に付本年三月十三日日本会幹事内藤素行君 [鳴雪、1847～1926] は本会総代として其遺族の宅に赴き弔詞を呈したり。」

・明治神宮創建関係（平成 23 年 5 月 10 日追加）

・菅浩二（1969～）（報告）「開拓・同祖・総鎮守：台湾神社をめぐって」（於「宗教と社会」学会 第 10 回学術大会〈平成 14 年 6 月 29～30 日〉）

（レジュメ）「・日本武尊が「前例」 ※台湾神社自体が明治神宮の前例ともなる（cf. 崩御翌日の池辺義象による創建論）」

<http://www.soc.nii.ac.jp/jasrs/4.congress/meeting/meeting10-kojin.html>

・菅浩二（1969～）『日本統治下の海外神社—朝鮮神宮・台湾神社と祭神—』（弘文堂、平成 16 年 9 月 15 日刊）253～254、259（池辺義象「大喪及山陵について」『日本及日本人』第 588 号（大正元年刊）のことを誌す。同稿末尾には、「七月三十一日午後三時記す」とある由。）頁

・明治神宮編『明治神宮叢書』第 17 巻資料編（1）（国書刊行会、平成 18 年 11 月 3 日刊）237～245 頁に、今泉定介（1863～1949）・池辺義象・今井清彦（1860～1922）「四 明治神宮ヲ青山練兵場ニ建設セントスルノ請願」（『明治天皇奉祀ニ関スル建議並請願書』の一つ）が掲載されている。

・齊藤智朗（1972～）「明治国学の継承をめぐって—池辺義象と明治国学史—（国学特集）」『國學院雑誌』第 107 巻第 11 号（平成 18 年 11 月 15 日刊、通号第 1195 号）181～182 頁（平成 24 年 1 月 31 日追加）

・『明治天皇御集』、『明治天皇紀』関係（平成 24 年 1 月 31 日追加）

・齊藤智朗（1972～）「明治国学の継承をめぐって—池辺義象と明治国学史—（国学特集）」『國學院雑誌』第 107 巻第 11 号（平成 18 年 11 月 15 日刊、通号第 1195 号）182～185 頁（平成 24 年 1 月 31 日追加） ⇒ 後掲 91 頁（関係文献追加）参照。（H260726 追加）

2 著作目録

(参照書籍等)

- ・昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第 22 卷（池辺義象、有島武郎、ケーベル、厨川白村、三木天遊）（昭和女子大学、昭和 39 年 12 月 1 日刊）中「池辺義象」（口絵、10～11、17～92、447 頁）
- ・同第 2 卷（〔昭和女子大学〕光葉会、昭和 31 年 4 月 10 日刊）中「小中村清矩」（口絵、10～11 頁、301～338 頁）
- ・池辺史生（池辺義象兄源太郎の令孫、1939～）「池辺義象」『近現代日本人物史料情報辞典 3』（吉川弘文館、平成 19 年 12 月 10 日刊）23～25 頁
- ・国会図書館蔵書検索 <<http://opac.ndl.go.jp/>>
- ・国立国会図書館近代デジタルライブラリー検索 <<http://kindai.ndl.go.jp/>>
- ・国立公文書館デジタルアーカイブ・システム検索
< http://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/MetaOutServlet?GRP_ID=&DB_ID=G9100001EXTERNAL&IS_STYLE=default&IS_TYPE=meta&XSLT_NAME=MetaSearchSimpleFrame.xsl&ID=&act=meta&DEF_XSL=default >
- ・国文学研究資料館電子資料館検索 <http://www.nijl.ac.jp/contents/d_library/>
- ・nacsis wecat 検索 <<http://webcat.nii.ac.jp/>>
- ・「web 版日本近代文学館」検索（「小中村義象」で 62 件、「池辺義象」で 54 件、ただし重複あり。）<<http://yagi.jkn21.com/>>
- ・小中村義象「故井上子爵小伝」『第一高等学校 校友会雑誌』第 47 号（明治 28 年 5 月 23 日刊）13～17 頁（「web 版日本近代文学館」参照。）、同「故井上子爵小伝」『大日本教育会雑誌』第 166 号（明治 28 年? 月刊。未見）
- ・池辺義象『日本法制史』（博文館、明治 45 年 1 月 29 日刊）
- ・池辺義象編著『日本法制史書目解題』（上・下、大鑑閣、大正 7 年 12 月 5 日刊。「例言」あり。復刻：日本図書センター、昭和 57 年 5 月 25 日刊。合本、ただし表紙は「池辺義象著」とし、原著の表紙はなし。
<http://buzz.goo.ne.jp/item/cid/9/pcid/6065109/tab_flag/3/>)
- ・ウィキペディア（令和 3（2021）年 11 月 19 日追加）
< <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%A0%E8%BE%BA%E7%BE%A9%E8%B1%A1> >

(1) 著書 [編集]

（省略）（例えば下記参照。）

< <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%A0%E8%BE%BA%E7%BE%A9%E8%B1%A1> >

(2) 共著・共編 [編集]

（省略）（例えば下記参照。）

< <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%A0%E8%BE%BA%E7%BE%A9%E8%B1%A1> >

(3) 校注等 [編集]

（省略）

(4) 論説その他

（省略）

(5) 池辺義象氏関係日記（抄）（平成 23 年 6 月 9 日追加）

- ・明治 17（1884）年 1 月 1 日～同年 4 月 27 日の日記が愛知県の「西尾市岩瀬文庫」に所

蔵されているとの由（平成 23 年 5 月大沼宜規先生御教示。）

<http://www.city.nishio.aichi.jp/nishio/kaforuda/40iwase/index.html>

- ・齊藤智朗（1972～）「明治国学の継承をめぐって—池辺義象と明治国学史—（国学特集）」『國學院雑誌』第 107 卷第 11 号（平成 18 年 11 月 15 日刊、通号第 1195 号）189 頁註（31）に上記日記の件の記載あり（「千代のかたみ」、小中村家の養子となった直後から明治 17 年 8 月までとのこと。文書番号 162-230）（平成 24 年 2 月 9 日追加）
- ・池辺史生（池辺義象兄の令孫、1939～）「池辺義象」『近現代日本人物史料情報辞典 3』（吉川弘文館、平成 19 年 12 月 10 日刊）23～25 頁（その他の日記情報あり。）参照。

(6) 池辺義象氏関係書簡（抄）

・三村竹清（1876～1953）『三村竹清集 2 日本書誌学大系 23（2）』（青裳堂書店、昭和 57 年 6 月 15 日刊）178～179 頁（「陽春廬日記」（178～179 頁）中に下記の記載あり。）（大沼宜規先生御著作の示唆に拠る。平成 23 年 6 月 7 日追加）

「（中略）小中村氏にては後に池辺義象との紛紜あり、聞き居れることもあれど、中書のこと、みだりに筆にすべきにあらず、さはれ受恩之人忘恩而記怨とかや、其頃の手紙あれば記し置く。」として、明治 31（1898）年 5 月 13 日夜記載の石倉重継（1875～1938）宛池辺義象書翰を掲載し、「（別紙清朝活字）」として以下の挨拶文を載せている。「拝啓益御清康奉恭賀候小生儀今般都合ニヨリ池辺ニ復姓仕候就テハ従来ノ通不相替御交際ノ榮ヲ荷ヒ度此段御報知旁奉得貴意候 頓首 明治卅一年一月 小中村改 [この分小文字] 池辺義象 殿 侍史 [この分小文字]」 「右小中村氏復姓ハ家事上止ムヲ得サル義ニシテ小生等其責ヲ負ヒテ熟議ニ与リ候間乍憚左様御承知被下度此旨得貴意候早々 明治卅一年一月 元媒酌人 [この分小文字] 子爵 谷 干城 親友総代 木下広次」

・井上毅伝記編纂委員会編『井上毅伝 史料篇第五』（國學院大學図書館、昭和 50 年 2 月 15 日刊）（井上毅：1844～1895、小中村義象宛井上毅宛書簡 1 通：9、131 頁）

・『陸羯南全集』第 10 卷（陸羯南：1857～1907、みすず書房、昭和 60 年 4 月 5 日刊）（106 頁：No.27 池辺義象宛陸羯南宛書簡〈年不明 9 月 14 日〉、132 頁：No.99 小中村義象宛陸羯南宛書簡〈年不明〈明治 31 年か?〉 2 月 9 日〉）

・鈴木良「岡村司文書目録および解説「岡村司文書について」」『立命館法学』1999（平成 11）年第 3 号（第 265 号）（207 頁～）大正元（1912）年 11 月 16 日池辺義象宛岡村司宛書簡（岡村司：1867～1922、令息死去を弔うもの。封筒あり。）

・木下広次関係資料（京都大学大学文書館）

『木下広次関係資料』の公開を開始（平成 16（2004）年 9 月 1 日）

http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/ugoki_10.html

<http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/mokuroku/kinoshita040901.pdf>

・木下広次（1851.2.25～1910.8.22）は、木下犀潭（驍村、1805～1867）四男、井上毅（1844～1895.3.15）令室鶴子刀自（1849～1935）の弟

・池辺義象宛木下広次宛書簡 27 通（資料番号 12-1～12-27）（うち、主要なものは、平成 22（2010）年 3 月 1 日 高塩博先生に御解読いただいた。感謝の意を表す。）

・井上毅宛木下広次宛書簡中 1 通（資料番号 24-6）（内容：1893.4.6 「小中村義象文部秘書官希望」の件、小中村義象書簡を添付との由）

・『池辺ファミリー雑記集』（編集者：池辺三郎、自己出版、平成 16 年 12 月刊）61、62 頁（フランスより令兄、令妹に宛てたもの）

・池辺史生（池辺義象兄の令孫、1939～）「池辺義象」『近現代日本人物史料情報辞典 3』（吉川弘文館、平成 19 年 12 月 10 日刊）23～25 頁参照。

http://kins.jp/dic_person_list.html

(参考) 池辺義象氏宛書簡

・井上毅伝記編纂委員会編『井上毅伝 史料篇第四』（國學院大學図書館、昭和 46 年 9 月 5 日刊）（井上毅宛池辺（小中村）義象宛書簡 31 通：4～18 頁）

・井上毅伝記編纂委員会編『井上毅伝 史料篇第六』（國學院大學図書館、昭和 52 年 3 月 5

日刊) (井上毅書簡補遺、井上毅発池辺(小中村)義象宛書簡1通:248頁)(平成24年11月19日追加)

・池辺一郎(1905~1986)・富永健一(1931~(2019))『池辺三山—ジャーナリストの誕生』(みすず書房、平成元年10月16日刊)20~21頁(池辺三山(吉太郎、1864~1912)発池辺義象宛書簡の件(池辺義象殿父(軍次)悔み状))、173~174頁⇒池辺一郎・富永健一『池辺三山 ジャーナリストの誕生』(中公文庫、平成6年4月10日刊)25~26頁(池辺三山発池辺義象宛書簡の件(池辺義象殿父悔み状)) (平成23年4月18日追加)

・落合秀男編『落合直文著作集』Ⅲ(ゆまに書房、平成3年11月30日刊)(落合直文発小中村義象宛書簡5通:411~413頁(この他、318~319頁所載落合直亮宛明治20年2月14日付書簡は池辺の当時の小中村家での状況を知り得て貴重。)(平成23年4月18日追加)

・逸見久美(1926~)編『与謝野寛晶子書簡集成 第1巻』(八木書店、平成14年10月25日刊)(与謝野寛(1873~1935)発小中村義象宛書簡5通(明治26年):5~8頁、関連書簡2通(明治26年小中村清矩宛、明治29年佐々木信綱(1872~1963)宛))

(7) 池辺義象氏筆記諸家講義録(平成23年6月9日追加)

・愛知県の西尾市岩瀬文庫には、池辺義象氏筆記に係る諸家講義録が所蔵されている。

〈<http://www.city.nishio.aichi.jp/nishio/kaforuda/40iwase/index.html>〉

・齊藤智朗「明治国学の継承をめぐって—池辺義象と明治国学史—(国学特集)」『國學院雑誌』第107巻第11号(平成18年11月15日刊、通号第1195号)189頁註29参照。(平成24年1月31日追加)

(8) 池辺義象氏関連新聞記事 (読売新聞「ヨミダス歴史館」等参照。)

(補註:・朝日新聞社「聞蔵(きくぞう)Ⅱビジュアル」に、平成22(2010)年4月から、「明治、大正期朝日新聞紙面データベース(DB)」が追加された。これにより、本稿では、時間の関係で、同DBを検索する余裕がなかったが、今後、目録類については、その作成方法の見直しが求められる。

〈<http://www.asahi.com/information/db/images/release130.pdf>〉

〈<http://www.asahi.com/information/db/>〉

・上記につき、『朝日新聞』平成22年4月6日(火)12版14、15面に特集記事あり。特に、14面五百旗頭薫准教授(1974～、キーワード監修者)の解説参照。

・その後、上記「聞蔵(きくぞう)Ⅱビジュアル」中池辺義象氏関連記事目録(No.1～No.96)を、本稿末尾に別添「明治、大正期朝日新聞紙面データベース(DB)池辺義象氏関連分」として掲載した。これについては、平成25(2013)年2月12日(火)たまたま来日入浴中の沈佳姍女史の御高配に与った。記して深甚の謝意を表する次第である。(平成25年2月12日追加)

ア 『新聞集成 明治編年史』関連記事

昭和10(1935)年～昭和11(1936)年(『新聞集成 明治編年史』関連記事)

・『新聞集成 明治編年史』第5巻(財政経済学会、昭和10年8月25日刊)386頁(明治16年11月25日『朝野新聞』(池辺義象)「放校処分となつた百四十余名の大学生 他の官公私立学校へ転学禁止 其上三年間は不採用といふ厳罰」)⁹⁷

・『新聞集成 明治編年史』第7巻(財政経済学会、昭和10年11月27日刊)62頁(明治21年5月1日『時事』(小中村義象)「東洋学会活動 会長は西村茂樹」)

・『新聞集成 明治編年史』第7巻(財政経済学会、昭和10年11月27日刊)181頁(明治21年12月19日『時事新報』(小中村義象)「言語取調所 口語体創定運動」)

・『新聞集成 明治編年史』第7巻(財政経済学会、昭和10年11月27日刊)333頁(明治22年11月1日『郵便報知新聞』(小中村義象)「国文学振興と教授法研究会義 官学私学の斯界権威者参集す」)

・『新聞集成 明治編年史』第8巻(財政経済学会、昭和10年12月22日刊)123頁(明治24年8月10日『読売新聞』(小中村義象)「明治花婿鑑(4) 小中村義象(第一高等学校(マ)教諭)同夫人(文学博士小中村清矩氏令嬢)」)

・『新聞集成 明治編年史』第9巻(財政経済学会、昭和11年1月23日刊)43頁(明治27年3月27日『官報』(小中村義象)「叙任及辞令 ○明治二十七年三月二十六日。第一高等学校教授 従七位 小中村義象 兼任女子高等師範学校教授」)

・『新聞集成 明治編年史』第9巻(財政経済学会、昭和11年1月23日刊)305頁(明治28年10月12日『国民新聞』(小中村義象)「小中村清矩博士歿す (中略) 令嗣義象君能く家学を継ぐ。翁や後ありと云ふ可し」)

・『新聞集成 明治編年史』第12巻(財政経済学会、昭和11年4月27日刊)270頁(明治37年7月7日『日本』(池辺義象)「南禅寺畔の顔見会」(顔見会: 京都の文士美術家の会合))

・『新聞集成 明治編年史』第13巻(財政経済学会、昭和11年5月25日刊)521頁(明治41年12月20日『東京朝日新聞』(池辺義象)「官選中学唱歌 第一集漸く成る」)

・『新聞集成 明治編年史』第14巻(財政経済学会、昭和11年6月28日刊)121頁(明治42年7月2日『読売新聞』(池辺義象)「現代文士の年令(2)」)

・『新聞集成 明治編年史』第14巻(財政経済学会、昭和11年6月28日刊)198～199頁(明治43年1月19日『報知新聞』(池辺義象)「国学界の人々(上)」)

⁹⁷ ただし、半年後に解除との由。三上参次前掲『明治時代の歴史学界 三上参次懐旧談』(吉川弘文館、平成3年2月10日刊)10～11頁参照。

イ 『東京朝日新聞』（池辺義象氏逝去関連記事）

・大正 12（1923）年 2 月 22 日、同年 3 月 5～7、10 日（『朝日新聞（復刻版）』大正編 128（大正 12 年 2 月）、129（大正 12 年 3 月）（日本図書センター、平成 17 年 9 月 25 日刊）参照）

・大正 12 年 2 月 22 日（木）第 2 面（（復刻版）大正編 128 254 頁）
（見出し）「国文学の貢献者 池辺義象氏脳溢血 帝室編修局内にて 静養中だが重態」（写真も掲載）

・大正 12 年 3 月 5 日（月）第 2 面（（復刻版）大正編 129 50 頁）

（見出し）「池辺氏は全く絶望 カンフル注射で持つ」

・大正 12 年 3 月 6 日（火）第 2 面（（復刻版）大正編 129 62 頁）

（見出し）「池辺義象氏 全く危篤 官等陞叙さる」（内容）「脳溢血で臥床中の臨時帝室編修局編修官兼御歌所寄人池辺義象氏は五日全く危篤絶望に陥り高等官三等に陞叙された。」

・大正 12 年 3 月 7 日（水）第 2 面（（復刻版）大正編 129 74 頁）

（見出し）「池辺氏逝く」（本文）「危篤状態に陥つてみた池辺義象氏は六日正午遂に死去した、享年六十一 危篤大聴（ママ、天聴）に達し左の通り位勲陞叙の御沙汰があり宮中から特に祭資料（ママ、祭糞料）下賜の御内意がある。

正六位勲六等 池辺義象 叙従五位（特旨を以て位一級被進） 叙勲五等授瑞宝章」

・大正 12 年 3 月 10 日（土）第 2 面（（復刻版）大正編 129 110 頁）

（見出し）「池辺義象氏 告別式」（本文抄録）「三月九日午後一時～三時迄 下渋谷 519 の自邸」

（参考）

・『東京朝日新聞』大正 12 年 3 月 8 日（木）朝刊 5 頁 12 段「青鉛筆」参照（辞詠あり。）。また、同紙 6 頁に訃報広告「臨時帝室編修官御歌所寄人従五位勲五等池辺義象病氣之處養生不相叶六日午後四時卒去致候間此段謹告仕候 [以下小文字] 追而来る九日午後一時より三時迄の間下渋谷五百十九番地自宅に於て神式告別式執行可仕候 大正十二年三月六日 親族総代 池辺義敦 池辺栄弘 野口正雄 友人総代 子爵 藤波言忠 子爵 入江為守」あり。（いずれも、『聞蔵Ⅱ』ビジュアルに拠る。）（平成 23 年 6 月 20 日追加）

（調査中）

・欧州より、「藤園」名義で『東京朝日新聞』に、「知旦居士」、「知旦」名義で『日本』に寄稿した分については、現在調査中である。（平成 24 年 3 月 8 日追加、同年 3 月 16 日一部修正。）

(9) 池辺義象氏関連著作

(参考)

・『井上毅伝 史料篇』第一～第六、『井上毅伝 史料篇補遺』第一～第二（國學院大學圖書館刊）

・『漱石全集』は以下の版本を使用：『漱石全集 第22巻 書簡 上』（岩波書店、平成8年3月19日刊）池辺義象関連分：200頁（① 書簡207、明治33（1900）年12月26日（水）ロンドンから夏目鏡（鏡子、1877～1963）宛）、207頁（② 書簡212、明治34年1月3日（木）ロンドンから芳賀矢一（1867～1927）宛）

・『日本近代文学館資料叢書〔第1期〕文学者の日記1 池辺三山（1）』（博文館新社、平成13年8月31日刊）（解説206頁に、池辺家の系図あり。池辺三山：吉太郎、1864～1912）

・読売新聞「ヨミダス歴史館」収載新聞記事

〈<http://www.yomiuri.co.jp/rekishikan/>〉

・朝日新聞「聞蔵（きくぞう）Ⅱビジュアル」収載新聞記事（平成22（2010）年4月から、「明治、大正期朝日新聞紙面データベース（DB）」が追加された。

〈<http://database.asahi.com/library2/>〉（平成23年6月9日追加）

（発行年調査中：第1次第1期『早稲田文学』（明治24（1891）年～明治28（1895）年）か。）

・「国文学者評判記」（時文評論）『早稲田文学』第4号（落合直文（1861～1903）等）、第5号（小中村義象等）（未見）

・HP「かんがくかんかく（漢学感覚）」（平成19（2007）年12月12日）に拠る。

〈<http://ameblo.jp/k2600nen/entry-10059866335.html>〉

・上記HP（平成19（2007）年12月13日）に拠る。

「落合直文と小中村義象」（『早稲田文学』第4号〈落合：16～17頁〉、第5号〈小中村：9頁〉）〈<http://ameblo.jp/k2600nen/archive4-200712.html#main>〉

明治28（1895）年

（*参考：明治28（1895）年3月15日 井上毅逝去（1844～1895.3.15））（平成24年2月9日追加）

・井上毅著・小中村義象編『梧陰存稿』巻一、巻二（六合館、明治28年9月13日刊）（国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉参照。）（井上毅伝記編纂委員会編『井上毅伝 史料篇第三』〈國學院大學図書館、昭和44年3月5日刊。「26 梧陰存稿」637～709頁、「梧陰存稿の奥に書きつく 明治廿八年六月小中村義象識す」702～709頁）（平成23年5月8日追加）

（*参考：明治28（1895）年10月11日（墓石では10月9日の由） 小中村清矩（1822～1895）逝去）（平成24年2月9日追加）

・小中村清矩（1822～1895）『国史学のしをり』（吉川半七、明治28年11月17日刊）（小中村清矩遺著。巻頭に中邨秋香（1841～1910）「小中村清矩先生小伝」、小中村義象の跋あり。口絵として小中村清矩の肖像（67歳時撮影）あり

〈http://sky.geocities.jp/petrus0067/portrait_KONAKAMURA.html〉。相続者 小中村義象 東京市本郷区西片町十番地。国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉参照。）⇒『国史学の栞』（勉強堂書店、明治33年10月25日刊）では、肖像が差し替えられ、小中村義象跋は削除、「著者 故小中村清矩、右相続者 小中村三作」となっている。（平成23年10月10日追加、同24年2月9日、同年2月17日各一部修正）

明治30（1897）年

・小中村清矩（1822～1895）『陽春廬雜考』（やすむろ、吉川半七、明治30年12月20日刊。明治31年4月30日再版刊）（小中村清矩遺著。相続者 小中村義象 東京市本郷区曙

町十三番地。国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉参照。〉（平成 24 年 1 月 30 日追加）

明治 31（1898）年

- ・『第一高等学校本部一覽 自明治廿九年至明治三十年』（第一高等学校、明治 31 年 2 月 28 日刊）（91 頁に池辺が「国文学科主任」との記載がある。この他、明治 20 年代の『第一高等学校一覽』類参照。）（平成 24 年 3 月 12 日追加）
- ・中邨秋香（1841～1910）「おもひ出の一ふし」『読売新聞』明治 31 年 8 月 29 日（日）日曜附録明治 31 年第 33 号別刷 1/2 頁（ヨミダス歴史館）に拠る。小中村清矩、池辺義象の思い出。「又義象ぬしもよしありて本姓に復し、今は遠く仏国留学の人となりぬ。」）（平成 24 年 3 月 6 日追加）

明治 36（1903）年～大正 4（1913）年

- ・『京都帝国大学一覽』（明治 36（1903）年版（明治 31 年刊）以降各年版。京都帝国大学。国立国会図書館近代デジタルライブラリー〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉参照。）

明治 37（1904）年

- ・『明星』辰歳第 2 号（明治 37 年 2 月 1 日刊）、『国文学』第 62 号（明治 37 年 2 月 25 日刊）中の各落合直文追悼文（『近代作家追悼文集成 [2] 原抱一庵 落合直文 斎藤緑雨 網島梁川』〈ゆまに書房、昭和 62 年 1 月 25 日刊〉に再録。詳細は「昭和 62 年」の項参照。）（平成 23 年 4 月 18 日追加、同 25 年 2 月 15 日一部修正。）
- ・落合直文（1861～1903）編『萩之家遺稿』（落合直幸、明治書院（発売）、明治 37 年 5 月 1 日刊）（近代デジタルライブラリー〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉参照。）

明治 40（1907）年

- ・中邨秋香（中村、不尽廼舎、1841～1910）著『秋香歌かたり』（五車楼、明治 40 年 6 月 15 日刊）248～250 頁（「小中村博士」、「近代デジタルライブラリー」130～131 コマ〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉）（平成 24 年 3 月 6 日追加）

明治 42（1909）年

- ・『木魚遺響』（編輯者 黙語会代表者 池辺義象、京都・芸艸堂（うんそうどう）、明治 42 年 9 月 30 日刊）（浅井忠（1856.7.22～1907.12.16）の遺稿、追悼録。池辺義象関係：31～63,63～73、175～200（池辺義象「海の内外」175～194 頁、「黙語翁と鬼」194～195 頁、「西洋風俗画」195～196 頁、「巴里会」196 頁等）、262～265 頁池辺「浅井忠君の霊に告る詞」、273～281 頁池辺「親友浅井忠君の死を悲しみてその病床にあられし時よりの事を思ひつゝけてよめる五十首の歌」等）（平成 24 年 1 月 8 日追加、平成 24 年 1 月 30 日一部補正）〈<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/851860/1/1>〉（令和 5 年 4 月 3 日追加）

明治 43（1910）年

- ・坂井松梁編『現在人物の研究』（東京・春畝堂、明治 43 年 11 月 10 日刊）「池辺義象君と大和田建樹君」（1～3 頁、大和田建樹：1857～1910）（「近代デジタルライブラリー」参照。初出は『東京朝日新聞』明治 41（1908）年 12 月 29 日朝刊 6 頁 5 段 S 生「筆蹟と人物 池辺義象君と大和田建樹君」。）（平成 23 年 2 月 7 日一部追加）

明治 44（1911）年

- ・中邨秋香（1841～1910）著、中邨春二（1877～1924）編『不尽廼屋遺稿』（前川文栄堂、明治 44 年 1 月 31 日刊）（「小中村博士を悼む（長歌）」77～78 頁（52～53 コマ）、「小中村博士を追悼する辞」198～201 頁（115～116 コマ）、「日記」（小中村義象関係：315（177 コマ）、321（180 コマ）、342（191 コマ）、346（193 コマ）頁）（近代デジタルライブラリー所収、コマ数は同ライブラリーのもの。〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉）（平成 24 年 3 月 6 日追加）

明治 45/大正元 (1912) 年

- ・『藤岡東圃追憶録』(三周忌記念刊行、藤岡由夫(1903~1976)蔵版、明治45年2月刊。藤岡由夫、昭和37年12月1日(増補)再刊)(平成24年3月12日追加)
- ・『現代人名辞典』(第2版)(中央通信社、大正元年11月30日刊)イ84頁(復刻本:『明治人名辞典 上巻』(日本図書センター、昭和63年10月5日刊))

大正 3 (1914) 年

- ・福本日南(1857~1921)『石臼のへそ』(東亜堂書房、大正3年8月刊)(「近代デジタルライブラリー」(大正8年1月9日改版)参照。福本日南は要検討。)

大正 4 (1915) 年

- ・小中村清矩(1822~1895)遺著『有声録』(広文堂書店(「石川文英堂」とするものもあり。))、大正4年9月20日刊。小中村清矩満二十年祭記念出版。巻末に小中村清矩令孫で池辺次男小中村清象の「有声録の後に」があるが実質的には池辺の編輯か。「近代デジタルライブラリー」参照。)(平成24年1月30日追加、同年2月9日一部修正)

大正 6 (1917) 年

- ・出口競(1890~1957)『学者町学生町』(実業之日本社、大正6年8月5日刊)「西片町の解剖」(1~59頁)、「西片町の誠之舎」(243~255頁)(「近代デジタルライブラリー」参照。)(平成24年3月16日追加、同25年1月9日一部補正)

大正 8 (1919) 年

- ・池辺義象「純忠至誠の高美大人」『佐佐木高美大人』(猪狩又蔵編、発行者石渡幸之輔、大正8(1919)年7月3日刊)「逸事及び感想」7~11頁は佐佐木高行侯爵、佐佐木高美との関係に詳しい。(<<https://dl.ndl.go.jp/pid/1906418/1/1>>(令和6(2024)年1月1日追加)

大正 12 (1923) 年

- ・『東京朝日新聞』大正12年2月22日、同年3月5~7、10日(池辺義象氏逝去関連記事)(『朝日新聞(復刻版)』大正編128(大正12年2月)、129(大正12年3月)(日本図書センター、平成17年9月25日刊)参照。)(詳細は上記「2(6)イ『東京朝日新聞』(池辺義象氏逝去関連記事)」参照)
- ・大町五城(1869~1938)「嗚呼池辺義象先生」『わか竹』第16巻第3号(大正12年刊)(未見)
- ・「池辺義象氏の逝去」『國學院雑誌』第29巻第4号(大正12年4月号)91頁(「彙報」欄)(平成25年4月18日追加)
- ・杉浦鋼太郎(1857~1942)「藤園池辺義象大人の霊前に」『神廻道』第144号(大正12年8月10日刊)25~28頁(『大成中学校創立四十周年記念 杉浦先生講演集』(大成中学校々友会、昭和12年10月29日刊)8~10頁に再録(一部に異同あり。))。⇒「近代デジタルライブラリー」に収録。⇒両者とも本稿に全文収録:前掲「〔略年譜〕*追悼記」参照。)(平成24年12月4日追加、同年12月14日、同25年1月4日各一部修正)

杉浦鋼太郎:

<http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/S/sugiura_k.html>

- ・「池辺義象氏の追悼会」前掲『神廻道』第144号(大正12年8月10日刊)「彙報」36頁(前掲「〔略年譜〕*追悼記」参照。)(平成25年1月9日追加)
- ・「池辺義象氏追悼会」『國學院雑誌』第29巻第9号(大正12年9月号)80頁(「彙報」欄)(平成25年5月21日追加)
- ・今井斐巳(彦三郎、1868~1944)「池辺義象ぬしに別れて」『國學院雑誌』第29巻第9号(大正12年9月号)73頁(「文苑」欄、追悼歌)(平成25年4月18日追加)

大正 13 (1924) 年

- ・熊沢一衛『青山余影 田中光顕伯小伝』（青山書院、大正 13 年 2 月 11 日刊）
（「第 25 章 青山伯の八面観」中に、池辺義象「田中伯と和歌」（603～611 頁。池辺生前のもの。）あり。明治 42 年秋京都から東京に戻って住んだ小石川区関口台町の池辺の家[細川侯爵邸の一角か?]の門と田中伯の本邸[蕉雨園]の門とが対合っていたという。）
（平成 22 年 6 月 4 日追加）
「蕉雨園」：〈<http://nile-alex.blog.so-net.ne.jp/2007-04-08>〉

昭和 4 (1929) 年

- ・石井柏亭（1882～1958）『浅井忠 画集及評伝』（京都・芸艸堂、昭和 4 年 11 月 5 日刊）（池辺義象関係: 83～88、128、129、144、145、154、155、170、172、175 頁等）
（平成 24 年 1 月 8 日追加）

昭和 7 (1932) 年

- ・『神宮皇學館五十年史』（神宮皇學館、昭和 7 年 4 月 30 日刊）212 頁
- ・『東京帝国大学五十年史 上冊』（東京帝国大学、昭和 7 年 11 月 20 日刊）（東京大学文学部附属古典講習科: 721～747 頁）
- ・『東京帝国大学五十年史 下冊』（東京帝国大学、昭和 7 年 11 月 20 日刊）（史料編纂掛: 1192～1205 頁）
- ・『皇典講究所五十年史』（皇典講究所、昭和 7 年 10 月刊。未見）

昭和 9 (1934) 年

- ・佐佐木信綱（1872～1963）『明治文学の片影』（中央公論社、昭和 9 年 10 月 25 日刊）「小中村清矩先生 明治国文学の恩人」（平成 24 年 3 月 16 日追加）

昭和 10 (1935) 年

- ・『国学者伝記集成続篇』（『国学者伝記集成』（全三巻）、国本出版社、昭和 10 年 1 月刊（未見）。復刻版: 『国学者伝記集成』（全三巻、名著刊行会、昭和 42 年 9 月 20 日刊））「池辺義象」459～460 頁
（参考）「小中村清矩」『国学者伝記集成』（大日本図書、明治 37 年 8 月刊（未見）。国本出版社、昭和 9 年刊（未見）。復刻版: 『国学者伝記集成』（全三巻、名著刊行会、昭和 42 年 9 月 20 日刊））1620～1624 頁

昭和 11 (1936) 年

- ・池辺義純（本名: 義敦、1902～1989）「父池辺義象を語る」『書物展望』第 6 巻第 3 号（通巻第 57 号、昭和 11 (1936) 年 3 月 1 日刊）
- ・角田政治（すみだ）『肥後人名辞書 全』（肥後地歴叢書刊行会、昭和 11 年 9 月 23 日刊。復刻版: 熊本・青潮社、昭和 48 年 12 月 15 日刊（「池辺義象」105 頁）
（*『漱石全集』は何回か刊行されているが、下記のもの、たまたま見たもの。）
- ・『漱石全集 第 15 巻 日記及断片』（岩波書店、昭和 11 年 7 月 10 日刊）池辺義象関連分: 601 頁（明治 43 (1910) 年 11 月 13 日（月））

昭和 12 (1937) 年

- ・『大成中学校創立四十周年記念 杉浦先生講演集』（杉浦鋼太郎（1857～1942）、大成中学校々友会、昭和 12 年 10 月 29 日刊）（「二 藤園池辺義象大人の霊前に」: 8～10 頁（初出: 『神廻道』第 144 号（大正 12 年 8 月 10 日刊）25～28 頁）、（参考）「一、芳賀 [矢一] 博士を送る」1～7 頁（池辺関連: 3 頁）、「六、萩の舎先生追悼の辞」21～27 頁（落合直文、大正 14 年 9 月 23 日講演か。池辺関連: 21、22 頁）。「近代デジタルライブラリー」〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉に収録（初出とは一部に異同あり。）。⇒初出誌、『講演集』分とも本稿に全文収録: 前掲「〔略年譜〕*追悼記」参照。）（平成 24 年 12 月 4 日追加、同年 12 月 14 日、同 25 年 1 月 4 日、同 1 月 9 日各一部修正）

・「池辺義象」『新撰大人名辞典』第1巻（平凡社、昭和12年12月20日初版第1刷刊。未見。）（復刻版：『日本人名大事典（新撰大人名辞典）』第1巻〈平凡社、昭和12年12月20日初版第1刷刊。昭和54年7月10日、覆刻版第1刷刊〉205頁）

昭和14（1939）年

・『第一高等学校六十年史』（第一高等学校、昭和14年3月31日刊）
・恒川平一『御歌所の研究』（恒川平一）還暦記念出版会、昭和14年6月14日刊（池辺義象関係分：353～358頁等）（平成24年1月8日追加）

昭和16（1941）年

・荒木精之（1907～1981）『肥後先哲評伝』（熊本・日本談義社、昭和16年5月?日刊。未見。）

昭和17（1942）年

・下村海南（宏、1875～1957）『随筆 二直角』（櫻井書店、昭和17年7月1日刊）中「西片町十番地」（33～36頁）（明治25（1892）年頃の話。「近代デジタルライブラリー」参照。）（平成25年3月28日追加）

昭和18（1943）年

・『京都帝国大学史』（京都帝国大学、昭和18年12月20日刊）（第1章 法学部 第3節 学術 14 日本法制史講座）（池辺義象関係分：185～186頁）（近代デジタルライブラリー〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉にあり。）⇒〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1460809/1/594>〉

昭和19（1944）年

・中村孝也（1885～1970）「三上先生を憶う」三上参次（1865～1939）『江戸時代史 下巻』（富山房、昭和19年10月刊。辻善之助（1877～1955）「故三上参次先生略歴」もあり。未見）（『江戸時代史（7）』（講談社学術文庫、昭和52年6月10日刊）171～210頁、小中村義象関係：175頁）

昭和25（1950）年

・三宅雪嶺（1860～1945）『自分を語る』（朝日新聞社、昭和25年1月?日刊（未見）。『石川近代文学全集 12 三宅雪嶺・石橋忍月・藤岡東圃・桐生悠々等』（石川近代文学館、昭和63年8月25日刊）64頁に拠る。当該記載は大正15年5月発表のものか。）（平成24年5月21日追加）

昭和27（1952）年

・保科孝一（1872～1955）『ある国語学者の回想 挿話に浮んだ名士の面影』（朝日新聞社、昭和27年10月10日刊）「小中村義象」11～13頁（一高教授時代のこと）（下記アドレスのみ平成23年2月28日追加）

〈http://uwazura.cocolog-nifty.com/blog/files/hosinakoiti_arukokugogakusya.pdf〉
（参考）三上参次（1865～1939）『明治時代の歴史学界 三上参次懐旧談』（吉川弘文館、平成3年2月10日刊）53頁参照。

昭和28（1953）年

・『明治文化史』第7巻文芸編（洋々社、昭和28年12月20日刊）15、311頁

昭和29（1954）年

・『明治文化史』第5巻学術編（洋々社、昭和29年12月20日刊）758頁

昭和31（1956）年

・昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第2巻（[昭和女子大学] 光葉会、

昭和 31 年 4 月 10 日刊) 中「小中村清矩」口絵、10～11 頁、301～338 頁 (302～303、307～308、「5、遺跡、遺族」: 334～338 頁、447 頁。小中村清矩: 1822～1895)

・昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 第 4 巻』(昭和女子大学光葉会、昭和 31 年 9 月 10 日刊)「飯田武郷」(283～324 頁)(平成 24 年 12 月 8 日追加)

・野田寛口述・熊本市編纂『肥後文教と其城府の教育』(熊本市教育委員会、昭和 31 年? 月? 日刊。未見。)

昭和 32 (1957) 年

・昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第 7 巻 (昭和女子大学光葉会、昭和 32 年 12 月 10 日刊) 中「落合直文」(1861～1903、小中村 (池辺) 義象: 122,125～127、147、149～150 頁)

昭和 34 (1959) 年

・昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第 11 巻 (昭和女子大学光葉会、昭和 34 年 1 月 1 日刊) 中「中村秋香」(1841～1910)、「藤岡作太郎」(1870～1910) (平成 24 年 3 月 12 日追加)

・荒木精之 (1907～1981) 『熊本県人物誌』(日本談義社、昭和 34 年 6 月 1 日刊) (「池辺義象」93～96 頁、「狩野直喜」(1868～1947) 87～90 頁)

・瀧川幸辰 (1891～1962) 「回想の法学者 (2) 一勝本勘三郎・井上 密・市村光恵・中島玉吉・田島錦治・池辺義象の諸先生一」『綜合法学』第 17 号 (昭和 34 年 12 月 1 日刊) 29 頁、後に、『瀧川幸辰刑法著作集』第 5 巻 (世界思想社、昭和 56 年 8 月 10 日刊) 200～201 頁に収録。貴重。)

・狩野直喜 (1868～1947) 著、狩野直禎 (1929～(2017))・吉川幸次郎 (1904～1980) 校『君山文』(京都・中村印刷 (印刷者)、昭和己亥 (34 年) 12 月刊。80 丁、24cm、和装。「狩野夫人池邊氏墳志」(巻七、二 b～三 a 丁)「亡室池邊氏行述」(巻八、二 b～三 b 丁)) (「墳志」は「墓誌」、「墓誌銘」のこと。狩野直方氏: 明治 34 (1901) 年 11 月生。前者は平成 21 (2009) 年 9 月 21 日松尾尊允先生、後者は同 10 月 2 日高橋均先生の御教示に拠る。)

昭和 37 (1962) 年

・『藤岡東圃追憶録』(藤岡作太郎 (1870～1910) 三周忌記念刊行、藤岡由夫 (1903～1976) 蔵版、明治 45 年 2 月刊。藤岡由夫、昭和 37 年 12 月 1 日 (増補) 再刊) 12、23,133 頁 (平成 23 年 7 月 3 日追加)

昭和 38 (1963) 年

・梅溪昇 (1921～2016) 『明治前期政治史研究』(未来社、昭和 38 年 2 月 28 日刊。増補版: 昭和 53 年 9 月 20 日刊) (井上毅と池辺義象関連: 308～316 頁。貴重。ただし、齊藤智朗『井上毅と宗教—明治国家形成と世俗主義—』(弘文堂、平成 18 年 4 月 30 日刊) 51、77 頁 (註 8) 参照。)

(参考)・國學院大學日本文化研究所『井上毅と梧陰文庫』(汲古書院、平成 18 年 2 月 20 日刊)「梅溪昇先生に聞く」: 261～262 頁。「平成 12 (2000) 年」の項参照。

・「法律学と私 瀧川幸辰 (ママ、瀧川) 先生に聞く (遺稿) [第 1 回]」((語る人) 故瀧川幸辰、(聞く人) 木村静子 (1927～)) 『法学セミナー』第 84 号 (昭和 38 年 3 月号 (3 月 1 日刊)、昭和 36 年 8 月の対談速記録) 49 頁 (後に、我妻栄 末川博 瀧川幸辰 [談] 利谷信義 乾昭三 木村静子編『法律学と私』(日本評論社、昭和 42 年 5 月 10 日刊。「瀧川幸辰先生に聞く (遺稿)」の項に再録。))

昭和 39 (1964) 年

・昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第 22 巻 (池辺義象、有島武郎、ケーベル、厨川白村、三木天遊) (昭和女子大学、昭和 39 年 12 月 1 日刊) 口絵、10、17～92、447 頁

昭和 40 (1965) 年

- ・森銑三 (1895～1985) 編『明治人物逸話辞典 上巻』(東京堂出版、昭和 40 年 4 月 10 日刊) 「池辺義象」56、57 頁 (『石臼のへそ』、『萩之家遺稿』等に拠る。)

昭和 41 (1966) 年

- ・『井上毅伝 史料篇第四』(國學院大學図書館、昭和 41 年 11 月 4 日刊)

昭和 42 (1967) 年

- ・我妻栄 末川博 瀧川幸辰〔談〕 利谷信義 乾昭三 木村静子編『法律学と私』(日本評論社、昭和 42 年 5 月 10 日刊) (「瀧川幸辰先生に聞く(遺稿)」の項: 198、199、203 頁) (我妻栄: 1897～1973、末川博: 1892～1977、瀧川幸辰: 1891～1962、利谷信義: 1932～(2019)、乾昭三: 1928～2003、木村静子: 1927～) (初出: 『法学セミナー』第 84 号(昭和 38 年 3 月号(3 月 1 日刊) 49 頁等)
- ・『京都大学七十年史』(京都大学、昭和 42 年 11 月 3 日刊) 384 頁
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/9581721/1/1>)

昭和 43 (1968) 年

- ・西村捨也 (1903～?) 『明治時代法律書解題』(酒井書店、昭和 43 年 7 月 15 日刊) (未見)
- ・宮尾しげを (1902～1982) 監修『東京都名所図会・下谷区・上野公園之部』(原本『新撰東京名所図会』、暁書房、昭和 43 年 9 月 15 日刊) (以下上根岸町) 96～99 頁、(以下「上野公園桜雲台」) 175、176～177 (地図)、222 頁 (平成 23 年 7 月 24 日追加)
- ・塩谷賛 (1916～1977) 『幸田露伴 中』(中央公論社、昭和 43 年 11 月 9 日刊、(中公文庫、昭和 52 年 3 月刊)) 34、38～43 頁 (平成 23 年 7 月 3 日追加)
- ・『明治文学全集 44 落合直文 上田萬年 芳賀矢一 藤岡作太郎』(筑摩書房、昭和 43 年 12 月 25 日刊) 中、「落合直文集」書翰 101 頁 (平成 23 年 4 月 18 日追加)

昭和 44 (1969) 年

- ・井上毅伝記編纂委員会編『井上毅伝 史料篇第三』(國學院大學図書館、昭和 44 年 3 月 5 日刊) (「26 梧陰存稿」637～709 頁、「梧陰存稿の奥に書きつく 明治廿八年六月小中村義象識す」702～709 頁)
- ・高橋昊 (1912～) 「今泉定助先生正伝研究 今泉研究所一その国体論と神道思想史上の地位」『今泉定助先生研究全集』第一巻 (日本大学今泉研究所、昭和 44 年 9 月 11 日刊。今泉定助(定介): 1863～1944) 139、143、(今泉夫人ろく(録)氏は千賀鶴太郎博士(1857～1929)夫人令妹、口絵に写真あり、152～153 頁参照。) (平成 25 年 5 月 28 日追加)

昭和 45 (1970) 年

- ・『國學院大學八十五年史 本編』(國學院大學、昭和 45 年 3 月 30 日刊) 135、136 頁
- ・昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第 33 巻 (昭和女子大学光葉会、昭和 45 年 6 月 15 日刊) 中「関根正直」(319～358 頁、池辺義象関連: 321 頁) (平成 23 年 8 月 9 日追加)

昭和 46 (1971) 年

- ・井上毅伝記編纂委員会編『井上毅伝 史料篇第四』(國學院大學図書館、昭和 46 年 9 月 5 日刊) (井上毅発池辺(小中村)義象宛書簡 31 通: 4～18 頁)

昭和 47 (1972) 年

- ・『皇學館大學史 創立九十年 再興十年』(皇學館大學、昭和 47 年 10 月 30 日刊) 15、16 頁

昭和 50 (1975) 年

・井上毅伝記編纂委員会編『井上毅伝 史料篇第五』(國學院大學図書館、昭和 50 年 2 月 15 日刊)(小中村義象発井上毅宛書簡 1 通: 131 頁)

昭和 51 (1976) 年

・宮崎市定(1901~1995)「東と西との交錯『仏国風俗問答』」『展望』第 215 号(昭和 51 年 11 月号)(宮崎市定『東風西雅』(岩波書店、昭和 53 年 5 月 18 日刊)、『宮崎市定全集 20(菩薩蛮記)』(岩波書店、平成 4 年 12 月 7 日刊)等に再録。)(池辺義象『仏国風俗問答』(明治書院、明治 34 年 6 月 15 日刊)、同『欧羅巴』(金港堂書籍、明治 35 年 8 月 10 日刊)。近代デジタルライブラリー参照。)

昭和 52 (1977) 年

・井上毅伝記編纂委員会編『井上毅伝 史料篇第六』(國學院大學図書館、昭和 52 年 3 月 5 日刊)(井上毅発池辺(小中村)義象宛書簡 1 通追加: 248 頁)

昭和 53 (1978) 年

・深荳和男(1929~)『明治の国文学雑誌』(笠間書院、昭和 53 年 2 月 20 日刊)(「三日本文学・国文学」: 53~69 頁、「附三 日本文学・国文学総目次」: 187~240 頁)(平成 25 年 2 月 18 日追加)

昭和 54 (1979) 年

・藤井貞文(1906~1994)「池辺義象」『国史大辞典』第 1 卷(吉川弘文館、昭和 54 年 3 月 1 日刊) 481 頁

昭和 56 (1981) 年

・桑原伸介(1918~)「近代政治史料収集の歩み 3 一井上毅と修史事業の再建一」『参考書誌研究』第 22 号(昭和 58 年 6 月刊) 3~6、12、13 頁(平成 24 年 1 月 30 日追加)
(<http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/22-12.pdf#search='近代政治史料収集の歩み3'>)

・『瀧川幸辰刑法著作集』第 5 卷(世界思想社、昭和 56 年 8 月 10 日刊)(「回想の法学者 池辺義象先生」201 頁)(初出: 瀧川幸辰(1891~1962)「回想の法学者(2) 一勝本勘三郎・井上密・市村光恵・中島玉吉・田島錦治・池辺義象の諸先生一」『綜合法学』第 17 号(昭和 34 年 12 月 1 日刊) 29 頁)

昭和 57 (1982) 年

・『熊本県大百科事典』(熊本日日新聞社、昭和 57 年 4 月 25 日刊) 46 頁(池田勝「池辺義象」: 46 頁)

・三村竹清(1876~1953)『三村竹清集 2 日本書誌学大系 23(2)』(青裳堂書店、昭和 57 年 6 月 15 日刊) 178~179 頁(「陽春廬日記」)(平成 23 年 6 月 5 日追加)

・全国質屋組合連合会『日本の質屋』(全国質屋組合連合会、昭和 57 年 6 月 21 日刊)(平成 23 年 7 月 24 日追加)

・『國學院大學百年小史』(國學院大學、昭和 57 年 11 月 1 日刊) 62、79 頁

・『皇典講究所 草創期の人びと』(國學院大學、昭和 57 年 11 月 4 日刊) 18、250、251、261 頁(小中村清矩: 134~142 頁)

・『濟々鬢百年史』(熊本・濟々鬢百周年記念事業会、昭和 57 年 11 月(日付なし)刊)

昭和 59 (1984) 年

・『東京大学百年史 通史 I』(東京大学、昭和 59 年 1 月刊)(東京大学文学部附属古典講習科: 462~467 頁)

・『お茶の水女子大学百年史』(「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会編、昭和 59 年 5 月刊) 91~93 頁(<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/4567>)

・山室信一（1951～）『法制官僚の時代—国家の設計と知の歷程』（木鐸社、昭和 59 年 12 月刊）

昭和 60（1985）年

・『陸羯南全集』第 10 卷（陸 羯南：1857～1907、みすず書房、昭和 60 年 4 月 5 日刊）（106 頁：No.27 池辺義象発陸羯南宛書簡（年不明 9 月 14 日）、132 頁：No.99 小中村義象発陸羯南宛書簡（年（明治 31 年か？）不明 2 月 9 日）、220～222 頁：明治 40（1907）年 9 月池辺義象の陸羯南への追悼文「陸羯南君の霊前に曰す詞」（初出：『日本及日本人』第 467 号（明治 40 年 9 月 15 日刊））

昭和 61（1986）年

・『明治ニュース事典』I～VIII、総索引（毎日コミュニケーションズ、昭和 61 年 2 月 25 日刊）

・東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 部局史 1』（東京大学出版会、昭和 61 年 3 月刊）（東京大学文学部附属古典講習科：416 頁）

昭和 62（1987）年

・『近代作家追悼文集成 [2] 原抱一庵 落合直文 斎藤緑雨 綱島梁川』（ゆまに書房、昭和 62 年 1 月 25 日刊。初出：『明星』辰歳第 2 号（明治 37 年 2 月 1 日刊）、『国文学』第 62 号（明治 37 年 2 月 25 日刊））中「落合直文」

（池辺義象関連）

[[『明星』辰歳第 2 号分、括弧内頁数は同誌] 6 (4) 頁（森 林太郎談話）、8～10（6～8）頁（市村瓊次郎談話）、19（17）頁（関根正直演説）、29（27）頁（与謝野鉄幹演説）

[[『国文学』第 62 号分、括弧内頁数は同誌] 41～42（11～12）（井上通泰）、45（15）（森林太郎）、47～49（17～19）頁（市村瓊次郎）、52～54（22～23）頁（阪正臣）、55～56（25～26）頁（芳賀矢一）、62（32）頁（関根正直）、63～66（33～36）頁（萩野由之）、66～67（36～37）頁（池辺本人記述）、76（46）頁（今井彦三郎）、79（49）頁（青戸波江）、83（53）頁（青戸波江）、85～92（55～62）頁（池辺本人記述）、101（71）頁（平田盛胤）、103～104（73～74）頁（池辺本人記述）、158（128）頁（堀江秀雄）、161（131）頁（尾上柴舟）、163（133）頁（尾上柴舟）（平成 23 年 4 月 18 日追加、同 25 年 1 月 31 日、同 2 月 15 日各補正）

・『東京大学百年史 部局史 4』（東京大学、昭和 62 年 3 月刊）562 頁

・岩野英夫（1944～）「わが国における法史学の歩み（1873－1945）—法制史関連科目担任者の変遷—」『同志社法学』第 39 巻第 1・2 号（昭和 62 年 7 月刊）⇒「平成 14（2002）年」の項参照。

昭和 63（1988）年

・高橋在久（すみひさ、1927～2005）『浅井忠 原風景と留学日記』（第一法規出版、昭和 63 年 5 月 30 日刊）52、86、87、89、105～113、115、116、118、119～127、129～134（「藤園氏」のものあり。）、135（「三人」）、188、190 頁参照（平成 23 年 5 月 23 日追加）。

・柳田国男研究会編著『柳田国男伝』（三一書房、昭和 63 年 11 月刊。柳田国男：1875～1962）71、73 頁（井上通泰（1867～1941）関連で 71、73 頁。平成 25 年 1 月 31 日内藤丈二先生の御示教による。）（平成 25 年 2 月 1 日追加）

昭和 64/平成元（1989）年

・池辺一郎（1905～1986）・富永健一（1931～（2019））『池辺三山—ジャーナリストの誕生』（みすず書房、平成元年 10 月 16 日刊）20～21 頁（池辺三山（吉太郎、1864～1912）発池辺義象宛書簡の件（池辺義象厳父（軍次）悔み状））、173～174 頁（池辺義象が池辺三山令室を紹介の件）⇒池辺一郎・富永健一『池辺三山 ジャーナリストの誕生』（中公文庫、平成 6 年 4 月 10 日刊）25～26 頁（池辺三山発池辺義象宛書簡の件（池辺義象厳父悔み状））、219～220 頁（池辺義象が池辺三山令室を紹介の件）

平成 3 (1991) 年

・三上参次 (1865~1939) 『明治時代の歴史学界 三上参次懐旧談』 (吉川弘文館、平成 3 年 2 月 10 日刊) (明治 16 (1883) 年 11 月寄宿舎暴動事件: 9~11 頁、小中村清矩: 32、42、53、88 頁、落合直文 (1861~1903): 53、134、135 頁、高津鋏三郎 (1864~1921): 213 頁、小中村 (池辺) 義象: 48、53 (貴重)、57、58、66、80 (貴重)、84、88、93、97、98 頁)

・落合秀男編『落合直文著作集』 (全三巻、明治書院、I: 平成 3 年 7 月 10 日刊、II: 同年 10 月 10 日刊、III: 同年 11 月 30 日刊) (I: 「浜松風」: 404~417 頁、「井上毅先生に与ふる書」: 509~510 頁、522、526 頁。II: 巴戟天舎: 228、234~246、246~281、281~284 頁。藤園主人: 285、325、336、345、406、407 頁。III: 145、319、344、349、361、375、400、435、436、442、448、454、469、471 頁) (平成 23 年 4 月 18 日追加)

平成 6 (1994) 年

・野口伐名 (いさあき、1934~) 『井上毅の教育思想』 (風間書房、平成 6 年 2 月 28 日刊) 223~226、234、304~318 頁

・『國學院大學百年史 (上・下)』 (國學院大學、平成 6 年 3 月 27 日刊。) (上): 154、156、160、169 (明治 26 (1893) 年 7 月 7 日撮影「第 1 回卒業生集合写真」中に小中村義象の姿あり。同氏 30 歳過ぎの写真で貴重。)、170、172、175、259 頁。なお、275 頁「明治 30 (1897) 年 9 月開講学課表」には小中村義象の氏名なし。

平成 7 (1995) 年

・木野主計 (1930~) 『井上毅研究』 (続群書類従完成会、平成 7 年 3 月 15 日刊) 381、423、440、476、478、494、495 頁 (井上毅: 1844~1895.3.15)

・鈴木良 (1934~2015) 「史料紹介 岡村司譴責事件に関わる資料について」『立命館百年史紀要 3』 (立命館百年史編纂委員会、平成 7 年 3 月 25 日刊。岡村 司: 1867~1922) 264 頁 (平成 24 年 8 月 3 日追加)

* 参考:

・鈴木良 (1934~2015) 「自由法学の誕生—岡村司の民法研究について—」『立命館大学人文科学研究所紀要』第 65 号 (平成 8 (1996) 年 2 月刊) 25~63 頁

・福井純子「岡村司年譜・著作目録」『立命館大学人文科学研究所紀要』第 70 号 (平成 10 (1998) 年 2 月刊) 153~173 頁

・鈴木良 (1934~2015)・福井純子 (1956~) 「(史料紹介) 岡村司『西遊日誌』(その 1)」『立命館産業社会論集』第 30 巻第 4 号 (通号第 83 号、平成 7 年 3 月刊。岡村司: 1867~1922) 109~125 頁 (関係分: 115 左、117 右、118 左、118 右、119 左、120 左、121 右、122 左、122 右、123 左、124 右各頁) (平成 24 年 8 月 3 日追加)

* (参考) <<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/cg/law/lex/99-3/Suzuki.htm>>

・鈴木良・福井純子「(史料紹介) 岡村司『西遊日誌』(その 2)」『立命館産業社会論集』第 31 巻第 1 号 (通号第 84 号、平成 7 年 6 月刊) 167~193 頁 (関係分: 167 右、173 左、173 右、174 右、175 左、175 右、176 左、177 左、177 右、178 左、178 右、179 左、179 右、180 左 (重要)、183 右、185 左、187 右、190 右、191 左、191 右、193 左各頁)

* (参考) 180 頁左 (重要) ⇒ 「巴里に日本人多しと雖も、池辺氏の如く淡泊真率 [正直で飾りけのないこと] にして愛敬すべき人はあらずと思ふ。」 (平成 24 年 8 月 3 日追加)

・鈴木良・福井純子「(史料紹介) 岡村司『西遊日誌』(その 3)」『立命館産業社会論集』第 31 巻第 2 号 (通号第 85 号、平成 7 年 9 月刊) 127~153 頁 (関係分: 128 右、129 右 (藤

園主人」、「知且居士」もあり。）、131 右、134 右、135 左、139 左、139 右、143 左、143 右、146 左、146 右各頁）（平成 24 年 8 月 3 日追加）

・鈴木良（1934～2015）・福井純子（1956～）「岡村司『西遊日誌』（その 4 [完]）」『立命館産業社会論集』第 31 巻第 3 号（通号第 86 号、平成 7 年 12 月刊）183～210 頁（関係分：191 左、205 左、207 左各頁）（平成 24 年 8 月 3 日追加）

平成 8（1996）年

・『漱石全集 第 22 巻 書簡 上』（夏目漱石：1867～1916、岩波書店、平成 8 年 3 月 19 日刊）池辺義象関連分：200 頁（① 書簡 207、明治 33（1900）年 12 月 26 日（水）ロンドンから夏目鏡（鏡子、1877～1963）宛）、207 頁（② 書簡 212、明治 34（1901）年 1 月 3 日（木）ロンドンから芳賀矢一（1867～1927）宛）

・『中央区沿革図集 [京橋篇]』（東京都中央区京橋図書館、平成 8 年 3 月 31 日刊）（平成 23 年 7 月 24 日追加）

平成 9（1997）年

・京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史 部局史編 1』（京都大学後援会、平成 9 年 9 月 30 日刊）309～310 頁（下記ネット版参照）

〈http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr_bookview.cgi/BB00000052/Contents/k_kan1.html〉

平成 10（1998）年

・『國學院黎明期の群像』（國學院大學日本文化研究所、平成 10 年 3 月 15 日刊）（斎藤ミチ子「池辺義象」391～402 頁）

平成 11（1999）年

・鈴木良（1934～2015）「岡村司文書目録および解説「岡村司文書について」」『立命館法学』第 265 号（1999 年第 3 号）207 頁（岡村司：1867～1922）（平成 24 年 8 月 3 日追加）〈<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/law/lex/99-3/Suzuki.htm>〉

平成 12（2000）年

・梅溪昇（1921～（2016））『教育勅語成立史一天皇制国家みの成立（下）一』（青史出版、平成 12 年年 8 月 10 日刊）（井上毅と池辺義象関連：135～146 頁、図版 24「儒教を存す 井上毅」（273～294 頁、宛先 294 頁））（昭和 38（1963）年の項参照。ただし、齊藤智朗『井上毅と宗教一明治国家形成と世俗主義一』（弘文堂、平成 18 年 4 月 30 日刊）51、77 頁（註 8）参照。）

・『熊中・熊高百年史』（熊本県立熊本高等学校、平成 12 年 10 月 30 日刊）39 頁（同校校歌作詞の件）

平成 13（2001）年

・野口伐名（いさあき、1934～）『文部大臣井上毅における明治国民教育観』（風間書房、平成 13 年 2 月 28 日刊）148、153、170 頁

・『熊中・熊高 写真で見る百年史』（熊本県立熊本高等学校、平成 13 年 3 月 27 日刊）11、106、107 頁（同校校歌作詞の件）

（参考）熊本高校校歌：〈http://www.kumamoto.bears.ed.jp/_1006.html〉、〈<http://www.youtube.com/watch?v=1XkmCYKfl1k>〉（平成 23 年 12 月 19 日追加）

・山口隼正（1940～）「田中義成日記と『大日本史料』創刊のことども」『長崎大学教育学部紀要 人文科学』第 63 号（平成 13 年 6 月 27 日刊）15～40 頁（田中義成：1860～1919、小中村義象関係：21、30～31 頁（註 16）。ただし、（註 16）中「なお、小中村（池辺）は

洋行から帰国後、」以下の記載の件は、八田三喜 [1873～1962]「狩野亨吉父子」未見のため未確認。(平成 24 年 10 月 25 日追加)

<http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10069/5802/1/KJ00000045515.pdf#search='%E4%BA%AC%E9%83%BD%E5%B8%9D%E5%9B%BD%E5%A4%A7%E5%AD%A6+%E6%B1%A0%E8%BE%BA%E7%BE%A9%E8%B1%A1>

- ・『日本近現代人名辞典』（吉川弘文館、平成 13 年 7 月 20 日刊）（藤井貞文〈1906～1994〉「池辺義象」：58 頁）
- ・（財）日本近代文学館『日本近代文学館資料叢書 [第 1 期] 文学者の日記 1 池辺三山⁹⁸ (1)』（博文館新社、平成 13 年 8 月 31 日刊）解説 266 頁に池辺家の系図が出ている（下記『池辺ファミリー雑記集』（編集者：池辺三郎、自己出版、平成 16 年 12 月刊）で改訂）。

平成 14 (2002) 年

- ・研究代表者岩野英夫 (1944～) 『法学教育における法史学の存在価値—わが国における法史学の成立と展開との関連で—』平成 11 年度—平成 13 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告 平成 14 年 3 月刊 (註: これには、前記岩野英夫「わが国における法史学の歩み (1873—1945) —法制史関連科目担任者の変遷—」 (註: 昭和 62 年 7 月刊) の修正版が収録されている。) ⇒「昭和 62 (1987) 年」の項参照。
- ・秦郁彦 (1932～) 編『日本近現代人物履歴事典』（東京大学出版会、平成 14 年 5 月 20 日刊）(平成 24 年 3 月 12 日追加)
- ・逸見久美 (1926～) 編『与謝野寛晶子書簡集成 第 1 巻』（八木書店、平成 14 年 10 月 25 日刊）(与謝野寛 (1873～1935) 発小中村義象宛書簡 5 通 (明治 26 年) : 5～8 頁、関連書簡 2 通 (明治 26 年小中村清矩宛、明治 29 年佐佐木信綱 (1872～1963) 宛))
- ・大沼宜規 (1971～) 「古典講習科時代の小中村清矩一日記にみる活動と交友」『近代史料研究』第 2 号 (平成 14 年 10 月 31 日刊) 47～69 頁 (平成 23 年 5 月 23 日追加)

平成 15 (2003) 年

- ・齊藤智朗 (1972～) 「明治二十年代初頭における国学の諸相—池辺義象の著作を中心に— (特集 神道と日本文化の諸相)」『國學院雑誌』第 104 巻第 11 号 (平成 15 年 11 月 15 日刊、通号第 1159 号) 282～295 頁

平成 16 (2004) 年

- ・細江光 (1959～) 『谷崎潤一郎—深層のレトリック』（和泉書院、平成 16 年 3 月 31 日）542～560 頁 (小中村清矩関係。554 頁に、「写真 8 神祇大史従七位・小中村清矩 (51 歳)」、「写真 9 小中村清矩と妻・たつ子」等あり。) (平成 24 年 3 月 19 日追加)
- ・木下広次 (1851～1910) 関係資料 (京都大学大学文書館) 公開 (平成 16 年 9 月 1 日) http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/ugoki_10.html <http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/mokuroku/kinoshita040901.pdf>
- ・菅浩二 (1969～) 『日本統治下の海外神社—朝鮮神宮・台湾神社と祭神—』（弘文堂、平成 16 年 9 月 15 日刊）253～254、259 (池辺義象「大喪及山陵について」『日本及日本人』第 588 号 (大正元年刊) のことを誌す。同稿末尾には、「七月三十一日午後三時記す」とある由。) 頁 (平成 23 年 5 月 10 日追加)
- ・『池辺ファミリー雑記集』（編集者：池辺三郎、自己出版、平成 16 年 12 月刊）18～24、37 (参考文献表示)、58～62 頁、「池辺家系図」 (前掲 (財) 日本近代文学館『日本近代文学館資料叢書 [第 1 期] 文学者の日記 1 池辺三山 (1)』（博文館新社、平成 13 年 8 月 31 日刊) 266 頁所収系図を改訂したもの)

⁹⁸ 池辺三山 (吉太郎、1864～1912) (平成 23 年 2 月 23 日追加)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%A0%E8%BE%BA%E4%B8%89%E5%B1%B1>

平成 17 (2005) 年

・國學院大學日本文化研究所編『梧陰文庫総目録』（東京大学出版会、平成 17 年 3 月 15 日刊）（『梧陰文庫目録』（國學院大學図書館、昭和 38 (1963) 年 11 月刊）の改題増補改訂。人名索引：小中村義象（池辺義象）：724 頁参照。）

平成 18 (2006) 年

・國學院大學日本文化研究所『井上毅と梧陰文庫』（汲古書院、平成 18 年 2 月 20 日刊）27、98、115、134、138、150～153、162、283、379 頁

・高槻幸枝・氣多恵子「翻刻 絵巻「郊遊会図」および「隅田の家つと」」『お茶の水地理』第 46 号（お茶の水地理学会、平成 18 年 3 月 20 日刊）84（1）～76（9）頁
〈<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/12693/1/004611.pdf>〉

（お茶の水女子大学デジタルアーカイブス）参照

〈<http://archives.cf.ocha.ac.jp/exhibition/da0006.html>〉

〈<http://archives.cf.ocha.ac.jp/exhibition/da0007.html>〉

・齊藤智朗『井上毅と宗教—明治国家形成と世俗主義—』（弘文堂、平成 18 年 4 月 30 日刊）51、77、101、102、118、119 頁

・小谷野敦（1962～）『谷崎潤一郎伝—一堂々たる人生』（中央公論新社、平成 18 年 6 月 25 日刊）15 頁「谷崎家・江澤家系図」（小中村清矩関係。上記細江光『谷崎潤一郎—深層のレトリック』（和泉書院、平成 16 年 3 月 31 日）542～560 頁により一部修正の要あり。）（平成 24 年 3 月 19 日追加）

・馬渕礼子（1949～）『歌の早春 馬渕礼子評論集 2』（短歌研究社、平成 18 年 7 月 19 日刊）274～322 頁（「東京下谷根岸及近傍図」を掲載。）（平成 23 年 10 月 19 日追加）

・HP「ことば先生翁」（遠藤熊吉：1874～1952）（平成 18 年 HP 開設）

〈<http://nishinaruse.sakuraweb.com/kumakichi/kumakichi.html>〉

北条常久（1939～、秋田市立中央図書館長）「標準語村の生成と展開」（2 指導者遠藤熊吉）〈<http://nishinaruse.sakuraweb.com/kotoba/hojo02.html>〉

明治廿八〔1895〕年三月大八洲学校卒業記念なる遠藤熊吉氏旧蔵写真が掲載されており、同写真裏の「氏名録」によれば、当時の同校教師として「（左から）小中村義象〔1861～1923〕、萩野由之〔1860～1924〕、飯田武郷〔1828～1900〕、木村正辞〔まさこと、1827～1913〕、本居豊頼〔とよかい、1834～1913〕、落合直文〔1861～1903〕、関根正直〔1860～1932〕」と国語伝習所の創設者であった杉浦剛太郎〔マ、鋼太郎、1857～1942〕及び飯田永夫〔飯田武郷次男、？～1918、65 歳〕の姿がある。（平成 24 年 12 月 4 日追加、同 25 年 1 月 4 日一部修正）

杉浦鋼太郎：

〈http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/S/sugiura_k.html〉

・北条常久（1939～）『標準語の村 遠藤熊吉と秋田西成瀬小学校』（無明舎出版、平成 18 年 7 月 20 日刊）24 頁（上記 HP 所載写真と同一写真が掲載されているが、ここには、同写真裏に記載されている「氏名録」は掲載されていないので、上記 HP は寔に貴重である。）（平成 25 年 1 月 4 日追加）

・八木雄一郎「小中村義象の国語教育論—明治 20 年代における「国語観」の時代的拡大」の中で—『人文科教育研究』（筑波大学・人文科教育学会）第 33 号（平成 18 年 8 月 20 日刊）83～93 頁

〈<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/dspace/handle/2241/98287>〉

・明治神宮編『明治神宮叢書』第 17 巻資料編（1）（国書刊行会、平成 18 年 11 月 3 日刊）（237～245 頁に、今泉定介（1863～1949）・池辺義象・今井清彦（1860～1922）「四 明治神宮ヲ青山練兵場ニ建設セントスルノ請願」（『明治天皇奉祀ニ関スル建議並請願書』の一つ）が掲載されている。）

・齊藤智朗「明治国学の継承をめぐって—池辺義象と明治国学史—（国学特集）」『國學院雑誌』第 107 巻第 11 号（平成 18 年 11 月 15 日刊、通号第 1195 号）173～191 頁

平成 19 (2007) 年

- ・八木雄一郎「「国語」と「古文」の境界線をめぐる対立：『尋常中学校教科細目調査報告』（1898（明治 31）年）における上田万年と小中村義象」『国語科教育』第 61 号（全国大学国語教育学会、平成 19（2007）年 3 月 31 日刊）27～34 頁
<<http://157.1.40.181/naid/110006274054>>（平成 23 年 3 月 30 日追加）
- ・大沼宜規（1971～）「晩年の小中村清矩一日記にみる活動と交友」『近代史料研究』第 7 号（平成 19 年 10 月刊）1～28 頁（平成 23 年 5 月 23 日追加）
- ・上笙一郎（1933～（2015））・山崎朋子（1932～（2018））編纂『日本女性史叢書』第 2 卷（池辺義象・増田于信（1862～1932）『美姫遺蹟』（金港堂書籍、明治 37 年再版）を収録。）中、猿渡土貴解説 1～9 頁（池辺義象関連：1～6 頁）（平成 24 年 1 月 31 日追加）
- ・池辺史生（池辺義象兄源太郎の令孫、1939～）「池辺義象」『近現代日本人物史料情報辞典 3』（吉川弘文館、平成 19 年 12 月 10 日刊）23～25 頁
- ・藤田大誠（1974～）『近代国学の研究』（弘文堂、平成 19 年 12 月 15 日刊）（人名索引あり。）（平成 23 年 6 月 5 日追加）
- ・山下一郎（1913～？）『鶯の谷 根岸の里の覚え書き』（富山房インターナショナル、平成 19 年 12 月 22 日刊）（平成 25 年 3 月 21 日追加）
<http://www.fuzambo-intl.com/index.php?main_page=product_info&cPath=11&products_id=42>

平成 20 (2008) 年

- ・木野主計（1930～）「明治典憲体制の視点から見た法制家井上毅の問題点」『江戸東京たてももの園天明家炉辺談話（1）』（平成 20 年刊？、未見。<<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jalha/>>に拠る。）（平成 23 年 2 月 16 日追加）
- ・木野主計「井上毅と池辺義象と池辺三山との交渉経緯について」『江戸東京たてももの園天明家炉辺談話（2）』（平成 20 年刊？、未見。<<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jalha/>>に拠る。）（平成 23 年 2 月 16 日追加）
- ・小川有閑「井上毅の国体教育主義における近代国学の影響」『東京大学宗教学年報』通号第 26 号（2009）（平成 20 年刊）77～100 頁（平成 24 年 2 月 27 日追加）
<<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/26759/1/rel02606.pdf>>
- ・伊藤徹（1957～）「世紀転換期のヨーロッパ滞在一浅井忠と夏目金之助」『関西大学東西学術研究所紀要』通巻第 41 号（平成 20 年 8 月刊）19～46 頁（池辺義象関係：21 頁上、24 頁上、25 頁下、43 頁註 7、9）（平成 24 年 5 月 22 日追加）
<<http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/bitstream/10112/2855/1/KU-0401TGGK-20080401-11.pdf>>

平成 21 (2009) 年

- ・窪寺紘一（1942～）『東洋学事始—那珂通世とその時代』（平凡社、平成 21 年 2 月 25 日刊）125、163 頁（那珂通世：1851～1908）
- ・齋藤智朗「井上毅と明治国家」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第 1 号（平成 21 年 3 月 9 日刊）93～115 頁
- ・木越治（1948～〔2018〕）『藤岡作太郎日記 明治三十九年分』（『市民大学院論文集』第 4 号別冊〈金沢大学市民大学院、平成 21 年 3 月 14 日刊〉）5 頁（平成 23 年 8 月 9 日追加）<<http://kigoshi.sophia.labos.ac/ja/page/p1.html>>
- ・齋藤智朗（〔1972〕～）「國學院設立期の国学界—皇典講究所講師時代における三上参次の事績・活動を中心に—」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第 1 号（平成 21 年 3 月 31 日刊）173～184 頁（三上参次：1865～1939）
- ・森銑三（1895～1985）小出昌洋（1948～）編『落葉籠』（下）（中公文庫、平成 21 年 6 月 25 日刊）138～139 頁「95 近古歌謡」、139～140 頁「95 井上梧陰の歌」（初出：『日本古書通信』に掲載、後、『森銑三著作集 続集』第 11 巻（中央公論社、平成 6 年 9 月刊。「落葉籠」）に掲載。いずれも未見。）（平成 23 年 5 月 23 日追加）

- ・島善高（1952～〔2020〕）『律令制から立憲制へ』（成文堂、平成 21 年 10 月 1 日刊）217～218、268（小中村義象の略歴等を記載）、302、303 頁
- ・長尾龍一（1938～）「宮崎道三郎の法史学」（HP 公開年月日不明）⇒同『法学に遊ぶ 新版』（慈学社出版、平成 21 年 10 月 10 日刊）256～286 頁に収録（宮崎道三郎：1855～1928、池辺義象関連：256 頁）。

〈http://book.geocities.jp/ruichi_nagao/miyazakimitisaburou.html〉

- ・（講演）山室信一（1951～）「近代日本の国家形成と学知の意義」（國學院大學研究開発推進機構・公開学術講演会、平成 21 年 10 月 10 日（土）午後、於國學院大學・渋谷キャンパス・常磐松松ホール）（Ⅱ 国家形成と国学知の領域 3 国制の正統的根拠と法制調査小中村義象等）⇒「平成 22 年」の項参照。
- ・小林宏（1931～）『日本における立法と法解釈の史的研究 第 3 卷 近代』（汲古書院、平成 21 年 11 月 30 日刊）240、245 頁

平成 22（2010）年

- ・山室信一（1951～）「近代日本の国家形成と学知の意義」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第 2 号（平成 22 年 3 月 31 日刊）82～128（（1）～（47））頁（上記公開学術講演会（平成 21 年 10 月 10 日（土）午後、於國學院大學・渋谷キャンパス・常磐松松ホール）のもの）85（44）、107～109（20～22）頁⇒「平成 21 年」の項参照。（平成 24 年 6 月 10 日追加）
- ・益井邦夫「井上毅と井上家系譜考」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第 2 号（平成 22 年 3 月 31 日刊）171～180 頁
- ・齋藤智朗（〔1972〕～）「井上毅と明治典憲体制」『藝林』第 59 卷第 1 号（藝林會、平成 22 年 4 月 10 日刊）96～123 頁（平成 22 年 12 月 5 日追加）
- ・藤田大誠（1974～）「近代皇族制度の形成と展開」『藝林』第 59 卷第 1 号（藝林會、平成 22 年 4 月 10 日刊）124～171 頁（平成 23 年 2 月 17 日追加）
- ・青木茂（1932～）「池辺義象と浅井忠」『日本古書通信』第 75 卷第 4 号（通巻第 969 号、日本古書通信社、平成 22 年 4 月 15 日刊）8～11 頁（1 頁に「〈今月号注目の一点〉 浅井忠・池辺義象『当世風俗五十番歌合』、7 頁に追記各あり。」）（平成 22 年 6 月 4 日追加、平成 23 年 4 月 18 日一部修正）
- ・大沼宜規（1971～）編著『小中村清矩日記』（汲古書院、平成 22 年 7 月 15 日刊）
〈<http://www.kyuko.asia/book/b68286.html>〉（平成 22 年 10 月 9 日追加）
- 【書評】中川和明（1962～）「大沼宜規編『小中村清矩日記』」『古文書研究』第 73 号（日本古文書学会、平成 24 年 7 月 20 日刊）122～124 頁（平成 24 年 9 月 27 日追加）
本稿「1 略年譜 *池辺義象氏の^{よしかた}小中村家離縁の件（参考 3）『小中村清矩日記』に見たる本件関係事項抄」参照。（平成 22 年 12 月 5 日追加）
- ・藤田大誠（ひろまさ、1974～）「近代国学と日本法制史」法制史学会第 415 回近畿部会報告（平成 22 年 12 月 18 日、於京都大学法経本館 3 階小会議室）
〈<http://www.soc.nii.ac.jp/jalha/>〉（平成 23 年 2 月 8 日追加）
- ・宮本誉士（1970～）『御歌所と国学者』（弘文堂、平成 22 年 12 月刊。未見）（平成 24 年 1 月 8 日追加）

平成 23（2011）年

- ・木越治（1948～〔2018〕）「藤岡作太郎と上田秋成・序説」『国文学論集』第 44 号（上智大学国文学会、平成 23 年 1 月 5 日刊）1～25 頁（6、25 頁に池辺義象関連記述あり。平成 23 年 6 月 14 日木越治先生の御教示に拠る。）（平成 23 年 7 月 3 日追加）
- ・宮部香織「小中村清矩の法制学講義」國學院大學国史学会 4 月例会（平成 23 年 4 月 23 日〈土〉午後、於國學院大學渋谷キャンパス 1206 教室、レジメあり。）
〈http://www.kokugakuin.ac.jp/letters/bun05_00128.html〉（平成 23 年 7 月 24 日追加）
⇒後掲宮部香織「小中村清矩と法制学講義」『國學院大學 校史・学術資産研究』第 5 号（平成 25 年 3 月刊）参照。（平成 25 年 4 月 15 日追加）

- ・七戸克彦（1959～）「ロー・アングル 現行民法典を創った人びと [23] 小中村清矩」『法学セミナー』第 675 号（平成 23 年 3 月刊）（平成 24 年 2 月 27 日追加）
 〈https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/bitstream/2324/19907/1/法学セミナー_2011.3.pdf〉
- ・報告「池辺義象氏関係文献一瞥 一池辺義象氏個人史検討の一つの試み一」國學院大學第 242 回梧陰文庫研究会（平成 23 年 4 月 23 日（土）午後）（平成 23 年 12 月 19 日追加）
- ・『明治時代史大辞典』第 1 卷（あ～こ）（全 4 卷。吉川弘文館、平成 23 年 12 月 20 日刊）兼築信行（1956～）「池辺義象」（102～103 頁）、藤田大誠（1974～）「小中村清矩」（1007 頁）（平成 24 年 9 月 26 日追加）

平成 24（2012）年

- ・太田治子（1947～）『夢さめみれば一日本近代洋画の父・浅井忠』（朝日新聞出版、平成 24 年 1 月 30 日刊。浅井忠：1856～1907）126、137、144、149、156、157 頁（平成 24 年 3 月 6 日追加）
- ・「文京ふるさと歴史館」（<http://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/>）展示会
 「伯爵家のまちづくり一学者町・西片の誕生一」（平成 23 年度収蔵品展、平成 24 年 2 月 11 日（土）～同年 3 月 18 日（日）。旧福山藩主阿部家丸山屋敷（中屋敷）地）（平成 24 年 2 月 17 日追加）
 （参考）出口競（1890～1957）『学者町学生町』（実業之日本社、大正 6 年 8 月 5 日刊）
 「西片町の解剖」（1～59 頁）、「西片町の誠之舎」（243～255 頁）（平成 24 年 3 月 16 日追加）
- ・報告「池辺義象氏個人史再考 一統・池辺義象氏関係文献一瞥 一池辺義象氏個人史検討の一つの試み一」國學院大學第 249 回梧陰文庫研究会（平成 24 年 3 月 17 日（土）午後）（平成 24 年 3 月 19 日追加）
- ・『藤岡作太郎日記 明治 42 年・43 年』（平成 23 年度科学研究費補助金 研究成果報告書、研究代表者 木越治、平成 24 年 3 月 25 日刊。藤岡作太郎：1870～1910）48 頁下段、49 頁上段、51 頁下段（平成 24 年 4 月 20 日追加）
- ・藤田大誠（ひろまさ、1974～）「皇典講究所・國學院大學における日本法制史の特質」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第 4 号（平成 24 年 3 月 31 日刊）217～243 頁（平成 24 年 4 月 23 日追加） [〈<https://irdb.nii.ac.jp/01250/0004369705>〉]
- ・宮部香織「國學院における三浦周行の法制史講義」『國學院大學 校史・学術資産研究』第 4 号（平成 24 年 3 月刊。三浦周行：1871～1931）123、143 頁（平成 24 年 6 月 11 日追加）

平成 25（2013）年

- ・ネット資料「II 〈小特集〉かつて池辺義象という学者がいた」西尾市岩瀬文庫「こんな本があった！～岩瀬文庫平成悉皆調査中間報告展 10～」（平成 25 年 1 月 26 日（土）～3 月 31 日（日）、西尾市岩瀬文庫・岩瀬文庫資料調査会。池辺の写真もあり。）（平成 25 年 6 月 3 日追加）
 〈<http://www.city.nishio.aichi.jp/nishio/kaforuda/40iwase/index.html>〉
 〈<http://www.city.nishio.aichi.jp/nishio/kaforuda/40iwase/kikaku/48konna10/konna10.html>〉
 （令和 6（2024）年 1 月 1 日特別追記）西尾市岩瀬文庫ネット資料「2013 年 1 月 26 日（土）～2013 年 3 月 31 日（日） こんな本があった！10～岩瀬文庫平成悉皆調査中間報告展 10～ II 〈小特集〉かつて池辺義象という学者がいた」
 〈<https://iwasebunko.jp/event/exhibition/entry-131.html>〉
- ・宮部香織「小中村清矩と法制学講義」『國學院大學 校史・学術資産研究』第 5 号（平成 25 年 3 月刊）123、143 頁（平成 25 年 4 月 15 日追加）
- ・宮部香織「池辺義象の『日本制度通』講義」『校史』第 23 号（國學院大學研究開発推進

機構校史・学術資産研究センター、平成 25 年 3 月 4 日刊) 7～10 頁 (10 頁に池辺義象の
写真〈「明治 26 年の國學院第一回卒業式集合写真より」〉あり。) (平成 25 年 5 月 11 日追
加)

平成 27 (2015) 年

・大沼宜規 (1971～) 「池辺義象の日記—古典講習科生徒の青春—」『日本史学集録』第
37 号 (平成 27 年 12 月 31 日刊) 31～61 頁 (平成 29 (2017) 年 7 月 20 日追加)
(<http://ci.nii.ac.jp/naid/40021201688/>)

(10) 池辺義象氏研究論文 (抄)

昭和 42 (1967) 年

- ・甲斐知恵子 (1927～) 「池辺義象の「藤園詠草」について」『学苑』(通号 325) [1967.01]

平成 8 (1996) 年

- ・飯塚信雄 (1922～2004) 「池辺義象の『仏国風俗問答』について— 一つの比較生活文化史試論」『明治大学教養論集』(通号 281) [1996.01] (未見)

平成 14 (2002) 年

- ・齊藤智朗 (1972～) 「池辺義象と近代皇室・神社制度」〔神道宗教学会〕第 55 回学術大会紀要号 (研究発表 第二部会) 『神道宗教』神道宗教 (186) [2002.4] (未見)

平成 15 (2003) 年

- ・齊藤智朗 (1972～) 「明治二十年代初頭における国学の諸相—池辺義象の著作を中心に— (特集 神道と日本文化の諸相)」『國學院雑誌』第 104 卷第 11 号 (平成 15 (2003) 年 11 月 15 日刊、通号第 1159 号) 282～295 頁

平成 18 (2006) 年

- ・齊藤智朗 (1972～) 「井上毅と『萩の戸の月』」國學院大學日本文化研究所『井上毅と梧陰文庫』(汲古書院、平成 18 (2006) 年 2 月 20 日刊) 148～155 頁
- ・八木雄一郎 「小中村義象の国語教育論—明治 20 年代における「国語観の時代的拡大」の中で—」『人文科教育研究』(筑波大学・人文科教育学会) 第 33 号 (平成 18 (2006) 年 8 月 20 日刊) 83～93 頁 (下記アドレスのみ平成 23 年 2 月 28 日追加) <http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/limedio/dlam/M86/M864217/8.pdf>
- ・齊藤智朗 (1972～) 「明治国学の継承をめぐって—池辺義象と明治国学史— (国学特集)」『國學院雑誌』第 107 卷第 11 号 (平成 18 (2006) 年 11 月 15 日刊、通号第 1195 号) 173～191 頁

平成 19 (2007) 年

- ・八木雄一郎 「「国語」と「古文」の境界線をめぐる対立：『尋常中学校教科細目調査報告』(1898 (明治 31) 年) における上田万年と小中村義象」『国語科教育』第 61 号 (平成 19 (2007) 年 3 月 31 日刊) 27～34 頁 (<http://157.1.40.181/naid/110006274054>) (平成 23 年 2 月 17 日追加、同年 3 月 30 日一部補正)

平成 22 (2010) 年

- ・山東功 (1970～) 「明治二〇年代の学校国文法教科書：落合直文・小中村義象『中等教育日本文典 全』について」『言語文化学研究 日本語日本文学編』第 5 号 (平成 22 (2010) 年 3 月刊) (未見、平成 23 年 2 月 17 日追加)

(以上)

【追加分】

(概要)

*〔追加1〕平成25(2013)年9月1日

『CD版 春木一郎博士・原田慶吉教授・田中周友博士・船田享二博士・武藤智雄教授・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士・池辺義象氏略年譜・著作目録—日本ローマ法学七先生略年譜・著作目録(新訂版)—ローマ法・法制史学者著作目録選(第十輯)—』(平成25(2013)年9月1日刊)作成以後の追加事項

〈<http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA64090131>〉⇒〈<http://ci.nii.ac.jp/ncid/BB13864295>〉

(平成26年7月26日新設)

〔追加事項〕

- ・※1 平成26(2014)年7月26日(土)補正第37稿作成
- ・※2 平成26(2014)年12月17日(水)補正第38稿作成
- ・※3 平成26(2014)年12月21日(日)補正第39稿作成
- ・※4 平成27(2015)年3月9日(月)補正第40稿作成
- ・※5 平成27(2015)年5月31日(日)補正第41稿作成
- ・※6 平成27(2015)年10月10日(土)補正第42稿作成
- ・※7 平成29(2017)年7月20日(木)補正第43稿作成
- ・※8 平成29(2017)年7月23日(日)補正第44稿作成
- ・※9 平成29(2017)年8月30日(水)補正第45稿作成

〔追加2〕平成30(2018)年1月1日(月)

『CD版 ローマ法、法制史、明治警察史及び日本統治下台湾警察史の諸問題—ローマ法・法制史学者著作目録選(第十三輯)—明治警察史雑纂(第四輯)—日本統治下台湾警察史雑纂(第八輯)—』(平成30(2018)年1月1日刊)作成以後の追加事項

- ・※10 平成30(2018)年9月10日(月)補正第46稿作成
- ・※11 平成30(2018)年10月19日(金)補正第47稿作成
- ・※12 平成30(2018)年11月5日(月)補正第48稿作成
- ・※13 平成30(2018)年12月18日(火)補正第49稿作成
- ・※14 平成31(2019)年3月21日(木)補正第50稿作成
- ・※15 (令和2(2020)年7月27日(月)補正第51稿追加分)
- ・※16 (令和3(2021)年11月20日(土)補正第52稿追加分)

〔追加3〕令和4(2022)年4月1日(金)

『CD版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録—【参考篇】【附篇】—ローマ法・法制史学者著作目録選(第十五輯)—』(令和4(2022)年4月1日刊。補正第53稿を収録。)作成以後の追加事項

- ・※17 (令和4(2022)年4月1日(金)補正第53稿追加分)
- ・※18 (令和4(2022)年6月26日(日)補正第54稿追加分)
- ・※19 (令和5(2023)年1月8日(日)補正第55稿追加分)

・※20（令和 5（2023）年 4 月 3 日（月）補正第 56 稿追加分）

＊〔追加 1〕平成 25（2013）年 9 月 1 日

『CD 版 春木一郎博士・原田慶吉教授・田中周友博士・船田享二博士・武藤智雄教授・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士・池辺義象氏略年譜・著作目録—日本ローマ法学七先生略年譜・著作目録（新訂版）—一ローマ法・法制史学者著作目録選（第十輯）—』（平成 25（2013）年 9 月 1 日刊）作成以後の追加事項

（関係文献等追加）

※1（平成 26 年 7 月 26 日補正第 37 稿追加分）

・池辺義象「落合直文君小伝」落合直文『萩之家歌集』（明治書院、明治 39 年 6 月 1 日刊、大正 2 年 9 月 24 日改版刊）1～16 頁（池辺の小伝は大正 2 年 9 月 24 日改版に収録。末尾に「大正二年九月 友人 池辺義象」とある。）⇒『落合直文集』（明治書院、昭和 2 年 11 月 7 日刊）の冒頭に再録。（平成 26 年 7 月 26 日追加）

・宮部香織「小中村清矩の『令義解』講義録」『國學院大學 校史・学術資産研究』第 6 号（平成 26 年 3 月刊）（平成 26 年 7 月 26 日追加）

・渡辺幾治郎（1877～1960）『明治史研究』（楽浪書院、昭和 9 年 9 月 18 日）（第四雜篇 第二章 明治天皇紀編修二十年〈370～390 頁〉中に池辺義象の回想あり〈370～371 頁〉。）（平成 26 年 7 月 26 日追加）

・堀口修（1949～）「明治天皇紀編修と近現代の歴史学」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第 43 号（平成 18 年 11 月刊）184、201 頁（註）18（平成 26 年 7 月 26 日追加）

〈<http://www.mkc.gr.jp/seitoku/pdf/f43-13.pdf>〉

・堀口修（1949～）「明治天皇紀編修をめぐる宮内省臨時編修局総裁人事問題と末松謙澄」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第 45 号（平成 20 年 11 月刊）171、184 頁（註）25、26（平成 26 年 7 月 26 日追加）

〈<http://www.mkc.gr.jp/seitoku/pdf/f45-10.pdf>〉

・各種ネット資料（平成 26 年 7 月 26 日追加）

〈<http://21coe.kokugakuin.ac.jp/db2/kokugaku/ikebe.004.html>〉

〈https://www.google.co.jp/search?q=%E6%B1%A0%E8%BE%BA%E7%BE%A9%E8%B1%A1&hl=ja&rlz=1T4KMOH_jaJP552JP552&tbn=isch&tbo=u&source=univ&sa=X&ei=CRDTU9KbI42iugT-rICICw&ved=0CC8QsAQ&biw=1366&bih=611〉

※2（平成 26 年 12 月 17 日補正第 38 稿作成追加分）

・北脇洋子（1929～）『明治を彩る光芒—浅井忠とその時代—』（展望社、平成 26 年 10 月 20 日刊）（平成 26 年 12 月 17 日追加）

〈<http://www.bookservice.jp/ItemDetail?cmId=6245260>〉

・齋藤伸郎「佐佐木高行日記群の全貌—宮内公文書館所蔵資料の検討—」『日本歴史』第 799 号（平成 26 年 12 月号、同年 12 月 1 日刊）37～55 頁（佐佐木高行：1830～1910、宮内公文書館：下記アドレス参照。）（平成 26 年 12 月 17 日追加）

〈<http://www.kunaicho.go.jp/kunaicho/shinsei/kobunshokan.html>〉

※3（平成 26 年 12 月 21 日補正第 39 稿作成追加分）

・本稿中「*京都大学大学文書館（木下広次（初代総長）関係資料）の件」で当時御高配

を賜った京都大学名誉教授松尾尊允先生（1929～2014）には平成 26 年 12 月 14 日長逝された。謹んで御冥福をお祈りいたします。（平成 26 年 12 月 19 日追加）

〈<http://www.kyoto-np.co.jp/politics/article/20141217000131>〉

『京都新聞』（2014 年 12 月 17 日 21 時 40 分）

「松尾尊允氏死去 京都大名誉教授

松尾尊允氏（まつお・たかよし＝京都大名誉教授、現代史学）14 日午前 10 時 30 分、悪性リンパ腫のため京都市内の病院で死去、85 歳。鳥取市出身。葬儀・告別式は済ませた。喪主は長男新（あらた）氏。

大正時代の政治社会史研究の第一人者で、京都新聞「現代のことば」を執筆した。」

※4（平成 27 年 3 月 9 日補正第 40 稿作成追加分）

・本稿中「1 略年譜 ＊京都帝国大学法科大学在任中試験問題関係（抄） …64」中に下記文献を追加。いずれ補正予定でいる。（平成 27 年 3 月 9 日追加）

・『東西大学 法律 政治 経済科試験問題』（進化堂、明治 43 年 9 月 5 日刊）（「法制史」参照。近代デジタルライブラリー〈<http://www.ndl.go.jp/>〉にあり。）（平成 27 年 3 月 7 日井上琢也先生の御教示による。）

・『東西大学 法律 政治 経済科試験問題』（文信社、大正 3 年 2 月 1 日初版刊、大正 5 年 12 月 20 日改訂 4 版刊、大正 6 年 9 月 30 日増訂第 5 版刊）（「法制史」参照。近代デジタルライブラリー〈<http://www.ndl.go.jp/>〉にあり。）（平成 27 年 3 月 7 日井上琢也先生の御教示による。）

※5（平成 27 年 5 月 31 日補正第 41 稿追加分）

・CiNii〈<http://ci.nii.ac.jp/>〉オープンアクセス分につき再検討の余地あり。例えば、「池辺義象」、「小中村義象」「小中村清矩」等で検索のこと。（平成 27 年 5 月 31 日追加）

・木龍美代子氏のツイッター（本来は谷崎潤一郎研究のためのものであるが、小中村清矩検討関係でも寔に貴重である。）（平成 27 年 5 月 31 日追加）

〈<https://twitter.com/miyokosroom/status/512962210067263488>〉等。

※6（平成 27 年 10 月 10 日補正第 42 稿追加分）

・佐佐木信綱博士（1872～1963）関係文献追加（平成 27 年 10 月 10 日追加）

佐佐木信綱博士の著作は膨大なものがあるが、自伝関係文献中重要なもののみ抽出しておくこととする。小中村清矩博士関係の記載はあるが、池辺義象氏については何故か単独の記載は存在しない。ただ、池辺義象氏の生きた時代背景がよくわかることからいずれも貴重な著作である。

〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BD%90%E4%BD%90%E6%9C%A8%E4%BF%A1%E7%B6%B1>〉

・佐佐木信綱『明治文学の片影』（中央公論社、昭和 9 年 10 月 25 日刊）（藤岡作太郎の京都文科大学教授就任辞退の件については 242、243 頁参照。）

・佐佐木信綱『ある老歌人の思ひ出 自伝と交友の面影』（朝日新聞社、昭和 28 年 10 月

25 日刊)

・佐佐木信綱『作歌八十二年』(毎日新聞社、昭和 34 年 5 月 25 日刊)

(小中村清矩関係: 22、23 頁。池辺義象関係: 129 頁)(このみ平成 30 年 10 月 10 日追加)

・佐佐木信綱『明治大正昭和の人々』(新樹社、昭和 36 年 1 月 30 日刊)(小中村清矩: 15～16 頁、池辺義象: 235～236 頁)(このみ平成 30 年 12 月 18 日追加)

※7 (平成 29 年 7 月 20 日補正第 43 稿追加分)

・大沼宜規氏(1971～)「池辺義象の日記—古典講習科生徒の青春—」『日本史学集録』第 37 号(平成 27 年 12 月 31 日刊) 31～61 頁 ⇒本論考により本稿全面改訂の要ありか。

〈<http://ci.nii.ac.jp/naid/40021201688/>〉

※8 (平成 29 年 7 月 23 日補正第 44 稿追加分)

・西尾市・岩瀬文庫所蔵池辺義象半自叙伝「千代のかたみ」が HP で公開されたことから、本稿は全面的に改稿の要があるが、取り敢えずは文献紹介のみにとどめざるを得ないことをお断りしておく。(平成 29 (2017) 年 7 月 23 日記)

〈<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11E0/WJJS06U/2321315100/2321315100100010?hid=ht086790>〉 ⇒「千代のかたみ」全文テキストへのリンクあり。

※9 (平成 29 年 8 月 30 日補正第 45 稿追加分)

・池辺義象を谷干城に紹介した土佐人今橋巖(未詳～1899)について再度言及した。

[追加 2] 平成 30 (2018) 年 1 月 1 日 (月)

『CD 版 ローマ法、法制史、明治警察史及び日本統治下台湾警察史の諸問題—ローマ法・法制史学者著作目録選(第十三輯)—明治警察史雑纂(第四輯)—日本統治下台湾警察史雑纂(第八輯)—』(平成 30 (2018) 年 1 月 1 日刊) 作成以後の追加事項

(関係文献等追加)

※10 (平成 30 年 9 月 10 日補正第 46 稿追加分)

・「平成 29 (2017) 年 8 月 30 日補正第 45 稿」を『CD 版 ローマ法、法制史、明治警察史及び日本統治下台湾警察史の諸問題—ローマ法・法制史学者著作目録選(第十三輯)—明治警察史雑纂(第四輯)—日本統治下台湾警察史雑纂(第八輯)—』(平成 30 (2018) 年 1 月 1 日刊) 中に収録した。

・本文にある下記「*小中村家人物史一斑」中「(小中村清矩住居の転居関係)」に関し、追加稿「小中村清矩の最後の根岸邸について(1)」をここに記載した。

(平成 30 (2018) 年 10 月 19 日一部修正)

「	* 小中村家人物史一斑…………… *	
	(参考 1) 小中村清名の動静の件 …………… *	
	(参考 2) 小中村清象の動静の件 …………… *	
	(参考 3) 『小中村清矩日記』に見たる本件関係事項抄 …………… *	
	(小中村清矩の家族関係) …………… *	
	(小中村清矩住居の転居関係) …………… *	
	(小中村家のその後の状況) …………… *	」

(小中村清矩住居の転居関係) 追加稿 1

小中村清矩の最後の根岸邸について (1)

小中村清矩、池辺義象両氏のパーソナルヒストリー研究については、夙に有名な昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第 2 巻 ((昭和女子大学) 光葉会、昭和 31 年 4 月 10 日刊) 中「小中村清矩」口絵、10～11 頁、301～338 頁 (302～303、307～308、「5、遺跡、遺族」: 334～338 頁、447 頁)、同編『近代文学研究叢書』第 22 巻 (昭和女子大学、昭和 39 年 12 月 1 日刊) 中「池辺義象」口絵、10、17～92、447 頁等があったが、その後平成 22 (2010) 年に大沼宜規氏 (1971～) 編著『小中村清矩日記』(汲古書院、平成 22 年 7 月 15 日刊) が刊行されたことから、かなりのことが判明するに至った。

〈<http://www.kyuko.asia/book/b68286.html>〉

しかるに、小中村清矩が晩年を過ごした根岸 (根岸では少なくとも一回転居していることが判明しているが、ここでは清矩が根岸に居た最後の場所を指す。) と駒込西片町十番地の邸宅中、根岸の家のことについてはなお不明なことが多い。下記の根岸の家は明治 31 (1898) 年 1 月の小中村義象離縁時には小中村清矩後室等遺族が住んでおり、離縁問題に言及する小中村義象の木下広次宛書状には頻出することから興味深い場所であるが、清矩が居住していたところとは断定できない。なお、上記『近代文学研究叢書』第 2 巻「小中村清矩」336 頁では、小中村家の本籍は「上根岸町 111 番地」と記している。

ところで、『三村竹清集 4』(青裳堂書店、昭和 58 年 5 月 25 日刊) 所収「成瀬大域」(393 頁～403 頁、成瀬大域: 温、1827～1902) 393 頁に「其頃大域先生は、上根岸の木の実庵の先の横町、三島様 [元三島神社のこと] の反対に右へ曲つて左側に居られ、黒く塗った立派な長屋門の堂々たる構えであつた。」、399 頁に「私が伺つた頃は、もう先生は、御隠殿の下に移って居られた。前が小中村清矩博士、筋向ふに寒川鼠骨さんがゐた。鶯横町から正岡子規の家の前を通つて鉤に曲つても行かれる所だった。」とある。

なお、当時の根岸検討に最も重要なものに有名な『東京下谷 根岸及近傍図』があるが、今回改めてネット検索したところ、詳細はよくわからないものの株式会社 **Stroly** の下記アドレスで見ることができることがわかった。寔に貴重である。このことには長く気がつかず、お恥ずかしい次第である。〈<https://stroly.com/maps/3739/>〉

そこで、小中村家及び成瀬家関係者の回想録の類を再度ネット検索したところ、成瀬大域氏の令息成瀬無極博士 (清、1885～1958) に、例えば下記のものがある。池辺義象はじめ小中村家関係者のものは寡聞にして知らない。

・①成瀬無極「十五歳のころ」『木の実を拾ふ』(白水社、昭和 15 年 11 月 30 日刊) 251～260 頁 (初出『日本評論』昭和 15 年 4 月)

・②成瀬無極「呉竹の里と三崎が原」『面影草』(北隆館、昭和 22 年 4 月 25 日刊) 31

～42 頁（初出調査中）

・③成瀬無極「根岸の思ひ出」『無極集』（法律文化社、昭和 34 年 11 月 3 日刊）420～436 頁（初出調査中、執筆日付：末尾に「(昭 30・3)」とある。）

成瀬博士の根岸回想は他にも多々あるかと思われるが、取り敢えずこの三稿で関係部分を整理すると、次のようになる。これらは重複するところが多いが、ここでは一番詳しい③に拠るとともに、併せ、上記『東京下谷 根岸及近傍図』を使用した。

これからすると、成瀬家のもともとの住居は上根岸町 60 番地（③422 頁。三村竹清氏 393 頁）であり、その別荘として上根岸町 105 番地のものがあつた（③424 頁。三村竹清氏 399 頁）が、明治 30（1897）年頃事情あつて上根岸町 60 番地の本宅を売却し、上根岸町 105 番地に移つた（③424 頁）とのことである。これが「御隠殿の下」の住居といわれるものである。上根岸町 105 番地とあるが、成瀬氏の文面から見て敷地としてはかなり広く、少なくとも 103、104、105 番地を含むものかと思われる（『東京下谷 根岸及近傍図』参照。）。

加えて、幸いなことに、向かいの小中村家についての記述が③424～425 頁に見られるが、これによれば、当時の小中村家の住所は上根岸町 88 番地かと思われる（上記『東京下谷 根岸及近傍図』で見ると番地としては 3 区画あるが、上記三村竹清氏 399 頁の記述からするとおそらく下部（南側）の一区画か二区画の部分ではないか。）。この頃は小中村清矩博士は既に明治 28（1895）年 10 月に逝去しており、博士三男の小中村三作氏（1863～1933）の時代であるが、当該地は小中村清矩博士逝去後に移転した住居かもわからない。なお、その後事情あつて同家は「倒産」との由である（③425 頁）。これで、おそらく小中村家と根岸の縁は切れると思われる。

しからは、小中村家の本籍地として出ている「上根岸町 111 番地」（『近代文学研究叢書 2』「小中村清矩」336 頁）とは一体何かということになるが、上記大沼宜規編著『小中村清矩日記』（汲古書院、平成 22 年 7 月 15 日刊）でもこの時期の日記が一部失われていること等から記載されておらず、それ以前又はその後に同家が「上根岸町 111 番地」に転居しているのか、あるいは、何か理由あつて本籍地として「上根岸町 111 番地」を届けたのかなどこのあたりはよくわからない。今後の課題である。しかし、三村竹清氏、成瀬無極博士が言及されていることから、明治 30（1897）年頃の小中村家の番地は「上根岸町 88 番地」であると見てよいのではないかと史料される。なお、三村竹清氏 399 頁がいう成瀬家筋向いに居住の寒川鼠骨氏（1875～1954）の住宅云々の件については、ここでは触れない。寒川氏と正岡子規（1867～1902）との有名な関係を含め、追つて別に言及したいと思う。

（以下「小坂象堂」の件は平成 30 年 11 月 5 日追加）

ちなみに、「上根岸町 111 番地」には、明治 31（1898）年末から 32 年 6 月にかけては、夭逝した画家の小坂象堂（力松、1870～1899）が居住していたという。

・『象堂遺芳』（画報社、明治 32 年 7 月 23 日刊）8 丁裏

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/850827/12?tocOpened=1>〉

〈<https://kotobank.jp/word/%E5%B0%8F%E5%9D%82%E8%B1%A1%E5%A0%82-1074673>〉

・柴田宵曲（1897～1966）『柴田宵曲文集』第4巻（小澤書店、平成4年9月20日刊）
121頁

※11（平成30年10月19日補正第47稿追加分）

- ・表題に副題「—小中村清矩博士との関連で—」を追加した。
- ・東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館 HP 所蔵「一高・文芸部」関係写真の件を本文右記中に追加した。⇒「1 略年譜 *〔肖像〕」
- ・浅井忠及び井上密両者関係の件を本文中に追加した。
- ・前稿「(小中村清矩住居の転居関係) 追加稿 1 小中村清矩の最後の根岸邸について(1)」の追加稿「(小中村清矩住居の転居関係) 追加稿 2 小中村清矩の最後の根岸邸について(2)」を下記に記載した。

（小中村清矩住居の転居関係）追加稿 2

小中村清矩の最後の根岸邸について（2）—森鷗外及び正岡子規根岸旧宅との
関連も含めて— 一続・小中村清矩博士の下谷・根岸邸はどこにあったのか—

1 はじめに

先に「小中村清矩博士の下谷・根岸邸はどこにあったのか—明治法制史の一齣—明治法制史の一齣—」（平成30〈2018〉年9月29日稿）を作成したが、その後知人の示教を受け訂正すべきところが出てきたので、再度言及しておくことしたい。（※10〈平成30年9月10日補正第46稿追加分〉記載参照。）

前回までは『小中村清矩日記』296頁にいう「明治21（1888）年6月13日（本年の重事）6月13日根岸大塚より同処中村へ転居」について、根岸大塚「東京府下北豊嶋郡金杉村375番地」（現在の台東区根岸4丁目16番地付近）からの移転先である「同処中村」の地名番地を確定できていなかったが、これが「東京府下北豊嶋郡金杉村332番地」（その後、下谷区金杉村332番地、⇒下谷区中根岸町88、89、90番地付近、⇒現在は台東区根岸3丁目13番付近）であることが判明した。その結果、前稿で記載した小中村清矩遺族が明治30（1897）年頃に居住していた「下谷区上根岸町88番地」はおそらく小中村清矩逝去後に転居した場所かと推測される。ただし、昭和30年代初め頃調べの同家本籍地「台東区上根岸町111番地」（現在の「台東区根岸2丁目21番」付近）との関係については、依然として不明であることから、これは更に検討する必要がある。

2 前回までの調査結果

・明治30年前後の根岸検討に最も重要な大槻文彦博士（1847～1928）の『東京下谷 根岸及近傍図』（根岸倶楽部、明治34（1901）年1月3日刊）は、現在ではネット上には詳細はよくわからないものの株式会社 Stroly の下記アドレスで見ることができる。

〈<https://stroly.com/maps/3739/>〉なお、同図については、差し当たり馬渕礼子氏（1949

～)「東京下谷根岸及近傍図」『馬淵礼子評論集 2 歌の青春』(短歌研究社、平成 18 年 7 月 19 日刊) 274～322 頁に詳しい。ここには同図の縮刷版もある。

・昭和 30 年代初めの小中村家の本籍地は台東区上根岸町 111 番地(現在の「台東区根岸 2 丁目 21 番」付近)との由。

昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第 2 卷((昭和女子大学)光葉会、昭和 31 年 4 月 10 日刊)中「小中村清矩」口絵、10～11 頁、301～338 頁(302～303、307～308、「5、遺跡、遺族」: 334～338、447 頁)参照。

上記『近代文学研究叢書』第 2 卷「小中村清矩」336 頁は、「[中村秋香(1841～1910)の誄辞にいう]根岸の別荘は[現在では]いつことも知る由もない。」という。

・明治 18(1885)年 11 月 3 日(火)『読売新聞』朝刊「転居」広告(「ヨミダス歴史館」に拠る。同日 4/4 頁)(同年 11 月 6、7 日にも同文広告あり。)

「転居 下谷区茅町貳丁目拾貳番地 小中村清矩」

・その後明治 19(1886)年 7 月頃には東京府下北豊嶋郡金杉村に転居(『小中村清矩日記』160 頁上段)か。

小中村清矩『歌舞音楽略史』(著述者兼発行人 小中村清矩、明治 21 年 2 月 27 日刊)には、小中村の住所は「東京府下北豊嶋郡金杉村 375 番地」とある。「金杉村 375 番地」は字では「大塚」であり、識者によれば、「東京府下北豊嶋郡金杉村 375 番地」はその後「下谷区下根岸町 24 番地」となり、現在の「台東区根岸 4 丁目 16 番地」付近との由である。

・『小中村清矩日記』明治 21 年 2～3 月には転居関係記事が頻出す。なお、2 月 10 日条(229 頁下段)には「阿部邸内売家」(おそらく駒込西片町の阿部邸)の件が出ているので、最後の住居である本郷区駒込西片町も早くから転居対象地であったようである。

・明治 21(1888)年 6 月 13 日「(本年の重事) 6 月 13 日根岸大塚より同処中村へ転居」との由。

大沼宜規氏(1971～)編著『小中村清矩日記』(汲古書院、平成 22 年 7 月 15 日刊) 252 頁上、296 頁下

・[明治 22 年(1889 年) 5 月 1 日: 市制・町村制施行にともない、金杉村のうち石神井用水(音無川)より南の土地が下谷区内に編入される。⇒東京市誕生。]

[明治 24 年 3 月に字名変更により下谷区金杉村は上根岸町、中根岸町、下根岸町の三町となった。石神井用水より北の土地は東京府北豊島郡日暮里村字金杉となった。それまで「区」の中に「村」が存在していた。]

〈 [https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A0%B9%E5%B2%B8\(%E5%8F%B0%E6%9D%B1%E5%8C%BA\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A0%B9%E5%B2%B8(%E5%8F%B0%E6%9D%B1%E5%8C%BA)) 〉

〈 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8B%E8%B0%B7%E5%8C%BA> 〉

・明治 23(1890)年 10 月 10 日 本郷区駒込西片町拾番地に転居(『小中村清矩日記』415 頁上段)

・明治 23(1890)年 10 月 29 日(水)『読売新聞』朝刊「転居」広告(「ヨミダス歴史館」に拠る。同日 4/4 頁)

「転居 本郷区駒込西片町拾番地 小中村清矩」

「小中村清矩」335 頁参照、「西片町十番地にノ三十号の家」との記載あり

『小中村清矩日記』には根岸邸は三男小中村三作に譲るも頻繁に根岸邸と西片町邸とを往来の記載あり。

- ・明治 28 (1895 年) 10 月 11 日 小中村清矩、本郷区駒込西片町拾番地で逝去
- ・明治 30 (1897) 年前後 小中村家遺族は上根岸町 88 番地に転居か。その後「没落」(下記成瀬無極氏稿) との由。

成瀬無極 (1885～1958) 「根岸の思ひ出」『無極集』(法律文化社、昭和 34 年 11 月 3 日刊) 420-436 頁中 425 頁 (初出不明、執筆日付: 末尾に「(昭 30・3)」とある。)

〈<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1669876/1/225>〉

三村竹清 (1876～1953) 『三村竹清集 4』(青裳堂書店、昭和 58 年 5 月 25 日刊) 中「成瀬大域」(393-403 頁、成瀬大域: 温 (ゆたか)、1827～1902) 393 頁

- ・この時点での疑問点としては、次のことがある。
 - ・本籍地という上根岸町 111 番地との関係が不明。上根岸町 88、111 番地は字としては「杉崎」のため、上根岸町 88 番地に転居では明治 21 (1888) 年 6 月 13 日「(本年の重事) 6 月 13 日根岸大塚より同処中村へ転居」のことではない。「上根岸町 111 番地」とは何か。

(1) 「下谷区金杉村三百三十二番地」(「根岸中村」) 転居の件

・大沼宜規氏 (1971～) 編著『小中村清矩日記』(汲古書院、平成 22 年 7 月 15 日刊) を 8 年ぶりに再読し、既述 (252 頁上 6 月 13 日条 転居の件、296 頁下 本年の重事 6 月 13 日「根岸大塚より同処中村へ転居。」) に加え、「237 頁下 明治 21 年 3 月 30 日条 331 番地の件、239 頁下 4 月 4 日条 332 番地の件」を見いだした。初読当時は根岸界隈の地歴知識に疎くてよくわからずそのままにしていたのではと痛く反省す。331 番地、332 番地は金杉村の番地と思われるので、識者にお聞きしたところ、「明治 28 年の地図では中根岸町 88、89、90 番地にあたる。現在の地名番地は、(一部省略) 台東区根岸 3 丁目 13 番付近である。」(平成 30 年 10 月 5 日回答) とのことであった。

・更に、『東京百事便』(三三文房、明治 23 年 7 月 9 日刊) 495 頁 (国会図書館デジタルコレクション 258 コマ)、497 頁 (同 259 コマ) を見るに、小中村清矩の当時の住所については、「下谷区金杉村三百三十二番地」とある。『東京百事便』については、今までまったく知らなかったが、寔に貴重なものであり、詳しくは後述する。

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991721/336>〉

なお、『東京百事便』の作成方については下記参照。

〈<https://fujimizaka.wordpress.com/2016/02/03/luxun-29/>〉

・また、三村竹清日記「不秋草堂日暦 (26)」『演劇研究』第 41 号 (早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、平成 30 年 3 月 16 日刊) 72～73 頁は、昭和 9 年 10 月 21 日条で「小中村清矩氏自伝」を筆写したものを活字化しているが、「明治卅二 (<ママ> 廿二の筆写間違いか。) 年十月二十二日東京下谷区金杉村三百三十二番地 小中村清矩」とあり、これでも確認できる。(このみ平成 30 年 12 月 18 日追加)

- ・いずれにせよ、中根岸町は「金杉村中村」であり、「根岸大塚より同処中村へ転居。」へ

の記述はこれを指すことが判明した。その後の『小中村清矩日記』の根岸関連の記述は当地でのことを指すものかと思われる。小中村清矩は、ここから、明治 23 (1890) 年 10 月に「本郷区駒込西片町拾番地」に転居するが、根岸の同邸とは頻りに往来している。

・本籍地という上根岸町 111 番地との関係は、現時点でもなお不明である。また、小中村清矩遺族が居住していた上根岸町 88 番地は、小中村清矩逝去後になんらかの理由があつて転居したものかと思われる。

(以下「小坂象堂」の件は平成 30 年 11 月 5 日追加)

先にも言及したが、「上根岸町 111 番地」には明治 31 (1898) 年末から 32 年 6 月にかけては、夭逝した画家の小坂象堂 (力松、1870~1899) が居住していたという。

・『象堂遺芳』(画報社、明治 32 年 7 月 23 日刊) 8 丁裏

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/850827/12?tocOpened=1>〉

〈<https://kotobank.jp/word/%E5%B0%8F%E5%9D%82%E8%B1%A1%E5%A0%82-1074673>〉

・柴田宵曲 (1897~1966) 『柴田宵曲文集』第 4 卷 (小澤書店、平成 4 年 9 月 20 日刊) 121 頁

(2) 森鷗外及び正岡子規旧居 (上根岸町 88 番地) の件

・明治 30 年頃に小中村清矩遺族が居住していた下谷区上根岸町 88 番地 (陸羯南 (1857~1907) 宅西隣) であるが、同番地は正岡子規 (1867~1902) が現在子規庵がある上根岸町 82 番地 (陸羯南宅東隣) に明治 27 年 2 月 1 日に転居する前に明治 25 年 2 月 29 日から約 2 年間居住していた地として知られており、また、森鷗外 (1862~1922) が赤松登志子 (1871~1900) と結婚して最初に住んだ土地とも聞いていたので、一、二調べてみた。

・その際、知人より森まゆみ氏 (1954~) 『鷗外の坂』(新潮社、平成 9 年 11 月 20 日刊) 126~133 頁及び上杉伸夫氏「鷗外旧居考」『鷗外』59 号 (森鷗外記念会、平成 8 年 7 月 9 日刊) 247~267 頁の教示を受けた。森氏によれば、鷗外が明治 22 (1889) 年 1~5 月の間根岸に住んでいた住居地の定説は「下谷根岸金杉 122 番地」であるが、その根拠は『読売新聞』明治 22 年 1 月 16 日掲載の良崖医生 (鷗外筆名) 「見立てちがひ」中の記載事項とのことである。ここが後年の「下谷区上根岸町 88 番地」に当たり、これらについては上杉伸夫氏の上記論考があるとのことであった。上杉氏の「鷗外旧居考」は詳細なものであるが、それによれば、「上根岸町 88 番地」は「単に金杉村百二十二番地に対応しているのではなく「百十六、十九、二十、廿一、廿二番地」を包含したものとのことである。これはおそらく所有者の便宜を考えてのこととされる。子規が「上根岸町 88 番地」に住んでいた時に鷗外旧居と同じ 88 番地中の元の「金杉村 122 番地」に居住していたのは、高名な画家の巨勢小石 (こせ、1843~1919) であつて、子規は別の家にいたようである。

・巨勢小石は明治 23 (1890) 年から東京美術学校教授として 5 年間在京したとの由であるが、その後居住者が替わり、三村竹清氏や成瀬無極氏の回想によれば明治 30 年頃には小中村清矩遺族が住んでおり、その前の家が書家の成瀬大域 (温 (ゆたか)、1827~1902) 邸であつたようである。

・上杉伸夫氏は巨勢小石が同番地に居住していたことを前掲『東京百事便』（三三文房、明治23年7月9日刊）504頁、263コマで見い出されたとのことである。

（国会図書館デジタルコレクション：<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991721/336>）

・当時の著名人の住所等について簡単に一度に調べられる方法はないかと前々から思っていたが、同書はまさにそのためのものであり、これによって、小中村清矩の住所を検索し、上述のように、「下谷区金杉村三百三十二番地」のことが確認された次第である。知ってしまえばどうということはないことであるが、無知とはおそろしい。大きな道草を喰ってしまい寔に遺憾である。

・『東京百事便』の作成過程については、幸田露伴「書生商人」（明治25年12月）（現在では、『露伴全集』第2巻〈岩波書店、昭和25年8月20日刊〉151～167頁中164～166頁参照。同書164頁にいう『東京通鑑』が『東京百事便』のこととの由）
<https://fujimizaka.wordpress.com/2016/02/03/luxun-29/> 参照。

・『東京下谷 根岸及近傍図』（根岸倶楽部、明治34年1月3日刊）については、森まゆみ氏『子規の音』（新潮社、平成29年4月25日刊）356～364頁も参考になる。

・改めて、森まゆみ氏『鷗外の坂』（新潮社、平成9年11月20日刊）126～133頁及び上杉伸夫氏「鷗外旧居考」の御示教に与った知人の御厚情に深甚の謝意を表するものである。

※12（平成30年11月5日補正第48稿追加分）

・既出「1 略年譜 *追悼記」中の「杉浦鋼太郎氏「藤園池辺義象大人の霊前に」」の初出『神廻道』第144号「彙報」36頁には、「池辺義象氏の追悼会」と題した下記の文面があり、当日の状況が判明する。

「会は武島〔羽衣か?、1872～1967〕、本居〔清造か?、1873～1958〕、鳥野〔幸次か?、1873～1961〕、佐藤〔球か? 1856～1926。「佐藤球（たまき）」とすると佐佐木信綱『明治大正昭和の人々』（新樹社、昭和36年1月30日刊）31頁参照。〕等諸氏の斡旋にて七月十六日に富士見軒〔当時九段坂にあった有名な西洋料理店のことか?〕に於て催さる、藤岡〔好春か?、昭和9年2月現在神宮奉斎会専務理事〕神宮奉斎会東京支長が祭主を勤められ杉浦〔杉浦鋼太郎、1857～1942〕氏の追悼辞あり、食卓につき今泉〔定助、1863～1944〕氏発起人総代として挨拶あり、それより篠田〔時化雄、京都・精華女学校創立者〕今井〔彦三郎（斐巳）か?、1868～1944〕千葉〔胤明、1864～1953〕等諸氏の追悼談あり、田中光顕伯〔1843～1944〕より送られたる和歌を鳥野氏朗詠せられしが妙声実に驚嘆に余りあり、当日は生憎山本信哉氏〔1863～1944〕の博士になられし招待会とかちあひ、それに赴きし人の多かりしため博士連の出席は少なりしが出席者は入江〔為守、1868～1936〕御歌所長、関根〔正直、1860～1942〕博士、古賀鶴所〔マ、賀古鶴所〈1855～1931〉のことか?〕、與謝■寛〔一字不明、与謝野鉄幹、1873～1935〕氏等八十余名に及びたり」

当初文中「鳥野」氏のことを「島野」氏と誤記していたところ、知人より高名な歌人である鳥野幸次氏（1873～1961）のこととの指摘を受け、改めて原本に当たって再確認した。不明を恥じる次第である。ついては、本文中のものも訂正した。

・小中村家の本籍地である「上根岸町111番地」に、明治31（1898）年末から32年6月にかけては、夭逝した画家の小坂象堂（力松、1870～1899）が居住していたことが判明したので、上記※10（平成30年9月10日補正第46稿追加分）及び※11（平成30年10月19日補正第47稿追加分）中に追加した。

※13（平成 30 年 12 月 18 日補正第 49 稿追加分）

・パソコン技術上（検索都合）の故あって、表題を従前の「池辺義象氏（1861～1923）著作目録（新訂・初稿）—小中村清矩博士との関連で—」から「池辺義象（1861～1923）氏の特別検討 池辺義象氏著作目録（新訂・初稿）—小中村清矩博士との関連で—」に変更した。（その後再度変更した。）

・全体にわたり誤植等を修正するとともに、追加すべきは追加した。

※14（平成 31 年 3 月 21 日補正第 50 稿追加分）

・上記※13 で言及した表題変更を元に戻した。

・下記関係文献等を追加する。

・藤田大誠「近代国学と日本法制史」『國學院大學紀要』第 50 卷（平成 24 年 2 月 14 日刊）105～132 頁（本稿前掲の法制史学会第 415 回近畿部会（2010 年 12 月 18 日）於京都大学法経本館 3 階小会議室・藤田大誠（國學院大學人間開発学部健康体育学科准教授）報告「近代国学と日本法制史」を活字化したもの）

・日本近世文芸の研究者で藤岡作太郎研究でも多大の御業績を残された木越治先生（1948～2018）には平成 30（2018）年 2 月 23 日逝去された。先生からはかつて諸々の御示教に与るとともに貴重な翻刻本『藤岡作太郎日記』の御恵投に与った。御冥福をお祈り申し上げます。

〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%A8%E8%B6%8A%E6%B2%BB>〉

〈<http://www.sophiakai.gr.jp/news/news/2018/2018030901.html>〉

〈<https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/ga/63603>〉

・國學院大學デジタル・ミュージアムの開設

「国学・神道関係人物研究情報データベース」⇒「池辺義象」

〈http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/dbTop.do;jsessionid=934C96F7825101D646ABC173D7437780?class_name=col_jmk〉

〈http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/detail.do;jsessionid=AA41EA4A486161D822E5B729EF3E6A54?class_name=col_jmk&data_id=106960〉

※15（令和 2 年 7 月 27 日補正第 51 稿追加分）

・下記関係文献等を追加する。

・國學院大學デジタル・ミュージアム「明治期国学・神道・宗教関係人物データベース」⇒「小中村清矩」

〈http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/detail.do;jsessionid=AA41EA4A486161D822E5B729EF3E6A54?class_name=col_jmk&data_id=106867〉

⇒同「池辺義象」

〈http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/dbSearchList.do?class_name=col_jmk&search_condition_type=1&db_search_condition_type=3&View=0&focus_type=0&startNo=1&name_search_j=%E6%B1%A0%E8%BE%BA%E7%BE%A9%E8%B1%A1&name_search_j〉

Ta=1&calendar_j=&calendar_j Ta=1&calendar_e=&calendar_e Ta=1&school=&school Ta=1&keyword=&harmoty_calendar=>

- ・大沼宜規「晩年の小中村清矩」『近代史料研究』第7号（平成19年刊）
- ・大沼宜規「紀伊藩古学館時代の小中村清矩」『近代史料研究』第13号（平成25年刊）
- ・並木誠士・青木美保子編『京都近代美術工芸のネットワーク』（思文閣出版、平成29年3月31日刊）（池辺義象関係：12、20～25、111、123、196、221頁）
- ・齋藤公太「池辺義象の日本法制史研究と祭政一致論」國學院大學研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集『近代の神道と社会』（弘文堂、令和2年2月刊）（令和2年7月27日追加）

<<https://www.kokugakuin.ac.jp/research/oard/researchcenter/%E5%88%8A%E8%A1%8C%E7%89%A9%E4%B8%80%E8%A6%A7%E8%BF%91%E4%BB%A3%E3%81%AE%E7%A5%9E%E9%81%93%E3%81%A8%E7%A4%BE%E4%BC%9A>>

- ・大沼宜規「「国学考証派」にとっての明治国家一官吏としての調査活動一」中野目徹（1960～）編『官僚制の思想史 近現代日本社会の断面』（吉川弘文館、令和2年6月1日刊）120～144頁

<<http://www.yoshikawa-k.co.jp/book/b508718.html>>

※16（令和3年11月19日補正第52稿追加分）

- ・レイアウトを全面変更した。

（文献追加）

- ・大沼宜規（1971～）『考証の世紀—十九世紀日本の国学考証派—』（吉川弘文館、令和3年3月10日刊）16、280、286、287、289、293～300、316頁（第三部「国学考証派」にとっての明治 第二章「国学考証派」の後継者としての池辺義象：280～308頁）

<<http://www.yoshikawa-k.co.jp/book/b555744.html>>

- ・陣野英則（1965～）『藤岡作太郎「文明史」の構想 近代「国文学」の肖像 2』（岩波書店、令和3年8月18日刊）<<https://www.iwanami.co.jp/book/b587790.html>>

〔追加3〕令和4（2022）年4月1日（金）

『CD版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録—【参考篇】【附篇】—ローマ法・法制史学者著作目録選（第十五輯）—』（令和4（2022）年4月1日刊。補正第53稿を収録。）作成以後の追加事項

（関係文献等追加）

※17（令和4年4月1日補正第53稿追加分）

- ・一、二補正し、『CD版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録—【参考篇】【附篇】—ローマ法・法制史学者著作目録選（第十五輯）—』

(令和 4 (2022) 年 4 月 1 日刊) に収録した。

※18 (令和 4 年 6 月 26 日補正第 54 稿追加分)

・全体にわたり一、二補正した。

※19 (令和 5 (2023) 年 1 月 8 日 (日) 補正第 55 稿追加分)

・全体にわたり一、二補正した。

・以前「(7) 池辺義象氏筆記諸家講義録 (平成 23 年 6 月 9 日追加) ・愛知県の西尾市岩瀬文庫には、池辺義象氏筆記に係る諸家講義録が所蔵されている。
<<http://www.city.nishio.aichi.jp/nishio/kaforuda/40iwase/index.html>>」と記載したが、これらは、「西尾市岩瀬文庫／古典籍書誌データベース」で検索できる。

<<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/2321315100>>

うち、以下では、下記西尾市岩瀬文庫所蔵『宗吾大双紙講義』の件を追加するが、これに添付されていた兄池辺源太郎書翰は、明治 17 (1884) 年小中村家入籍頃の記載として貴重である。

「2018 年 1 月 27 日 (土) ～2018 年 4 月 08 日 (日)

こんな本があった!15

～岩瀬文庫平成悉皆調査中間報告 15～

<<https://iwasebunko.jp/event/exhibition/entry-297.html>>

II. 添付された書簡

[16] 『宗吾大双紙講義』 181 函 36 号

明治大正の法制史学者・国文学者の池辺義象 (当時は小中村義象、1861～1923) が、東京大学古典講習科の学生時代に、国学者の松岡明義 (1826～90) による講義を聴講筆記した講義録。中に、義象 24 歳の明治 17 年ごろ、郷里熊本の兄源太郎より寄せられた長文の書簡が添付されていた。この前年に義象の父軍次 [明治 16 (1883) 年 2 月逝去、54 歳] と弟竹雄が亡くなっており、いっぽうこの年 1 月に義象は師である小中村清矩の娘えいと結婚、婿養子に入っている。兄の手紙は、母親 [幾喜子] の無事と養子先での心得を教訓する。しかし、この結婚は 14 年後の明治 31 年に破局を迎え、義象は旧姓に戻ることを。」

⇒ 兄池辺源太郎書翰全文表示あり。

函番号 (資料番号) 181-36

旧書名 宗吾大双紙開題

<<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11F0/WJJS07U/2321315100/2321315100100010/mp01872900>>

※20 (令和 5 (2023) 年 4 月 3 日 (月) 補正第 56 稿追加分)

・小中村清名及び小中村清象両氏の件

小中村清名（1886～？（1931年小中村清象逝去後）、小中村清矩令孫、小中村家での池辺義象長男）、小中村清象（1890～1931、小中村清矩令孫、小中村家での池辺義象次男、清象が家督を継ぐ。）両氏の件については、前掲「*小中村家人物史一斑」で言及したが、村上こずえ・森本祥子「資料紹介 井上哲次郎『巽軒日記-大正三年-』」『東京大学史紀要』第40号（令和4（2022）年3月刊。1（108）～55（60）頁）中に小中村清名氏については4か所、小中村清象氏については21か所の記載がある。ただし残念なことにいずれも「来る」、「来状あり」との記載で詳しいことは不明である。なお、同号以前の「資料紹介 井上哲次郎『巽軒日記』」には両氏の件の記載は存在しない。

〈<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400185096.pdf>〉

なお、『東京大学史紀要』第41号（令和5（2023）年3月刊）には『巽軒日記』は未掲載。

（文献追加）

・井上俊輔（1953～）『忘れられた天才 井上毅』（国書刊行会、令和元（2019）年11月25日刊）5、661頁

〈<https://www.kokusho.co.jp/np/isbn/9784336065360/>〉

〔追加4〕令和6（2024）年1月1日（月）

『CD版 上山安敏先生・柴田光蔵先生・西村稔先生・宮崎道三郎博士・池辺義象氏・小林宏先生・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士略年譜・著作目録 附録：「日本ローマ法・法制史学者等略年譜・著作目録・追悼辞」掲載資料抄（追補）中田薫博士・瀧川政次郎博士・三浦周行博士・牧健二博士各関係資料抄 一ローマ法・法制史学者著作目録選（第十六輯）一』（令和6（2024）年1月1日刊。補正第57稿を収録。）作成以後の追加事項

※21（令和6（2024）年1月1日（月）補正第57稿追加分）

・本稿が電子版であることに鑑み、今回は黒赤二色を使用した。
・三村竹清日記「不秋草堂日暦（27）」『演劇研究』第42号（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、平成31（2019）年3月15日刊）67頁下段、昭和10年7月19日条に、「小中村清矩さんハ（中略）池辺義象ハ落合「直文」なとか誘ひて 柳橋へ引はり出せし事もあり家内〔ゑい（栄、1860（万延元年3月31日）～1932.5.12、）か愒（翻刻本原字はなぜか「女」+「吝」）気もあり 三作〔小中村三作、義弟（清矩三男）、1863～1933〕とも折合あしく とう / \ 離縁也云々（下略）」あり。（令和5（2023）年5月15日追加）
・（文献追加）池辺義象「純忠至誠の高美大人」『佐佐木高美大人』（猪狩又蔵（1873～1938）編、発行者石渡幸之輔、大正8（1919）年7月3日刊）「逸事及び感想」7～11頁は佐佐木高行侯爵、佐佐木高美との関係に詳しい。〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1906418/1/1>〉（令和6（2024）年1月1日追加）

(参考)

元号・西暦対照表

(平成 25 年 6 月 5 日追加、同 26 年 12 月 17 日、同 26 年 12 月 21 日、同 30 年 10 月 19 日、令和 2 年 7 月 27 日、同 3 年 11 月 20 日、同 5 年 1 月 8 日各一部修正)

〈<https://www.jcinfo.net/ja/useful/era>〉

〈https://www.jacar.archives.go.jp/apps/help/chronological_table.html〉

慶應元年 (4 月 7 日～)	1865 年	慶応 04 年 (～9 月 7 日)	1868 年
明治元年 (9 月 8 日～)	1868 年	明治 04 年	1871 年
明治 05 年	1872 年 (明治 5 年 12 月 3 日 ⇒太陽暦: 明治 6 年 1 月 1 日)		
明治 08 年	1875 年 (清・光緒元年)		
明治 10 年	1877 年	明治 15 年	1882 年
明治 20 年	1887 年	明治 25 年	1892 年
明治 30 年	1897 年	明治 33 年	1900 年
明治 35 年	1902 年	明治 40 年	1907 年
明治 41 年	1908 年 (清・光緒 34 年) (明治 42 年: 清・宣統元年、民国前 3 年)		
明治 44 年	1911 年 (清・辛亥革命)		
明治 45 年/大正元年 (7 月 30 日～)		1912 年 (中華民國元年、太陽暦採用)	
大正 05 年	1916 年	大正 10 年	1921 年
大正 15 年/昭和元年 (12 月 25 日～)		1926 年 (中華民國 15 年)	
昭和 05 年	1930 年	昭和 10 年	1935 年
昭和 15 年	1940 年	昭和 20 年	1945 年
昭和 25 年	1950 年	昭和 30 年	1955 年
昭和 35 年	1960 年	昭和 40 年	1965 年
昭和 45 年	1970 年	昭和 50 年	1975 年
昭和 55 年	1980 年	昭和 60 年	1985 年
昭和 64/平成元年	1989 年 (1 月 8 日改元)	平成 10 年	1998 年
平成 12 年	2000 年	平成 20 年	2008 年
平成 23 年	2011 年	(中華民國 100 年)	
平成 25 年	2013 年	平成 30 年	2018 年
平成 31 年/令和元年	2019 年 (5 月 1 日改元)		(中華民國 108 年)
令和 2 年	2020 年	令和 6 年	2024 年

別添

「明治、大正期朝日新聞紙面データベース (DB)」池辺義象氏関連分

(本稿前掲「2 著作目録 (8) 池辺義象氏関連新聞記事」参照。本資料 (No.1～No.96) については、平成 25 (2013) 年 2 月 12 日 (火) たまたま来日入浴中の沈佳姍女史の御高配に与った。記して深甚の謝意を表する次第である。)(平成 25 年 2 月 12 日追加、同年 5 月 29 日表形式補正)

	発行日	社／ 刊種	ペ ー 頁	掲 載 位 置	記 事 種 別	題名	關鍵字
1	1898年 7月10 日	東京 ／朝 刊	3 頁	3 段	記 事	寺尾氏等出発	寺尾亨法科大学教授, オランダ・ハーグ府, 外交史万国会議, 国際法協会開設, 横浜出帆カナダ船インデヤ号, バンクーバー, 林忠正仏国万国博覧会事務官長, 池辺義象, 斉藤甲四郎, 第5回パリ万国博覧会, パリ万博, 科学・技術, 教育・学習支援業, 娯楽業, 第5回パリ万博
2	1898年 7月10 日	東京 ／朝 刊	3 頁	5 段	記 事	池辺義象君におく れる歌どもの中に 落合直文	
3	1899年 3月17 日	東京 ／朝 刊	7 頁	4 段	記 事	新刊各種	土佐日記灯三冊, 富士谷御杖大人遺著, 国光社, 松陰先生批評東坡策, 吉川半七, 新選女子用文上巻, 池辺義象, 小野鷲堂, 対外施政の本道(非売品), 寺田彦太郎, 保険雑誌, 保険学会, 商業世界, 同文館, 東京青年雑誌, 学海社
4	1901年 2月13 日	東京 ／朝 刊	4 頁		広 告	(広告) 池辺義象 婦朝謹告す	
5	1901年 6月22 日	東京 ／朝 刊	8 頁		広 告	(広告) 明治書院 仏国風俗問答 池 辺義象	
6	1902年 10月3 日	東京 ／朝 刊	8 頁		広 告	(広告) 弘文館吉川 半七 世界読本 池 辺義象	
7	1902年 10月5 日	東京 ／朝 刊	8 頁		広 告	(広告) 金港堂書籍 株式会社 金港堂新 刊書類 小説千石岩 米光幽月 恩師の余 光 水出永三郎 少	

						年の友第三編 池辺 義象ほか	
8	1903年 11月23日	東京 ／朝 刊	6 頁	2 段	記 事	宮本武蔵の二天記 池辺義象	新免武蔵守藤原玄信, 岩流小次郎, 豊前小倉, 細川三斎, 長岡興長, 向島, 舟島, 岸流島, 木刀, 長光の刀, 吉岡又七郎清十郎, 兵法者の道, 播磨の人, 肥後千葉城, 飽田郡弓削村, 兵法天下一新免武蔵塚, 細川侯爵, 津田静一, 細川護久侯爵
9	1903年 12月22日	東京 ／朝 刊	3 頁	5 段	記 事	落合直文君を悼む 丸山正彦	池辺義象, 今泉定介, 桑原芳樹, 麻布連隊, 萩の屋, 落合直文
10	1904年 2月28日	東京 ／朝 刊	7 頁	6 段	記 事	新刊各種 美姫遺跡 (全) 日本文法論 (全)	池辺義象, 増田干信, 金港堂, 金沢庄三郎, 金港堂
11	1904年 7月18日	東京 ／朝 刊	6 頁	5 段	記 事	琵琶歌常陸丸 池辺 義象作	玄界灘, 須知中佐, 常陸丸事件, 日露戦争, 沈没, 常陸丸沈没
12	1904年 9月25日	東京 ／朝 刊	4 頁	4 段	記 事	演芸節用	常磐津林中, 文字太夫, 岸沢古式部, 長唄囃子連中, 芳村伊十郎, 杵屋六左衛門, 岡安喜代八, 杵屋勘五郎, 富士田音蔵, 慈善演芸会, 活動写真, 活人画, 浅井忠, 池辺義象, 西幸吉, 歌沢祝捷会予備病院, 寿座, 常磐木倶楽部, ロシア, 歌舞伎座, 日露戦争, 娯楽業, 祝勝会
13	1904年 12月12日	東京 ／朝 刊	6 頁	1 段	記 事	紀貫之朝臣の墓 京 都にて 池辺義象	青木徳之助, 叡山, 江州坂本村, 無動寺, 浄明寺山金蔵院山, キノツラ, 渡忠秋, 勘文, 敷島の道
14	1905年 2月27日	東京 ／朝 刊	8 頁	4 段	記 事	紀貫之卿の墓 池辺 義象<画>	比叡山雲起山, 大阪, 早川清吉, 渡忠秋翁
15	1905年 3月31日	東京 ／朝 刊	7 頁	1 段	記 事	翁草の予約出版	京都, 神沢貞幹, 遺稿・翁草, 池辺義象, 五車楼, 近世資料

16	1905年 6月21日	東京 ／朝 刊	5 頁	5 段	記 事	新刊紹介	商業大辞書, 同文館, 帝国軍人 読本(巻一), 池辺義象, 厚生 堂, 日本之小学教師(七十八 号), 人道(第二号), 軍人遺 族新報(第廿九号)
17	1905年 6月26日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 発行所 兵 書専売厚生堂 相沢 富蔵 帝国軍人読本 池辺義象	
18	1905年 8月15日	東京 ／朝 刊	5 頁	4 段	記 事	和歌欄	池辺義象
19	1905年 12月11日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 発行所合資 会社吉川弘文館 長 岡少尉 池辺義象	
20	1906年 3月19日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 合資会社吉 川弘文館 訂正増補 世界読本 池辺義象	
21	1907年 7月11日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 吉川弘文館 書翰文大観 池辺義 象編 小野鷺堂書	
22	1907年 8月21日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 吉川弘文館 書翰文大観 池辺義 象選	
23	1907年 9月7日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 合資会社吉 川弘文館 書翰文大 観 池辺義象撰 小 野鷺堂 一老侯爵の 人物撰抜標準 一女 学者の花嫁撰定標準	
24	1908年 12月20日	東京 ／朝 刊	4 頁	3 段	記 事	中学唱歌成る 委員 の苦心二閱年 新曲 の数総て三十	中等唱歌集, 文部省, 湯原元一 東京音楽学校長, 富尾木知佳, 鳥居忱, 武島又次郎, 乙骨三郎, 吉丸一昌, 島崎赤太郎, 楠美恩 三郎, 岡野貞一, 南能衛, 木村 正辞, 小野竹三, 土井林吉, 尾 上八郎, 池辺義象, 小金井喜美 子, 渡辺盛衛, 納所弁次郎, 小

							山作之助, 目賀田万世吉, 山田源一郎, 東京音楽学校, 東京芸術大学, 教育・学習支援業, 湯原東京音楽学校長
25	1908年 12月29日	東京 ／朝 刊	6 頁	5 段	記 事	筆蹟と人物 池辺義象君と大和田建樹君 S生<写>	落合直文, 第一高等学校, 国学院, 東京大学, 教育・学習支援業, 東京帝国大学, 東京帝大
26	1909年 5月16日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 隆文館 大日本文献全書 第一編輯 肥後文献叢書 発起人及び編輯担任者 池辺吉太郎 池辺義象 徳富猪一郎 ほか	
27	1909年 5月23日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 発兌 文泉堂 服部書店 売捌 大倉書店 女子消息 雁のつばさ 池辺義象	
28	1909年 5月28日	東京 ／朝 刊	6 頁	5 段	記 事	新刊雑書	法律大辞書, 同文館, 東京春陽堂, 女子消息かりのつばさ, 池辺義象, 文泉堂, 家庭必読伝染病予防法講話, 石原喜太郎, 春陽堂, 商工の天下, 望月小太郎, 英文通信社, 金色鳥, 巖谷小波, 博文館, 三四郎, 夏目漱石, 朝日新聞, 夏目金之助, 文学, 映像・音声・文字情報制作業
29	1909年 11月15日	東京 ／朝 刊	2 頁	3 段	記 事	池辺義象氏辞任(京都)	京都法科大学, 日本法制史, 東京, 京都帝国大学, 京都帝国大学法科大学, 京都大学法学部, 京都帝大, 学術・開発研究機関, 教育・学習支援業
30	1910年 3月14日	東京 ／朝 刊	5 頁	1 段	記 事	中等国語教科書に就て 各中学の教科書選択期	中等教科書, 教育屋, 落合直文, 中等国語読本, 吉田弥平, 中学国文教科書, 畠山健, 三土忠造, 池辺義象, 保科孝一, 大町芳衛, 森鷗外, 中学国語読本, 明治読

							本, 国語教本, 中等新読本, 中等国文読本, 教科書検定, 国定教科書, 教育・学習支援業, 行政機関, 国家公務, 文学, 森林太郎
31	1910年 3月29日	東京 ／朝 刊	3 頁	5 段	記 事	ぶらぶら日記(5) 名古屋にて 楚	支那忠, 静岡, 市村団一郎, パリ, 池辺義象, 池辺三山, 福岡共進会, 杉村楚人冠, 杉村広太郎, 池辺吉太郎, 鉄崑崙
32	1910年 9月20日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 吉川弘文堂 中島辰文堂 偉人幽 斎 池辺義象	
33	1910年 9月29日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 合資会社吉 川弘文館 評釈明倫 歌集 池辺義象監修 桜文会編	
34	1911年 1月12日	東京 ／朝 刊	6 頁	8 段	記 事	新刊雑書	御製謹註天津日影, 池辺義象・弥富浜雄共著, 後は昔の記, 朝鮮移住手引草, 最新動作遊戯法, 小林磯治・仲野宇一二共著, 芸者, 田村西男作, 近刊雑誌, 林董
35	1911年 2月8日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 発行と売捌 辰文館 吉川弘文館 林平次郎 松田庄助 御製謹註天津日影 池辺義象・弥富浜雄 合著	
36	1911年 3月18日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 株式会社啓 成社 古事記通釈 池辺義象編	
37	1911年 6月14日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 郁文舎 処 世訓 後藤新平述 邦文日本外史 頼山 陽 池辺義象訳述 大聖二宮尊徳 豊岡 茂夫	
38	1911年	東京	7	4	記	新刊雑書	彰義隊琵琶歌, 池辺義象, 山崎

	7月28日	／朝刊	頁	段	事		有信, 近刊雑誌, 人道七五, 精神時報四七, 婦女新聞五八一, 同仁六二, 紙業雑誌六の五
39	1912年1月24日	東京／朝刊	5頁		広告	(広告) 発行 辰文館 御製謹註天沙日影 池辺義象 弥富源雄	
40	1912年2月9日	東京／朝刊	1頁		広告	(広告) 博文館 日本法制史 池辺義象	
41	1912年3月12日	東京／朝刊	1頁		広告	(広告) 文成社 少年史談 池辺義象	
42	1912年3月18日	東京／朝刊	1頁		広告	(広告) 発行所 辰文館 松田書店 七郷落 池辺義象	
43	1912年6月30日	東京／朝刊	6頁	2段	記事	新刊雑書	彰義隊琵琶歌, 池辺義象, 西幸吉, 東京堂, 毒物劇物営業取締規則註解, 藤実冊字, 東洋医薬新報社, 少年小説腕白, 大井冷光, 子文社, 桂月文集, 大町桂月, 隆文館, ハーモニカハウツープレー, 芝英吉, 松本楽器店, 市町村雑誌, 殖民公報, 新世界, 慶応義塾学報, 時事評論, 慶応義塾大学, 慶応大学, 慶大, その他の製造業, 学術・開発研究機関, 教育・学習支援業
44	1912年7月3日	東京／朝刊	1頁		広告	(広告) 発行所・辰文館 手紙手ほどき文章「かな」付 池辺義象校閲 中村春堂編著	
45	1912年9月21日	東京／朝刊	1頁		広告	(広告) 辰文館 七郷落 池辺義象	
46	1913年3月1日	東京／朝刊	6頁	5段	記事	出版界	太平記上巻, 池辺義象編, 博文館, 地人論, 茅原華山, 東亜堂,

		刊					古吾妻錦絵，古吾妻錦絵保存会，映像・音声・文字情報制作業
47	1913年 3月5日	東京 ／朝 刊	3 頁	8 段	記 事	亀井三位(英三郎君) の薨去を悲しみ共に 欧羅巴をめぐりし時 のことを思ひでてよ める歌 池辺義象	ヨーロッパ
48	1913年 6月20 日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告)博文館 皇 室 池辺義象 日本 魂の新解説 堀江秀 雄	
49	1913年 7月21 日	東京 ／朝 刊	6 頁	2 段	記 事	出版界	飛行機全書，武石浩玻，仏弟子 伝，山辺習学，法律大鑑，添田 増男，火及火災，日下部四郎太， 皇室，池辺義象，作法新教授書， 相島亀三郎，明治代表人物，高 須梅溪，水産経済，山本美越乃， 保険通論，栗津清亮，能楽小話， 坂元雪鳥，労働問題，山本美越 乃，動物学講義，山鳥吉五郎， 中学化学参考書，池田清，農業 水利論，原澄次，自然より人生 へ，大住嘯風，排日問題梗概， 千葉豊治，移民，航空運輸業， 白仁三郎
50	1913年 9月28 日	東京 ／朝 刊	5 頁	3 段	記 事	出版界	ウラジオストク，最新鉄道工学 講義，第五卷，阪岡末太郎，蜜 蜂の生活，岡本清逸訳，保元平 治平家物語，池辺義象編，謡曲 手ほどき，大和田五月，最近英 文研究，平田禿木，大正二年度 諸官立学校，入学試験問題答案 評，芳流堂，後の男狩り，渡辺 黙禅，古吾妻錦絵，第十九回古 吾妻錦絵保存会，黒髪，後編， 遅塚麗水，旅人，窪田空穂，累 卵の日本，波多野島峰

51	1914年 1月9日	東京 ／朝 刊	6 頁	3 段	記 事	出版界	通俗日本全史補遺, 早稲田大学出版部, 校註国文叢書第六冊, 池辺義象編, 博文館, 南総里見八犬伝前編, 博文館, 名家俳句集, 佐々醒雪, 巖谷小波編, 博文館, 飴製造加工法, 鹿又親, 清水武紀共著, 博文館, 犠牲, 加藤朝鳥, 植竹書院, 全訳天路歷程, ジョン・バンヤン, 松本雲舟訳, 警醒社, 都会病, ルネ・パザン, 永代静雄, 北文館, 南方支那, 大野恭平, 台湾日々新聞社, 教育, 教育・学習支援業, 映像・音声・文字情報制作業
52	1914年 1月25 日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 博文館 大 礼要義 牛塚虎太郎 皇室 池辺義象	
53	1914年 1月30 日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 博文館 博 文館七大叢書 竹取 物語 伊勢物語 落 窪物語 土佐日記 枕草子 徒然草 紫 式部日記 井上頼圀 萩野由之 関根正直 池辺義象校訂及註解 源平盛衰記 詩経 三島毅 服部宇之吉 高瀬武次郎監修 久 保天隋校訂ほか	
54	1914年 3月26 日	東京 ／朝 刊	2 頁	4 段	記 事	大礼講演会 (高松)	香川県神職会, 京都大学, 池辺義象, 大正天皇即位礼, 皇室, 大正天皇即位大礼, 皇太子嘉仁, 明宮嘉仁, 大正天皇即位の礼, 大正天皇即位の大礼, 大正天皇即位の大典, 京都帝国大学, 京都帝大

55	1914年 6月3日	東京 ／朝 刊	6 頁	3 段	記 事	出版界	豪州及び其諸島, アーサーダブ リュージュオーズ著, 比較心理 学, モルガン博士プリストル大 学教授著, 大日本文明協会, 狂 言記下, 江戸名所図会, 有朋堂 書店, 歯科学説彙纂, 鈴木俊樹 編, 歯科新報社, 支那の砂糖貿 易, 木村増太郎著, 糖業研究会, 栄花物語, 池辺義象編, 博文館, 財政商業高等利息算, 沢田吾一 著, 富山房, 青年農家年中行事, 弘道会編, 弘道会, 肖像, 観古 会, 心理学要覧, 片桐佐太郎著, 光風館, 歴史物語織田信長, 笹 川臨風著, 中央書店, 般若心經 講話, 寿山良海著, 神奈川県生 麦竜泉寺, 映像・音声・文字情 報制作業
56	1914年 6月7日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 前川文栄閣 新撰高等女子用文 池辺義象 新体女子 手紙の文 塩井雨江	
57	1914年 8月27 日	東京 ／朝 刊	6 頁	8 段	記 事	出版界	徳川文芸類聚第十一, 参考保元 平治物語, 図書刊行会, 水戸家, 国書刊行会, 西郷南州, 長谷場 致堂, 博文館, 釈雲照, 草繫全 宜, 校註国文叢書, 池辺義象, 映像・音声・文字情報制作業
58	1915年 3月22 日	東京 ／朝 刊	6 頁	5 段	記 事	出版界	宇津保物語上巻, 池辺義象, 賞 奇楼叢書第五集しみのすみか 物語上下, 石川雅望, 卓上噴水 一
59	1915年 3月31 日	東京 ／朝 刊	6 頁	7 段	記 事	出版界	宇治拾遺物語, 花暦八笑人, 滑 稽和合人, 妙竹林話七偏人, 加 茂翁家集, 六帖詠草, 桂園一枝, 有朋堂, 槍の玉様, 白鳥天葉, 二舎書房, 個性鑑別法の研究, 今村惟善, 清水書房, 権利争闘

							論, 三村立人訳, ルドルフ・フォン・イエリング, 清水書店, 徒然草新訳, 石井直三郎, 東京出版社, 文集しら菊, 中村孝也, 日本雄弁会, 国産奨励の歌, 池辺義象作歌, 田村康蔵作曲, 双文館, 我が断片, 岡田哲蔵, 六合雑誌社, ルドルフ・フォン・イエリング
60	1915年 4月6日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 東京博文館 校註国文叢書 宇津 保物語 井上頼圀 関根正直 池辺義象 住吉物語・堤中納言 物語ほか	
61	1915年 4月20 日	東京 ／朝 刊	6 頁	4 段	記 事	出版界	国文叢書, 池辺義象編, 博文館, 牧民社, 禅房の一年間, 湯浅竹 山人, 牧民社, 映像・音声・文 字情報制作業
62	1915年 7月9日	東京 ／朝 刊	5 頁	1 段	記 事	奉祝唱歌の選 大体 を終る 田所局長談	文部省, 森林太郎, 佐々木信綱, 田所普通学務局長, 井上通泰, 池辺義象, 阪正臣, 大正天皇即 位礼, 皇室, 大正天皇即位大礼, 佐佐木信綱, 森鷗外, 田所美治 普通学務局長, 皇太子嘉仁, 明 宮嘉仁, 大正天皇即位の礼, 大 正天皇即位の大礼, 大正天皇即 位の大典
63	1915年 8月21 日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 博文館 御 大礼図譜 池辺義 象・今泉定介共著	
64	1915年 8月27 日	東京 ／朝 刊	6 頁	8 段	記 事	出版界	図書刊行会, 徳川文芸類聚, 丸 善, 精練漂白編, 西田博太郎, 博文館, 俳人逸話紀行集, 佐々 醒雪, 巖谷小波, 博文館, 御大 礼図譜, 池辺義象, 今泉定介, 東亜堂, 演説文章応用修辞学, 加藤咄堂, 東華堂, カピールと

							タゴール, 齋木仙醉, 丸善, 羅甸文法, 田中秀史, 人品雜誌社, 健康能率増進法, 西邨ト堂, 文海堂書店, 快雨, 天児, 句集第一輯, 下村号信, 朝倉貞二, 有隣堂, 炭窯利用醋酸石灰製造法, 牧駿次, 日本婦人社, 日本婦人, 映像・音声・文字情報制作業
65	1915年 8月29 日	東京 ／朝 刊	6 頁	7 段	記 事	出版界	警醒社, 欧州動乱史論, 吉野作造, 松崎蒼キユウ堂, 製薬化学, 下山顧一郎, 博文館, 今昔物語, 池辺義象, 法律評論社, 法律学説判例評論全集, 高窪喜八郎, 衍文社, 朝鮮名勝詩選, 成島鷺村, 緑星社, 組織的研究エスペラント講習会, 基督教書類会社, 六十六卷之基督, ジョージ・ブレスウエート, 洛陽社, 地方青年団の現在及将来, 天野藤男, 丸善, 改訂植物名彙, 松村任三, 岸原鴻太郎, 精神の威力, 岸原鴻太郎, つくし会, 改訂四万温泉誌, 石倉重継, 目黒書店, 大正幼年唱歌第一集, 小松耕輔, 東京堂, 富士山案内, 鹿島桜巷, 実業之日本社, 鍊胆術, 井上泰岳, 鶴林堂, 松本と安曇, 胡桃沢勘内, 川流堂, 呼吸体操, 遠藤道孝, 以文館, 山水と人物, 横山健堂, 奥村栄喜弥, 中房温泉, 葛原幽, 東京堂, 霊山富士案内, 林治一, 通俗図書中央販売所, 徹底せよ, マーデン博士, 西村二郎訳, 郁文学会, 関城書新考, 井川巴水, 古吾妻錦絵保存会, 古吾妻錦絵第六十回, 電気公報社, 電気公報

							第一巻第一号,他に分類されない非営利的団体,映像・音声・文字情報制作業,キリスト教
66	1915年 10月23日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告)前川文栄閣 新撰女子はがき用文 新撰高等女子用文 池辺義象 阪正臣書 新体女子手紙の文 塩井雨江 小野鶯堂 書ほか	
67	1915年 11月13日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告)博文館 校 註国文叢書 関根正 直 萩野由之 池辺 義象ほか校註 校註 和歌叢書 佐佐木信 綱 芳賀矢一校註 校註謡曲叢書 芳賀 矢一 佐佐木信綱校 註	
68	1915年 11月16日	東京 ／朝 刊	6 頁	3 段	記 事	出版界	新聞総覧,日本電報通信社編, 日本電報通信社,支那政治地理 誌下巻,木村欣一,丸善,名古 屋市史学芸編,名古屋市役所, 日本詩歌論,野口米次郎,白日 社,続和漢名詩鈔,結城蕃堂編, 文会堂,担保物権法,三瀧信三, 有斐閣,初等作詩法,森川竹ケ イ,文会堂,アマゾン探検記, 中村直吉,啓成社,大典,観世 元滋,檜常之助,新撰女子はが き用文習字兼用,池辺義象,前 川文栄閣,芸術雑誌踊画報十月 号,踊画報社,忠敬室印叢乙卯 秋集,汲古印会,くだもの第一 巻第一号,経世社

69	1915年 12月9日	東京 ／朝 刊	6 頁	4 段	記 事	出版界	帝国歳計沿革史，鈴木敬義編纂，麒麟閣，日本經濟叢書第十九卷，日本經濟叢書刊行会，校註国文叢書第十八刷，池辺義象編，博文館，貞操婦女八賢誌下，恋の若竹，吉原楊枝，自由社内人情本刊行会，現代の政治，吉野作造，実業之日本社，国民經濟学原論第六冊運営，山田伊三郎，富山房，大日本覚醒史，長尾永五郎，日英堂，処世と修養自己の爲めに，井上如真，一書堂，怪美人，宮地竹峰，佐藤出版部，根気の世の中，蘆川克己，二松堂，高等女学校師範学校中学校，教員受験撮要，修学堂書店，修養一日一善日記，後藤静香，洛陽堂，御即位礼画報第八卷，御即位記念協会，実業之日本臨時増刊，実業之日本社，御大典記念号歴史写真十二月号，歴史写真会，刀劍講義録發刊，教育・学習支援業，映像・音声・文字情報制作業
70	1916年 2月5日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 精華堂書店 文集彩雲 池辺義 象・大町桂月・武島 羽衣ほか共著	
71	1916年 5月29日	東京 ／朝 刊	5 頁	1 段	記 事	明治天皇紀編修 各 部の担任者／山なす 材料 股野編修長談	廢藩置県，池辺義象，重田定吉，三宅米吉，土方総裁，金子副総裁，股野琢，蛤御門の戦い，三条・中山・岩倉家，地方公務，地方制度，皇室
72	1916年 7月5日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 博文館 校 定源氏物語詳解 池 辺義象・鎌田正憲	
73	1916年 7月8日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 博文館 新 撰日本外史 池辺義	

		刊				象・落合直文 戦場 秘話 綿貫仁門 実 業青年成業の要義 一木内相・河野農 相・添田総裁ほか	
74	1916年 8月4日	東京 ／朝 刊	6 頁	2 段	記 事	出版界	校定源氏物語詳解, 池辺義象, 鎌田正憲共編, 博文館, 語原類 解, 松村任三, 丸善, 宗教哲学, 石原謙, 岩波書店, 倫理学の根 本問題, 阿部次郎, 映像・音声・ 文字情報制作業
75	1916年 9月30 日	東京 ／朝 刊	3 頁	4 段	記 事	明治帝事蹟取調	明治天皇紀臨時編修局, 藤波言 忠子爵, 池辺義象, 京都, 三重, 名古屋, 徳川義親, 京都御所, 久邇宮, 賀陽宮, 伊勢神宮, 宗 教, 皇室, 藤波子爵
76	1917年 8月24 日	東京 ／朝 刊	2 頁	9 段	記 事	東人西人	臨時東京市会, 豊川良平, 奥田 市長, 電灯案, 武島羽衣, 日本 歌道奨励会, 巡回講演, 池辺義 象
77	1917年 11月17 日	東京 ／朝 刊	5 頁	7 段	記 事	池辺氏と佐佐木博士 昨日御歌所寄人を拝 命／明治天皇御製編 纂が主な仕事 大口 鯛二氏談	池辺義象, 佐々木信綱, 佐佐木 信綱, 宮内省, 難波津会, 芙蓉 会, 佐々木弘綱, 常磐会, 歌御 会始め, 歌会始, 詠進歌, 皇室, 行政機関
78	1917年 11月22 日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 止善堂 天 才社 合評徒然草新 解 池辺義象 今井 己斐 坂正臣ほか	
79	1917年 12月10 日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 辰文館 女 子新用文 池辺義象 中村春堂	
80	1918年 1月19 日	東京 ／朝 刊	5 頁	4 段	記 事	光栄の預選者 昨日 の歌御会始 今年は 総じて出来がよい/ 昨年より七千首も多 い 御歌所長 入江 子爵談／雄々しき御	宮中歌御会始, 鎌倉宮司, 矢野 豁, 神宮皇学館, 鎌倉高等女学 校, 中村保, 南天会, 上野荒雄, 歌道奨励会, 上田三郎, 福岡県 八幡尋常小学校訓導, 青木ジョ ウ子, 田島壯二郎, 飛田総社宮

						製 寄人 池辺義象 氏談／預選歌夫々の 面白味 寄人 大口 鯛二氏談	司, 遠藤二郎, 大口鯛二, 入江 為守御歌所長, 東京盲学校, 大 和民族, 詠進歌, 宮中歌会始, 伊勢神宮, 皇学館大學, 宗教, 教育・学習支援業, 他に分類さ れない非営利的団体, 入江子 爵, 入江為守子爵
81	1918年 11月18 日	東京 ／朝 刊	5 頁	11 段	記 事	真淵翁祭典	賀茂真淵, 真淵翁百五十年祭, 国学院大学, 徳川達孝伯爵, 上 田文学博士, 三上文学博士, 井 上文学博士, 芳賀文学博士, 桑 原芳樹, 近藤久敬, 平田盛胤, 池辺義象, 教育・学習支援業
82	1919年 1月17 日	東京 ／朝 刊	5 頁	1 段	記 事	代々の総裁難 三度 も悩む臨時編修局 田中伯の就任した由 来	田中光顕伯爵, 臨時帝室編修局 総裁, 池辺義象, 宮内省, 波多 野宮相, 末松子爵, 土方伯爵, 股野琢, 重田定一, 三宅米吉, 山県公爵, 金子子爵, 近藤久 敬, 藤波言忠子爵, 皇室, 波多 野宮内大臣, 波多野敬直宮内大 臣, 波多野敬直宮相, 金子堅太 郎子爵, 山県有朋公爵, 田中伯 爵, 土方久元伯爵, 藤波子爵, 末松謙澄子爵
83	1919年 1月27 日	東京 ／朝 刊	1 頁		広 告	(広告) 大鑑閣 日 本法制史書目解題 池辺義象	
84	1919年 8月24 日	東京 ／朝 刊	4 頁	7 段	記 事	公私消息(二十三日)	山内万寿治男, 京都, 高崎親 章, 福富鉄道員人事課長, 神 戸, 松島肇, 下関, 新庄大蔵技 師, 松本, 江木千之, 軽井沢, 岩住良治, 秋田, 石黒東京府立 工芸学校長, 北条, 阪田東京高 等工業学校長, 勝山, 池辺義 象, 磯部尚, 福井三郎, 阪田貞 一東京高等工業学校長
85	1921年 3月13	東京 ／夕	2 頁	4 段	記 事	明治神宮献詠披講 明日午後一時より神	献詠披講式, 御歌所寄人, 池辺 義象, 遠山霞, 男子部, 女子部,

	日	刊				前にて最初の企て	大原重明, 遠山霞, 上野啓吉, 平田盛胤, 海上竜子, 相川けい子, 宗教
86	1921年 4月23日	東京 ／夕刊	1 頁	8 段	記事	公私消息(廿二日)	秋山教育総監, 大津淳一郎, 阪本サン之助, 奥衆議院議長, 藤波言恵子, 池辺義象, 立法機関, 奥繁三郎衆議院議長, 奥繁三郎衆院議長, 奥衆院議長, 秋山好古教育総監
87	1921年 8月26日	東京 ／朝刊	1 頁		広告	(広告) 大鑑閣 日本法制史書目解題 池辺義象 神道起源論 津田敬武 支那仏教遺物 松本文三郎ほか	
88	1922年 10月3日	東京 ／朝刊	1 頁		広告	(広告) 博文館 本居宣長稿本全集 上田万年 芳賀矢一 池辺義象ほか監修 本居清造編 上代国文学の研究 武田祐吉 枕草子選 积佐々政一 日本歌学史 佐佐木信綱	
89	1923年 2月22日	東京 ／夕刊	2 頁	5 段	記事	国文学の貢献者池辺義象氏脳溢血 帝室編修局内にて 静養中だが重態<写>	御歌所寄人, 臨時帝室編集局, 渋谷, 赤十字病院, 佐藤博士, 腎臓病, 眼底故障, 熊本, 東京帝大古典科, 小中村清矩博士, 落合直文, 萩野由之, 日本文学全書, 国文学書, 第一高等学校, 宮内省, 明治大帝, 御一代記, 佐佐木信綱博士, 東京帝国大学, 東京大学, 皇室, 教育・学習支援業, 佐々木信綱
90	1923年 3月5日	東京 ／夕刊	2 頁	6 段	記事	池辺氏は全く絶望 カンフル注射で持つ	脳溢血症, 池辺義象, 昏睡
91	1923年	東京	2	8	記	池辺義象氏全く危篤	脳溢血

	3月6日	／夕刊	頁	段	事	官等陞叙さる	
92	1923年 3月7日	東京 ／夕刊	2 頁	9 段	記 事	池辺氏逝く	池辺義象
93	1923年 3月8日	東京 ／朝刊	5 頁	12 段	記 事	青鉛筆	池辺義象, 国文学, 火災, 煙突, 安房久米商店
94	1923年 3月8日	東京 ／朝刊	6 頁		広 告	(広告) 池辺義象	
95	1923年 3月10 日	東京 ／夕刊	2 頁	7 段	記 事	池辺義象氏告別式	御歌所寄人
96	1937年 4月25 日	東京 ／朝刊	20 頁	1 段	記 事	池辺義象作の琵琶 「常陸丸」 林竜山 月の弾奏<写>	X

〔目次再録〕

池辺義象氏著作目録（新訂・初稿）—小中村清矩博士との関連で—

（令和 6（2024）年 1 月 1 日（月）補正第 57 稿作成）

〔目 次〕

（前 記）	1
【参考 HP】	7
【関連 HP】	11
〔改訂状況〕	13
〔作成経緯〕	17
〔作成経緯・追記〕（平成 22（2010）年 6 月 4 日～）	18
はじめに	27
1 略年譜	31
＊〔参考サイト〕	31
＊〔肖像〕	31
＊〔雅号〕	33
＊〔自筆文献〕	33
＊〔略年譜〕	34
＊訃報	42
＊追悼会	42
＊追悼辞	42
池辺義象氏追悼記一斑 —杉浦鋼太郎氏「藤園池辺義象大人の霊前 に」—	43
＊親族	51
＊自伝	51
＊京都大学大学文書館（木下広次（初代総長）関係資料）の件	53
＊池辺義象氏の小中村家離縁の件	53
＊小中村家人物史一斑	58
（参考 1）小中村清名の動静の件	58
（参考 2）小中村清象の動静の件	59
（参考 3）『小中村清矩日記』に見たる本件関係事項抄	59
（小中村清矩の家族関係）	60
（小中村清矩住居の転居関係）	60
（小中村家のその後の状況）	63
（『小中村清矩日記』抽出）	63
＊京都帝国大学文科大学の件	67
〔参考〕京大文科初代国文学講座担任関係抄	68
＊京都帝国大学法科大学の件	73
＊京都帝国大学法科大学雑誌掲載論稿関係	75

* 京都帝国大学法科大学在任中試験問題関係 (抄)	77
* その他	78
・ 史談会関係	78
・ 明治神宮創建関係	78
・ 『明治天皇御集』、『明治天皇紀』関係	78
2 著作目録	79
(1) 著書 [編集] (省略)	79
(2) 共著・共編 [編集] (省略)	79
(3) 校注等 [編集] (省略)	79
(4) 論説その他 (省略)	79
(5) 池辺義象氏関係日記 (抄)	79
(6) 池辺義象氏関係書簡 (抄)	80
(参考) 池辺義象氏宛書簡	67
(7) 池辺義象氏筆記諸家講義録	81
(8) 池辺義象氏関連新聞記事	82
ア 『新聞集成 明治編年史』関連記事	82
イ 『東京朝日新聞』(池辺義象氏逝去関連記事)	83
(9) 池辺義象氏関連著作	84
(10) 池辺義象氏研究論文 (抄)	101
【追加分】	102
(概要)	102
〔追加1〕平成25(2013)年9月1日	
『CD版 春木一郎博士・原田慶吉教授・田中周友博士・船田享二博士・武藤智雄教授・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士・池辺義象氏略年譜・著作目録—日本ローマ法学七先生略年譜・著作目録(新訂版)—ローマ法・法制史学者著作目録選(第十輯)—』(平成25(2013)年9月1日刊)作成以後の追加事項(平成26年7月26日新設)	103
(関係文献等追加)	103
※1(平成26(2014)年7月26日補正第37稿追加分)	103
※2(平成26年12月17日補正第38稿作成追加分)	103
※3(平成26年12月21日補正第39稿作成追加分)	103
※4(平成27(2015)年3月9日補正第40稿作成追加分)	104
※5(平成27年5月31日補正第41稿追加分)	104
※6(平成27年10月10日補正第42稿追加分)	104
※7(平成29(2017)年7月20日補正第43稿追加分)	105
※8(平成29年7月23日補正第44稿追加分)	105
※9(平成29年8月30日補正第45稿追加分)	105
〔追加2〕平成30(2018)年1月1日(月)	

『CD版 ローマ法、法制史、明治警察史及び日本統治下台湾警察史の諸問題—ローマ法・法制史学者著作目録選（第十三輯）— 明治警察史雜纂（第四輯）— 日本統治下台湾警察史雜纂（第八輯）—』（平成30（2018）年1月1日刊）作成以後の追加事項…105
 （関係文献等追加） ……105

※10（平成30（2018）年9月9日補正第46稿追加分） ……102
 （収録稿「（小中村清矩住居の転居関係）追加稿1 小中村清矩の最後の根岸邸について（1）」） ……106

※11（平成30（2018）年10月19日補正第47稿追加分） ……108
 （収録稿「（小中村清矩住居の転居関係）追加稿2 小中村清矩の最後の根岸邸について（2）—森鷗外及び正岡子規根岸旧宅との関連も含めて— 続・小中村清矩博士の下谷・根岸邸はどこにあったのか—」） ……108

※12（平成30（2018）年11月15日補正第48稿追加分） ……112

※13（平成30（2018）年12月18日補正第49稿追加分） ……113

※14（平成31（2019）年3月21日補正第50稿追加分） ……113

※15（令和2（2020）年7月27日補正第51稿追加分） ……113

※16（令和3（2021）年11月20日補正第52稿追加分） ……114

〔追加3〕令和4（2022）年4月1日（金）

『CD版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録—【参考篇】【附篇】—ローマ法・法制史学者著作目録選（第十五輯）—』（令和4（2022）年4月1日刊）作成以後の追加事項…114

※17（令和4（2022）年4月1日補正第53稿追加分） ……114

※18（令和4（2022）年6月26日補正第54稿追加分） ……115

※19（令和5（2023）年1月8日補正第55稿追加分） ……115

※20（令和5（2023）年4月2日補正第56稿追加分） ……115

〔追加4〕令和6（2024）年1月1日（月）

『CD版 上山安敏先生・柴田光蔵先生・西村稔先生・宮崎道三郎博士・池辺義象氏・小林宏先生・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士略年譜・著作目録 附録：「日本ローマ法・法制史学者等略年譜・著作目録・追悼辞」掲載資料抄（追補）中田薫博士・瀧川政次郎博士・三浦周行博士・牧健二博士各関係資料抄—ローマ法・法制史学者著作目録選（第十六輯）—』（令和6（2024）年1月1日刊）作成以後の追加事項…116

※21（令和6（2024）年1月1日補正第57稿追加分） ……116

（参考）元号・西暦対照表 ……117

別添「明治、大正期朝日新聞紙面データベース（DB）」池辺義象氏関連分…119

〔目次再録〕 ……137～139
